

尼崎市

田能高田遺跡

—園田競馬場厩舎改築事業に伴う発掘調査報告書—



平成9年3月

兵庫県教育委員会

尼崎市

た のう たか だ

田能高田遺跡

—園田競馬場既舎改築事業に伴う発掘調査報告書—



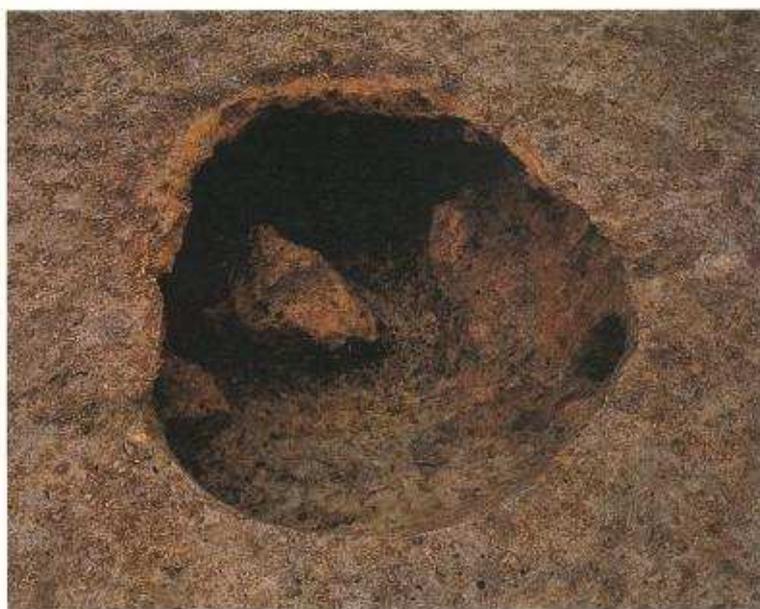
遺跡の位置 (1)

遺 構



伏見地震による液状化

噴砂 101



壁が焼けた土坑

SK 213



平面五角形の竪穴住居

SH 302

遺物



S 4
有孔円板



S 5
石鋤



M 6
銅鏡



M 5
鍔鍬先



2 1 7
赤色顔料による施紋のある壺

例 言

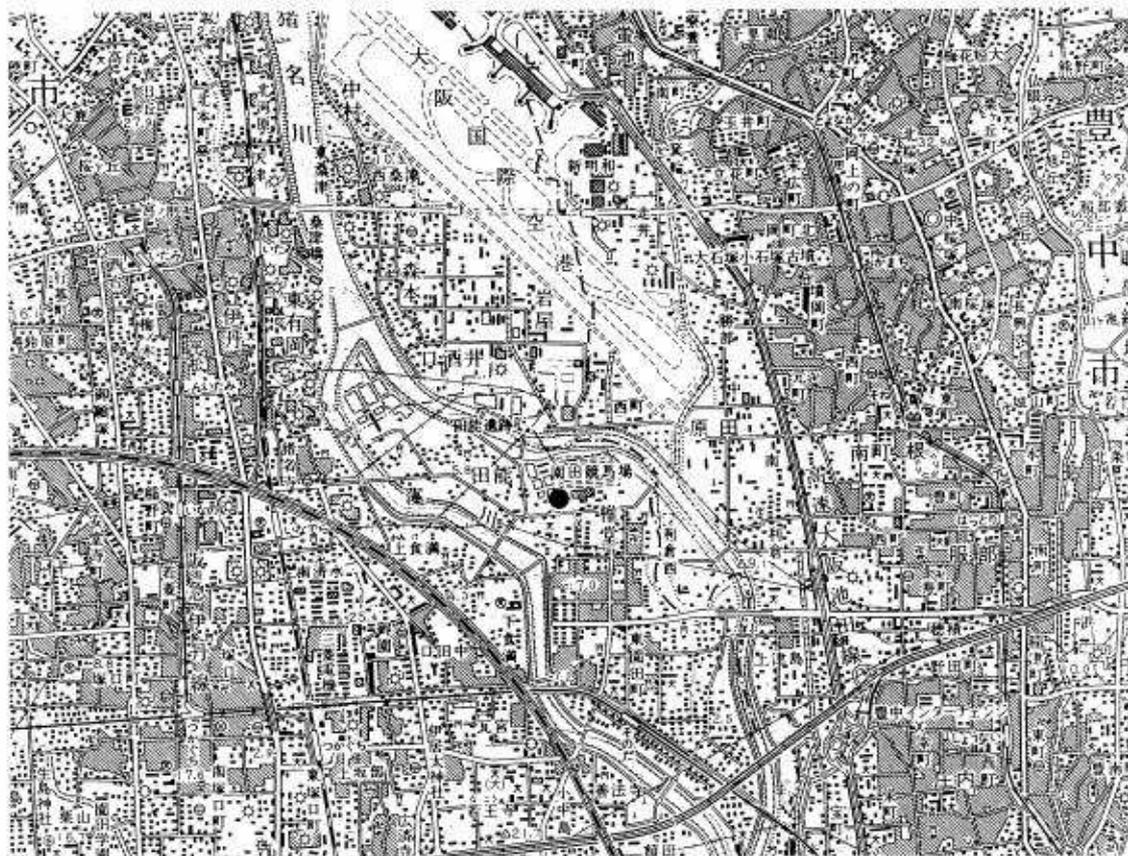
1. 本書は、尼崎市田能2丁目3-1-3に所在する田能高田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、園田競馬場既舎改築事業に関連するもので、兵庫県競馬組合の委託を受けて、平成3・4年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 全面調査は、榎柄谷工務店と作業委託契約を交わして実施した。
4. 調査現場での遺構等の実測・写真撮影は、調査員および調査補助員が行った。
5. 出土品整理作業は、平成5～8年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
6. 遺物写真撮影は、株式会社衣川・株式会社サンスタジオに委託して実施した。
7. 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は甲斐昭光が行った。また、現地調査の際に液状化跡について御教示下さった寒川 旭氏（通産省地質調査所）からは玉稿を頂いた。
8. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
9. 現地調査および整理作業の際には、関係各機関をはじめ、以下の方々から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表する。

岡田 務・寒川 旭・高島信之・高島知恵子・高橋 学・西川寿勝・瀬田佳男・橋爪康至
濱野俊一・福井英治・藤丸詔八郎・益田日吉・森岡秀人・森下章司 （敬称略・五十音順）

凡 例

1. 本書で示す標高値は大阪湾平均海水準（O. P.）を基とし、方位は磁北を指す。
2. 遺物には通し番号を付けている。ただし石器・金属器には、その頭にそれぞれSとMをつけて、土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
3. 遺構名はアルファベットによる略号（土器群・噴砂を除く）と3桁の数字で表記する。
略号の意味は以下のとおりである。
SA：柵 SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SH：竪穴住居 SK：土坑
SP：柱穴 SR：旧河道
3桁の数字は遺構それぞれの個別番号で、種別ごとに01からふっている。なお、百の位は遺構の検出面を示している。
4. 遺物包含層については、第1面までのものを第1包含層、第1面から第2面までのものを第2包含層というように呼び、特に遺構面直上のものを第1遺構面直上というように呼び分けることもある。
5. 本書における地区名・遺構名は現地での呼称を使用した。ただし、報告の段階で呼び変えた遺構については、以下に示す。

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
土器群A	土器群101	土器群a	土器群105	第2面 噴砂	噴砂201
土器群B	土器群102	土器群b	土器群106	SK219	SH203
土器群C	土器群103	土器群c	土器群107	SH203	SK219
土器群d	土器群104	第1面 噴砂	噴砂101		



遺跡の位置 (2) 上：大正3年修正測図「大阪西北部」1/50,000 陸地測量部発行 (大正5年)
 下：昭和56年修正測図「大阪西北部」1/50,000 国土地理院発行 (昭和57年)

目 次

- 巻首図版1 遺 構 (噴砂101・SK213・SH301)
巻首図版2 遺 物 (有孔円板・石釧・銅鏡・鋤鍬先・赤色顔料による施紋のある壺)

本文目次

第1章 調査の経過	第1節 調査に至る経緯	1. 調査に至る経緯…………… (甲斐昭光) …… 1
		2. 第1次確認調査…………… (甲斐) …… 1
		3. 第2次確認調査…………… (甲斐) …… 2
	第2節 全面調査の経過	1. 調査に至る経緯…………… (甲斐) …… 5
		2. 調査区の設定…………… (甲斐) …… 5
		3. 調査の経過…………… (甲斐) …… 5
	第3節 整理作業の経過…………… (甲斐) …… 7	
第2章 遺跡を とりまく環境	第1節 遺跡の地理的環境	1. 地理的位置…………… (山田清朝) …… 8
		2. 地形的位置…………… (山田) …… 9
	第2節 遺跡の歴史的環境…………… (鐵 英記) …… 12	
第3章 調査の結果	第1節 遺 構	1. 基本層序…………… (甲斐) …… 15
		2. 第1面の遺構…………… (甲斐) …… 15
		3. 第2面の遺構…………… (甲斐) …… 20
		4. 第3面の遺構…………… (甲斐) …… 25
		5. 第4面の遺構…………… (甲斐) …… 28
	第2節 遺 物	1. 土器・土製品…………… (鐵) …… 30
		2. 石器…………… (鐵) …… 47
		3. 石製品…………… (甲斐) …… 47
		4. 金属製品…………… (甲斐) …… 48
第4章 遺跡の検討	第1節 土 器…………… (鐵) …… 51	
	第2節 石 釧…………… (甲斐) …… 53	
	第3節 古墳時代仿製鏡の破鏡	1. 鏡式の検討…………… (甲斐) …… 54
		2. 出土状況の検討…………… (甲斐) …… 55
		3. 鏡片の性格…………… (甲斐) …… 57
	第4節 田能高田遺跡で検出された液状化跡…………… (寒川 旭) …… 59	
	第5節 総 括…………… (甲斐) …… 63	
		参考文献…………… 64
		報告書抄録…………… 66

表目次

第1表 調査一覧表……………	6
第2表 土器群一覧表……………	20
第3表 古墳時代仿製鏡の破鏡一覧表……………	58

挿図目次

第1図	旧田能村の小字名	2	第8図	周辺の遺跡	13
第2図	確認調査の位置と土層図	3	第9図	石製品	48
第3図	全面調査区設定図	4	第10図	鉄製品	49
第4図	西摂平野の位置	8	第11図	銅鏡	50
第5図	西摂平野の5mコンター図	9	第12図	古墳時代仿製鏡における 直径・縁幅・鋸歯文の状況	56
第6図	西摂平野の地形分類図	10			
第7図	遺跡周辺の微地形	11			

第4章第4節分

写真1	兵庫県南部地震の液状化現象で生じた地割れ	59
写真2	兵庫県南部地震の液状化現象で生じた噴砂	59
写真3	田能高田遺跡で検出された液状化跡	60
図1	液状化現象の発生過程	60
図2	田能高田遺跡で検出された液状化跡の断面図	60
図3	液状化した砂礫層の粒径加積曲線	60
図4	伏見地震で生じた可能性の強い地震跡	61

図版目次

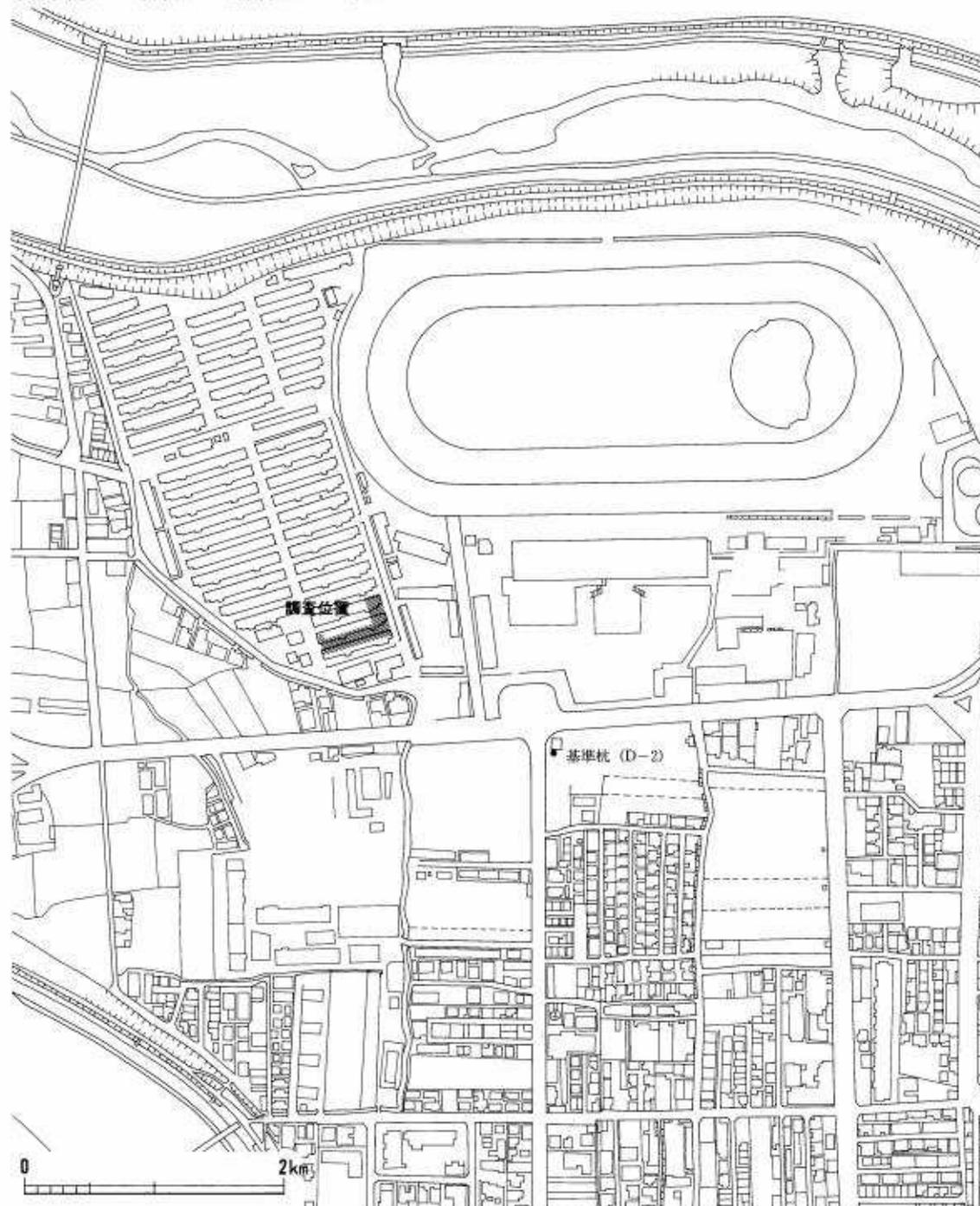
図版1	土層堆積状況図
図版2	第1面の遺構(1) 全体図
図版3	" (2) SH101・SK101
図版4	" (3) SH102
図版5	" (4) SK102・SK103
図版6	" (5) SK104
図版7	" (6) SK107・SE101
図版8	" (7) SD103
図版9	" (8) SD104
図版10	" (9) SD108
図版11	" (10) 土器群101・土器群102
図版12	" (11) 噴砂101・噴砂201
図版13	第2面の遺構(1) 全体図
図版14	" (2) SH201
図版15	" (3) SH202・SH203
図版16	" (4) SA201・SB201・SK217
図版17	" (5) SK213・SK219・SK220
図版18	" (6) SK221・SK222・SK225・SK228
図版19	第3面の遺構(1) 全体図
図版20	" (2) SA301・SH301
図版21	" (3) SH302
図版22	" (4) SD306・SD310・SD311
図版23	第4面の遺構(1) 全体図
図版24	" (2) SK402・SK404
図版25	" (3) SD405
図版26	" (4) SR401
図版27	遺物(1) SH101/SH102
図版28	遺物(2) SH102/SK101/SK102/SK103/SK104
図版29	遺物(3) SK104/SK105/SK106/SK107
図版30	遺物(4) SK107/SE101/SD103
図版31	遺物(5) SD104
図版32	遺物(6) SD104
図版33	遺物(7) SD104

図版34	遺物 (8)	SD104
図版35	遺物 (9)	SD106/SD108
図版36	遺物 (10)	SH201/SH202/SH203/SK210/SK212/SK217 SK219/SK220/SK221/SK222/SK223/SK225 SK226
図版37	遺物 (11)	SK228/SH301/SH302/SK301/SP316/SP332 SD306
図版38	遺物 (12)	SD306/SD307/SD309/SD311
図版39	遺物 (13)	SD405/SD406
図版40	遺物 (14)	SR401
図版41	遺物 (15)	SR401
図版42	遺物 (16)	SR401
図版43	遺物 (17)	SR401
図版44	遺物 (18)	第1包含層/第1面直上/土器群101/土器群102/土器群103 土器群105/土器群106
図版45	遺物 (19)	土器群104/土器群106/土器群107
図版46	遺物 (20)	第2面直上
図版47	遺物 (21)	第2面直上
図版48	遺物 (22)	第2面直上/第3面直上
図版49	遺物 (23)	第3面直上/第4面直上/第4包含層

写真図版目次

写真図版1	上空からみた田能高田遺跡	
写真図版2	遠景・調査前の状況	調査区の遠景・調査前の状況・土層堆積状況
写真図版3	第1面の遺構 (1)	全景
写真図版4	" (2)	SH101
写真図版5	" (3)	SH102・SK102
写真図版6	" (4)	SK103・SK104
写真図版7	" (5)	SK107・SE101
写真図版8	" (6)	銅鏡出土状況・有孔円板出土状況・土器群101
写真図版9	" (7)	SD103・SD104
写真図版10	" (8)	SD104・噴砂101
写真図版11	第2面の遺構 (1)	全景
写真図版12	" (2)	SH201
写真図版13	" (3)	SH202・SH203・SB201
写真図版14	" (4)	SK210・SK213
写真図版15	" (5)	SK217・SK219
写真図版16	" (6)	SK220・石剣出土状況
写真図版17	" (7)	噴砂201
写真図版18	第3面の遺構 (1)	全景
写真図版19	" (2)	SH301
写真図版20	" (3)	SH302
写真図版21	" (4)	SD306
写真図版22	第4面の遺構 (1)	全景
写真図版23	" (2)	SK402・SD306・SD405
写真図版24	" (3)	SR401
写真図版25	土器 (1)	SH102・SK104・SK107
写真図版26	土器 (2)	SE101・SD103・SD104
写真図版27	土器 (3)	SD104
写真図版28	土器 (4)	SD104・SD106・SD108・SK210・SK217
写真図版29	土器 (5)	SK217・SK220・SK228・SH301・SK302・ SD306
写真図版30	土器 (6)	SD306・SD309・SD311

- | | | |
|--------|--------------|---------------------------------------|
| 写真図版31 | 土器 (7) | SD405 |
| 写真図版32 | 土器 (8) | SR401 |
| 写真図版33 | 土器 (9) | SR401 |
| 写真図版34 | 土器 (10) | SR401 |
| 写真図版35 | 土器 (11) | 土器群101・土器群103・土器群105・土器群106・
第2面直上 |
| 写真図版36 | 土器 (12) | 第2面直上 |
| 写真図版37 | 土器 (13) | 第2面直上・第2包含層・第3包含層 |
| 写真図版38 | 土器 (14) | 第3包含層・第4面直上・第4包含層 |
| 写真図版39 | 石製品・金属製品・土製品 | |



遺跡の位置 (3)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

兵庫県競馬組合では、その所管する地方競馬場である園田競馬場の施設改善を進めており、平成4～7年度事業として、競馬場敷地の西端に存在する45棟の既舎を全面的に改築することとなった。これは、昭和39～45年にかけて7期にわたって建設された、木造一部2階建の既舎老朽化に対する措置であり、新たに鉄筋2階建ての既舎20棟に改築される計画である。

今回の工事地区周辺には、田能遺跡、園田競馬場遺跡、四ノ坪遺跡、猪名川川床遺跡などの遺跡が周知されており、既舎所在地にも遺跡が存在することが想定されたため、兵庫県教育委員会では、兵庫県競馬組合からの依頼（平成3年5月27日付 兵馬総第95号）に基づいて、建て替え工事に先立ち、確認調査を実施した。

2. 第1次確認調査（第2図）

調査対象地の面積は14,761㎡を測る。確認調査時点では競走馬645頭が収容できる45棟の既舎が使用されていたため、馬の移動の少ない競馬非開催日（全休日）に調査を実施した。調査地点は既舎と既舎の間の空き地に限定され、トレンチ1つあたりの面積は、水道管・ガス管の埋設状況から3㎡程度となった。

調査の方法は、まずバックホーにより掘削し、人力によって断面の整形を行って土層を観察するものである。しかし、盛土が厚く掘削深度が2mを超えたため、十分な観察を行えなかったトレンチもある。最終的には33箇所の調査を実施した。

調査結果は以下のとおりである。

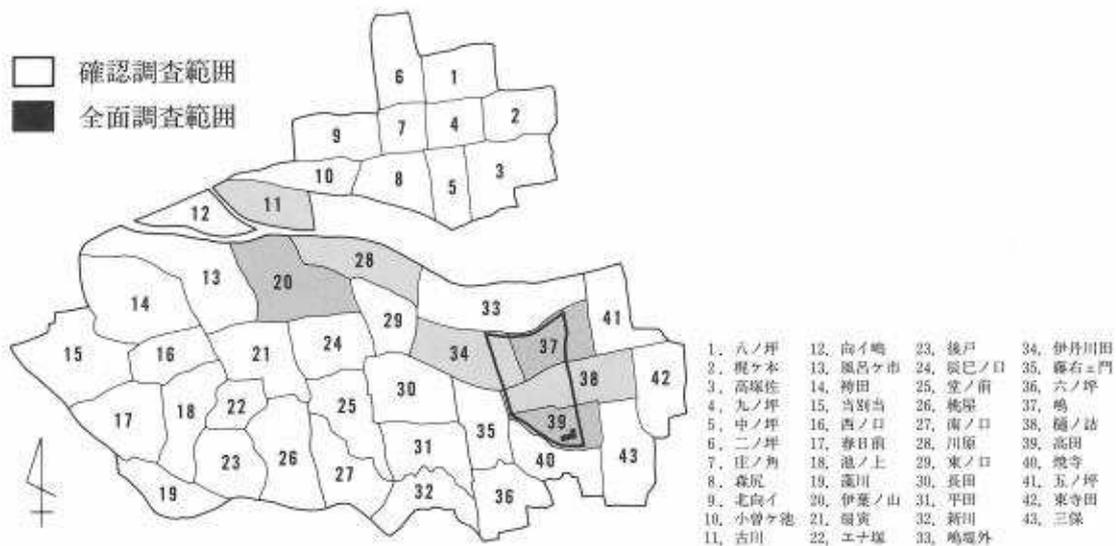
確認調査の地点とその土層堆積状況の模式図を第2図に示した。

これによれば、調査地は現在の地表面から約1mが盛土であり、概ね北の方が薄く、南方が厚い。盛土直下には耕土が存在する。この盛土は昭和39～45年度にかけて実施された既舎建設時の造成土と思われる。その直前には水田であったことが分かり、昭和39年撮影の航空写真からも水田の畦畔が読み取れる（写真図版1）。

No1～5・7・13・14・16～21・27～29・33トレンチからは、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。特にNo28トレンチでは古墳時代前期の遺物が比較的多量に出土し、No20トレンチでは遺構埋土らしき土層の堆積が認められた。なお、No26・30～32トレンチでは盛土からの湧水が激しく、掘削を中断したため、十分な調査結果が得られなかった。

以上のように、地点や面積に制約のある調査ではあったが、大まかにはNo13・14・16～21トレンチ付近、No1～7トレンチ付近、No27～29トレンチ付近に遺構の存在が想定できるような微高地を確認することができた。また、これらの微高地間に挟まれた部分は旧河道であった可能性が高い。

なお、明治18年頃に作成された旧田能村の切絵図（第1図）をみると、調査区からその周辺にかけて



第1図 旧田能村の小字名

旧地形を推定できる字名が残っていることが分かる。即ち、旧河道の存在を思わせる「樋ノ詰(38)」・「伊丹川田(34)」・「川原(28)」・「古川(11)」が連続しており、その南北両側には「鳴(37)」・「高田(39)」・「伊葉ノ山(20)」という微高地の反映と思われる字名がみえる。このうち、調査対象範囲内の字名は北西から「伊丹川田」・「鳴」・「樋詰」・「高田」であり、そこから推測できる旧地形は、先述した確認調査の結果にも大まかに符号するものである(第2図)。

3. 第2次確認調査(第2図)

第1次確認調査の結果、広範囲にわたって遺跡の広がりや認められ、遺構面までの深度も確認された。新築される2階建ての既舎は、厚い盛土の上から比較的浅い基礎工事によって建設されるため、工事によっても遺構面に影響を与えることがないと判断された。

ただし、既舎南端に所在する「騎手調整ルーム棟」の北側に計画された鉄筋4階建ての「レース輸送馬房・騎手宿舎」の工事は、地下の遺構に与える影響が極めて大きいと判断された。工事計画の変更が不可能なため、協議の結果、この部分については全面調査を実施することになったが、第1次確認調査だけでは遺構の広がりを確定できなかったため、第2次確認調査を実施することになった。

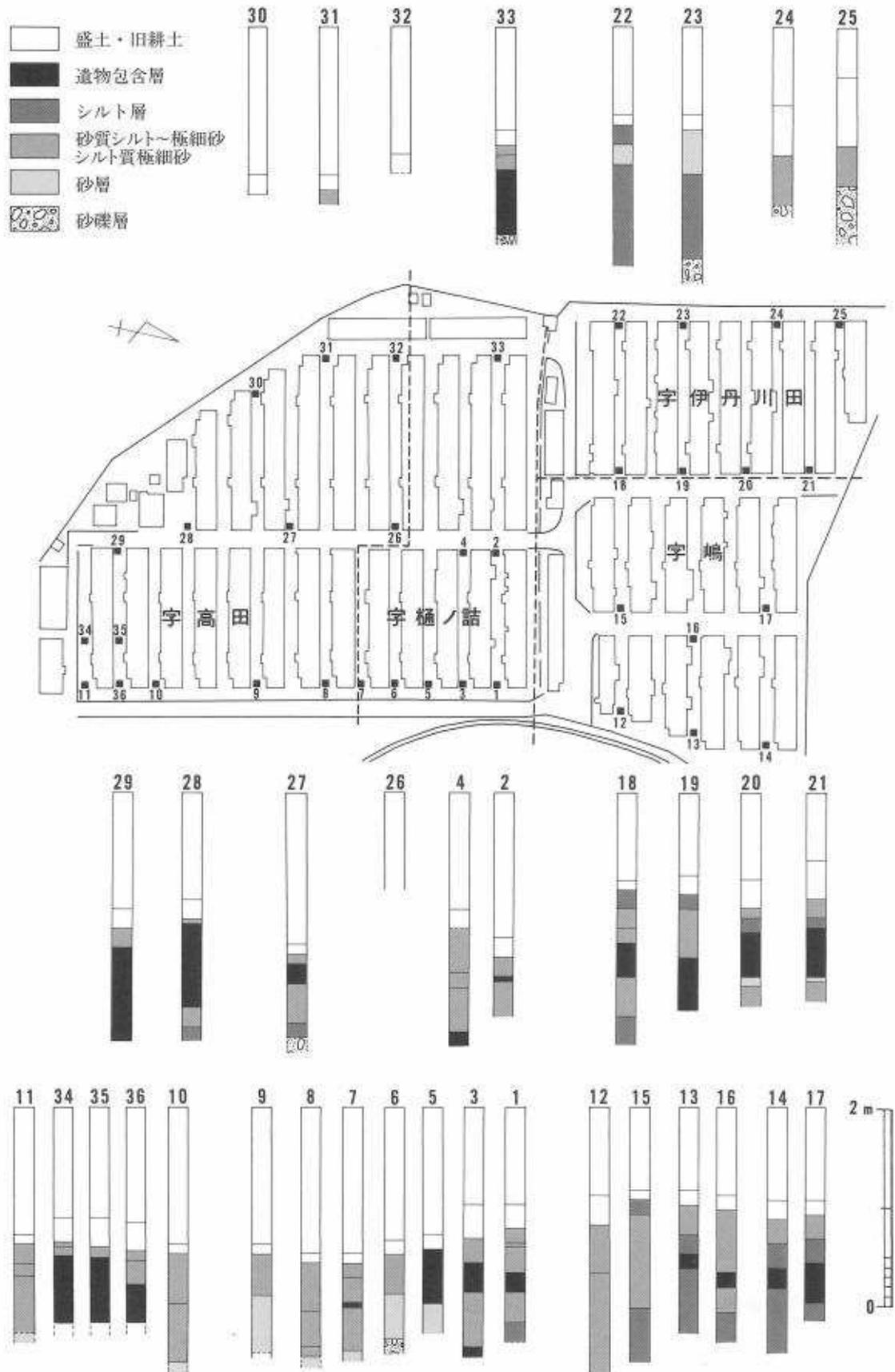
今回の調査も全休日に実施した。また、トレンチ1つあたりの面積も、前回と同様水道管・ガス管の埋設状況から3㎡程度となった。

調査の方法は、まずバックホーにより掘削し、人力によって断面の整形を行って土層を観察するものである。しかし、盛土が厚く掘削深度が2mを超えたため、十分な観察を行えなかったトレンチもある。調査箇所はNa34-36トレンチの3箇所である。

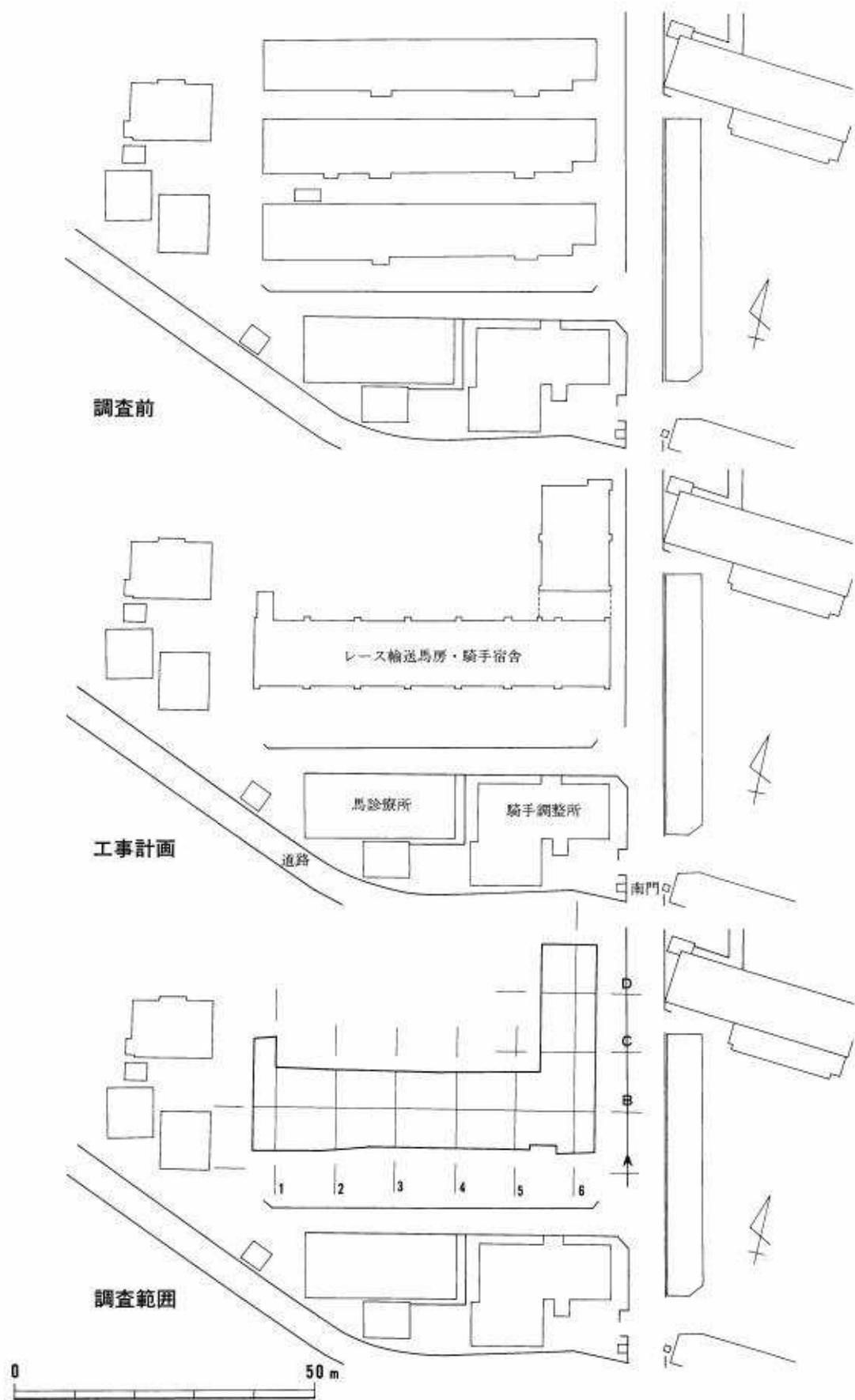
調査結果は以下のとおりである。

各トレンチより弥生時代後期から古墳時代前期の土器の出土をみた。Na35・36トレンチでは、遺構の埋土らしき土層の堆積が認められた。また、時期は特定できないが、Na34トレンチにおいて、地震の際の液状化現象(噴砂)が確認された。

第1次確認調査のNa10・11トレンチでは遺物の出土をみなかったため、Na35・36トレンチ付近は微高地の東端に近い部分と考えられる。



第2図 確認調査の位置と土層図



第3図 全面調査区設定図

第2節 全面調査の経過

1. 調査に至る経緯

第1次・第2次確認調査の結果を受けて、兵庫県競馬組合から全面調査の依頼があり（平成4年6月26日付 兵馬総第120号）、「レース輸送馬房・騎手宿舎」建設予定地における全面調査を実施した。

調査は、調査区に含まれる南端の3棟の既舎の解体と、調査区を取り囲む防音壁の設置工事の完了、さらに盛土の撤去を待つて行うこととなった。

今回の調査区は、東方の馬場の中にある周知の埋蔵文化財包蔵地である園田競馬場遺跡と、競馬場敷地外の四ノ坪遺跡に近接している。確認調査の段階までは、当遺跡を「園田競馬場遺跡」と呼称していたが、確認調査の結果および空中写真判読による検討の結果、これら周知の遺跡との間には各1本の旧河道が埋没していることが判明した。すなわちこれらの遺跡とは別の微高地上に立地する遺跡の可能性が高いため、遺跡の名称を、当地で使用されていた大字・小字をとって「田能高田遺跡」とした。

2. 調査区の設定（第3図）

調査区は、東西方向に長いL字形を呈しているが、当初予想されなかった地下埋設物を避けるため、工事に関わる範囲よりも東西方向に若干縮小した。調査面積は約991㎡である。

この調査区に東西方向にA～Dの基準線、南北方向に1～6の基準線を各10m間隔で設定して、調査地区を18に細分し、遺物の取り上げや遺構の位置の特定の際に使用した。この細分された地区名を呼ぶ場合は、南西角の杭の名称を使用することとした。例えば、Bラインと5ラインの交点をB5杭とし、これを南西の角とする10m四方の区画をB5区とよぶ。

また、水準測量に係わる基準高は大阪湾平均海水準（O. P.）であり、平成3年に尼崎市が設置した基準杭（D-2）を引用した。

3. 調査の経過

平成3年度の第1・2次確認調査は、調査面積が狭く、各調査区の土層の対応関係が明確ではなかった。このため、全面調査の実施にあたっては、調査区周囲にL字形のトレンチA・Bを設定し、土層の堆積状況と遺構面を把握することから開始した（9月28日）。

その結果、遺構面は4面存在すること、最下層に河道状の砂礫層の堆積があること、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落遺跡であることなどが判明したため、これに基づいて、機械および人力による掘削、遺構の調査を実施し、12月9日、諸記録の作成を終え、調査を終了した。

なお、空中写真撮影については、小型ヘリコプターを使用するのが効果的と考えられたが、ヘリコプターの騒音が、既舎内の競走馬に悪影響を与える可能性が高いことから、使用を差し控えた。また、競馬場施設内への立ち入りに制限があるため、現地説明会も割愛させるを得なかった。

なお、調査にあたっては、調査補助員として竹村忠洋・中北敦子、事務員として渡辺佳子、室内作業員として藤岡 薫の助力を得た。

以下に、調査日誌抄と確認・全面調査の調査体制を記す。

9月28日～10月27日 第1面の調査

- 9月28日(月) 調査の開始。トレンチA・Bより機械掘削を開始する。
- 10月5日(月) 人力掘削および遺構検出作業の開始。
- 10月6日(火) 掘削中にB3区より銅鏡片が出土。
- 10月12日(月) A5区で噴砂を検出。B5区より有孔円板が出土。
- 10月16日(金) 遺構の掘り下げを開始する。
- 10月21日(水) トレンチBで、第2面に伴う噴砂を確認する。
- 10月23日(金) 全景写真の撮影と平面実測の開始。

10月28日～11月16日 第2面の調査

- 10月28日(水) 第2回の機械掘削を開始。
- 10月29日(木) トレンチB壁面から石剣片が出土する。
- 10月30日(金) 通産省 寒川 旭氏来訪。第1面の噴砂を断ち割り、所見を賜る。
- 11月4日(水) 人力掘削・遺構の掘削を開始する。
- 11月12日(木) 全景写真の撮影と平面実測の開始。
- 11月13日(金) 柱穴の断ち割り作業を実施。

11月16日～11月27日 第3面の調査

- 11月16日(月) 第3面までの人力掘削・遺構の掘削開始。
- 11月20日(金) 通産省 寒川 旭氏来訪。第2面の噴砂の所見を賜る。
- 11月24日(火) 全景写真の撮影と平面実測の開始。
- 11月27日(金) 柱穴の断ち割り作業を実施。

11月27日～12月9日 第4面の調査

- 11月27日(金) 第4面までの人力掘削・遺構の掘削開始。
- 12月2日(水) 全景写真の撮影と平面実測の開始。
- 12月17日(木) 撤収。

第1表 調査一覧表

	遺跡調査番号	調査主体	調査担当者	調査期間
第1次確認調査	910040	兵庫県教育委員会	村上賢治・山田清朝 菱田淳子・中村 弘	平成3年6月6日・ 6月14日・6月21日 (3日間)
第2次確認調査	910150	兵庫県教育委員会	村上賢治・長濱誠司	平成4年3月5日
全面調査	920185	兵庫県教育委員会	甲斐昭光・所崎明雄 織 英記	平成4年9月28日～ 12月9日(52日間)

第3節 整理作業の経過

遺物の整理にあたっては、発掘調査時に監督員詰所において土器の水洗作業を実施することから開始した。本格的な整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて平成5～8年度に行い、各年度に取り交わした兵庫県競馬組合との整理契約に基づいて実施した。

平成5年度 ネーミングおよび接合補強を実施した。ネーミングは遺跡調査番号(920185)のあとに通し番号を付した。番号の内容はネーミング台帳に記載している。

整理担当職員 整理普及班 技術職員 高瀬一嘉
調査第3班 技術職員 甲斐昭光
整理技術嘱託員 図化技術員 西原美智代・光澤鈴子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・
長谷川洋子
図化補助技術員 林 寿珠子・江口初美・家光和子

平成6年度 接合補強・実測・金属器保存処理を実施した。実測点数は土器344点、石器5点、金属器6点である。

整理担当職員 整理普及班 主査 加古千恵子(金属器保存処理担当)
主任 甲斐昭光
整理技術嘱託員 企画技術員 前山三枝子
図化技術員 佐伯純子・赤松千鶴・二階堂 康・木村淑子・中田明美・
茨木恵美子・前田千栄子・木場裕美・鈴木まき子・和田寿佐子
喜多山好子
図化補助技術員 竹内泰子
日々雇用職員 村上京子

平成7年度 土器の復元および写真撮影等を実施した。遺物写真撮影は総計130カットである。

整理担当職員 整理普及班 主任 甲斐昭光
復興調査班 技術職員 織 英記
整理技術嘱託員 企画技術員 岡田依理子・本窪田英子・香川フジ子
図化技術員 佐伯純子・早川亜紀子・蓬萊洋子・島村順子・中西睦子
日々雇用職員 岡田美穂・田中 葉・久留宮由佳・森田 泉・西馬佐紀

平成8年度 トレース・レイアウトを実施し、本文執筆をまって本報告書の編集作業を実施した。

整理担当職員 整理普及班 主任 甲斐昭光
調査第3班 主任 山田清朝
復興調査第1班 技術職員 織 英記
整理技術嘱託員 主任技術員 八木和子
企画技術員 前山三枝子
図化技術員 佐伯純子
日々雇用職員 森田 泉

第2章 遺跡をとりまく環境

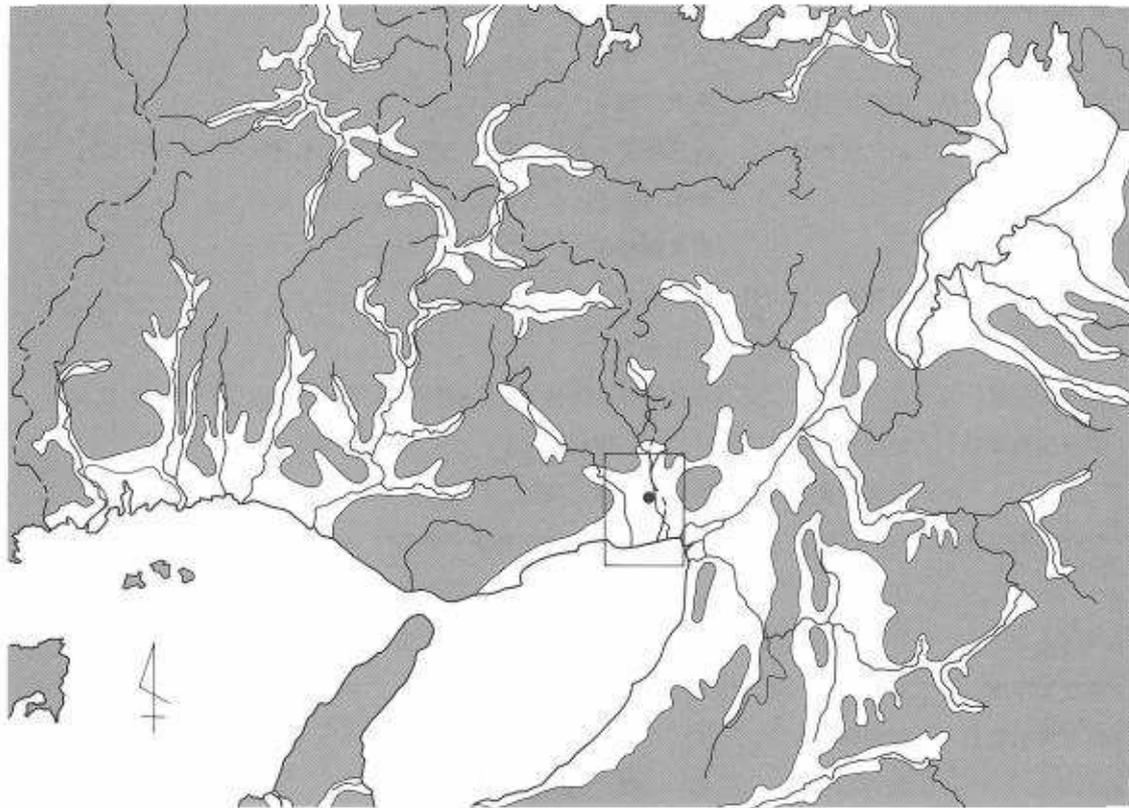
第1節 遺跡の地理的環境

1. 地理的位置

田能高田遺跡の所在する尼崎市は、兵庫県の南東部に位置する。西側は武庫川を境に西宮市と、北側は伊丹市と、東側は猪名川を境に大阪府とそれぞれ接しており、南側は大阪湾に面している。そして、兵庫県にありながら西宮市・宝塚市・伊丹市・川西市とともに大阪の衛星都市群を形成し、一帯は旧摂津国の西部に位置付けられることから、「西摂地方」と呼称されている。

田能高田遺跡は、尼崎市の北東部に位置し、大阪府豊中市との市境近くにあたる。尼崎市の東側の市境をなす猪名川は、その上流側の伊丹市口酒井において藻川と分岐している。この分岐点より南東へ約1.5 kmの両河川に挟まれた地点に田能高田遺跡が位置する。

当地は、現在、園田競馬場に付属する既舎となっている。しかし、大正3年陸地測量部作製の1/50,000測量図（例言裏頁）をみると、水田域であったことがわかる。



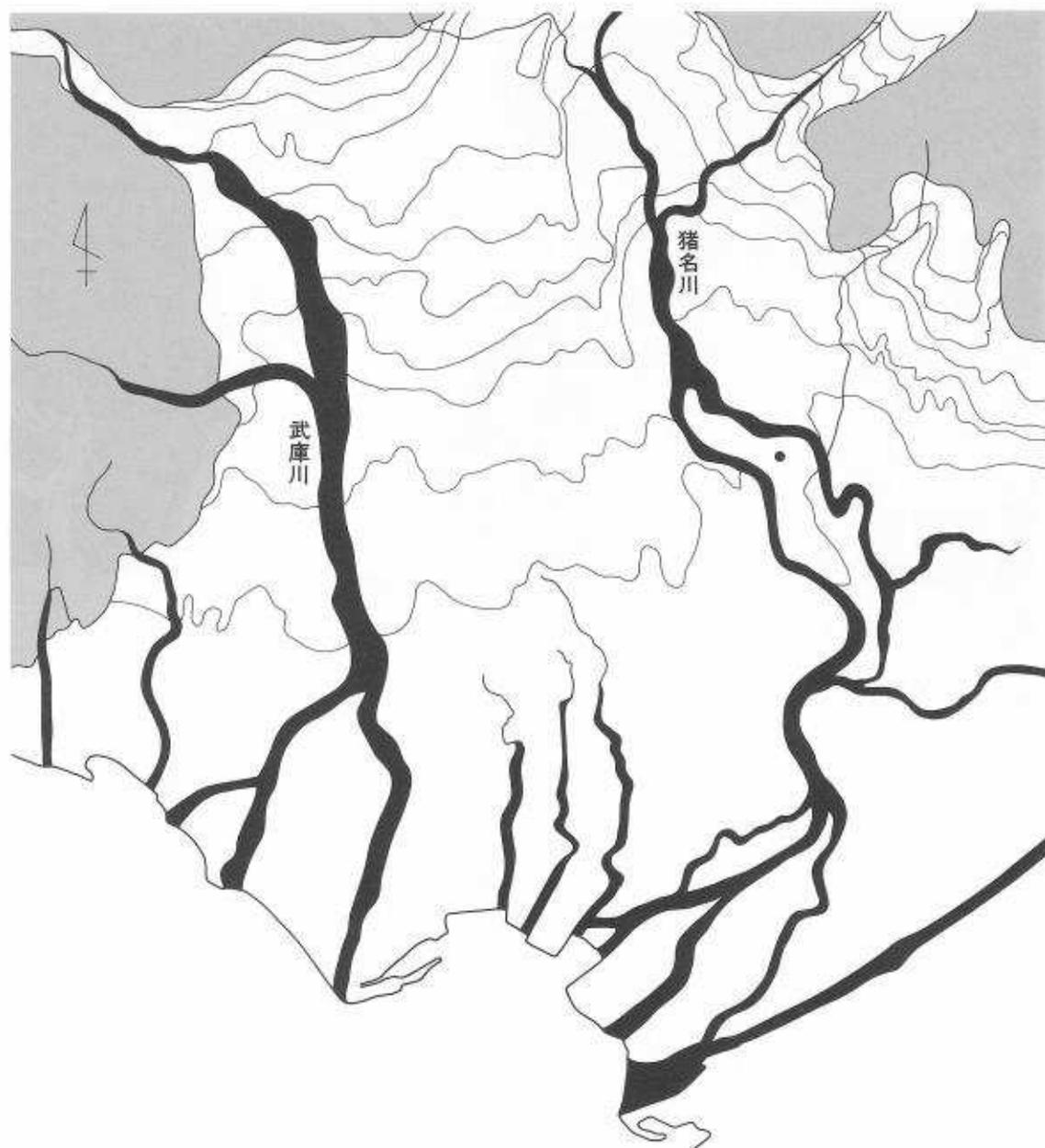
第4図 西摂平野の位置

2. 地形的位置

当遺跡は、上述したように、猪名川と藻川が分岐した地点の下流側に位置する。以下当地の地形的位置について、スケールⅠからスケールⅢの3段階のレベルに分けてみていくことにする。

スケールⅠ 大阪平野を視野に地形面レベルで捉えるものである。近畿地方を対象に、平地と山地とに地形を分類したのが第4図である。これによると、尼崎市域は大阪平野の西側に位置する。武庫川と猪名川の沖積作用によって形成された平野で、狭義には「西摂平野」あるいは「武庫平野（平地）」と呼称され、尼崎市はこの西摂平野の臨海部を占めている。このため、当市域には山地・丘陵地がない点がひとつの特徴となっている。そして、田能高田遺跡はこの西摂平野の東部に位置付けられる。

スケールⅡ 西摂平野を視野に地形面レベルで位置付けるものである。当該地域を対象に5mコンター図を作製したのが第5図である。さらに、この第5図および藤田和雄・渡辺久雄氏による当地域の地形

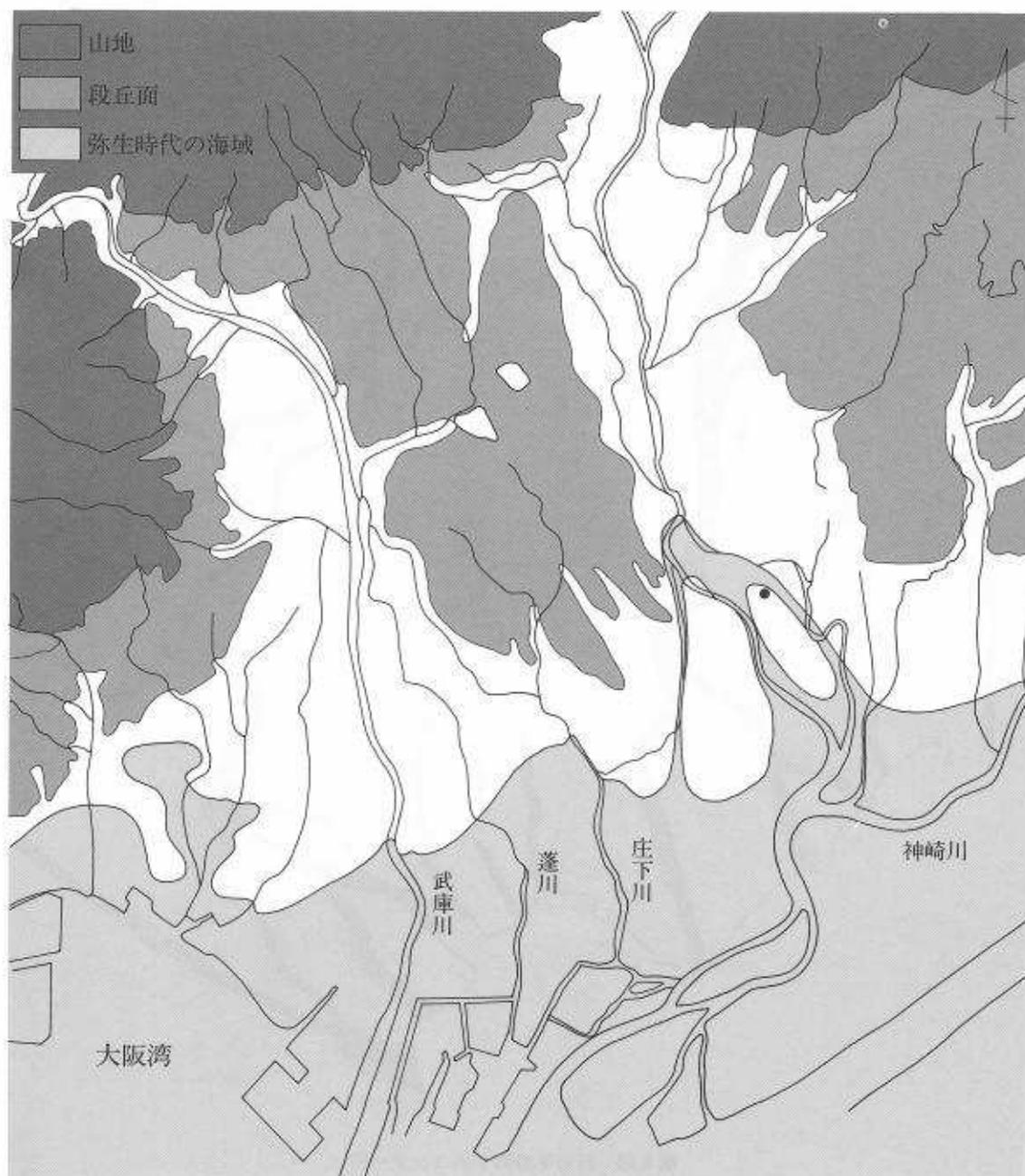


第5図 西摂平野の5mコンター図

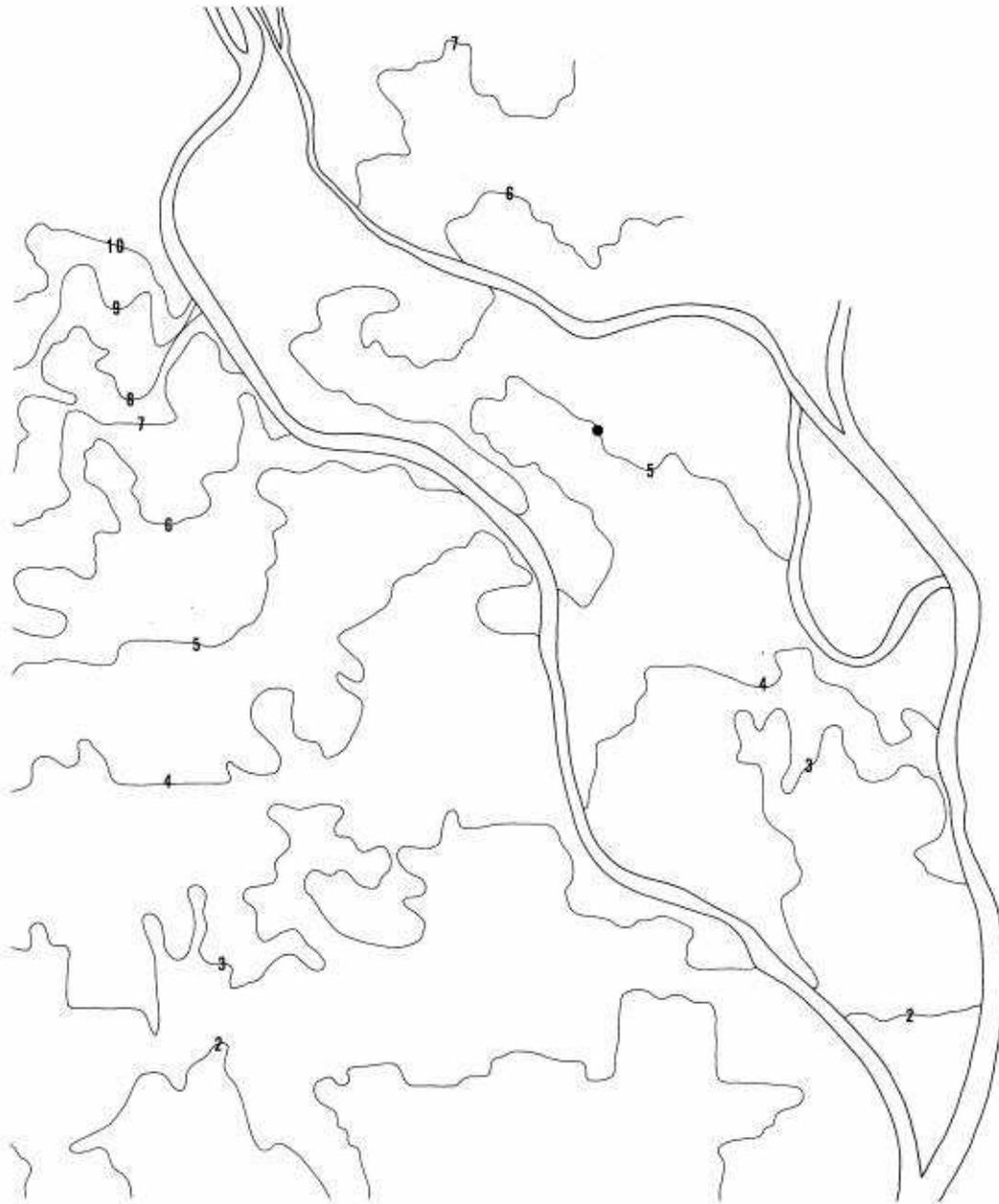
分類を参考に、当該地域を山地・段丘面・旧海域に分類したのが次の第6図である。

これによると、尼崎市域は阪急電鉄神戸線つまり標高5mラインを境に、その北側は伊丹台地に、南側は沖積地となっている。伊丹台地は約3万年前にはすでに形成されており、その後海退にともない武庫川と猪名川による沖積作用が盛んになり、舌状に張り出す伊丹台地の縁辺部を埋める形で沖積平野が形成されていった。特に標高5m以南は、弥生時代後期においては第6図によると海域となっており、この地域に人々の生活した痕跡が認められるようになるのは弥生時代後期以降であることも、この状況を端的に物語っている。

ところで田能高田遺跡は、広義には猪名川によって形成された沖積地に位置する。ところが、第6図からも明らかなように、弥生時代においては、当遺跡のすぐ南側まで海域が猪名川を遡るように入り込んできている。よって、田能高田遺跡は、三角洲Ⅱ帯自然堤防縁辺部に位置付けられる。



第6図 西摂平野の地形分類図



第7図 遺跡周辺の微地形

スケールⅢ 最後に、第7図の当遺跡周辺を1mコンターで復元した微地形図をもとに、当遺跡の埋没過程を検討してみたい。

第7図によると、猪名川と藻川の間中部に谷部が想定される。そして、この谷部の縁辺部に当遺跡が位置する。しかし、調査の結果、当地には集落が存在したことが明らかとなっている。

そこで、弥生時代後期以降、当遺跡の南側の三角洲帯への猪名川による堆積作用の結果、当遺跡の立地する自然堤防が形成され、集落が営まれるようになる。その後、この自然堤防の北側および南側の後背湿地を埋める形で堆積作用が進んだ結果、第7図にみる微地形が形成されたものと考えられる。

つまり、当遺跡の立地する自然堤防の北側と南側に形成された後背湿地が現在の猪名川と藻川に続くものであり、その後両川を中心に天井川化した結果が、第7図に復元された微地形と考えたい。

〔参考文献〕 渡辺久雄「尼崎平野の形成」『尼崎市史』第1巻 1966

藤田和雄・笠間太郎「宝塚の自然とその成立」『宝塚市史』第1巻 1975

第2節 遺跡の歴史的環境

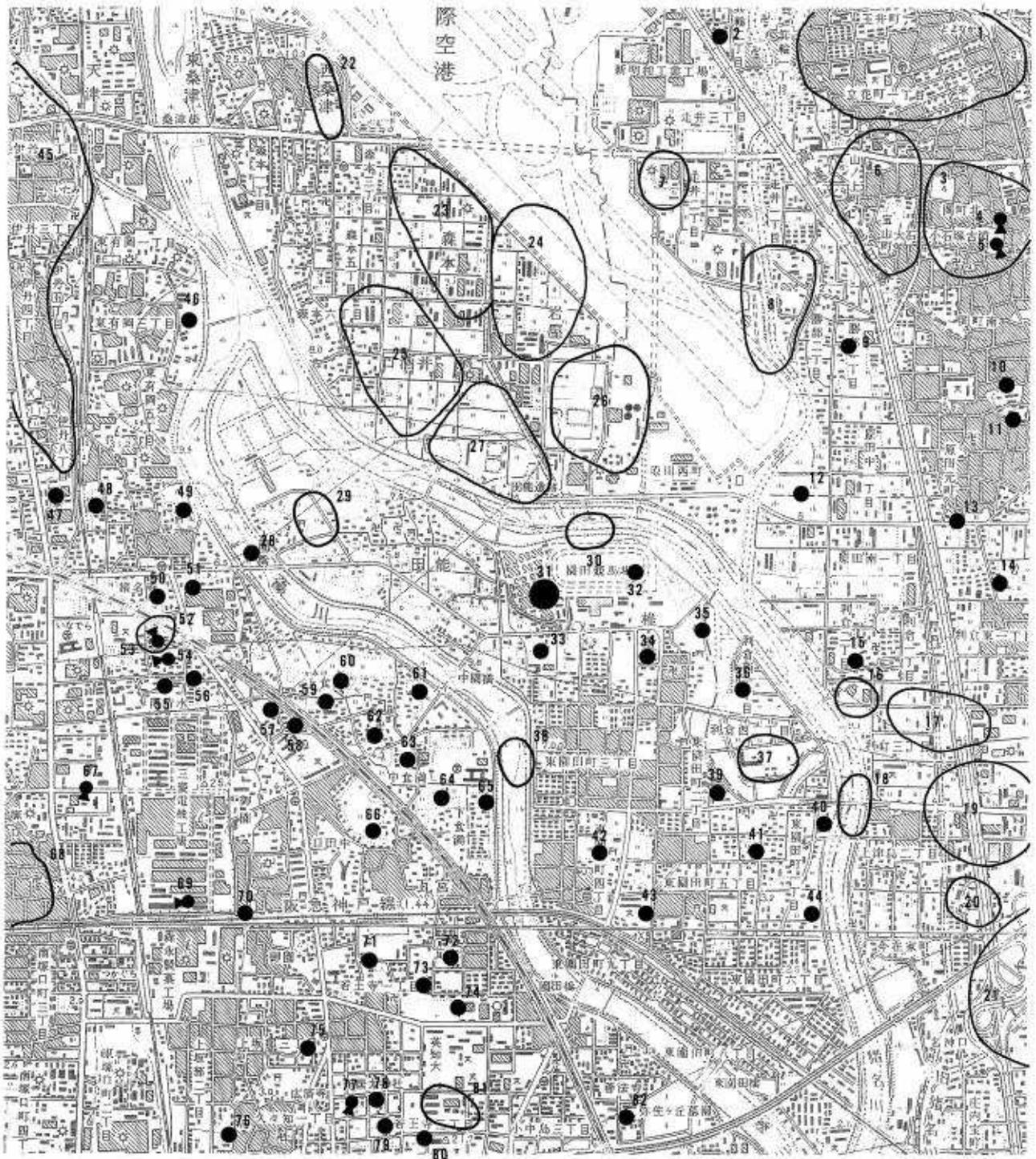
猪名川流域の沖積地上や洪積台地上には旧石器時代以来、人々の生活の痕跡が認められる。ここでは田能高田遺跡周辺の歴史的環境について概観したい。

西摂地方で認められる旧石器時代の遺跡は発掘調査ではなく表面採集資料によって存在が予想されているものが多い。伊丹台地では現在のところこの時期の遺跡は未発見であるが、豊中台地の豊中市蛍ヶ池北遺跡、柴原遺跡、猪名川上流域の川西市加茂遺跡では国府型ナイフ形石器が見つかり、豊中市野畑遺跡、川西市花屋敷遺跡では有舌尖頭器の出土が報告されている。

縄文時代の遺跡の立地は、当初旧石器時代と同様に丘陵や台地の縁辺を中心としていた。しかし、猪名川の沖積地の形成に伴い、時期が下るにつれて、沖積地にも居住域を拡大してくる。この時期の遺跡には内容の明らかなものが少なく、遺物が単独で確認されているだけの場合も多い。遺跡の内容がある程度明らかなものとしては、千里丘陵にある野畑春日遺跡で中期の墓域、野畑遺跡で居住域が確認されている。伊丹郷町下層(45)では船元Ⅱ・Ⅲ式に新崎式が伴って出土した他、後期の土器も認められる。大阪空港A遺跡では勝坂式が出土し、森本遺跡(23)、原田西遺跡(26)、穂積遺跡でも中期の土器が出土している。後期では加茂遺跡で土器棺墓が確認されている他、大阪空港B遺跡が古くから知られている。晩期では口酒井遺跡(25)でこの時期の土器が集中して出土しており、田能遺跡(27)でも下層から突帯文土器の出土が認められる。

弥生時代になると前代に引き続いて形成の進む猪名川と藻川の氾濫原である沖積地の微高地を中心として遺跡数が増加する。猪名川中流域には前期初頭から田能遺跡・勝部遺跡(8)という二つの拠点集落が出現する。猪名川川床遺跡(30)でも前期からの包含層が確認されており、前述の口酒井遺跡でも突帯文土器と前期の土器の共伴が認められる。また、やや丘陵よりの山ノ上遺跡でも前期の溝から突帯文土器の出土が認められる。中期になると居住域が拡大し、山麓や台地上にも遺跡の立地が認められる。新免遺跡(1)は中期から後期にかけての大規模集落で竪穴住居・方形周溝墓が多数検出されている。口酒井遺跡でも中期から後期にかけての住居域と墓域が見つかり、原田西遺跡でも中期の方形周溝墓群が確認されている。後期になると田能遺跡は継続するが、勝部遺跡は廃絶し、前述の遺跡に加え、四ノ坪遺跡(33)、中ノ田遺跡(52)、若王子遺跡(81)、利倉西遺跡(37)、東園田遺跡(39)等の集落が出現する。青銅器関係では田能遺跡で銅剣鑄型、山ノ上遺跡の後期住居から小形仿製鏡、銅鐵が勝部遺跡・田能遺跡で確認され、中村遺跡からは外縁付紐式銅鐸が、利倉遺跡(16)からも飾耳部破片が出土している。

猪名川中流域と伊丹台地では前期前半の古墳は見つからない。しかし、猪名川東岸には前期末から造営が始まった豊中市桜塚古墳群、西岸には中期に造営の始まる猪名野古墳群が現れる。桜塚古墳群は明治時代の絵図によると36基存在したとされているが、現存するのは前期末の前方後円墳である大石塚古墳(4)・小石塚古墳(5)と中期の前方後円墳である御獅子塚古墳、円墳の大塚古墳・南天平塚古墳の5基である。大石塚古墳・小石塚古墳は内部主体は不明であるが、墳丘に壺形埴輪・円筒埴輪を配し、周囲では円筒埴輪棺が検出されている。大塚古墳では墳頂の主体部で3基の棺が検出され、方格規矩神獸鏡・甲冑・武具・農耕具が確認された。御獅子塚古墳では後円部の主体部で2基の棺を検出し、獸文鏡・甲冑・武具・盾・農耕具などが確認された。南天平塚古墳では主体部として割竹形木棺が用い



- | | | | | | |
|------------|-------------|-------------|-----------|------------|-------------|
| 1. 新免遺跡 | 2. 箕輪遺跡 | 3. 岡町北遺跡 | 4. 大石塚古墳 | 5. 小石塚古墳 | 6. 山ノ上遺跡 |
| 7. 走井遺跡 | 8. 勝部遺跡 | 9. 勝部東遺跡 | 10. 原田遺跡 | 11. 曾根遺跡 | 12. 原田中町遺跡 |
| 13. 原田元町遺跡 | 14. 曾根南遺跡 | 15. 利倉北遺跡 | 16. 利倉遺跡 | 17. 利倉南遺跡 | 18. 上津島川床遺跡 |
| 19. 上津島遺跡 | 20. 上津島南遺跡 | 21. 鳥田遺跡 | 22. 西桑津遺跡 | 23. 森本遺跡 | 24. 岩屋遺跡 |
| 25. 口酒井遺跡 | 26. 原田西遺跡 | 27. 田能遺跡 | 28. 上園橋遺跡 | 29. 春日神社遺跡 | 30. 猪名川川床遺跡 |
| 31. 田能高田遺跡 | 32. 園田競馬場遺跡 | 33. 四ノ坪遺跡 | 34. 大西遺跡 | 35. 権堂遺跡 | 36. 権堂の前遺跡 |
| 37. 利倉西遺跡 | 38. 藤川川床遺跡 | 39. 東園田遺跡 | 40. 東浦遺跡 | 41. 西浦遺跡 | 42. 神楽田遺跡 |
| 43. 深田遺跡 | 44. 三反長遺跡 | 45. 伊丹郷町 | 46. 松原遺跡 | 47. 南本町遺跡 | 48. 北畑遺跡 |
| 49. 猪名寺廃寺 | 50. 前畑遺跡 | 51. 寺前遺跡 | 52. 中ノ田遺跡 | 53. 大塚山古墳 | 54. 南清水古墳 |
| 55. 稲荷遺跡 | 56. 松ヶ内遺跡 | 57. 食満1号墳 | 58. 食満2号墳 | 59. 鎌田遺跡 | 60. 喜撰町遺跡 |
| 61. 西ノ口遺跡 | 62. 南ノ口遺跡 | 63. 宮ノ前遺跡 | 64. 東口遺跡 | 65. 古宮遺跡 | 66. 南浦遺跡 |
| 67. 池田山古墳 | 68. 塚口城跡 | 69. 御園古墳 | 70. 岡院の石棺 | 71. 熊野神社遺跡 | 72. 追田遺跡 |
| 73. 平田遺跡 | 74. 苗田遺跡 | 75. 伊佐具神社遺跡 | 76. 川崎遺跡 | 77. 伊居太古墳 | 78. 下川田遺跡 |
| 79. 春日遺跡 | 80. 二ノ坪遺跡 | 81. 若王寺遺跡 | 82. 善法寺遺跡 | | |

第8図 周辺の遺跡

られ、変形六獣鏡・武具が確認された。猪名野古墳群は大塚山古墳(53)・南清水古墳(54)・消滅した池田山古墳(67)・御園古墳(69)・御願塚古墳という5基の前方後円墳と円墳と考えられる柏木古墳等からなるが、桜塚古墳群と同様、早くから削平を受け全貌は明らかではない。しかし、有岡城の砦推定地で古墳であることが確認されたものが2例、最近の調査で埴輪を伴う小古墳が2基発見されている。また、利倉南遺跡では中期の小方墳群が発見され、埴輪・須恵器が出土している。当時の海岸線に沿って西摂最大規模の前方後円墳である伊居太古墳(77)がある。後期ではその前半に猪名野古墳群で追葬が見られ、大型の横穴式石室を持つ単独墳である池田市鉢塚古墳、川西市勝福寺山古墳が猪名川のやや上流に出現する。後期後半からは伊丹台地、豊中台地、長尾山丘陵に群集墳が展開する。集落遺跡としては箕輪遺跡(2)、山ノ上遺跡、中ノ田遺跡、岩屋遺跡(24)、伊丹郷町下層等が挙げられ、新免遺跡では焼け歪みのある須恵器や窯体等が出土しており、桜井谷窯跡群に関連した集落であると考えられている。島田遺跡(21)では古墳時代中期から後期にかけての滑石製模造品が多数出土している。

古代の遺跡としては白鳳時代から奈良時代の法隆寺式の伽藍配置を持つ猪名寺廃寺(49)、伊丹市伊丹廃寺がある。猪名寺廃寺に関連するものとして、中ノ田遺跡で奈良時代の掘立柱建物や多量の遺物が検出されていたが、最近では南本町遺跡(47)でも奈良時代に属する大型の掘立柱建物が確認されている。伊丹廃寺は平安時代に一度再建され、その際に金堂基壇に3基の瓦窯を営んでいる。口酒井遺跡では平安時代中頃の掘立柱建物の他、条里の痕跡を示すと考えられる溝が検出されている。上津島遺跡では奈良時代の河川より人形・斎串が発見されており、上津島南遺跡では奈良時代～平安時代末期の掘立柱建物、井戸、墓などが検出されている。

中世城館としては伊丹氏により鎌倉時代末には築造され、天正年間に荒木村重により惣構えの城として改築された有岡城が伊丹郷町の下層で検出されている。これまでの調査で建物跡・堀跡・土塁跡・溝跡等の主郭とそれに付随する砦の様相が判明しつつある。森本遺跡、口酒井遺跡の一部は森本氏の居館跡に当たるものと思われるが、青磁・瓦器・土師器等遺物の出土は認められるものの、具体的な遺構は判っていない。他にも天正年間に一向一揆衆により築かれた塚口城跡(68)や田能城があったとされる春日神社遺跡(29)等がある。

近世では有岡城の範囲とほぼ重なる形で、酒造業で栄えた伊丹郷町の遺構が検出されている。建物跡・溝・かまどなどの生活に関わる遺構の他、庭園・水琴窟や酒蔵等の当時の暮らしぶりを伺わせる遺構も検出されている。

参考文献

- 尼崎市教育委員会『田能遺跡発掘調査報告書』(1982)
- 尼崎市教育委員会『尼崎市猪名寺廃寺跡』(1984)
- 尼崎市教育委員会『尼崎市中ノ田遺跡Ⅲ』(1991)
- 尼崎市教育委員会『尼崎市埋蔵文化財遺跡分布地図及び手引き』(1996)
- 伊丹市教育委員会・財団法人古代学協会『伊丹市口酒井遺跡―第11次発掘調査報告書―』(1988)
- 伊丹市教育委員会『埋蔵文化財保護の手引き』(1989)
- 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財年報2』(1994)
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成7年度年報』(1996)

第3章 調査の結果

第1節 遺構

1. 基本層序 (図版1・写真図版2)

図版1は、調査区壁面における土層堆積状況であり、調査区の南西隅とトレンチB北端とを壁面に沿って結んだものである。これとともに調査区内の基本層序を上層から順に示せば以下のとおりとなる。

①. 盛土 (図版1には省略)

昭和39～45年に実施された既設建設時の造成土である。厚さは約1mである。

②. 耕作土 (図版1の第1～4層)

平安時代前半から昭和39年の造成直前までの耕作土。約1,000年の間に50cm程度しか土壌の堆積がみられない。それ以前との間に地形環境の変化があったこと、具体的には完新世段丘Ⅱ面の段化によって洪水堆積物がほとんど及ばなくなったことを示すものである。

③. 第1遺構面直上層 (図版1の第5層)

平安時代前半期の遺物が出土した。

④. 第1～第3遺構面の基盤層

比較的細粒(極細砂より細かい)の堆積物で構成される。厚さは約70cm。弥生時代終末期から古墳時代中期にかけての遺構面である。第2遺構面において土壌化が認められた。その他の遺構面では、のちの削平などによるためか、土壌化は顕著でなかった。なお、第2遺構面の調査にあたっては、この土壌化層をわずかに掘り下げて遺構の検出を実施した。

⑤. 第4遺構面の基盤層 (図版1に記載できず)

下層の旧河道に伴う砂礫層を主体とする層。弥生時代中期～後期にかけての遺物を含む。深さは確認していない。

2. 第1面の遺構 (図版2・写真図版3)

(1) 概要

第1面は、調査区内ではほぼ平坦であり、その標高は約4.0mである。5層下面にあたる面であり、土壌化していないことから、第5層の堆積以前に削平を受けていることが分かる。遺構は調査区全域に認められるが、Cライン以南に集中している。竪穴住居2棟、土坑7基、井戸1基、溝8条、土器群7カ所などが検出された。

土器群101～107、土坑SK103・SK104、溝SD103・SD104・SD108などからは、布留式前後の完形に近い多量の土師器が出土し、また竈付きの竪穴住居であるSH101や、井戸SE101、土坑SK107、溝SD108などからは古墳時代の須恵器が出土している。

第1面の遺構はこのように、古墳時代中期を中心とした時期に営まれたことが分かる。ただし、1・2区で検出された南北方向の畝とA5区の噴砂101は、第1面で検出したものの、畝は第5層上面から切り込んでおり、噴砂101も第5層を引き裂いている。第5層からは平安時代前半の須恵器・環B

(246)が数点出土しているため、これらの遺構に限っては平安時代前半以降のものといえる。特に噴砂101は、慶長元(1596)年に起きた伏見地震による可能性が高い。

また特筆すべきこととして、5層直下から出土した銅鏡片、有孔円板が挙げられる。ともに集落における何らかの祭祀的行為に用いられた可能性が考えられる。

(2) 竪穴住居

SH101 (図版3・写真図版4)

B0・B1区で検出された、造り付け竈をもつ竪穴住居である。周壁のうち、西壁は土坑SK101に切られたうえ、調査区外に続くため検出できなかった。また、北東隅を溝SD102に切られる。

平面形態は正方形と思われ、南北方向における一辺の長さは約3.0mを測る。主軸の方向はN46°Wである。検出面から床面までの深さは8~13cmであり、床面の標高は3.77mである。床面積は9㎡程度と推測される。屋内施設として、竈、周壁溝、土坑がある。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

北壁には造り付けの竈が認められた。ただし、調査中にそれと認識できずに、両袖部分を削平してしまったため、床面に残る炭や焼土の分布状況からその形態と平面規模を推測しえたものである。袖部は盛土によって築かれているものと思われ、その長さは約84cm、焚口部の幅15cm、奥行き80cmを測る。焼成部は僅かに窪み、焚口部奥から屋外に向かう煙道部の一部を検出した。

屋内の南西隅には円形の土坑が掘り込まれている。直径は54~60cm、深さは14cmを測る。

周壁溝は床面の周囲に全周するのではなく、南辺の一部に認められたのみである。幅は12cm、深さは4cmである。

また、精査にもかかわらず、床面から支柱穴は検出されなかった。周壁の外側においても柱穴は確認できなかったが、これは第1面自体の削平によるためかもしれない。

竈前面の床面直上から甕(1)と高環(2)が、南西隅の屋内土坑の上面からは高環(3)が出土した。また、埋土より古墳時代のものと思われる須恵器の小片が出土している。

SH102 (図版4・写真図版5)

A4区で検出された屋内高床部をもつ竪穴住居である。トレンチAの設定によって遺構の南半分を掘削してしまった。他の遺構との切り合いはない。竪穴住居SH101との直線距離は約31mを測る。

平面形態は正方形と思われ、東西方向における一辺の長さは5.42mを測る。主軸の方向はN7°Wである。検出面から床面までの深さは約30cmであり、床面の標高は3.62mである。床面積は30㎡程度と推測される。屋内施設として、高床部、支柱穴がある。

埋土は4層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

周壁に沿って幅80~130cmの屋内高床部が検出された。全周するか否かは断定できないが、調査区南壁における断面観察によって、南辺際には高床部が存在することが判明した。高床部と床面との比高差は15cmである。なおこの高床部は盛土ではなく、地山の削り出しによって造り出されている。

支柱穴は2穴が確認された。いずれも高床部内側の隅あるいはその近くに位置している。柱掘り方の直径は36~39cm、深さ10cmを測る。柱痕は認められなかった。

周壁溝は認められなかった。

床面の主に東半から古墳時代の土師器が出土した。

(3) 土 坑

SK101 (図版3)

B0区で検出された土坑である。西半部が調査区外に続くため、形状、規模については不明な点が多い。竪穴住居SH101の埋没後に営まれた遺構であり、これを切っている。

平面形は不明であるが、円形の可能性が高い。残存部における規模は、東西1.2m以上、南北2.4m以上を測る。横断面形は台形で、検出面から土坑底までの深さは13cmである。

埋土は1層であり、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から古墳時代の土師器、土錘が出土している。

SK102 (図版5・写真図版5)

A0区で検出された長楕円形の土坑である。南端部をトレンチAで掘削してしまった。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、長さ1.43m以上、最大幅0.68mを測る。横断面形は、土坑壁が比較的急角度に立ち上がる台形を呈し、検出面から土坑底までの深さは37cmである。

埋土は3層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土、特に第1層より古墳時代の土師器が多く出土している。

SK103 (図版5・写真図版6)

A3区で検出された円形の土坑である。南端部をトレンチAで掘削してしまったため、形状や規模のうで不明な点が多い。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、南北1.30m以上、東西1.45mを測る。横断面形は台形で、検出面から土坑底までの深さは35cmである。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土の第2層から古墳時代の土師器が出土している。

SK104 (図版6・写真図版6)

A2・A3区で検出された土坑である。トレンチAによって遺構の大半を掘削してしまったため、形状、規模および他の遺構との切り合い等については不明な点が多い。

残存部における規模は、東西3.72m以上、南北2.99m以上を測る。横断面形は台形で、検出面から土坑底までの深さは28cmである。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から古墳時代の土師器が多数出土している。特に土坑底からの出土土器が多い。

SK105

A2区で検出された土坑である。トレンチAによって遺構の大半を掘削してしまったため、形状、規模および他の遺構との切り合い等については不明な点が多い。

規模は、東西が3.46m以上、南北方向の残存長2.00m以上を測る。横断面形は台形で、検出面から土坑底までの深さは45cmである。

埋土は3層に分かれ、土坑底には直径75cm、厚さ2mm程度の炭層が広がっている。人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から古墳時代の土師器が出土している。

SK106

B3区で検出された楕円形の土坑である。他の遺構との切り合いはない。

規模は、長軸の長さ1.24m、短軸の長さ0.94mを測る。横断面形は台形で、検出面から土坑底までの深さは23cmである。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から古墳時代の土師器が出土している。

SK107 (図版7・写真図版7)

D5区で検出された平面円形の土坑である。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、東西1.44m、南北1.64mを測る。横断面形は台形だが、北側の底に近い部分が大きくえぐれている。検出面から土坑底までの深さは72cmである。

埋土は5層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。4・5層中には炭化した木材を含む植物繊維が含まれていた。

埋土から古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

(4) 井戸

SE101 (図版7・写真図版7)

B4区で検出された、井戸と思われる遺構である。他の遺構との切り合いはない。

平面形は円形であり、検出面における規模は、東西1.07m、南北1.00mを測る。壁はほぼ直立し、底面も水平に近い。検出面から底までの深さは74cmである。底は下層に流れていた旧河道を埋めた極細砂層に達しており、地下水位が調査時より高ければ湧水が得られたであろう。

埋土は9層に分かれ、人為的な埋積状況は確認できなかった。また、6層下面には木質を含む厚さ1cm程の植物遺体層が平面的に認められた。

埋土から古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

(5) 溝

SD103 (図版8・写真図版9)

B4区で検出された東西方向にのびる溝である。東端は浅くなって消滅し、西端は調査区外にある。検出された長さは9mを測り、東半部における幅は30cm程度である。ただし、溝の西半部は幅が広く、最大1.65mを測る。

横断面形は台形を呈し、検出面から底までの深さは最大18cmを測る。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は確認できなかった。

埋土から古墳時代の土師器、敲石が出土している。特に溝の西半部には包含する遺物の量が多く、また大型の破片も多い。

SD104 (図版9・写真図版9・10)

B5・B6区で検出された東西方向(N86°W)に直線的にのびる溝である。東西両端とも調査区外にある。

検出された長さは16.1mを測り、幅は0.86m程度である。

横断面形は台形を呈する。溝底における幅は11~40cm、検出面から溝の底までの深さは50cm前後である。調査区内における東西両端の標高はいずれも3.40mであり、高低差は認められない。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は確認できなかった。

埋土の第1層から古墳時代の土師器が多数出土している。特に溝の中央付近からの遺物の出土量が多い。また、図化していないが生駒西麓産の壺の小片も出土している。

SD105 (図版2)

B5・B6区で検出された東西方向(N90°W)に直線的にのびる溝であり、溝SD104とはほぼ平行する。東端は浅くなって消滅しており、西端は調査区外にある。

検出された長さは6mを測り、幅は0.40m程度である。

横断面形は台形を呈する。検出面から溝の底までの深さは15cm前後である。溝底は僅かに西に向かって低いが、大きな差はない。調査区内における西端の標高は3.70mである。

埋土は1層であり、人為的な埋積状況は確認できなかった。

埋土から古墳時代の土師器が出土している。

SD106 (図版2)

B5・B6区で検出された東西方向(N90°W)に直線的にのびる溝であり、溝SD104・SD105とはほぼ平行する。東西両端とも調査区外にある。

検出された長さは10.8mを測り、幅は34~50cmである。

横断面形は台形を呈する。検出面から溝の底までの深さは12~18cmである。溝底の標高は、調査区内の西端で3.72m、東端で3.64mと大差ない。

埋土は1層であり、人為的な埋積状況は確認できなかった。

埋土から古墳時代の土師器が出土している。

SD108 (図版10)

A5・B5区で検出された南北方向に直線的にのびる溝である。非常に浅く、南北両端部は消滅している。

検出された長さは3.80mを測り、最大幅は1.01m程度である。

横断面形は台形を呈する。検出面から溝の底までの深さは12cm前後である。

埋土は1層であり、人為的な埋積状況は確認できなかった。埋土の第1層から遺構外にかけて古墳時代の須恵器・土師器が出土している。特に溝の北端部分からの遺物の出土量が多い。

第2表 土器群一覧表

遺構名	地区	規模 (cm)	遺物
土器群101	B2	180 × 180	甕2, 高坏4, 小型丸底壺1, 鉢1, 鉄鋤鍬先1
土器群102	B2	25 × 30	甕1
土器群103	B3	30 × 40	甕1
土器群104	B4	20 × 50	壺1
土器群105	B5	80 × 110	小型丸底壺2, 高坏1
土器群106	B5	40 × 90	壺1, 高坏1, 甕1
土器群107	B5	40 × 55	甕2, 高坏1

(6) その他

土器群 (第2表・図版11・写真図版8)

明確な掘り込みがないが、第1面の直上で、土器を主体とする多くの遺物の集中する遺構が確認された。本報告ではこれらを土器群とよぶことにする。101～107の7か所が検出された。その概略を一覧表の形で表示する。

噴砂101 (巻首図版1・図版12・写真図版10)

A5区で検出された、液状化に伴う噴砂である。東西方向(N81°W)にのび、その長さは、断続的に約7.7mを測る。検出面における最大幅は6cmである。

第1面より約40cm下層にある旧河道堆積物が液状化したもので、第4面におけるSR401西側の中州状に高くなった部分が、噴砂として第1面以上に噴き上がったものである。

液状化したのは粗砂混じりの小礫層である。検出面で確認されたのは粗砂であるが、約40cm下層には最大径8cm程度の礫が認められた。

調査区東壁の観察によれば、噴砂101は第1面より上層の第5層を引き裂いていることが分かった。このことから、この噴砂は平安時代前半以降の所産と考えられる。また、震源が近いと考えられること、震度Ⅵ以上の激しい揺れの結果であると判断されることから、文献に残る地震記録に当てはめれば、慶長元(1596)年9月5日、午前零時頃に起きたとされる慶長伏見地震による液状化である可能性が高い。

3. 第2面の遺構 (図版13・写真図版11)

(1) 概要

第2面は調査区内ではほぼ平坦であり、その標高は約3.7mである。9・32・33・58層の下面に相当する。第2面では、遺構はCライン以南、5ライン以西に集中している。竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟、柵1列、土坑22基、溝2条、噴砂などが検出された。ただし、2ライン以西については、第2面の認定を誤り約20cm掘り下げてしまった結果、遺構の一部を削り、あるいは下層の遺構を検出してしまった可能性もある。

竪穴住居SH201には1回の建て替えが認められ、建て替え後の柱穴には柱根が遺存していた。また、屋内の土坑からは板状の木製品が出土した。

土坑には、かなり強い火を受けた痕跡が認められる土坑SK213や、下層に厚い炭層が認められ、微細な骨片などが含まれていた土坑SK217がある。

また、トレンチB西壁の第2面直上から、石鋼の小片が1点出土している。

噴砂201は、第1面のものより小規模な地震によるもので、太平洋沿岸地帯を震源とする南海地震の可能性が高いという。この場所における遺構の分布が少ない理由として、下層の旧河道の影響で地盤が軟弱であった可能性もあるが、南海地震による液状化で噴砂が遺構面を覆ってしまったことが挙げられるかもしれない。

第2面に伴う遺物はさほど多くないが、出土土器および石鋼の年代観から、古墳時代前期を中心に営まれた生活面といえる。

(2) 竪穴住居

SH201 (図版14・写真図版12)

A0・A1区で検出された竪穴住居である。遺構の南西隅は調査区外に位置し、南東隅をトレンチAの設定によって掘削してしまった。また、先述したように遺構面の誤認によって周壁を掘り下げてしまう結果となった。

周壁溝と支柱穴の検出状況から本住居は建て替えがなされていることが分かり、土層の堆積状況の観察からは、内側の住居が先行して営まれ、次いで外側のものがこれを切っていると判断できる。このため、内側の住居を1次住居、外側のものを2次住居とよんで区別する。他の遺構との切り合いは認められない。

1次住居の平面形態は南北にやや長い長方形であり、南北方向における一辺の長さは3.56m、東西方向の長さは2.56mである。主軸の方向はN13°Eである。2次住居の床面で周壁溝と支柱穴を検出した。床面積は9㎡程度と推測される。1次住居の屋内施設として、周壁溝、支柱穴がある。中央土坑もこの段階のものかもしれない。

支柱穴は4穴が確認された。柱掘り方の直径は25～35cm、深さ23～26cmを測る。柱間距離は1.44～1.56mを測る。南西の柱穴を除き、柱痕が認められた。柱痕の直径は13cm程度である。

周壁溝と思われる溝が部分的に検出された。溝が全周しないのは、2次住居を営む際に床面をさらに掘り窪めたため削平されたのであろう。幅は15cm、床面からの深さは3cm程度と浅い。

2次住居の平面形態は正方形であり、南北方向における一辺の長さは4.62m、東西方向の長さは4.76mである。主軸の方向はN14°Eである。検出面から床面までの深さは約33cmであり、床面の標高は3.48mである。床面積は23㎡程度と推測される。2次住居の屋内施設として、周壁溝、支柱穴、中央土坑および土坑がある。

埋土は4層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

支柱穴は4穴が確認された。柱掘り方の直径は30～42cm、深さ49～59cmを測る。柱間距離は2.44～2.56mを測る。全ての柱穴で柱痕が認められたが、北西隅の柱穴には柱根が遺存していた。柱根の直径は約14cm、長さは51cmであり、本来の柱掘り方から30cm以上基盤層に沈み込んでいた。この沈下は住居の基盤層が水分を比較的多く含んだ軟弱な細砂～極細砂であることに一因があると思われ、この支柱の不当沈下による上屋構造の傾きが当住居の廃絶原因になった可能性も考えられる。

周壁の内側を全周する周壁溝が認められた。幅は8cm、床面からの深さは5cmである。

床面のほぼ中央には楕円形の土坑が認められる。長軸の長さ58cm、短軸の長さ45cm、床面からの深さ4cmを測る。坑底には薄い炭層が面的に広がる。厳密には、この中央土坑が2次住居の屋内施設だという確証はない。この土坑は浅いため、建て替え時に削平を受けたであろう1次住居に伴う施設であった可能性もある。

周壁の南東隅から、南端部をトレンチAで破壊された長方形の土坑が検出された。幅59cm、残存長87cm、床面からの深さ11cmを測る。この土坑底の中央には長さ40cm、厚さ5mm程度の板材がほぼ水平に置かれていた。そのままの形で取り上げることもできず、その性格も不明とせざるをえない。

SH202 (図版15・写真図版13)

A1区で検出された竪穴住居である。遺構の南東隅をトレンチAの設定によって掘削してしまった。同一面で検出された竪穴住居SH201との直線距離は約1.1mである。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形態はほぼ正方形であり、南北方向における一辺の長さは4.85m、東西方向の長さは4.66mである。主軸の方向はN5°Wである。検出面から床面までの深さは約9cmであり、床面積は22㎡程度である。屋内施設として、主柱穴、中央土坑および土坑がある。周壁溝は確認されなかった。

埋土は3層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

主柱穴は4穴が確認された。柱掘り方の直径は40～46cm、深さ50～63cmを測る。柱間距離は2.56～2.68mを測る。すべての柱穴において柱痕が認められた。柱痕の直径は15～20cm程度である。

床面のほぼ中央には隅丸方形の土坑が認められる。長軸の長さ49cm、短軸の長さ43cm、深さ6cmを測る。

東壁の中央北寄りでは長方形の土坑が検出された。長軸の長さ50cm、短軸の長さ29cm、深さ6cmを測り、上面には炭片を多く含んでいる。

SH203 (図版15・写真図版13)

A3区で検出された竪穴住居である。トレンチAの設定によって掘削してしまったため、遺構の北端部しか検出されなかった。同一面で検出された竪穴住居SH202との直線距離は約11.4mである。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形態はほぼ正方形と推定され、東西方向における一辺の長さは3.16m、南北方向の長さは1.44mが検出されたにとどまった。主軸の方向はN14°Wである。検出面から床面までの深さは約6cmである。屋内施設として周壁溝が確認されたのみである。周壁溝は断続的に床面の外側を全周するものと思われ、幅12cm、床面からの深さは4cm程度である。

埋土は3層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

(3) 掘立柱建物

SB201 (図版16・写真図版13)

A3・B2・B3区で検出された掘立柱建物である。土坑SK217に切られ、北辺中央の柱穴を欠く。竪穴住居SH203の約2.5m北に位置する。

N22°Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の建物である。規模は桁行方向が3.68～3.94m、梁行

方向が3.52~3.64mのやや南北に長い正方形である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.90m、梁行が1.84mを測る。面積は約14㎡である。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は28~34cm、柱痕の直径は11~15cmである。深さは15~23cmを測る。

遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

(4) 柵

SA201 (図版16)

B0区の竪穴住居SH201の北側で検出された柵である。他の遺構との切り合いはない。しかし、先述したように第2面を誤認し、約20cm掘り下げてこの遺構を検出したため、この遺構は柵SA301とともに第3面に属する可能性もある。

4個の柱穴から構成されるが、調査区外の北方へ延びる可能性もある。その方向はN9°Eを測る。柱穴間の心々距離の平均値は1.56mである。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20~28cm、柱痕の直径は11~14cmである。深さは18~26cmを測る。

遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

(5) 土坑

SK213 (巻首図版1・図版17・写真図版14)

B2区で検出された平面不整形の土坑であり、竪穴住居SH202に近接する。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、長軸の長さ63cm、短軸の長さ52cmを測る。検出面において土坑西壁が焼土化しているのが確認された。縦断面形は台形であるが、この焼土化した西壁が大きくえぐれており、その部分にも焼土化が認められた。また、横断面形も台形であるが、南壁がわずかにえぐれている。土坑底はほぼ平らであるが、中央西寄りが楕円形に5cm程深くなり、その東肩が焼土化している。

検出面から坑底までの深さは22cmを測る。埋土は3層に分かれ、第1層は細砂~極細砂、第2層が二次堆積した焼土層、一段深くなった部分の埋土は微細な炭片を多く含むシルト層である。

これらのことから、燃焼を行った土坑であることは確実である。土坑底をさらに掘り窪め、そこを燃焼部とし、熱を逃がさぬよう土坑の西および南北壁をオーバーハングさせて、覆い部を形成していたと思われる。第2層とした二次堆積の焼土層はこの焼土化した壁が崩落したものであろう。

炭を多く含む第3層からは、微細な骨や種子は確認されず、燃焼の目的は不明とせざるをえない。

遺物は出土していない。

SK217 (図版10・写真図版15)

B3区で検出された平面楕円形の土坑である。掘立柱建物SB201を切る。

検出面における規模は、長軸の長さ1.82m、短軸の長さ1.50mを測る。横断面形は台形であり、検出面から土坑底までの深さは41cmである。

埋土は5層に分かれ、最下層は厚さ15cmの炭層である。この炭層中には、微細な白色の骨片や木片が

含まれている。

埋土から古墳時代前期の土師器が出土している。

SK219 (図版17・写真図版15)

A4・B4区で検出された平面長方形の土坑である。溝SD202に切られる。

検出面における規模は、長辺3.07m、短辺2.68mを測る。横断面形は台形であり、土坑底は平坦である。検出面から土坑底までの深さは8cmである。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から古墳時代前期の土師器が出土している。

SK220 (図版17・写真図版16)

A4区で検出された不整形の土坑である。北端の溝状を呈する部分、南半の楕円形の部分からなっており、断面形からもいくつかの遺構が切り合っている可能性がある。

検出面における規模は、溝状の部分を除けば長軸の長さ3.16m、短軸の長さ2.00mを測る。横断面形は凹凸が激しいが、台形を呈している。検出面から土坑底の最深部までの深さは37cmである。

埋土は6層に分かれている。第1層には砂粒を全く含まない白色の粘土が散在している。厚さは最大1cm程度である。土器製作用の粘土の可能性はある。

埋土から弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土師器が出土している。

SK221 (図版18)

B3・B4区で検出された不整形の土坑である。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、長軸の長さ2.24m、短軸の長さ1.96mを測る。横断面形は皿形であり、検出面から土坑底までの深さは8cmである。

埋土は1層のみであり、焼土や炭片を含んでいる。

埋土から古墳時代前期の土師器が出土している。

SK222 (図版18)

B4区で検出された不整形の土坑である。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、長軸の長さ2.16m、短軸の長さ1.51mを測る。横断面形は皿形であり、検出面から土坑底までの深さは9cmである。

埋土は2層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

SK225 (図版18)

B5区で検出された不整形の土坑である。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、長軸の長さ2.51m、短軸の長さ1.68mを測る。横断面形は皿形であり、検出面から土坑底までの深さは8cmである。

埋土は1層のみであり、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から古墳時代前期の土師器が出土している。

SK228 (図版18)

A2区で検出された平面楕円形の土坑である。竪穴住居SH203の西側に位置する。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、長軸の長さ3.52m、短軸の長さ2.35mを測る。横断面形は皿形であり、検出面から土坑底までの深さは10cmである。

埋土は3層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から古墳時代前期の土師器と弥生時代後期の土器が出土している。

(6) その他

噴砂201 (図版12・写真図版17)

C5区で検出された、液状化に伴う噴砂である。南東から北西方向(N69°W)にのび、その長さは断続的に約10.5mを測る。検出面における最大幅は10cmである。

第2面より約90cm下層にある旧河道堆積物が液状化したものである。トレンチBの調査区西壁によれば、第2面まで噴き上がった砂が平面的に広がっている様子が観察された。

液状化したのは、礫を含む粗砂～中砂層である。

この第2面に伴う噴砂201は、古墳時代前期の所産であり、噴砂101ほど強い揺れとは考えがたいことから、南海地震による液状化である可能性が高い。

4. 第3面の遺構 (図版19・写真図版18)

(1) 概要

第3面は調査区内では平坦であり、標高は約3.5mである。第3面は10・46・61層の下面にあたる。第3面で検出された遺構は、竪穴住居2棟、土坑11基、溝5条などであり、すべて5ライン以西に位置している。4ラインより東には埋没しつつある旧河道が存在するため、地盤が安定せず居住地には利用されなかったものと思われる。トレンチBにおける土層堆積状況の観察によれば、Cライン以北には遺構、遺物が認められないため、この部分における第3・4面の平面的な調査は実施しなかった。

竪穴住居SH301は、大半が調査区外に存在するが、床面直上から多くの弥生時代後期の土器を得ることができた。また、竪穴住居SH302は、屋内高床部をもち、平面形が正五角形を呈する特異なもので、兵庫県下での検出は3例目である。

第3面は、下層の埋没旧河道の影響を強く受けたため、調査区全域に居住地の広い展開は見られないものの、弥生時代後期後半から庄内式期を中心とする生活面であるといえる。

(2) 竪穴住居

SH301 (図版20・写真図版19)

B3区で検出された竪穴住居である。大半が調査区外に位置し、南端の一部を検出したにとどまる。約3m外側を巡る弧状の溝SD306は、当住居の付帯施設の可能性も考えられる。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形態は円形で、その直径は4.00mと推測される。検出面から床面までの深さは約12cmであり、床面積は12㎡程度であろう。床面の周囲には周壁溝が、床面からは柱穴と土坑が検出された。

埋土は4層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

周壁溝は床面の外側を全周するものと思われ、幅15cm、床面からの深さは15cm程度である。

柱穴が1穴確認された。柱掘り方の直径は51cm、深さ44cmを測る。柱痕は認められず、埋土は上下2層に分かれる。この柱を当住居の主柱穴とするには周壁溝に近すぎるため、当住居築造以前に掘り込まれた柱穴である可能性が高い。

また、周壁溝を切る形で楕円形の土坑の一部が検出された。床面からの深さは約15cmである。

床面直上から、完形のものを含む弥生時代後期の土器が出土している。

SH302 (巻首図版1・図版21・写真図版20)

A3・B3区で検出された竪穴住居である。竪穴住居SH301との直線距離は3.6mである。溝SD306を切り、SD307に切られる。

平面形態は明確な正五角形で、各辺の長さは3.73m、3.80m、3.40m、4.45m、4.05mを測る。床面中央を中心点とする半径約3.3mの円の中に収まり、周壁の屈曲部はこの円周上にはほぼ正確に位置している。遺構の削平の結果、検出面において床面の大半が検出された。床面積は25.5㎡程度であろう。

当住居は全周する屋内高床部をもち、周壁の内側には周壁溝が全周する。周壁と平行する高床部の内側にも溝が廻り、その溝が途切れる高床部の屈曲部には5穴の主柱穴が認められる。床面では中央土坑が検出された。

遺構の残存状況が良くなかったため、埋土は1層しか確認できず、人為的な埋積状況も認められなかった。

南辺から南東辺にかけての一部で周壁溝が2条検出されている。このことは、中央土坑に切り合いがみられることと合わせ、主柱穴の移動を伴わない建て替えがあったことを推測させる。また、南東辺には周壁溝の途切れた部分が認められるが、この部分において周壁が検出されていないことから、本来のものか否かは判断できない。周壁溝の幅は12~15cm、床面からの深さは8cm程度である。

周壁に沿う形で、全周する屋内高床部が検出された。高床部の幅は約80~100cmとほぼ均一なため、高床部内側の平面形は周壁の平面形と相似形の正五角形を呈する。ただし、高床部内側のうち、南東辺は緩い円弧を描いている。高床部の面積は13.4㎡であり、全床面積の約53%を占める。高床部は地山の削り出しによって築かれており、その上面においては焼土化や炭の分布も認められなかったため、恒常的な燃焼を伴う行為は行われなかったようである。また、高床部内側の溝は幅12~20cm、床面からの深さは7cm程度を測る。

主柱穴は5穴が確認された。その位置は先述のとおり高床部の屈曲部であるが、高床部の上に位置するものが1穴、床面上に位置するものが4穴を数える。柱掘り方の直径は21~31cm、深さ31~55cmを測る。ほとんどの柱穴で柱痕が認められ、その直径は最大30cmである。

床面の中央やや東寄り、切り合う2つの中央土坑が検出された。古い方は楕円形で、長軸の長さ約80cm、短軸の長さ約65cm、深さ5cm程度と非常に浅い。新しい土坑は、直径約65cm、深さ約13cmを測る。ともに最下層には厚さ5cm程度の炭層が堆積している。また、これらの土坑を中心とした東西188cm、南北125cmの範囲の床面には炭や灰が面的に広がっている。

床面直上から、弥生時代後期の土器が出土している。

(3) 柵

SA301 (図版20)

B1区で検出された柵である。他の遺構との切り合いはない。

5個の柱穴から構成されるが、調査区外の北方へ延びる可能性もある。その方向はN55°Wを測る。柱穴間の心々距離の平均値は1.60mである。

柱穴の掘り方は円形であり、その直径は18~33cmを測る。2穴において柱痕が検出され、その直径は15cmである。深さは10~24cmを測る。

遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

(4) 溝

SD306 (図版22・写真図版21)

B2・B3区で検出された弧状の溝である。両端は北方の調査区外にのびる。竪穴住居SH301を取り巻くように位置しているが、付帯施設であるという確証はない。竪穴住居SH302に切られている。

調査区内の東端部が幅広くなっており、2.93mを測る。その他は0.75~1.10m程度である。

横断面形は台形を呈し、検出面から底までの深さは最大30cmを測る。

埋土は1層のみであり、人為的な埋積状況は確認できなかった。

埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

SD310 (図版22)

A4区で検出された南北方向に直線的にのびる溝である。溝SD309・SD311を切る。南端部は調査区外にあり、北端はしだいに浅くなって消滅している。

検出された長さは3.13mを測り、幅は1.69mである。

横断面形は台形を呈する。検出面から溝の底までの深さは12cmである。

埋土は1層であり、人為的な埋積状況は確認できなかった。

埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

SD311 (図版22)

A4区で検出された溝である。溝SD309を切り、溝SD310に切られる。南端部は調査区外にあり、北端はしだいに浅くなって消滅している。

検出された長さは3.88mを測り、幅は3.10mである。

横断面形は台形を呈する。検出面から溝の底までの深さは15cmである。

埋土は1層であり、人為的な埋積状況は確認できなかった。

埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

5. 第4面の遺構（図版23・写真図版22）

（1）概要

第4面は調査区内ではほぼ平坦であり、その標高は約3.1～3.3 mである。46・47・62・63層の下面に相当する。第4面においては土坑3基、溝6条などが検出されたのみで、居住に関する顕著な遺構は確認されていない。旧河道が完全に埋没していないためと考えられ、調査区外おそらく西方に集落の中心部分が存在していた可能性が高い。第3面と同様と同様の理由で、Cライン以北の平面的な調査は行わなかった。

この旧河道は、後述するように弥生時代中期から古墳時代前期までの遺物を含んでいるが、その埋没の最終段階において、少なくとも2度にわたり、まとまった量の土器を投棄していることから、水辺において祭祀が執り行われた可能性もある。

遺構からの出土遺物が少なく、時期の分かる資料を欠くため、第4面の時期は判然としないが、旧河道の最終埋没過程に対応すると思われるため、弥生時代後期後半頃に営まれた生活面と考えられる。

（2）土坑

SK402（図版24・写真図版23）

A1・B1区で検出された楕円形の土坑である。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、東西1.45m、南北1.24mを測る。横断面形は台形で、壁の立ち上がりは急傾斜である。検出面から土坑底までの深さは65cmである。

埋土は5層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土の第5層から、長さ約100cmの棒状の木や弥生時代後期の土器が出土している。

SK404（図版24）

A3区で検出された楕円形の土坑である。他の遺構との切り合いはない。

検出面における規模は、東西94cm、南北78cmを測る。横断面形は壁の中程に段を有する台形である。検出面から土坑底までの深さは94cmである。

埋土は3層に分かれ、人為的な埋積状況は認められなかった。

埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

（3）旧河道・溝

SR401（図版26・写真図版24）

B4区からA6区にかけて東西方向にのびる直線的なくぼみである。両端は調査区外にある。

検出された長さは約25m、幅は4.2～5.8 mを測る。

横断面形は浅いU字形を呈し、検出面から底までの深さは最大42cmを測る。調査区内における標高は、東端が2.86m、西端が2.65mであり、わずかに東が高い。

埋土は7～10層に分かれ、人為的な埋積状況は確認できない。またラミネーションはみられず、比較的均質な細粒の堆積物によって満たされていることから、激しい水流もなく、時間をかけて自然に埋没したことが分かる。

埋土から弥生時代後期～古墳時代前期を主体とする土器が多く出土している。第4面で検出されたに

もかわらず、布留式に属する土器が少なからず出土しているため、この部分の完全な埋没は古墳時代前期を待たねばならなかったようである。第2面で検出できたはずのこのくぼみを、現地調査の段階で見過ごしていた可能性が高い。

SR401は下層に存在するさらに大規模な旧河道の埋没過程における最終堆積時の窪みにすぎないと思われる。おそらく後述するSD405も同様の性質のものであろう。また、その下層で出土した弥生時代後期初頭の土器の溜まり(図版26に示した4点)も、旧河道堆積時に何らかの理由で投棄されたものと思われる。

下層に存在すると思われるこの大規模な旧河道の詳細が問題となるが、これについては不明な点が多い。埋没完了の時期は、SR401出土遺物のうち、最も新しい時期である古墳時代前期頃をあてざるをえないが、機能時あるいは埋没途上の時期を示す遺物は、噴砂101の断面観察用の断ち割り時に得られた、弥生時代中期の櫛描波状紋を施紋した壺の小片1点のみである。また、旧河道の規模については、下層の大規模な断ち割りが実施できなかったために、不明とせざるをえない。

SD405 (図版25・写真図版23)

SD405は、下層の大規模な旧河道の堆積時に存在した溝状の窪みと思われる。

A4・B4区で検出された南東から北西方向にのびる直線的な溝状の窪みである。南東端は調査区外にあり、北西端はしだいに浅くなって消滅する。

検出された長さは約11m、幅は2.1mを測る。

横断面形は凹凸のある皿形を呈し、検出面から底までの深さは最大17cmを測る。調査区内における南東端の標高は3.0mである。

埋土は3層に分かれ、人為的な埋積状況は確認できない。またラミネーションはみられず、比較的均質な堆積物によって満たされていることから、激しい水流もなく、自然に埋没したことが分かる。

埋土から弥生時代後期の土器が多く出土している。あたかも完形の甕が選別されて、投棄あるいは据え置かれたかのような出土状況を呈している。ちなみに、この他にいわゆる祭祀的な遺物は出土していない。

また、SD405と同様、完形の土器がまとまって出土した弥生時代後期初頭の土器溜まり(図版26)について触れる。この土器のなかには、赤色顔料とヘラ描きによる施紋をもつ長頸壺が含まれていることから、しだいに埋没していく河道を対象とした、土器を用いた水辺における祭祀が行われた可能性が高い。

第2節 遺物

1. 土器・土製品

田能高田遺跡では弥生時代末から古墳時代にかけての土器を中心に様々な遺物が出土している。ここでは遺構ごとに実測した出土遺物を、第1遺構面から記述し、その後で各包含層の遺物についても説明することにしたい。

(1) 第1面の遺物

SH101 (図版27)

1は胴部の張りが少なく、頸部のくびれも弱い小型丸底壺である。口縁部は斜め上方に直線的に伸び、端部を丸くおさめる。内外面ともナデによる調整を行っている。

高坏(2・3)のうち、2は平坦な坏底から直線的に開く口縁を持ち、外面には横方向のヘラミガキが施されている。3は外方に開く脚裾部と思われ、ナデ調整が施されている。

図示は出来なかったが、須恵器片が出土している。

SH102 (図版27・28・写真図版25)

甕(4~10)には若干の形態差がある。4はやや小型で、口縁は直線的に伸び、端部を丸く終わらせている。5は口縁部が内彎気味に立ち上がり、端部はやや内側に肥厚する。6は口縁部が内彎気味に立ち上がり、端部を少し外反させる。胴部外面はハケ、内面はケズリを施している。7はほぼ直線的に開く口縁部片である。8は端部をやや内側に肥厚させた口縁を持ち、胴部の張りが大きい。外面にはハケ、内面には板状工具による調整の痕跡がある。9は口縁端部を内側に少し肥厚させており、球形の胴部の外面にはハケ、内面底部には指頭圧痕が認められる。10は直線的に立ち上がる口縁を持ち、端部は外側に肥厚させる。胴部は球形で外面にナデ、内面にケズリとナデを施す。

11は球形の胴部から外反気味に開く口縁部を持つ直口壺である。外面には横方向のヘラミガキが認められる。12は壺の底部で、外面にはタタキが残り、内面にはケズリを施している。13は平底で扁球状の胴部から外反して開く受け部からさらに外側に拡張する口縁部を持ち、端部を上方に肥厚させる二重口縁壺である。胴部外面にはナデ、内面にはハケを施している。

高坏(14~19)にも形態差がある。14~17は坏部のみが残存している。14は平坦な坏底から屈曲して、外反気味に開く口縁を持つ。16は湾曲して開く口縁を持つ。15・17は坏底部と口縁部の境界が不明瞭になっている。18は坏底部より内彎して立ち上がる口縁と緩やかに広がる脚裾部を持つ。19は脚柱部から屈曲して開く脚裾部を持つ。外面には縦のヘラミガキ、内面にはハケが施されている。

小型器台(20~22)は逆円錐形の受け部に円錐形の脚部を持つ中空のタイプである。20は外面にヘラケズリの後ナデを施し、内面はナデで仕上げている。21は外面には縦のヘラミガキの後ナデを施し、内面はハケの後ナデ調整を行っている。

SK101 (図版28)

23は小型で平底の壺で扁球形の胴部のみ残存する。胴部外面は縦方向のハケ、底部はナデを施してい

る。内面調整はハケをナデで消している。

SK102 (図版28)

24はやや肩の張る球形の胴部から屈曲して直立気味に立ち上がる口縁部を持つ甕で、口縁端部を内面に若干肥厚させる。胴部外面はハケ調整、口縁部は内面にハケの痕跡が残るが、横ナデで仕上げている。胴部内面はヘラケズリを施している。

SK103 (図版28)

25は底部を欠くが、球形の胴部から直線的に立ち上がる口縁を持つ甕である。口縁端部を内外に少し拡張している。外面はナデを施しているが、一部にヘラケズリの痕跡が認められる。内面は板ナデの後一部に強いナデを施す。26は球形の胴部を持つ丸底の甕である。内外面とも磨減が著しく調整は不明瞭であるが、内面にはわずかに板ナデの痕跡が残る。27はやや縦に長い球形の胴部から屈曲し直線的に伸びる口縁を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面はハケ、内面にはユビオサエの後板ナデを施している。28は内彎気味に立ち上がる口縁を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部は少し外反させる。胴部外面はハケの後ナデ、内面は板ナデを施している。

29は脚柱部から屈曲して平たく開く脚裾部を持つ高坏である。脚柱部から脚裾部外面にはナデを施し、脚端部にはヨコナデを行う。脚柱部内面には板ナデの後ナデを行い、脚裾部との境界は強いナデを施している。

SK104 (図版28・29・写真図版25)

30は胴部上半に最大径を持つ扁球状の胴部から大きく直線的に開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面はハケで調整し、内面はケズリの後ナデで仕上げている。32は扁球状の胴部から大きく広がる口縁部を持つ小型丸底鉢である。口縁部は頸部直上に稜を持ち、二重口縁状を呈している。器面の状態が悪く調整は不明である。

31は球状の胴部から、外反気味に直立した極めて短い口縁部を持つ丸底の無頸壺である。口縁部はヨコナデ、胴部外面はナデ、内面はケズリの後ナデで仕上げている。34は球形の胴部から外反気味に開く口縁を持つ短頸壺である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面は縦方向のタタキの後板ナデとナデで仕上げている。内面は板ナデとナデを施している。42は肩の張った球形の胴部から外反して開く口縁部を持った短頸壺である。口縁部にはヨコナデを施し、端部が内側に肥厚する。胴部外面は横及び縦方向のハケを施し、内面はケズリの後ナデで仕上げ、一部に指頭圧痕が見られる。

33は内彎気味に立ち上がる口縁部を持つ甕で、口縁端部を内側に肥厚させる。口縁部にはヨコナデを施し、胴部外面はナデ、内面はユビオサエの後板ナデで仕上げている。41は球形の胴部から内彎して立ち上がる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部を内側に肥厚させる。胴部外面は上半に縦方向、下半に不整方向のハケを施し、内面はヘラケズリを行う。43は丸みを帯びた胴部から、頸部直上で屈曲し、立ち上がる複合口縁を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部を内傾させる。胴部外面には縦方向の後横方向のハケを施し、内面は板ナデを施す。

37は平坦な坏底から屈曲して外反気味に開く口縁を持つ高坏の坏部である。口縁端部付近はヨコナデ、内外面はヘラミガキの後ナデで仕上げている。38は平坦な坏底から屈曲して外反しながら開く口縁を持

つ高坏である。なだらかに広がる脚柱部から屈曲して平たく開く裾部を持つと思われる。口縁端部付近はヨコナデを施す。坏部内面にはヘラミガキの後ナデ、外面はナデで仕上げる。脚部外面は坏底部からハケを施した後ナデを行い、内面はナデを施している。39は湾曲して開く坏部を持ち、脚柱部から緩やかに開く裾部を持つ。器面の状態が悪く、一部にナデの痕跡が認められるが、他の調整は不明である。40は平坦な坏底から屈曲して大きく開く深い坏部を持ち、裾部は脚柱部から屈曲して平たく開く大型の高坏である。器面の状態が悪く、調整は不明である。

SK105 (図版29)

44は口縁端部を上下に若干拡張し、4条の凹線を施している。器台の口縁部であると思われる。

45は胴部最大径を胴部上半に持ち、直立して伸びる口縁を持つ小型丸底鉢である。口縁部はハケの後ヨコナデ、胴部内外面はハケを施している。46は45と同様の形態を示す小型丸底鉢である。口縁部はヨコナデで仕上げるが、内面にはハケの痕跡がある。胴部外面はハケ、内面はナデで仕上げています。

SK106 (図版29)

47は胴部下半に最大径を持つ丸底の胴部から屈曲して短く開く口縁を持つ小型鉢である。口縁部にはヨコナデ、胴部はナデで仕上げています。

SK107 (図版29・30・写真図版25)

48は中位で屈曲し、稜を形成して開く壺の口縁部である。ヨコナデを施し、口縁端部を内側に肥厚させる。

49は最大径を胴部上半に持ち、外反する短い口縁部を持つ鉢である。口縁部はヨコナデ、胴部内外面はナデで仕上げる。頸部内面には口縁部を付加した際の接合痕が明瞭に残る。

50は算盤玉状を呈する胴部からわずかに稜を形成して開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面はハケの後ナデを行い、内面はユビオサエの後ナデで仕上げています。

51は肩の張った胴部から直立して外反気味に立ち上がる口縁部を持つ広口壺である。口縁部は外面にヘラミガキの後ヨコナデ、胴部外面はタタキの後ヘラミガキを施して、胴部内面はユビオサエの後ナデで仕上げています。

52は球形の胴部から内彎気味に伸びる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデ、胴部外面はタタキの後ナデ、内面はナデで仕上げています。

53は大きく広がる脚柱部から屈曲して平たく開く裾部を持つ高坏の脚部である。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面にはヘラケズリとナデ、裾部はヨコナデを行っている。54は脚柱部から屈曲して平たく開く裾部を持つ高坏の脚部である。脚柱部外面はナデ、内面はケズリを施し、裾部はヨコナデで仕上げています。

55は櫛描波状文を巡らせ、長方形透しを最低2段持つ須恵器片である。器台の脚部と考えられる。

SE101 (図版30・写真図版26)

56は胴部が内彎しながら立ち上がり、屈曲して内彎気味に大きく開く口縁部を持つ鉢である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面にはハケ、内面はケズリの後ナデで仕上げています。遺構下層から出土した。

57は直立する立ち上がり部を持ち、天井部と口縁部の稜は明確で凹線を持つ須恵器の坏蓋である。天井部の上半部には回転ヘラケズリを行い、残りを回転ナデで仕上げる。坏蓋はMT15型式に属すると思われる。遺構埋土の中層から出土している。

SD103 (図版30・写真図版26)

58はやや肩の張った胴部から屈曲して内彎気味に伸びる口縁を持つ甕である。口縁部にはヨコナデを施し、端部を内側に肥厚させる。60は長胴気味の胴部から緩やかに屈曲し、直線的に伸びる口縁を持つ甕である。口縁部はヨコナデ、胴部は外面に主として縦方向のハケ、内面に板ナデを施す。

59は球形の胴部から外反気味に開く口縁を持つ広口壺である。口縁部にヨコナデを施し、胴部外面はハケ、内面はヘラケズリで仕上げる。61は胴部からなだらかに立ち上がり、少し外反する口縁を持つ短頸壺である。口縁部にはヨコナデを施しているが、胴部は器壁の状態が悪く、調整は不明である。62はやや縦に長い球形の胴部から屈曲して外反気味に立ち上がる口縁部を持つ短頸壺である。口縁部はヨコナデを行い、胴部外面はナデ、内面は板ナデで仕上げています。

63は平坦な底部から内彎して浅く立ち上がる胴部を持ち、短い口縁部を持つ鉢である。口縁部はヨコナデ、胴部外面はケズリの後ナデで仕上げ、内面はナデを施している。

64・65は平坦な坏底から屈曲して外反気味に開く口縁を持つ高坏の坏部である。双方とも口縁端部付近はヨコナデ、坏部はナデで仕上げています。66は脚柱部から緩やかに開く裾部を持つ高坏の脚部である。内外面ともナデで仕上げています。

SD104 (図版31~34・写真図版26~28)

67は球形の胴部から直立気味に立ち上がる口縁部を持つ小型の甕である。口縁部はハケの後ヨコナデ、外面は底部付近はケズリの後ナデ、胴部はハケを施す。内面はヘラケズリの後ナデで仕上げています。68は最大径が上位にくる扁球状の胴部から直立気味に立ち上がる口縁を持つ。口縁部はヨコナデで仕上げるが内面にはハケの痕跡が残る。胴部外面はハケ、内面は板ナデを行う。69は球形の胴部から直線的に開く口縁部を持つ。底部はかすかに突出する。口縁部はヨコナデで仕上げるが、内面には横方向のハケが残る。胴部外面の調整は不明、内面は一部にヘラケズリを施し、ナデで仕上げるが粘土紐の接合痕が明瞭に残る。70は肩が張ると思われる胴部から、外反した後軽く屈曲して直立する口縁部を持つ甕である。口縁部はハケの後ヨコナデを施し、端部は内側に肥厚する。胴部外面はハケ、内部はヘラケズリの後ナデで仕上げる。71は球形と思われる胴部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施す。胴部外面はハケの後ナデで仕上げ、内面にはヘラケズリを施す。72は肩が張り最大径が上位にある胴部から、外反した後屈曲して直立する口縁部を持ち、底部はやや突出する。口縁部はヨコナデを施す。胴部外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリを施す。73は球形の胴部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ甕である。口縁部は外面に斜め方向のハケ、内面に横方向のハケを施した後ヨコナデで仕上げ、端部は外傾する。胴部外面は斜め方向のハケの後ナデ、内面はヘラケズリの後ナデを施す。74は球形の胴部から直線的に伸びる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面は不整方向のハケの後ナデ、内面は頸部下に指頭圧痕が認められ、ハケで仕上げる。75はやや縦に長い球形の胴部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部をわずかに上につまみ上げる。胴部外面は上半部の状況が悪く調整は明瞭ではないが、下半部に不整方向のハケを

施す。内面はケズリを行っている。76は球形の胴部から内彎気味に立ち上がった後、わずかに外反した口縁部を持ち、端部を外傾させた甕である。口縁部はヨコナデを施す。胴部外面は上半部に斜め方向、下半部に水平方向のタタキを行った後ナデで仕上げている。内面は底部付近にユビオサエの痕跡があり、胴部はヘラケズリの後ナデで仕上げる。77はわずかに縦長の球形を呈する胴部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ甕である。口縁端部は外傾する。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面はハケの後ナデ、内面は下半部に強いユビナデを行っている。79は72と同じ形態を持つと考えられる甕の口縁部である。口縁部にはヨコナデを施している。

78は扁球状の胴部から口縁が直立気味に立ち上がると思われる小型丸底壺である。器面の状態が悪いが、外面底部付近はケズリの後ナデ、内面底部はユビオサエの後ナデを行っている。

80は球形の胴部から直立気味に伸びる口縁部を持つ直口壺である。口縁部は横方向のハケの後ナデ、端部付近はヨコナデを施す。胴部外面は器面の状況が悪く不明だが、内面はヘラケズリの後ナデで仕上げている。81は球形を呈すると考えられる胴部から外反して伸び、大きく開く口縁部を持つ短頸壺である。口縁部および胴部外面は器面の状態が悪く調整不明、胴部内面はヘラケズリを行っている。82は球形と思われる胴部から直線的に伸びて開く口縁部を持つ短頸壺である。口縁部外面から頸部にかけて縦方向のハケ、内面には横方向のハケを施し、端部はヨコナデを行う。胴部は外面に斜め方向のハケ、内面にヘラケズリを施す。83は縦に長い胴部から直線的に伸びる口縁部を持つ短頸壺である。口縁部にはヨコナデを施し、端部は内側に肥厚する。胴部外面および内面下半部は器面の状態が悪く調整不明、内面上半部にはヘラケズリを施す。

84は胴部最大径が上位にくる倒卵形の胴部から、外反した後屈曲して直立する口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部にはヨコナデを施し、胴部外面は不整方向のハケ、内面にはヘラケズリの後ナデで仕上げる。85は球形の胴部から外反した後屈曲して外反気味に直立する口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部はヨコナデを施す。胴部外面には斜め方向のハケの後ナデで仕上げ、一部にヘラミガキも認められる。内面はヘラケズリの後ナデを行う。86は球形の胴部と、大きく外反する受け部から内傾気味に直立した口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面は主として縦方向のハケ、内面は主として縦方向の板ナデを施す。87は胴部最大径が上位にある倒卵形の胴部と緩やかに外反する受け部に直立する口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部にはヨコナデを施し、端部を内傾させる。胴部外面にはハケを施し、内面は頸部下にユビナデ、胴部はハケで仕上げている。88は肩が大きく張りやや長胴の胴部を持ち、外反した受け部から内傾気味に直立する口縁部を持つ。口縁部はヨコナデを施し、端部は外傾する。胴部外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリの後ナデで仕上げる。89は肩の張る胴部から直線的に伸びる受け部に口縁部を付加することで外面に段を形成する二重口縁壺である。口縁部と肩部に竹管文を巡らせる。口縁部は内面にハケを施した後ヨコナデで仕上げ、端部を内側に肥厚させる。胴部外面はハケの後ナデ、内面は斜め方向のヘラケズリで仕上げる。90は平底の扁球形を呈する胴部から内彎気味に伸び、端部を鋭く外反させる口縁部を持つ鉢である。口縁部はヨコナデを施す。胴部は外面に左上がりのタタキの後ナデ、内面は板ナデで仕上げる。

91は平坦な坏底部から屈曲して外反する口縁部を持つ高坏の坏部である。器面の状態が悪く調整は不明である。92は湾曲した坏底部から緩やかに広がる脚柱部となだらかに開く裾部を持つ高坏である。坏部内面および外面は器面の状態が悪く、坏底部に指頭圧痕が見られるものの調整は不明である。脚柱部内面はかすかにヘラケズリの痕跡が残り、裾端部にはヨコナデを施している。93は大きく開く脚柱部か

ら屈曲して平たく開く裾部を持つ脚部である。脚柱部外面には一部にミガキが見られ、内面はケズリを行う。裾部はナデと端部をヨコナデで仕上げる。94は93と同形態の脚部である。脚柱部外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリを行う。裾部はヨコナデを施し、端部を上方に拡張する。95は腕状の坏部を持ち、短く直線的な脚柱部から屈曲して開く裾部を持つ高坏である。坏底に葦状の突起を持ち、そこに脚部を付加する。口縁部と裾部にヨコナデを施し、脚柱部外面には縦のヘラミガキ、内面はケズリの後ナデを施している。湾曲して立ち上がる坏部と緩やかに開く脚柱部から屈曲して浅く開く裾部を持つ高坏である。口縁端部は鋭く外反する。口縁部および裾部にヨコナデを施す。脚柱部内面にはヘラケズリを施し、他はナデで仕上げる。97は平坦な坏底部から外反気味に開く口縁部と大きく広がる脚柱部から緩やかに開く裾部を持つ。器面の状態が悪く調整は不明だが、脚部外面の一部にヘラミガキの痕跡がある。99は平坦な坏底から直線的に開く口縁部を持ち、筒状を呈する脚柱部から緩やかに広がる裾部を持つ高坏である。器面の状態が悪く、調整は不明である。98は坏底部から段を形成して屈曲し、大きく開く深い坏部を持ち、直線的に広がる脚柱部を持つ高坏である。坏部内面にはヘラミガキを施し、口縁部はヨコナデ、脚部はナデを行う。100は丸みを帯びた坏底部から段を形成して屈曲する深い坏部を持ち、緩やかに広がる脚柱部から浅いが広く開く裾部を持つ。器面の状態が悪く調整は不明である。101は平坦な坏底部から鋭く屈曲し、外反して開く深い坏部を持ち、細い脚柱部から緩やかに広がる裾部を持つ高坏である。屈曲部はわずかに垂下させており、脚部には穿孔が2ヶ所認められる。器面の状態が悪く調整は不明である。

102はほぼ完形の土鍾である。断面はやや潰れた円形を呈する。103もほぼ完形の土鍾で、外面中央に沈線が巡っている。断面は円形を呈する。

SD106 (図版35・写真図版28)

104は肩の張らない胴部から緩やかに屈曲して直線的に伸びる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデ、胴部外面は横方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。105はやや平底気味の縦長の胴部から、屈曲して直線的に開く口縁部を持つ甕である。口縁部にはヨコナデを施し、胴部外面は全体にハケ調整を行い、底部付近に指頭圧痕がある。胴部内面は底部はユビナデ、胴部はヘラケズリを行う。

106は球形を呈する小型壺の胴部である。外面はハケの後ナデ、内面は底部にユビオサエを施し、胴部はハケの後ナデで仕上げる。107は扁球状を呈する。直口壺の胴部と思われる。外面はハケの後ナデを行い、内面はナデで一部に指頭圧痕が認められる。

108は湾曲して開く坏部と、緩やかに開く脚柱部から浅く開く裾部を持つ高坏である。坏部内面にはヘラミガキを施し、口縁と裾端部をヨコナデで仕上げる。坏部から脚柱部外面には縦のヘラミガキを施し、内面はナデ、裾部内面はハケの後ナデで仕上げる。109は湾曲して立ち上がる坏部と緩やかに広がる脚柱部から屈曲して開く裾部を持つ高坏である。口縁端部はヨコナデを施し、内彎気味に屈曲させる。坏部内面にはヘラミガキを行い、脚柱部は外面をナデ、内面にヘラケズリを施す。裾部はヨコナデで仕上げる。

SD108 (図版35・写真図版28)

110は胴部最大径が下半に位置するイチジク状を呈する胴部である。外面はハケの後ナデで仕上げる。111は胴部最大径が中央に位置する扁球状の胴部である。器面の状態が悪く調整は明瞭ではないが、内

面に指頭圧痕が認められる。

112 は球形の胴部から屈曲して内彎気味に立ち上がる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部を内傾させる。胴部外面はハケの後ナデ、内面はナデで仕上げる。

113 は肩が張りやや平底傾向を持つ胴部から外反して開く口縁部を持つ須恵器の甕である。口縁部中位の外面を肥厚させる。口縁部はヨコナデで仕上げ、胴部外面は下半部に斜め方向、上半部に縦方向タキを施し、内面は板ナデとナデで仕上げる。焼成はかなり悪い。

第1遺構面の遺物の所属時期は概ね布留式の新相にあたるものである。ただし、その中でもより新しい様相を示すものもあり、SD104・SD106の資料がそれにあたる。また、SK107・SD108の資料についても布留式の範疇に入るものと考えられる。SE101では坏蓋よりも、下層で出土した鉢が本来の時期を示すものと考えられる。

(2) 第2面の遺物

SH201 (図版36)

114 は櫛描波状文を施した壺の胴部片であると思われ、内外面ともハケ調整を行っている。115 はやや膨らんだ平底を持つ壺の底部で、外面はタタキの後ナデを行っている。

116 は中央部がくぼんだ平底の甕の底部である。底部充填技法を用い、外面はタタキの後ナデ、内面は板ナデを行っている。

SH202 (図版36)

117 は平底を持つ甕の底部である。外面調整はタタキを施し、内面は板ナデで仕上げる。118 は屈曲して内彎気味に立ち上がる甕の口縁部である。口縁部にはヨコナデを施し、端部を内側につまみ上げる。胴部外面にはハケ、内面はナデを施している。

SH203 (図版36)

119 は外面を垂下させて段を強調する二重口縁壺の口縁部である。外面には円形浮文を巡らせている。外面調整はハケの後ナデで仕上げている。内面は器面の状態が悪く不明である。

SK210 (図版36・写真図版28)

120 は丸底の胴部から内彎気味に浅く開く口縁を持つ鉢である。口縁部は内面にハケを施した後、ヨコナデを施す。胴部外面は横方向のヘラミガキの後ナデ、内面はナデで仕上げている。

SK212 (図版36)

121 は屈曲して内彎気味に立ち上がる口縁を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部を内側につまみ上げる。胴部外面には横方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。

SK217 (図版36・写真図版28・29)

122 は丸みを帯びた胴部から屈曲して直線的に立ち上がる口縁部を持つ広口壺である。口縁部はヨコ

ナデを施し、端部が若干内側に肥厚する。

125 は屈曲して外反する受け部から外反気味に斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ二重口縁壺である。

123・124 は小型丸底鉢である。ともに口縁端部を欠き、124はやや胴部が張る。双方とも口縁部はヨコナデで仕上げるが、胴部調整は器面の状態が悪く不明である。

126・127 は逆円錐状の受け部と円錐状の脚部を持つ中空の小型器台である。ともに外面は縦方向のヘラミガキを行い、脚部内面にはヘラミガキが見られる。128 は皿状の受け部を持つと思われる中空の小型器台である。脚部に3ヶ所の穿孔を行っている。脚部内面にはヘラミガキの後ナデを施す。

SK219 (図版36)

129 は端部を上下に拡張し、凹線文を2条施した壺の口縁部である。器面状態が悪く調整は不明である。130 は受け部から外反して立ち上がる口縁部を持つ二重口縁壺の口縁部である。遺存状況が悪く、器面調整は不明である。

SK220 (図版36・写真図版29)

131 は二重口縁壺の口縁部の一部である。直線文と波状文で加飾し、外面にスリップを塗布している。

132 は口縁部に比して胴部最大径が小さい小型の甕である。胴部外面にはタタキ、内面にはヘラケズリを施す。

133 は球形の胴部を持つ短頸壺であると思われる。頸部下に5列の列点文を施す。134 は平底の壺の底部である。内面は板ナデを施している。

135 は大きく開く高環の脚部である。外面には縦方向のヘラミガキを施す。

136 は逆円錐台形を呈する平底の鉢である。外面はタタキの後ナデ、内面は板ナデの後ナデで仕上げている。137 は口縁部直下に段を持つ直口の鉢である。口縁部はヨコナデを行い、内外面にスリップを塗布している。

SK221 (図版36)

138 は丸みを帯びた胴部から屈曲して大きく外反する口縁を持つ甕である。胴部内外面にハケを施す。

139 はすぼまった平底の底部である。外面にハケを施し、内面にはヘラケズリを行う。

SK222 (図版36)

140 は平底の壺の底部である。底面にヘラ描きがある。

SK223 (図版36)

141 は平底の壺の底部である。器面の状態が悪く調整は不明である。

SK225 (図版36)

142 は屈曲して内彎気味に伸びる甕の口縁部である。口縁部はヨコナデを施し、端部を内側に肥厚させる。

143 は尖底を呈するミニチュア土器の底部である。外面はヘラケズリ、内面にはハケを施している。

SK226 (図版36)

144 は直立して立ち上がった後鋭く外反する受け部から、さらに外側に開く口縁部を持つ二重口縁壺である。遺存状態が悪く、調整は不明である。

145 は外反して開く広口壺の口縁である。ヨコナデで仕上げている。

146 は湾曲して立ち上がる浅い胴部から、屈曲後内彎して立ち上がる口縁部を持つ鉢である。口縁部はヨコナデを施しているが、器面の状況が悪く、他の調整は不明である。

SK228 (図版37・写真図版29)

147 は底部に向かってすぼまる胴部から、外反気味に口縁が伸び、端部外側に面を持つ甕である。外面はタタキを施し、内面はハケ調整を行う。分割整形を行っている。148 も外面にタタキを施し、分割整形を行う甕である。底部外面は強いナデで仕上げている。149 は丸底の小型甕である。口縁部は内面にハケ目の後ヨコナデを施す。胴部は内外面ともヘラケズリの後ナデで仕上げている。

150 は外面にハケを施し、内面はケズリで仕上げる小型丸底土器の胴部である。

151 は逆円錐台形の胴部から軽く屈曲して内彎気味に立ち上がる口縁部を持つ鉢である。胴部外面にはタタキの後、縦のヘラミガキを施す。内面は胴部は縦のヘラミガキ、頸部付近は横方向のヘラミガキを施す。

この面の遺構から出土している土器はほぼ布留式前半に位置づけられる。しかし、SK228 は若干古い様相を示している。

(3) 第3面の遺物

SH301 (図版37・写真図版29)

152 は平底の甕の底部である。外面はタタキの後縦方向のハケ、内面はハケで仕上げている。153 は高台状を呈する底部である。器面の状態が悪く外面調整は不明、内面は板ナデを行う。

154 は逆円錐台形を呈する鉢である。外面はナデ、内面はハケ調整を行う。

155 は完形の短頸壺である。イチジク状の胴部から直線的に立ち上がる口縁部を持つ。外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面はハケの後ナデを行う。分割成形の痕跡が明瞭である。胴部下半から底部にかけて煤が付着している。

SH302 (図版37)

156・157 は鉢または甕の底部である。外面はタタキを施し、内面はハケを行う。

158 は平底で湾曲して立ち上がる胴部から、内彎して大きく開く口縁部を持つ鉢である。外面は縦方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケ、胴部内面は板ナデを施す。

SK302 (図版37・写真図版29)

159 は平底で湾曲して開く胴部を持つ鉢である。胴部外面はタタキ、内面は下半にヘラミガキ、上半にハケを施し、口縁部はヨコナデを行う。

SP316 (図版37)

160 は胴部最大径がやや下がる位置にある胴部から、屈曲して直線気味に開き、端部を外反させる小型丸底鉢である。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ、内面はヘラケズリを行う。

SP332 (図版37)

161 は大きく外反する受け部から外反して開く口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部外面に櫛描波状文と竹管文を施す。

SD306 (図版37・38・写真図版29・30)

162 は外反して短く開く受け部と直線的な胴部から浅く開く脚部を持つ器台である。

163 は胴部最大径がやや上に位置し、倒卵形の胴部を持つ平底の広口壺である。胴部外面はヘラミガキの後ナデ、内面はハケの後ナデで仕上げる。164 は球形の胴部を持つ平底の壺である。胴部は内外面とも板ナデの後ナデを施し、底部外面はヘラケズリの後ナデを行う。165 は平底の壺の底部である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケ調整を行う。

166 は屈曲して外反する口縁部を持ち、端部をやや内彎させる甕である。口縁部はヨコナデを行い、端部は外側に面を持つ。胴部外面はタタキを行い、内面は状態が悪く調整は不明であるが、胴部と頸部の接合痕が残る。

SD307 (図版38)

172 は直立した後外方に開く口縁部を持つ広口壺である。口縁部はヨコナデを施し、口縁端部は若干上下に拡張する。外面には縦方向のハケの後ヘラミガキを施し、内面はハケの後ナデで仕上げている。

173 は皿形の坏部に外反する発達した口縁部を持つ高坏である。口縁部はヨコナデ、坏部から脚部の外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面はナデを施している。

SD309 (図版38・写真図版30)

174 は胴部から屈曲して外反気味に伸びた後内彎する口縁部を持つ甕である。

175 は椀状の胴部を持つ平底の鉢である。外面はタタキの後ナデ、内面は板ナデを施す。176 は逆円錐台形の胴部を持つ鉢である。外面はナデ、内面はハケの後一部に板ナデを施す。

SD311 (図版38・写真図版30)

177 は口縁端部に段を有し、胴部中位に最大径を持つ扁球形の胴部を持つ長頸壺である。ほぼ完形で、外面調整はヘラミガキ、頸部内面はハケを施している。178 は胴部中位に最大径を持つ扁球形の胴部である。外面は全体に方向を変えたヘラミガキを施し、内面はハケ調整を行う。179 は胴部最大径が上位にくる胴部から直立気味に立ち上がる頸部を持つ壺である。底部は突出した平底で、外面はヘラミガキとナデ、内面はハケとナデを行っている。

180 は胴部から屈曲して外反する口縁部を持つ甕である。口縁端部は外側に面を持つ。

181 は円筒状の胴部から緩やかに広がる裾部を持つ器台である。外面はタタキの後ハケを施し、一部

にヘラミガキを行う。内面は板ナデとハケで仕上げ、穿孔が3ヶ所残存している。

この遺構面から出土した土器の所属時期は、やや頸部を退化させた長頸壺の存在や甕の形態から、弥生時代末から庄内式の古相に収まるものと考えられる。ただし、SP316・SD307の土器は他のものに比べ、新しい様相を示している。

(4) 第4面の遺物

SD405 (図版39・写真図版31)

甕(182～184・187・188)は分割成形を行い、胴部外面にはタタキを施し、内面にはハケないしは板ナデを行う。胴部最大径が胴部中位にある形態は共通しているが、口縁部の形が異なっている。182は外反気味に伸びた後内彎気味に終わる口縁部を持ち、端部は外側に面を持つ。184も同様の形態を示すが、端部を内側に肥厚させている。183は胴部から緩やかに屈曲して立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部を上方に拡大し、凹線を施している。187は外反して開く口縁部を持ち、188の口縁部はやや外反気味に立ち上がっている。小型の甕(185・186)は口径が胴部最大径を凌駕している。胴部外面にはタタキを施し、内面はハケないし板ナデを施す。

189は逆円錐台形を呈する胴部を持つ平底の鉢である。外面はタタキ、内面はハケを施す。190は湾曲して立ち上がる胴部から屈曲して開く口縁部を持つ平底の鉢である。器面の状態が悪く調整は明瞭ではないが、内外面ともハケが施されていたと思われる。191は湾曲して立ち上がる胴部から屈曲して開く口縁部を持つ脚付き鉢である。脚部に4ヶ所の穿孔をもつ。胴部外面はタタキ、内面は横方向のヘラミガキを施している。

SD406 (図版39)

直線的に開く胴部を持つ平底の鉢である。内外面とも器面の状態が悪く調整は明瞭ではないが、外面にはタタキが施されていたと思われる。

SR401 (図版40～43・写真図版32～34)

本来第2遺構面から切り込まれていたと考えられる自然流路で、図示した資料には時期的なばらつきが認められる。また、217・229・237・238については、遺構の項でも述べられているようにSR401を含むさらに大きな流路の一部からまとまって出土したものである。

甕(193～215・230)は形態の変化に富んでいる。193は胴部最大径が中位にくる胴部から外反気味に伸びる口縁部を持ち、突出した平底である。外面はタタキを施し、内面はユビオサエの後ナデを施している。194は胴部の張りが強く、平底である。外部はタタキの後ハケ、内面はハケを施している。195はやや球胴化した平底の胴部から外反して開く口縁を持つ。196はやや尖底気味の丸底を持ち、口縁部は胴部から外反して開く。外面はタタキ、内面は板ナデを施している。197～201はやや尖底気味の丸底と球形化した胴部を持つ。197は外反気味に開く口縁の端部を内側に少し折り曲げる。外面はハケ、内面はヘラケズリを行う。198は口縁端部を上方に肥厚させる。外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリを行う。199は外反気味に開く厚めの口縁部を持ち、外面はタタキ、内面はハケを施している。200は外反する口縁部の端面に浅い凹線が巡っている。201は口縁端部を内側に肥厚させており、外面

にはタタキの後ハケ、内面にはヘラケズリの後ナデを施している。202 は球形の胴部から外反して開く口縁部を持つ。外面はタタキを施し、一部にハケが見られる。内面は口縁部にハケ、胴部にヘラケズリを施す。203 はやや縦長の胴部から内彎気味に開く口縁部を持つ。外面はハケ、内面にはユビオサエを施す。204 は球形の胴部から内彎して開き、端部を直立させる口縁部を持つ。外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施す。205 は球形の胴部から内彎して立ち上がる口縁部を持つ。外面にはハケを施し、内面にはヘラケズリの後ナデとユビオサエを行う。頸部下に2条からなる波状文を施している。206 はやや胴の張る球形の胴部から内彎気味に開く口縁部を持つ。口縁端部は内側に肥厚する。内外面にハケの後ナデを行う。207 ~ 209 は球形の胴部から内彎気味に伸びる口縁部を持つ。207 は外面にタタキの後ハケを施し、内面は口縁部にハケ、胴部にヘラケズリを行う。208 は口縁端部を内側にやや肥厚し、胴部外面にはハケの後頸部下に櫛描波状文を巡らせる。胴部内面はヘラケズリを行う。209 も内側に口縁端部を肥厚させ、胴部外面はハケ、内面はヘラケズリを行う。210 は球形を呈する胴部から直線的に伸びる口縁部を持ち、端部は内側に肥厚させる。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。211 は胴部最大径がやや上位にある丸底の胴部から内彎気味に伸びる口縁部を持ち、端部をやや外側に肥厚させる。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリを施し、頸部下に櫛描波状文を付加する。212 は球形を呈する胴部から外反後緩やかに屈曲し内彎する口縁部を持つ。端部は内側にやや肥厚する。213 は外反する受け部から内傾気味に立ち上がる複合口縁部を持つ。214 は外反する受け部から直立気味に立ち上がる口縁部を持つ。胴部外面はナデ、内面はヘラケズリを行っている。山陰系の土器であると思われる。215 は丸みを帯びた胴部から外反気味に伸びる口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が施される。外面はハケ、内面にはヘラケズリを施す。230 は東海系の台付甕の脚台の一部であると考えられる。胴部内外面にハケの痕跡が残る。

216 は直線的に伸びる頸部を持ち、口縁を若干外反させる長頸壺である。外面はハケ、内面はユビオサエとナデを行っている。217 は胴部最大径が上位にある平底の胴部から直線的に伸びる口頸部を持つ完形の長頸壺である。外面は全体にハケの後ナデを施し、内面は胴部にハケ、口頸部にナデを施す。外面肩部に「U」字形を呈する赤彩とヘラ描沈線を持つ。胴部下半に煤が顕著に付着している。

218 はやや尖底気味の平底を持つ丸みを帯びた胴部から直立後大きく外反する口縁部を持つ広口壺である。胴部外面はタタキとハケの後ナデ、内面はハケの後ナデを施す。

219 は胴の張った球形の胴部から外反して開く口縁部を持つ短頸壺である。外面全体にヘラミガキを行い、内面はハケを施し、口縁の一部にヘラミガキを行う。220・221 は丸みを帯びた胴部から屈曲して大きく開く口縁部を持つ短頸壺である。外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリを施す。221 は口縁端部を外側に肥厚させる。222 は中央部がくぼんだ平底を持ち、丸みを帯びた胴部から軽く外反して開く口縁部を持つ短頸壺である。頸部と胴部の境界にヘラ描沈線文を巡らせる。外面はタタキの後ハケを施し、最後に縦方向のヘラミガキを行う。内面は胴部にはナデ、口縁部は縦方向のヘラミガキを施す。

223~227は二重口縁壺である。223 は器面の状態が悪く、調整は不明である。224 は大きく外反する受け部に外反気味に伸びる口縁部を付加する。ヨコナデを行っている。225 は外反する受け部から直線的に伸びる口縁部を持つ。端部を欠き、ヨコナデを施している。226 も口縁端部を欠く。直立気味に立ち上がった後外反する受け部に外反する口縁部が付加される。口縁部外面には櫛描波状文と竹管文を施し、頸部と胴部の境界に列点文と櫛描波状文を施している。内外面ともナデを施している。227 は丸みを帯びた胴部から直立した後斜め上方に伸びる受け部に内傾して直線的に伸びる口縁部を付加する。内

外面ともハケとナデを施している。

228 は半球状の胴部を持つ鉢である。外面はハケの後ナデ、内面は口縁部にハケ、胴部に板ナデを施す。229 は胴部最大径を上位に持ち、口縁部がやや内傾する直口の鉢である。外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はユビオサエの後ヘラミガキとナデを施す。233 は頸部下に胴部最大径を持つ胴部から内彎して開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。口縁部はヨコナデで仕上げ、胴部外面はヘラケズリの後ナデ、内面はハケの後ナデを施す。234 は湾曲して立ち上がる胴部から屈曲して外反する口縁部を持つ平底の鉢である。胴部内外面はハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。235 は尖底で、直線的に伸びる胴部を持つ鉢である。底部には穿孔を施す。外面にはタタキの後ナデ、内面は板ナデの後ナデを施す。236 は大きく開いた浅い高環の坏部である。内外面にヘラミガキを施す。237 は湾曲して立ち上がる坏部を持つ高環である。内外面に縦方向のヘラミガキを行う。238 は屈曲部を有する皿形の坏部を持つ高環である。外面はヘラミガキの後ハケとナデ、内面はハケを施す。239 は緩やかな段を持つ高環の坏部である。内外面に縦方向のヘラミガキを行い、口縁端部はヨコナデで仕上げる。240・241 は平坦な坏底部から外反して大きく開く口縁部を持ち、直線的な脚柱部から段を有して開く裾部を持つ高環である。口縁端部は内側に肥厚し、外側に面を持つ。坏部内外面および脚部外面にヘラミガキを施す。脚柱部内面にはヘラミガキ、裾部内面にはハケを施す。

242・243 は浅い皿状を呈する受け部から直線的に広がる脚部を持つ小型器台である。受け部内外面および脚部外面はヘラミガキ、脚部内面は板ナデを施している。前者は5ヶ所×3段、後者は4ヶ所×3段の焼成前穿孔を行う。

この遺構面の時期は217・229・237・238 といった弥生時代後期前半の資料から、布留式までを含むS R 401 の資料を除けば、第3遺構面の時期とほとんど同じではないかと考えられる。

(5) 包含層および土器群

第1包含層出土遺物 (図版44)

244 は平坦な底部から直線的に伸びる口縁部を持つ須恵器の坏である。胴部は回転ナデ、底部はヘラケズリの後ナデを行う。奈良時代のものと思われる。245 は平坦な底部から内彎気味に伸びる口縁部を持つ土師器の皿である。内外面ともナデを施す。平安時代に属すると考えられる。246 は平坦な底部に高台が付加される須恵器の坏である。調整はナデを施している。奈良時代のものと考えられる。247 はやや厚めの器壁を持つ平底である。壺の底部と考えられ、ナデ調整を行う。

第1面直上出土遺物 (図版44)

248 は坏底部から屈曲して伸びる口縁部を持つ須恵器の高環である。回転ナデで仕上げる。249 はやや深い碗形の坏部と、緩やかに広がる脚部を持つ高環である。外面はハケの後ナデを施している。坏部内面はナデ、脚部内面はヘラケズリの後ハケとナデを施す。

250 はほぼ完形の土錘である。中央部に1条の沈線を施す。

土器群101出土遺物 (図版44・写真図版35)

251 は球形の胴部から、屈曲して直線的に伸びる口縁部を持つ小型の甕である。頸部下には1条のへ

ラ描波状文を施す。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。252 は球形の胴部から屈曲して内彎気味に伸びる口縁を持つ甕である。口縁端部は内側に肥厚させる。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリを行い、底部付近には指頭圧痕が認められる。

253 は浅いが器壁の厚い丸底の碗である。内外面ともナデを行い、全体に被熱している。

254 は浅い扁球形の胴部から大きく外方に開く口縁部を持つほぼ完形の小型丸底鉢である。口縁部はヨコナデを施し、胴部外面はハケの後ナデ、内面はナデで仕上げる。

255 は平坦な底部から緩やかに屈曲して直線的に開く口縁部を持つ浅い坏部と細長い脚柱部を持つ高坏である。器壁の状況が悪く調整は明瞭ではないが、ナデで仕上げている。256 は丸みを帯びた坏底から湾曲して立ち上がる口縁部を持つ。端部を若干外反させ、外側に面を持つ。257 は平坦な坏底部から屈曲して内彎気味に開く口縁部を持つ高坏である。脚裾部は柱部から屈曲して浅く開く。外面はヘラミガキの後ナデを施している。内面は脚柱部に板ナデを行うほか、ナデで仕上げる。258 は257と同形態の高坏である。外面は坏部から脚柱部にかけてヘラミガキを施し、内面はナデで仕上げる。

土器群 1 0 2 出土遺物 (図版44)

102 は球形の胴部から屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持つ甕である。口縁端部は内側に肥厚させる。胴部外面はハケ調整の後ナデを施し、内面はヘラケズリを行う。

土器群 1 0 3 出土遺物 (図版44・写真図版35)

260 は胴部から屈曲して直線的に開く口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデで仕上げる。胴部は磨滅が著しく調整は不明である。261 は扁球状の胴部に大きく開く脚台を持つ台付甕である。頸部の開きは大きい。外面は頸部下に水平方向のハケを施し、他は脚台部も含めて縦から斜め方向のハケを行う。内面は胴部にヘラケズリの後ナデを施し、脚台はハケの後ナデを行う。

土器群 1 0 5 出土遺物 (図版44・写真図版35)

262 は球形の胴部から外反して伸びる口縁部を持つ小型丸底壺である。底部にヘラケズリによる整形の痕跡が残る。胴部外面はヘラミガキ、内面はナデで仕上げている。263 はやや歪な球形の胴部から直線的に伸びる口縁部を持つ小型丸底壺である。胴部内外面ともナデで仕上げるが、造りは粗い。

264 は平坦な坏底部から屈曲して外方に開く口縁部を持つ高坏である。脚部は緩やかに伸び、屈曲して平たく開く。外面は坏底部から脚部にかけてヘラミガキを施し、他はナデ調整で仕上げる。

土器群 1 0 6 出土遺物 (図版44・45・写真図版35)

265 は肩の張る胴部から、屈曲して外反する受け部に直立して伸びる口縁部が付加される複合口縁の甕である。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。

266 は牛角状の把手である。全体をナデで仕上げる。甌の一部であると思われる。

267 は平坦な坏底部から湾曲して立ち上がる胴部と外反する口縁部を持つ高坏である。脚裾部は脚柱部から緩やかに開く。外面はナデを施し、坏部内面はハケの後ナデ、脚部内面はヘラケズリの後ナデを行う。

土器群 107 出土遺物 (図版45)

268 は椀状を呈する胴部から緩やかに伸びる脚柱部を持つ高坏である。口縁部を強くナデでやや外方に屈曲させる。全体にナデを施す。

269 は球形の胴部から屈曲して直線的に伸びる口縁部を持つ甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部を内側に肥厚させる。胴部外面は垂直方向の平行タタキの後ハケを施し、胴部はヘラケズリを行う。

270 は口縁部を屈曲させた後垂下させる。垂下部分には7条の直線文を施し、屈曲部上方に平坦面を形成し、連続した櫛描刺突文を配する。器台の受け部と考えられる。

第2面直上出土遺物 (図版45~47・写真図版35~37)

271 は胴部最大径の位置がやや下位にある胴部から、屈曲して外反する口縁部を持つ甕である。口縁部は外面にハケを施した後ヨコナデ、胴部外面は不定方向のタタキ、内部は斜め方向のハケを施す。272 は胴部最大径が中位にくる胴部から屈曲して外反する口縁部を持つ平底の甕である。口縁部はヨコナデを施し、端部を外傾させる。胴部外面は方向を変えたタタキを施し、内面はハケで仕上げる。273 はやや肩の張った胴部最大径が中位にくる胴部から屈曲して外反する口縁部を持つ甕である。口縁部はやや外傾する。胴部外面はタタキ、内面はハケの後ナデを施す。274 は焼成前穿孔された甕もしくは鉢の底部である。外面にはタタキ、内面にはヘラケズリを施す。275 は胴部から屈曲して内彎気味に立ち上がる口縁部を持つ甕である。口縁部は内側に若干肥厚する。外面はハケ、内面はヘラケズリを行う。276 は胴部最大径が上位にくる胴部から外反気味に伸びる口縁部を持つ小型の甕である。胴部内面はヘラケズリの後ナデを施す。277 は球形の胴部から内彎気味に伸びる口縁部を持つ甕である。口縁部は内側に肥厚させる。胴部外面は横方向のハケ、内面はヘラケズリの後ナデを行う。278 は胴部最大径がやや上位にくる球形の胴部から、屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持つ甕である。胴部外面は調整不明、内面はヘラケズリを施す。279 は胴部から鋭く屈曲した短い受け部に直線的に伸びる口縁部を持つ複合口縁甕である。口縁部は外側に肥厚させる胴部外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施す。280 は279 とほぼ同じ形態を持つが、口縁部は内側に肥厚させる。胴部外面は斜め方向の後横方向のハケ、内面はヘラケズリを行う。

281 は大きく膨らんだ依形を呈する胴部から屈曲して直線的に伸びる口縁部を持つ大型の広口壺である。胴部外面はハケ、内面は板ナデを施す。282 は扁球状の胴部から直線的に伸びる口縁部を持つ小型丸底壺である。外面は底部にヘラケズリ、胴部下半にハケが残り、口縁部から上半にかけてはナデで仕上げる。内面は口縁部にハケがのこり、胴部は不明である。284 はやや肩の張る丸みを帯びた胴部から直線的に伸びる口縁部を持つ短頸壺である。外面と口縁部内面にハケ、胴部内面にヘラケズリの後ナデを施す。285 は球形の胴部から内彎気味に伸びる口縁部を持つほぼ完形の短頸壺である。胴部外面には板ナデの後ナデを施す。内面は板ナデの後ナデで、底部には指頭圧痕が認められる。286 は球形の胴部に平底を持つ大型坪の胴部である。外面にはハケ、内面には板ナデの痕跡が残る。287 は口縁の屈曲部に粘土を垂下させ、半裁竹管による押圧のある円形浮文を配する二重口縁壺の口縁部である。ヨコナデで仕上げている。288 はやや尖底気味の球形の胴部から直立気味に立ち上がった後開く口縁部を持つ壺である。外面は底部付近にタタキの後ヘラケズリとナデを施し、スリッパを塗布している。胴部はタタキの後ユビオサエとハケを施し、さらに頸部外面から胴部にかけてヘラミガキを行う。内面は底部をナデ、胴部下半にハケ、上半にナデ、頸部にハケを施す。

283 は扁球状の胴部から大きく開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。外面は胴部にヘラミガキ、底部付近にヘラケズリが認められる。胴部内面はナデを施している。

289 は緩やかに立ち上がる胴部を持つ丸底の坏である。内外面に板ナデを施している。

290 は逆円錐状の受け部と円錐状の脚部を持つ小型器台である。器壁の状態が悪く調整は不明である。脚部内面にはヘラケズリの痕跡が残る。291 は脚部から屈曲して伸び、最後に外反する受け部を持つ器台である。外面は横方向のヘラミガキ、内面は横・縦方向のヘラミガキを施す。

292 は碗状の坏部を持つ高坏である。内外面にヘラミガキを施している。293 は丸みを帯びた坏底から立ち上がる口縁部を持ち、脚柱部から屈曲して浅く開く裾部を持つほぼ完形の高坏である。器面の状況が悪く調整は不明であるが、脚部内面にハケの痕跡が認められる。294～296 は平坦な坏底から屈曲して直線的に広がる口縁部を持ち、脚柱部から屈曲して浅く開く裾部を持つ高坏である。294 は脚柱部に2ヶ所の穿孔が残っている。調整は器面の状況が悪く不明である。295 はほぼ完形で、外面は坏部にヨコナデ、脚柱部にヘラミガキの後ナデ、裾部にハケの後ナデを施す。296 は外面には坏部上半をナデ、はい的にヘラケズリ、脚部に縦方向のハケを施す。内面は坏部にナデ、脚部にはヘラケズリの後ナデを施す。297 は平坦な坏底から屈曲して直線的に広がる口縁部を持ち、筒状の脚柱部から鋭く屈曲して浅く開く裾部を持つ高坏である。器面の状態が悪く、調整は不明である。

第2 包含層出土遺物 (図版47・48・写真図版37)

298 は丸みを帯びた胴部から屈曲して直線的に伸びる口縁部を持つ甕である。胴部外面にハケ、内面にヘラケズリを行う。299 は球形の胴部から屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持つ甕である。口縁部にはヨコナデを施し、端部を内面に肥厚させる。胴部外面はハケを施し、内面は指頭圧痕とヘラケズリの痕跡が認められる。

300 は外反して伸びた受け部に、外方に開く口縁部を付加する二重口縁壺である。口縁部はヨコナデを施し、端部は外傾させる。受け部外面は縦方向のハケの後ヘラミガキを行う。内面は横方向のハケの後ヘラミガキを行う。302 は球形の胴部から直線的に開く口縁部を持つ長頸壺である。口縁端部はヨコナデ、外面は頸部にかけてナデを施し、胴部はハケを行う。内面は口縁にハケが残り、胴部は粘土紐の接合痕と指頭圧痕が認められる。

301 は扁球状を呈する胴部から内彎気味に開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。器面の状態が悪く調整は不明である。

303 は逆円錐状の受け部と円錐状の脚部を持つ小型器台である。器壁の状態が悪く調整は不明である。脚部内面にはヘラケズリの痕跡が残る。

304 は平坦な坏底から直線的に開く口縁部を持ち、脚柱部は緩やかに伸びる。口縁部にはヨコナデ、坏部外面には横方向のヘラミガキ、脚柱部には縦方向のヘラミガキを行う。内面は坏部にヘラミガキの痕跡が残るが、他は器壁の状況が悪く不明である。305 は平坦な坏底から直線的に開く口縁部を持ち、脚柱部は緩やかに伸びる。口縁端部は外傾させ、脚柱部には2ヶ所穿孔がある。器面の状況が悪く調整は不明である。306 は平坦な坏底から直線的に開く口縁部を持ち、脚裾部は細長い脚柱部から鋭く屈曲して浅く開く。外面は口縁・裾端部をヨコナデ、脚柱部はヘラミガキ、他はナデを施す。内面は坏部は剝離が著しく不明で、脚柱部は絞り痕が認められる。

第3面直上出土遺物 (図版48)

307 は球形化した胴部から緩やかに屈曲して伸びる口縁部を持ち、端部は強いヨコナデが施され、内彎して受け口状を呈する。外面はタタキを施した後、胴部中央にナデを行う。308 はあまり胴の張らない胴部から屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持つ平底の甕である。口径が胴部最大径を凌駕する。外面は口縁部に至るまでタタキを施し、部分的にハケ・ナデ・ヘラミガキを施す。内面は全体に横方向のハケを行い、底部付近に縦方向のハケを付加する。

309 は外反する受け部に直線的に伸びる口縁部を付加する二重口縁壺である。口縁部はヨコナデ、受け部外面にはヘラミガキ、内面にはナデを行う。310 は丸みを帯びた胴部から外反気味に伸びる口縁部を持ち、端部を強く外側に折り曲げ、端部を上下に拡張する広口壺である。端部上面に刻み目を施す。

311 は逆円錐台形の胴部と内彎して受け口状を呈する口縁部を持つ平底の鉢である。口縁部はヨコナデ、胴部は内外面ともハケの後ナデを施す。

第3包含層出土遺物 (図版48・49・写真図版37・38)

312 は球形の胴部から屈曲して直線的に伸びる口縁部を持ち、端部を内傾させる。胴部外面はハケ。内面はヘラケズリを施している。

313 は胴部の膨らみがほとんどない胴部から直線的に開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。外面にはヘラミガキ、内面にはハケの痕跡が認められる。314 は扁球状の胴部から大きく開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。胴部外面はヘラミガキの後丁寧なナデを施し、内面は口縁部はハケの後ヨコナデ、胴部はヘラケズリの後ナデを施している。315 は扁球状の胴部から外反気味に大きく開く口縁部を持つ小型丸底鉢である。外面は横方向のヘラミガキの後、口縁部にヨコナデを施す。内面は口縁部にヘラミガキの痕跡があり、胴部はナデで仕上げている。316 は扁球状の胴部から大きく開く口縁部を持つ小型丸底鉢に脚が付く。器面の状態が悪いが、口縁部はヨコナデ、胴部外面はヘラミガキを施されているようである。内面の調整は不明である。

317 は外反する受け部に直線的な口縁部を付加する二重口縁壺である。受け部と口縁部の接合部分に粘土紐を付加し稜を強調している。ヨコナデを行い、口縁端部を拡張し、外傾させる。318 は丸みを帯びた胴部から屈曲して直線的に開く口縁部を持つ短頸壺である。319 は球形の胴部から直線的に立ち上がった後、端部付近で外反する口縁部を持つ長頸壺である。口縁部はヨコナデで仕上げ、外面は頸部に縦方向のハケ、胴部は斜め方向のハケを施す。内面も頸部から胴部にかけてハケを施している。

320 は湾曲した胴部からほぼ直角に屈曲し、さらに直立した受け口状の口縁部を持つ鉢である。口縁部はヨコナデを施しているが、胴部は器面の状態が悪く調整は不明である。

321 は平坦な坏底部から直線的に開く口縁部を持ち、脚柱部から緩やかに浅く開く裾部を持つ高坏である。外面は坏部にヘラミガキ、脚部にはハケの後ヘラミガキを施している。内面は坏部はヘラミガキ、脚部はヘラケズリとハケの後ナデで仕上げている。322 は皿状の坏部を持ち、口縁を外反させる高坏である。内外面ともヘラミガキの後ナデを施している。

第4面直上出土遺物 (図版49・写真図版38)

323 は胴部最大径がやや上位にくる胴部から緩やかに屈曲して伸びる口縁部を持つ甕である。端部は上方に拡張され、外側に面を持ち、かすかな凹線が1条巡っている。外面はタタキの後縦方向のハケを

施している。内面は不整方向のハケを行う。324 は全体に垂んでいるが、胴部最大径が中位にくる胴部から直立気味に外反する口縁部を持つ甕である。口縁端部は外側に面を持つ。胴部外面はタタキの後底部付近にヘラミガキを施している。胴部内面は不整方向のハケで仕上げる。325 は胴部最大径が中位にくる胴部から、屈曲して外反する受け部に直立気味の口縁部が付加される複合口縁の甕である。胴部外面には縦方向のハケ、内面にはヘラケズリを施している。326 は胴部から屈曲して内彎気味に伸びる口縁部を持つ、端部は内側に肥厚させる。全体に器面の状態が悪いが、胴部内面にはヘラケズリの痕跡が認められる。

327 は丸みを帯びた平底の胴部から、頸部のくびれをほとんど持たずに開く口縁部を持つほぼ完形の鉢である。外面はタタキをナデで消し、内面は口縁部にハケを行い、胴部はナデで仕上げている。

328 は壺または鉢と思われる底部である。外面はタタキ、内面は板ナデを施している。

329 は直立した頸部から直角に受け部が伸び、やや外反気味に大きく広がる口縁部を持つ二重口縁壺である。外面はナデとヘラミガキを施し、内面も同様の調整を行う。

第4 包含層出土遺物 (図版49・写真図版38)

330 は製塩土器の脚台部と思われる。胴部外面にはタタキ、脚台はユビオサエとナデを行っている。内面は板ナデの痕跡がある。

331 は端部をつまみ上げた皿状の受け部と円錐状の脚台部を持つ小型器台である。受け部内外面および脚台部外面はヘラミガキを行っている。脚台部内面はナデで仕上げている。

第1面直上から出土している土器と土器群の土器の所属時期は第1遺構面とほぼ同じと考えられる。第2包含層・第2面直上出土の土器および第3包含層出土土器の大半も布留式の前半に収まるものと考えられる。第3面直上・第4包含層・第4面直上の土器についても時期のばらつきはなく、ほぼ庄内式の範疇で収まるのではないかと考えられる。

2. 石器 (図版30・47・48・写真図版39)

3点図示した。うち、S1・S2 敲石である。S1はSD103 から出土している。全体に敲打痕が認められる花崗岩の亜円礫である。S2は第2面直上で出土した。両端に敲打痕を持つやや扁平な花崗岩の亜円礫である。S3は第3面直上で出土した。上面に使用痕を持つ断面が隅丸方形の亜角礫で、台石あるいは砥石ではないかと考えられる。

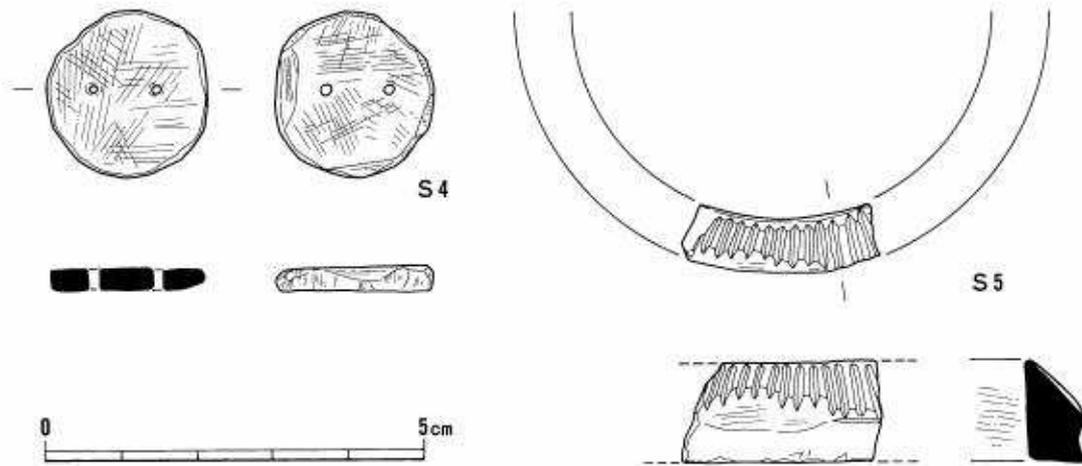
3. 石製品 (巻首図版2・第9図・写真図版8・39)

有孔円板 S4はB4区第1面直上から出土した、粗悪な滑石製と思われる有孔円板である。

直径は2.0~2.2cm、厚さ2~3mmを測り、平面形はほぼ円形であるが、側面を子細にみれば多角形状に多くの稜が残っている。

穿孔は表裏面の研磨工程以前に行われており、中央よりやや両端部に寄った2か所に認められる。孔間の距離は0.9cmである。穿孔は片側から行われており、平坦面に対してほぼ垂直に穿たれている。穿孔の直径は1.5mmを測る。

表裏両面には細かな擦痕が多方向に認められる。また、形割・切削の工程で生じてしまった小剝離面



第9図 石製品

を放置することなく、研磨を加えている。側面にも擦痕が顕著に残っているが、円周方向に直交する向きにしか施されていないため、先述したように、側面の稜が完全には解消されていない。完全な円形品に仕上げる意識はさほど強くはないようである（篠原 1990）。

石 釧 S5は第2面直上から出土した石釧の破片である。

D5区の調査区壁面の清掃時に出土したものであり、石釧の斜面の傷はその際についたものである。外径7.0cm、内径5.6cmのほぼ正円をなしていたであろう石釧の1/8の破片であり、高さ1.35cm、厚さ0.65cmを測る。底面は平坦で、上端は尖り気味である。そしてこの底面の内径の方が、上端における内径よりも1mmほど小さい。

斜面には幅1mm、深さ0.5mmの細刻線を全面に施し、側面は1段の凹帯を呈するもので、両者の境には幅0.5mm、深さ0.2mm程度の沈線が巡る。石釧を形状と刻みの種類によって分けた藩原分類の、IIa類（藩原 1987）に属する可能性が高い。ただし、小片のため、斜面の刻みには、本来細刻線のなかに凹帯を交えていた可能性は否定できない。

石釧の断面形は、方形に近いものから、高く内傾するものに変化する傾向が指摘されている。当遺跡出土のS5には内傾がほとんどみられず、側面の高さ0.50cm、斜面の長さ1.02cmを測る。

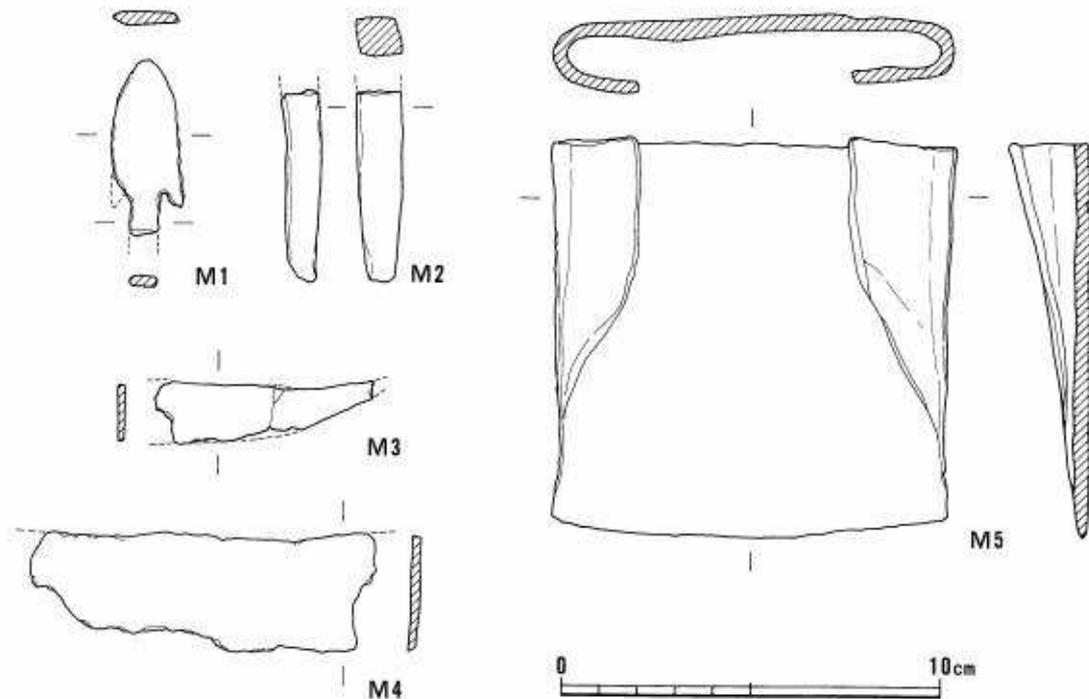
内面には、製作時についたと思われる水平方向の擦痕が顕著にみられる。

比較的新しい割れ口の中心部は深川鼠色(10GY7.2/1.5)を、その周囲から表面にかけては千草色(10G7/2.5)を呈している（小学館 1995）。石材は緑色凝灰岩であると思われる。

4. 金属製品（巻首図版2・第10・11図・写真図版8・39）

鉄 鎌 M1はSD104から出土した鉄鎌である。逆刺の一部を欠損する鎌身と、頸部の一部が残存する。鎌身の長さ3.9cm、最大幅は2.0cmと推定される。

鉄 釘 M2は第1遺構面直上より出土した鉄器である。釘の可能性がある。断面の形状は正方形に近い。頭部及び先端部を欠失する。



第10図 鉄製品

刀子 M3は土器群101から出土した鉄製の刀子と思われる。両端部を欠失するが、刀身と茎の破片と思われる。関は棟・刃両側とも判然としない。

鉄鎌 M4はSD104から出土した。両端部を欠失する鉄鎌であろう。幅は3.1cmを測る。

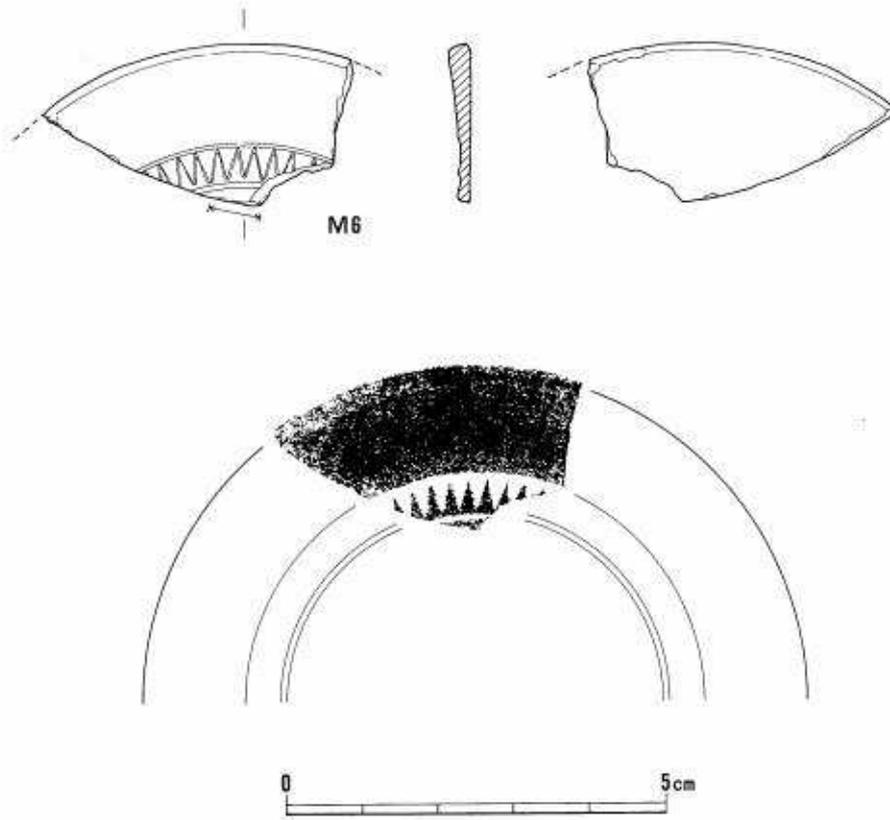
鎌・鋤先 M5は土器群101から出土した鉄製の方形鎌・鋤先であり、長方形の鉄板の両端を折り曲げて、鋤あるいは鎌といった木製農耕具との着装部としたものである。平面形態は、ほぼ正方形を呈し、基部の幅5.4cm、刃先部の幅5.2cm、長さ5.2cmを測る。木質の残存は認められない。

銅鏡 M6は、第1面直上から鏡背を上にして出土した銅鏡の破片である。土器群101の東方約3mで出土したものである。

この鏡片は周縁部を含む3.8×1.9cmの三角形を呈し、縁端の厚さ0.3cmを測る。これから復元される鏡の直径は8.8cmであり、縁端の円周を基準にした残存率は約1/6、紐孔方向での残存率は約1/2、面積を基準にすれば、約1/9の破片といえる。色調は内外面とも暗緑色(5G3/4)を呈し、重量は10.7gを測る。

幅約1.2cmの平縁の内側はわずか6.5mmしか残存していないため、鏡式の判定は困難である。内区外周には外向鋸歯文が、その内側には圏線の可能性のあるわずかな隆起が認められる。

注意すべきは、第11図に矢印で示した部分に丁寧に研磨が施されている点である。この研磨によって破断面はより平滑になり、鏡背の稜角も丸くなっている。しかしながら実体顕微鏡による観察においても、この研磨痕には擦痕はまったく観察されないため、厳密には「手擦れ」とよぶ著しい磨滅と解釈すべきかもしれない。これ以外の破断面には、このような痕跡が認められないため、研磨ないし磨滅後にさらに破損した可能性も考えられる。



第11図 銅鏡

表面には布痕や赤色顔料の付着は認められない。

鏡式は不明であるが、古墳時代の仿製鏡と考えてよい。鏡式の検討および破鏡としての性格については第4章第1節で検討する。

第4章 遺跡の検討

第1節 土器

各遺構面のおおよその時期は遺物の項でも述べたが、ここでは改めて遺構出土の土器を中心に、その帰属時期を考えてみたい。

1. 第1遺構面出土土器

第1遺構面出土の土器は大きく2時期に分けることができる。SH102出土土器を代表とするものとSD104出土土器を代表とするものである。

SH102から出土した甕は胴部形態は球形を呈するが、口縁部の立ち上がりが直線的になり、端部内面を肥厚させるものも少なくなっている。また、胴部外面に施されたハケも、不定方向のものがほとんどで規則性が崩れはじめている。高坏は米田分類(米田 1991)の「布留系高杯」で占められる。その他、特徴的な器種として、逆円錐台形の受け部に円錐台形の脚部を持つ小型器台が認められる。SK103・SK104もほぼ同じ傾向を示すが、SK104には大型の高坏が含まれている。SK104・SK105の小型丸底土器は口縁部の立ち上がりが直線的になり、やや粗製化するものが認められる。以上の点から、これらの土器はおおむね米田氏による編年(米田 1991)の布留式期Ⅲの特徴を備えているのではないと思われる。ただし、大型の高杯も存在する点から布留式期Ⅳへの過渡期と考えることもできる。

SD104出土の甕はやや長胴を呈するものも出現しはじめている。なかにはやや歪な器形となったものもある。全般的に口縁部の立ち上がりも直線的になり、端部内面を肥厚させるものはほとんどなくなっている。また、胴部外面に施されたハケも、不定方向のものがほとんどである。高坏は「布留系高杯」と大型の高坏が主体を占めるが95のような「後期型高杯」(米田 1991)が出現する。また、大型の二重口縁壺の存在も注目される。SD106出土土器の場合、甕は完全に長胴化しており、高坏も「後期型高杯」になっている。また、SD108・SK107は須恵器を伴う資料であるが、SD108から出土した須恵器の甕は、大庭寺遺跡(富加見・土井 1993)の393-OLⅡ層出土のものに類例があり、初期須恵器と考えられる。SK107出土の器台片についても、形態から考えて初期須恵器の範疇に収まるものと考えられる。また、SK101で出土している平底の壺も韓式系土器の影響下にある可能性を持ち、土器群106には鍋あるいは瓶のものと思われる把手も含まれている。したがって、これらの土器は米田編年の布留式期Ⅳ～Ⅴと考えて良いものと思われる。

2. 第2遺構面出土土器

第2遺構面出土の土器は良好な資料が少なく、器種的にも偏りがある。

SK217からは逆円錐台形の受け部に円錐台形の脚部を持つ小型器台と、皿状の受け部を持つと考えられる小型器台が出土している。また、SK210・SK226では屈曲して開く口縁部を持つ鉢が出土している。SK228ではタタキ技法が多用された甕・鉢が残存している。ただし、SH202・

SK225から出土した甕の口縁部片は布留式甕の特徴を示しており、第2包含層および第2遺構面直上にも同様の甕や坏底部が丸みを帯びてくる高坏が認められる。また、加飾された二重口縁壺の一部や精製の小型丸底鉢・小型丸底壺が第2面直上から出土している。以上の点から、これらの土器は米田編年の庄内式期V=布留式期I~布留式期IIに相当するのではないかと考えられる。

3. 第3・4遺構面出土土器

第3遺構面・第4遺構面出土の土器は甕・鉢が多く、やや器種的な偏りを持つ。甕はタタキ技法による分割成形を用いたものがほとんどを占める。口縁端部を横ナデして上方につまみ上げたり、外側に面を持たせる手法も認められる。小型のものには胴部がやや球形化しているものもある。鉢もタタキ技法を用いているが、直口のものと同外反する口縁を持つものが認められ、前者が主体を占める。壺では特徴的なものとしてSH301・SD311で頸部が短くなった長頸壺が出土している他、広口壺が認められる。広口壺は口縁部を欠くものが多いが、胴部の球形化した新しい傾向を持つものと、胴部の張りが大きい伝統的なものとが混在している。高坏ではSD307で坏底部と口縁部の境界が明確で、口縁が発達した形態のものが出土している。器台はSD311で裾部の発達した形態のものが出土しているほか、第4包含層で皿状の受け部を持つ精製の小型器台が出土している。これらの土器は中ノ田遺跡溝1・2出土資料(岡田 1991)や田能遺跡第1B区土器溜り新相(福井ほか 1982)資料とほぼ同じ段階のものと考えられる。

この遺構面から出土した土器の様相は、あくまでも弥生時代後期的なものが残存している。そのため森田氏による編年(森田 1990)を基準とすれば、摂津第VI-2様式に大半のものが相当し、一部摂津第VI-3様式まで下るものが含まれると考える。米田編年との併行関係については、甕の主体があくまでもV様式系のタタキ甕であるため、直接比較できる資料に乏しい。しかし、弥生時代後期前半から布留式前半のものが混在したSR401出土資料中には、庄内式甕およびその影響を受けた甕が認められる。また、有段口縁を持つ精製された高坏(240・241)や皿状の受け部を持つ精製の小型器台(242・243)といった庄内式の古相に位置づけられる土器も認められる。最近発表された森岡氏他の見解のよれば、森田編年の摂津第VI-2様式は庄内式直前から庄内式期I~II、摂津第VI-3様式は庄内式期II~IIIに併行するとされているが(森岡・中井・濱野 1996)、当遺跡の資料はそれを裏付けるものと考えられる。

煩雑になるが、もう一度各遺構面出土土器の時期を述べる。第1遺構面は布留式新相(布留式期III~V)、第2遺構面は布留式古相(庄内式期V=布留式期I~布留式期II)、第3・4遺構面は弥生後期末から庄内式古相(庄内式期直前~庄内式期II)に併行すると考えられる。

第2節 石 釧

古墳に副葬されるのが常である石釧（S5）が包含層から出土した。このような場合、玉造遺跡、破壊された古墳あるいは祭祀遺跡との関わりで説明されることが多いようである（國下 1986）。当遺跡では玉造りの痕跡は全く認められないため、その出土の理由は後二者に求められよう。

まず、破壊された古墳にこの石釧が副葬されていた可能性を考える。猪名川対岸の田能遺跡には、布留式期の方形周溝墓が存在し（福井ほか 1982）、また猪名寺廃寺においても円筒埴輪列が検出されたため⁽¹⁾、当遺跡近傍にも埋没古墳が存在する可能性は否定できない。しかしながら、当遺跡では石釧以外に古墳の存在を示すような遺物が出土していないため、積極的にこの考えを採ることを避けたい。

当遺跡の石釧は、調査区壁面の第2遺構面直上包含層から破片の形で出土した。石釧に東接する第2遺構面直上から、完形に近い多数の土器（図版45の271～297）が出土していることから、いささか安易ではあるが長野県・鳥羽山洞穴（関 1967）や兵庫県・入佐川遺跡（平成4年度県教委調査）などとともに、多くの土器を使用した祭祀遺構に伴う出土と捉えたい。

さて、石釧を含む碧玉製腕飾類については、政治的性格を付与されたうえで畿内政権から配布されたとする意見が一般的である（小林 1961）。とすれば、遅くともこの石釧の配布をもって、田能高田の首長と畿内政権との政治的・経済的交流関係が成立したと理解すべきである。石釧が畿内政権から各地首長へ配布されたことはすなわち、石釧をも用いた定式的な葬送儀礼の一環としての古墳築造が「原則として」認められており、石釧は首長の葬送儀礼に使用され、副葬されるという厳格な扱いの対象である、と観念されたであろうことを意味している。では当遺跡においては、石釧をなぜ葬送儀礼以外の祭祀に使用したのであろうか。

古墳に副葬されなかった石釧の類例が全国でも10例前後と少ない現在、その理由は極めて例外的な出来事に求めざるをえない。田能高田を含む集団の首長に石釧が配布されて彼が葬られるまでの間に、おそらくは畿内政権側に状況判断の変化が起きたため、彼は古墳築造を認められなかった、ということをも具体的な理由の一つに挙げられないだろうか。当遺跡の石釧は、型式学的特徴からおそらく3期の古墳に副葬されたであろうのに、当地域における前方後円墳の築造は、5期の池田山古墳を待たなければならなかったのである。東摂地域は畿内政権中枢とかなり密接に関わっていたのに対し、田能高田遺跡の位置する西摂地域に対する畿内政権の政策の方向性は、基本的にその勢力を抑えこむものだったようで（吉村・森岡 1992）、それだけに政治的關係を結ぶにあたっては、様々な状況に判断が左右されやすかったのではないだろうか。

田能高田の首長に前方後円墳築造が許されなかったとしても、彼は何らかの施設に埋葬されたはずである。しかし、そこに石釧が副葬されていないことは、石釧を葬送の場で使用する際には、畿内政権の示す一定の葬送儀礼のもとで行われる、という規制があったらしいことを窺わせるものである。

全国的に古墳以外からの石釧出土例を取り上げて、その地域における前方後円墳築造の動向を検討すべきであるが、果たせなかった。また、石釧のもつ政治的性格を疑問視する意見もある（中上 1977・寺村 1980）が、この問題を検討することなく、田能高田遺跡の出土例をもとにした一つの憶測を述べてみた。

注 (1)、尼崎市立田能資料館の橋爪康至氏のご教示による。

第3節 古墳時代仿製鏡の破鏡

第1遺構面において、銅鏡の破片が1点出土した（遺物番号はM6-以下「田能高田鏡」とよぶ）。小片であるが、その鏡式について検討を加え、出土状況から廃棄時期を特定したうえで、この鏡片の意味するところについて考えてみる。

1. 鏡式の検討

田能高田鏡の属性

田能高田鏡の属性を挙げれば、以下のとおりである。

- ①. 復元される直径は 8.8cm である。
- ②. 周縁は平縁であり、かつ素文である。
- ③. 周縁の幅は 1.2cm、厚み 0.3cm を測る。
- ④. 内区外周には外向鋸歯文が巡り、その内側には圏線の可能性をもつわずかな隆起がある。
- ⑤. 銅質は良好である。
- ⑥. 破片であり、破断面には丁寧に研磨が施されている。

中国鏡との比較

田能高田鏡は銅質が良く、また割れ口が磨かれていることから、中国鏡なかでも漢鏡である可能性が考えられた。以下、その可能性を検討する。

漢鏡4期の多くは、縁の断面形状がヒ面であったり、連弧文をもつ。また方格規矩四神鏡や獸帯鏡には、縁が素文のものが含まれるが、内区外周に櫛歯文が巡るのを通例とする（岡村 1984）。

漢鏡5・6期の鏡のうち、動物文鏡群のほとんどには外区に施文がみられるものがほとんどである。また、内行花文鏡の外区はほとんどが幅広い素文であるが、内区外周に鋸歯文をもつものは認められない（岡村 1993）。

漢鏡7期のうち「第1グループ」・「第3グループ」は斜縁がほとんどであること、「第2グループ」の周縁は平縁だが、画文帯をもつことが多い（岡村 1990）。

以上のように、田能高田鏡が漢鏡4～7期の中国鏡である可能性は低いといえよう。

弥生時代小形仿製鏡との比較

北部九州や朝鮮半島製の、いわゆる弥生時代小形仿製鏡の内区外周には、鋸歯文ではなく、不規則な斜行の櫛歯文帯をもつのを通例とし、銅質も不良なものが多いため、田能高田鏡がこの種の鏡である可能性はきわめて低い（高倉 1972・1985、高橋 1986）。

また、弥生時代終末～古墳時代前期における近畿系小形仿製鏡は、超小形化・素文化の方向性をもつ一群と、鋸歯文や珠文等で飾り、弥生鏡から逸脱して古墳時代の小形仿製鏡へ連なるであろう一群のものがあるとされる（森岡 1989）。このうち後者については田能高田鏡との関連も考えられるものであるが、類例が少ないうえに、画一的な様相を示さないことから、ここでは触れないこととする。

古墳時代仿製鏡との比較

古墳時代の仿製鏡には非常に多くの鏡種があり、外区が素文のタイプを含むのは10系列にもなる（森下 1991）。そこで、小形の仿製鏡ということで鏡種を絞れば、獸形鏡・神像鏡と内行花文鏡、掇文鏡・

珠文鏡・乳文鏡などが候補となる(和田 1986)。

そこで、これらのうち、外区が素文で内区外周に鋸歯文を巡らせる、直径13cm以下の鏡を対象に、直径と鋸歯文の歯数の関係(第12図左)、直径と周縁幅との関係(第12図右)を示すグラフを作成し、これと田能高田鏡との比較を行った。実物を計測したのではなく、各種文献に掲載されている写真や実測図等を用いたため、含まれる誤差は小さくはないが、ある程度の傾向は把握できると思われる。鋸歯文の歯数については、破片の場合は完形鏡の歯数を復元した。田能高田鏡は74個の三角形の歯が鋸歯文を形成していたものと思われる。

第12図(左)からは、掇文鏡・珠文鏡は田能高田鏡より鋸歯文の歯数の少ないものが大半を占め、獸形鏡・内行花文鏡は田能高田鏡をその属性範囲に含んでいることが分かる。

次に第12図(右)から、掇文鏡・珠文鏡は直径が大きいものほど、周縁の幅が広がる傾向にあるらしいこと、これに対して獸形鏡・内行花文鏡については両者の間に明確な比例関係が認められないことが分かる。また、珠文鏡は直径10cm以下のものが多いのに対し、獸形鏡は8cm以上のものがほとんどである。

第12図に星印(★)で示したのが田能高田鏡の数値であるが、いずれの鏡式の分布範囲をも大きく逸脱するものではない、すなわち残念ながら鏡式を限定できる分析資料ではないことを示している。この第12図は、鏡の直径、周縁の幅、鋸歯文の数という3つの属性を2つのグラフに分けて表示したものである。それぞれのグラフで田能高田鏡と似た値をもつものは散見されるが、この3属性を同時に満たすような資料はきわめて少ない。この点において、京都府福知山市八ヶ谷古墳出土の獸形鏡(四獸鏡—直径8.9cm、縁幅1.2cm、鋸歯文72歯)は田能高田鏡に酷似するものの、鋸歯文の形態が異なるため、同範とはいえない(山城考古学研究会 1983)。

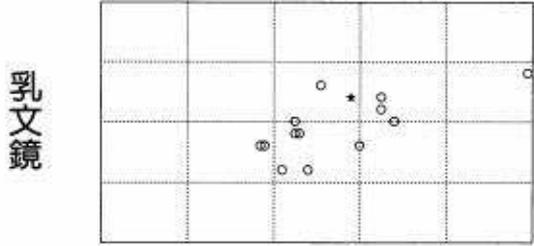
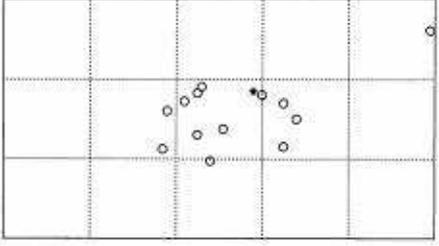
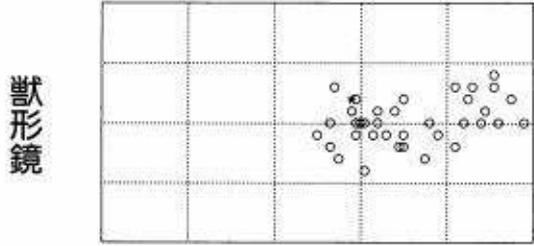
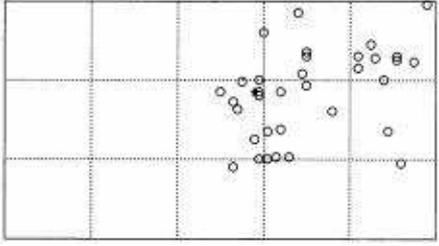
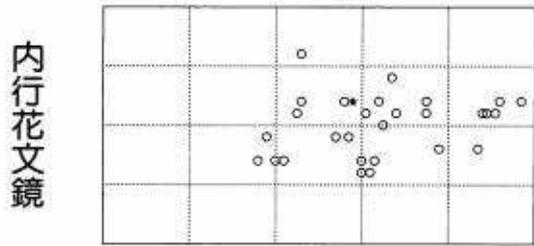
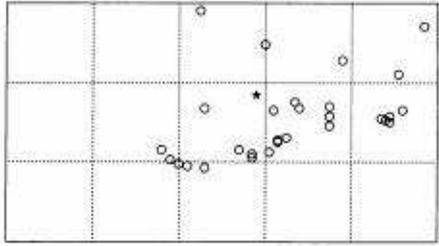
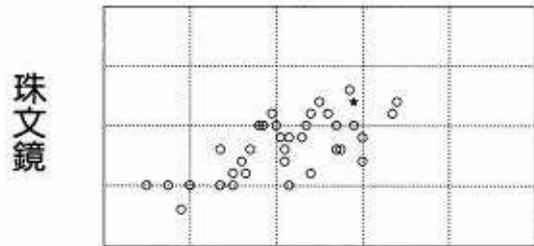
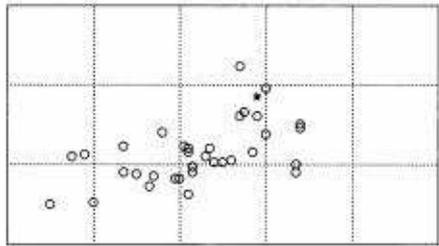
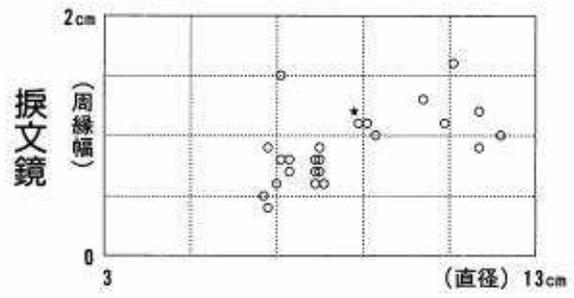
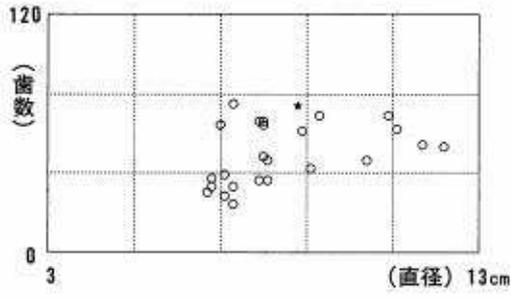
結局、田能高田鏡は、獸形鏡や内行花文鏡である可能性が比較的高いものの、鋸歯文鏡(樋口 1979)や近畿系小形仿製鏡を含む、古墳時代の仿製鏡であるという以上に鏡式を限定することはできないようである。したがって、鏡の製作年代および破鏡として利用され始めた時期についても不明とせざるをえない。では、廃棄された時期についてはどうだろうか。

2. 出土状況の検討

第1遺構面の時期幅

先述したように、この鏡は遺構からではなく、第1遺構面直上より出土したため、廃棄時期を直ちに限定することはできない。そこで、第1遺構面を覆う第5層から出土した須恵器環Bおよび第2遺構面における最も新しい遺物の検討からそれに迫ってみたい。第1遺構面は布留Ⅲ式期以降、平安時代前期以前の所産と考えられるが、出土土器からいまして時期幅を狭く限定できそうである。この第1遺構面からは多くの土器を含む遺構が検出されている。それらの多くは古墳時代中期(布留Ⅲ～Ⅴ式)のものであるが、最も新しい遺物は、深い井戸(SE101)の埋設中に含まれたMT15型式の須恵器である。しかし、この1点をのちの流入によるものとすれば、古式の須恵器を出土したSD108が第1遺構面における最も新しい遺構といえよう。最も古い遺物は布留Ⅲ式に属する土師器である。

以上のように、第1遺構面の営まれた時期は布留式新相段階である。また、田能高田鏡の廃棄時期もここに求めることができ、近接した土器群101との関連を重視すれば布留ⅢないしⅣ式と想定することができる。



直径と鋸歯文歯数の関係

直径と周縁幅の関係

第12図 古墳時代仿製鏡における直径・縁幅・鋸歯文の状況

3. 鏡片の性格

以上の検討から、田能高田鏡は布留Ⅲ～Ⅳ式期に廃棄された古墳時代仿製鏡の破鏡であることが明らかになった。なお、ここでは「破鏡」という用語を、破面研磨という二次的使用の明らかな鏡片に限定して使用する。

破鏡の研究史

破鏡は主に西日本に分布する遺物であり、1995年現在約 300例が集成されている（西川 1995）。

それによれば、破鏡の原鏡は舶載鏡がほとんどであり、そのなかでも内行花文鏡や方格規矩鏡の2種が破鏡全体の約5割を占めている。またその出土時期は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのものが7割以上である。1989年時点の集成では、約100例のうち、内行花文鏡と方格規矩鏡があわせて7割を越えていた（川西 1989）ことをみると、上記2種以外の鏡式の類例が増えはじめたあるいは注意されはじめたことを意味していよう。田能高田鏡は古墳時代仿製鏡を原鏡とする点、古墳時代中期まで破鏡が存在するという2点において、これまでの出土例と比べて異質であるといえよう。

出現の経緯や、出土状況・廃棄状況などからみた破鏡の性格については以下のような見方がなされている。田能高田鏡を理解するうえでの参考にしたい。

弥生時代の鏡は、その列島内における分布状況からみて、鏡を用いた独自の階層構造をつくりあげた北九州甕棺墓地域の首長層が、大陸から直接受入れを行っており、漸次西日本各地へもその分布が広がったとみられている（高橋 1992等）。このような状況のもと、破鏡出現の契機は、後漢鏡の流入停滞期にあたる弥生時代後期後半において、北九州旧甕棺墓地域から周辺地域の首長層へ配布するための舶載鏡の不足を補う目的で行われた、完形鏡を割るという行為に求められている（高倉 1976）。その後これに対して、完形鏡のもつ価値を減じるような分割行為は不自然であるとし、鏡片の形で北部九州へ舶載されたものが周辺地域に供給されたとする説（高橋 1992）が唱えられ、また弥生時代後期前半の佐賀平野において、鏡を故意に割ってその一片を抜き取るという新しい葬送儀礼が出現し、それが破鏡出現の主要な契機とする意見もみられる（藤丸 1993）。

破鏡の保有層は、首長周辺に位置し、呪術的な分野に携わった人物であろうとされ（正岡 1979）、その具体的な階層的位置については、副葬される埋葬施設の内容の比較などから、完形鏡より下位に位置づけられそうである。鏡片は弥生時代小形仿製鏡と同等の扱いがなされた（高倉 1976）あるいは、舶載完形鏡—舶載分割鏡—仿製鏡の順に階層性を考える意見がある（下條 1983）。

破鏡の出土状況については、北部九州では弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて主に墳墓への副葬品として出土することが多く（高倉 1976）、これに対して近畿地方では、主に集落内に廃棄された形で出土する傾向が指摘され、両者の違いは鏡を副葬する風習の有無に起因するとされる（森岡 1994）。

また、鏡片の破面を研磨するという行為は、完鏡の保持した能力の復活・再生・維持を企図したものとされ、墓に単品副葬される例の多さから、破鏡は個人帰属性の高い、呪術的な着装垂飾品であり、司祭者ないし司祭者的中小首長達が日常着脱したシンボルであるという意見がある（森岡 1994）。

「伝世鏡論」と相まって、鏡片にも伝世行為が想定されている（高倉 1990・岡村 1990・高橋 1992）が、北部九州では、地域首長が畿内政権と政治的関係を樹立した段階で伝世の意義を失い、主に墳墓に副葬される（岡村 1989）が、鏡副葬の伝統のない地域では、集落の諸画期や廃絶に伴い居住区に遺棄されたとされる（森岡 1994）。

田能高田鏡の性格について

従来研究の対象になった破鏡は、先述したように弥生時代に招来された舶載鏡を原鏡とするものであった。しかし、弥生時代の小形仿製鏡においても数例の破鏡の出土が知られるようになり（西川 1995）、さらに古墳時代の仿製鏡にも若干の破鏡が存在することが注意され始めている。具体的には、古墳時代前期前半の前方後円墳である奈良県・桜井茶臼山古墳の副葬鏡のなかの、大型仿製内行花文鏡に破鏡が存在することが判明し、従来弥生時代で終焉を迎えるとされていた破鏡行為の残存した時期と、大型仿製鏡の製作時期とに重複があることが指摘されるようになった（今尾 1993）。また、岐阜県・東寺山2号墳出土の鏡に、仿製鏡の破鏡が存在することが確認されている（赤塚 1995）。古墳時代の破鏡の性格の把握にあたっては、当然ながら弥生時代のそれとは異なった解釈を用意する必要がある。

古墳時代には、その当初から様々な仿製鏡が大量に生産されたことが判明している。これは、社会のもつ様々な需要にこたえるため、多義性と可変性に富んだ鏡が積極的に利用された（森下 1991）ことのためであり、それら多彩な鏡式や鏡径によって各地の首長層が様々なランク付けされていたことも証明されつつある（今井 1992）。しかしながら、第3表のように類例が少ない現状にあっては、畿内政権がこうした鏡の階層性のなかに、田能高田鏡のような古墳時代仿製鏡の鏡片を重要なものと位置づけていたとは考えにくく、さらに畿内政権による各地への配布行為も想定しがたい。

とすれば、田能高田鏡のような鏡片の出現においては、鏡を受容する立場の主體的な行為を考えざるをえない。そういった意味で、墳墓出土の「欠損鏡」を破鏡の発生と絡める考え方（藤丸 1991）は、この問題を説明する上で魅力的である。古墳副葬鏡のなかに破砕鏡が少なからず指摘されている（小山田 1992・北條 1994・赤塚 1995）が、これらには出土状況の不明瞭なものが多いため、欠損鏡も数多く含まれている可能性もある。兵庫県内の古墳においても、朝来郡和田山町・向山古墳群（平成2年度県教委調査）に欠損鏡としての類例がある。田能高田鏡のような、古墳時代仿製鏡破鏡の出現の説明にあたっては、近傍の古墳出土鏡に、この鏡片と接合できるような欠損鏡がみられないため確証はないが、入手した鏡を故意に割って、その破片を抜き取るという風習の残存をその原因として想定したい。田能高田鏡が不要となったのは先述したように、古墳時代中期（布留Ⅲ-Ⅳ式期）頃である。この鏡片が、第1面において多くの完形の土器や鉄器、有孔円板（S4）などとともに出土した点、また古墳時代中期以降に集落が継続したことを示す痕跡が認められない点に注目すれば、この鏡片の出土を単なる廃棄行為の結果とは考えがたい。また弥生時代の破鏡論にみられた、破鏡としての役目が突如として終了する契機になるような大きな政治的事象を想定しにくい点のため、より個別的な原因、当遺跡の場合には集落の廃絶・移動に伴う祭祀行為のために破鏡が使用されたものと捉えるべきであろう。

第3表 古墳時代仿製鏡の破鏡一覧表

No.	所在地	遺跡名	出土遺構	遺構時期	鏡式名・直径	備考
1	福岡	野多目前田遺跡	溝	中世	内行花文鏡 18.1cm	破面研磨（年代不明）
2	兵庫	田能高田遺跡	包含層	古墳中期	不明 8.8cm	破面研磨
3	奈良	桜井茶臼山古墳	竪穴式石室	古墳前期	内行花文鏡 35~38cm	破面研磨
4	岐阜	東寺山2号墳		古墳前期	二神二獣形鏡 17.2cm	破面研磨
5	千葉	根崎遺跡	竪穴住居	古墳中期	鋸歯文鏡 7.2cm	破面研磨？

第4節 田能高田遺跡で検出された液状化跡

寒川 旭（通産省地質調査所）

1. 兵庫県南部地震と液状化現象

しばらく前まで、阪神地域は地震のない所と思う人が多かった。しかし、それも無理のない話。誰でも、両親や祖父母から伝え聞いた出来事は心に残っていても、それ以前の事項について、なかなか、身近に考えることはできない。

地震をおこす場所は2つある。1つはプレートの境界。ここでおきる南海地震や東海地震は100～150年の周期をもつので、体験者も多いし、かなり身近な存在になっている。もう1つの場所が活断層。これは私たちの住む岩盤の下にある傷で、くり返し大地震をおこすが、その間隔は短いもので1,000年。だから、過去の地震のことも、活断層のことも知らない人が多い。

1995年1月17日の兵庫県南部地震は活断層から発生した地震。淡路島の野島断層が目いっぱい活動し、六甲断層系が深い所でわずかに活動した。このため、激しい地震動が阪神・淡路地域を直撃し、6千数百人の命を奪う大惨事となった。

瞬時に倒壊した家並、1階部分を踏みつぶすように崩れ落ちた鉄筋コンクリートのビル、しばらくして各地から燃え上がった炎、丘陵から一気に流れ下って家並を押し流した土砂——いずれも、ひとたび牙をむいた時の自然の恐ろしさを痛感させた。

海岸付近では大規模な液状化現象が発生した。地割れを伴いながら、海へ向かってせり出した岸壁。地面から抜け上がった傾いたり傾いたりしたビル。そして、あたり一面に広がった噴砂（写真1・2）。

——これらは液状化現象に特有な被害の数々である。

液状化現象は、地表からさほど深くない所にゆる詰まりの砂（礫）が堆積し、地下水で満たされている状態で、人の立っておれないほどの激しい地震動が加わっておきるものである。そして、発生のメカニズムは次のように説明される。

地下の砂粒は、通常は、お互いに支えあって安定している（図1A）。そこへ、激しい地震動が加わると支えがはずれ、それぞれの粒子がすき間を小さくしてより安定するように移動する。このため、すき間を満たしている地下水が圧迫されて水圧が急上昇する（図1B）。やがて、水圧の高まった水が砂粒や



写真1 兵庫県南部地震の液状化現象で生じた地割れ

写真2 兵庫県南部地震の液状化現象で生じた噴砂

周囲からの土圧を支えるようになり、地層全体が液体の性質を持つようになる（これが「液状化」）。さらに、水・砂が上位にある地層を引き裂きながら「噴砂」として上昇する（図1C）。

液状化現象の存在を確認することは、過去に人の立っておれないほどの激しい地震動が存在したことの証明となる。だから、遺跡でこの痕跡を探することは、地域毎の強い揺れの歴史を知るための最も確実な手段となる。

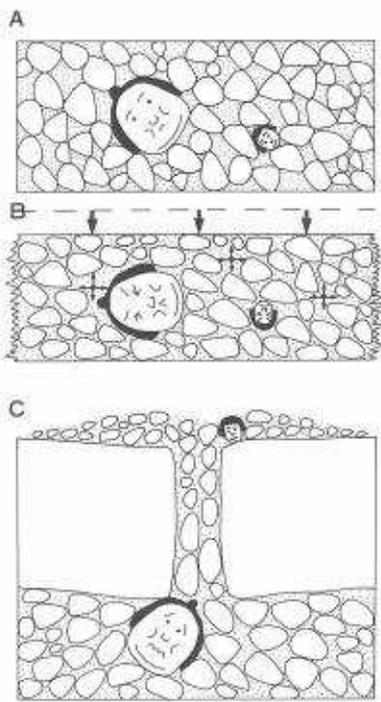


図1 液状化現象の発生過程

- A：通常の状態
- B：激しい地震動によって液状化現象が発生
- C：上を覆う地層を引き裂いて噴砂(礫)が流出



写真3 田能高田遺跡で検出された液状化跡

2. 田能高田遺跡の液状化跡

田能高田遺跡の発掘調査の過程で、液状化現象の痕跡が多く検出された。

この中で、特に注目されるのは、図2・写真3に示した痕跡である。ここでは、最大径8cmの礫を含む砂礫層が液状化し、砂脈（噴砂の通り道となる地割れ）内を礫が上昇している。

この砂脈は、幅約8cmで概ね東西にのびるもので、周囲に小さな砂脈を伴っている。砂脈内では、下部には最大径6cmの礫を含めて、多くの礫がみられるが、上部は主に粗粒砂で構成されている。

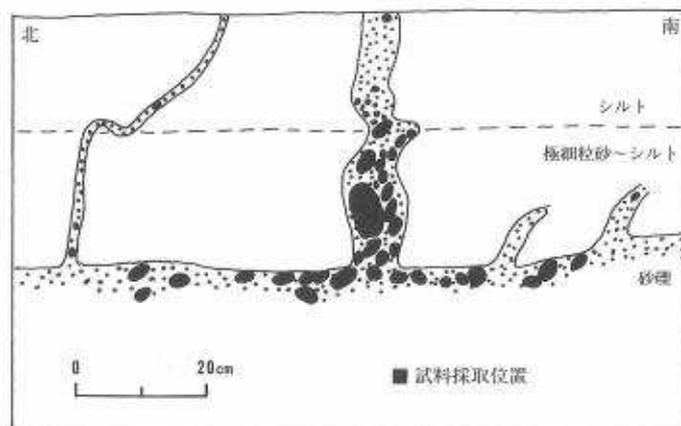


図2 田能高田遺跡で検出された液状化跡の断面図

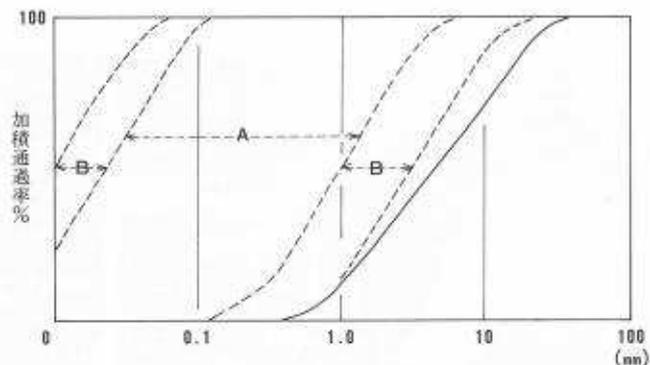


図3 液状化した砂礫層の粒径加積曲線

- (実線で示したものが田能高田遺跡の例：採取位置は図2に示した)
 A：特に液状化の可能性あり
 B：液状化の可能性あり

これは、砂や礫が上昇する際に、小さい粒子ほど浮上し易いので、大きな粒子だけが、下部に取り残されたことを示している。

図3は、液状化した砂礫の粒度組成を示したものである。これによると、最大径5cm（分析した試料中の最大径）を含め、1mm以上の粒子が大部分を占め、これらがほぼ均等に混じり合っていることがわかる。

粒度組成に基づいた地層の液状化のし易さのランク分けが、日本港湾協会（1979）で試みられており、広く普及している。これでは、A：特に液状化の可能性あり、B：液状化の可能性ありという分類となっているが、本遺跡の試料は、Bの範囲を少し超えている。このことは、液状化し難い粒度組成を持つ砂礫が液状化したことになり、一般に想定されるよりもっと激しい地震動がこの地域を襲ったことを示す。

考古学的に見た液状化現象の発生時期は、平安時代より後で、江戸時代より前となり、1596年の伏見地震が唯一該当する。だから、この地震が尼崎地域にかなり激しい揺れ（震度VII程度）を与えたことがわかる。

この伏見地震は、豊臣秀吉が築いた伏見城を揺り崩したことで有名であるが、被害は京阪神から淡路島にかけての広い範囲に及んでいる。阪神地域でも、『言経卿記』の「兵庫在所崩了、折節火事出来候、悉焼了、死人不知数了」という記述から、家屋の倒壊と直後の火災がわかる。また、須磨寺の日記（『当山歴代』）には、本堂・仁王門などの著しい被害が記されている。

図4は、この地震によって生じたと考えられる地震の痕跡の分布を示したものである。これによると京都盆地から淡路島に至る広範な地域に明瞭な地震の痕跡が見られ、広い範囲を激しい地震動が襲ったことがわかる。

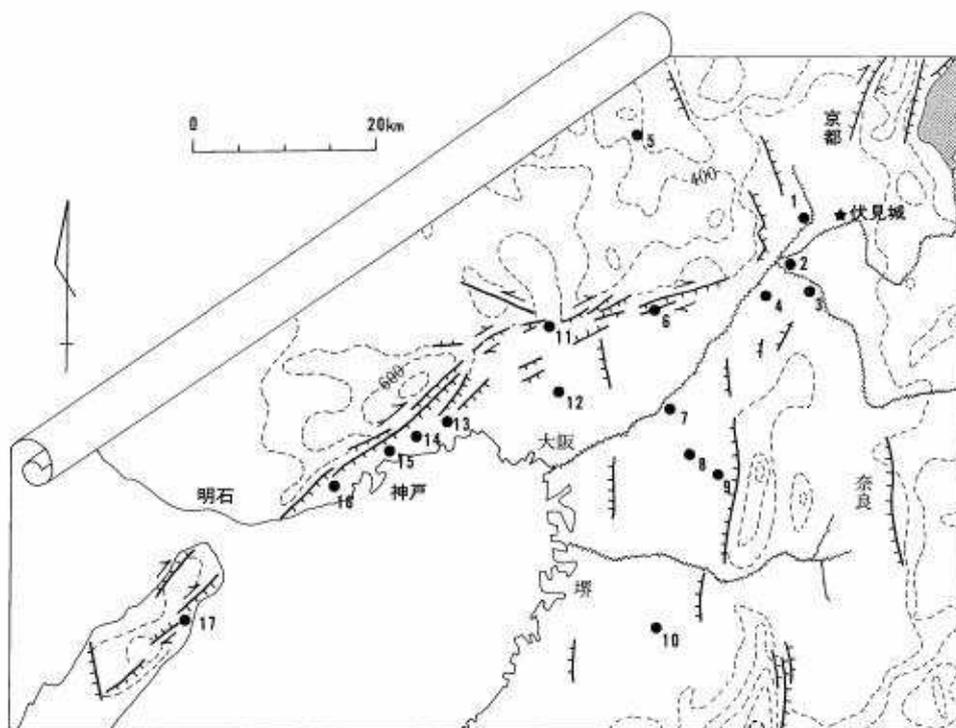


図4 伏見地震で生じた可能性の強い地震跡（太実線は活断層を示す）

1. 志水町遺跡 2. 木津川河床遺跡 3. 内里八丁遺跡 4. 樟葉野田遺跡 5. 鹿谷遺跡 6. 耳原遺跡
7. 西三荘・八雲東遺跡 8. 西鴻池遺跡 9. 水走遺跡 10. 狭山池遺跡 11. 栄根遺跡 12. 田能高田遺跡
13. 寺田遺跡・業平遺跡 14. 坊ヶ塚遺跡 15. 西求女塚古墳 16. 兵庫津遺跡 17. 佃遺跡

また、1995年度に実施された通産省地質調査所の活断層トレンチ調査では、有馬—高槻構造線活断層系や淡路島の東浦断層と先山断層がこの地震で活動したことが判明し、未調査の六甲断層系も同時に活動した可能性が強いと考えられる。

上途のように、過去の地震の歴史を知る方法は3つある。1つは、地震の文字記録を調べること。次に、遺跡の地震跡を観察すること。両者は地面が激しく揺れ、どんな被害が生じたかを知る手段として有効である。最後に、活断層を直接掘って地面の食い違いの歴史を知る「トレンチ調査」。この方法では、地震の原因となる活断層の履歴がわかる。

この3つの方法によって、活断層が活動して地面が激しく揺れたことが説明できると、1つの地震の全体像が把握できる。1596年の伏見地震は、これがよく検証できた好例である。

当遺跡で見られた砂礫の液状化跡は、周辺地域が400年前に激しく揺れた確実な証拠となる。一方、液状化し難いと考えられていた砂礫の液状化の事例は、今後の防災研究において、貴重な資料となるであろう。

本稿の作成にあたり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の甲斐昭光氏には多くのご教示・ご助力を頂きました。心よりお礼申し上げます。

文 献

- 兵庫考古研究会 1995『ひょうご考古』創刊号
- 埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会 1996『発掘された地震痕跡』
- 日本港湾協会 1979『港湾の施設の技術上の基準・同解説』
- 寒川 旭 1992『地震考古学—遺跡が語る地震の歴史—』中公新書
- 寒川 旭 1997『揺れる大地—日本列島の地震史—』同朋舎出版
- 田中 琢・佐原 真編 1994『発掘を科学する』岩波新書
- 宇佐美龍夫 1996『新編 日本被害地震総覧 増補改訂版416-1996』東京大学出版会

第5節 総括

田能高田遺跡は、園田競馬場既舎改築事業に伴う平成3年度の発掘調査で新たに周知された遺跡である。この遺跡は、弥生時代後期以前に形成された猪名川の三角州上に立地し、猪名川対岸の田能遺跡をはじめとする、弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺跡と共存していた集落遺跡である。

全面調査の結果、4つの遺構面が認められ、弥生時代後期前半以前に河道であった場所に、後期後半から古墳時代中期にかけての集落が連綿と営まれていることが判明した。

弥生時代後期末～弥生時代終末期 第3・4検出面が相当する。河道の埋没が進むため、当地にわずかに遺構が営まれるようになる。後期末には2棟の竪穴住居が構築され、うち1棟は平面五角形を呈し、屋内高床部をもつものである。また、出土土器をみれば、河道内の窪み（SR401）は、第4検出面で確認できたものだが、第2検出面まで埋没しきらずに残存していたようである。

この時期の土器には、他地域（中河内・吉備・東海）からの搬入品がわずかに認められる。

古墳時代前期 布留Ⅰ・Ⅱ式の時期であり、第2検出面がこれに相当する。建て替えを含めれば4棟の竪穴住居、1棟の掘立柱建物などの遺構が営まれる。また、第2検出面直上からは完形に近い土器に近接して石釧の小片が出土した。畿内政権から石釧を下賜されながらも、この時期には当地に前方後円墳の築造が認められなかった可能性が高く、政権側からみた当地域の位置づけを反映していると推測できる。また、第2検出面では地震の際の液状化現象に伴う噴砂（噴砂201）が検出された。古墳時代前期の南海地震の爪痕と考えられる。

古墳時代中期 布留Ⅲ～Ⅴ式の時期であり、第1検出面がこれに相当する。2棟の竪穴住居を始めとする多数の遺構とともに、完形に近い多くの土器が出土した。特筆すべきものに、土器とともに出土した有孔円板や古墳時代仿製鏡片が挙げられる。特に仿製鏡片は、破れ口を研磨する破鏡であり、この時代のものとしては類例の乏しい遺物といえる。従来、古墳時代の開始とともに終焉に向かうといわれる破鏡の風習が、集落の廃絶に伴う祭祀に使用される形で残存していたことを示す遺物と評価できる。また、第1検出面においても液状化現象に伴う噴砂（噴砂101）が確認された。慶長元（1596）年に近畿地方を中心に大きな被害を与えた慶長伏見地震によるものである。砂層ではなく、礫層までもが液状化した例として、地震被害の予測にも役立つ資料になると思われる。

以上のように、田能高田遺跡における本格的な集落の開始は弥生時代後期末であり、古墳時代中期の布留式直後まで継続する。これに対し、田能遺跡における居住域の展開は、弥生時代前期から後期にほぼ限定され、つづく庄内式期には中河内産の甕を含む若干の土器が出土し、布留Ⅰ・Ⅱ式期には2基の「方形周溝墓」が築かれているにすぎない（福井ほか 1982）。このように、田能遺跡での居住の終息と田能高田遺跡の開始が時期的にほぼ一致することから、田能遺跡から当遺跡への居住域の移動を想定したい。

当地域は、畿内を構成する旧摂津国西部に位置する。摂津における東西両地域の歴史的性格の違いは大きなものであったと評価されている（吉村・森岡 1992, 森岡ほか 1996）が、今回の調査によっても、搬入土器の少なさ、副葬されない石釧の存在、破鏡の風習の残存という3点が確認された。このことは畿内中枢の一角を占める東摂津地域の諸遺跡との質的な差であると評価できよう。

参考文献

- あ 赤塚次郎 1995「人物禽獣文鏡」『考古学フォーラム』6
 今井 亮 1992「小形倭鏡の再検討Ⅱ—中四国地方古墳出土内行花文鏡—」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会
 今尾文昭 1993「桜井茶白山古墳出土大型仿製内行花文鏡の破鏡の可能性について」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第17冊 奈良県立橿原考古学研究所
 岡田 務 1991『尼崎市中ノ田遺跡Ⅲ』 尼崎市教育委員会
 岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号 史学研究会
 岡村秀典 1989「三角縁神獸鏡と伝世鏡」白石太一郎編『古代を考える 古墳』 吉川弘文館
 岡村秀典 1990「卑弥呼の鏡」都出比呂志・山本三郎編『邪馬台国の時代』 木耳社
 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館
 小山田宏一 1992「破砕鏡と鏡背重視の鏡」『弥生文化博物館研究報告』第1集 弥生文化博物館
- か 鐘方正樹 1987「碧玉製腕飾類の研究視点」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』
 蒲原宏行 1987「石釧研究序説」『古墳文化の新視覚』雄山閣出版
 蒲原宏行 1991「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣出版
 川西宏幸 1989「古墳時代前史考—原畿内政権の提唱—」『古文化談叢』第21集 九州古文化研究会
 國下多美樹 1986「芝ヶ本遺跡出土の碧玉製石釧について」『京都考古』第43号 京都考古刊行会
 国立歴史民俗博物館 1994『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
 小林行雄 1961「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『古墳時代の研究』 青木書店
- さ 篠原祐一 1990「石製模造品観察の一視点——栃木県出土の有孔円板の観察をとおして——」
 『古代』第89号 早稲田大学考古学会
 下條信行 1983「北九州」森 浩一編『三世紀の考古学』下巻 学生社
 小学館 1995『色の手帖』
 関 孝一 1967「東信濃鳥羽山洞穴における古代祭祀遺跡」『考古学雑誌』第52巻第3号 日本考古学会
- た 高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号 日本考古学会
 高倉洋彰 1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 九州歴史資料館
 高倉洋彰 1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第3号 日本考古学会
 高倉洋彰 1990「弥生時代の遺跡と漢鏡」『日本金属器出現期の研究』 学生社
 高橋 徹 1986「鏡」金関 恕・佐原 真編『弥生時代の研究』第6巻 道具と技術Ⅱ 雄山閣出版
 高橋 徹 1992「鏡」『菅生台地と周辺の遺跡 XV 大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告』竹田市教育委員会
 都出比呂志 1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会
 寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館
- な 中上京子 1977「石製腕飾類出土地とその集成—特にその分布からの提案—」関西大学文学部考古学研究室編『河内長野 大師山』
 西川寿勝 1995「弥生時代終末の対外交流—破鏡の終焉をめぐる—」『研究紀要』3 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- は 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
 富加見泰彦・土井和幸 1993『陶邑・大庭寺遺跡 III』 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
 福井英治ほか 1982『田能遺跡発掘調査報告書』 尼崎市教育委員会
 藤丸詔八郎 1991「弥生後期後半～古墳初期の鏡—とくに破鏡を中心に—」『高津尾遺跡 4 (16区の調査)—九州縦貫自動車道関係文化財調査報告25—』 財団法人北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室
 藤丸詔八郎 1993「破鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心に—」『古文化談叢』第30集 (上) 九州古文化研究会

- 北條芳隆 1994 「四国地域の前期古墳と鏡（発表要旨）」『第36回埋蔵文化財研究集会 倭人と鏡
その2 — 3・4世紀の鏡と墳墓— 発表要旨資料』埋蔵文化財研究会
- ま 正岡睦夫 1979 「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号 古代学研究会
松井和幸 1987 「日本古代の鉄製鋤先、鋤先について」『考古学雑誌』第72巻第3号
日本考古学会
森岡秀人 1989 「銅鏡」『季刊考古学』第27号 雄山閣出版
森岡秀人 1994 「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『第35回埋蔵文化財研究集会 倭人と鏡—日本出
土中国鏡の諸問題—別冊発表要旨、追加資料』埋蔵文化財研究会
森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一 1996 「庄内式併行土器の様相をめぐる撰津地域の動向」『庄内式
土器研究』XII 庄内式土器研究会
森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号 史学研究会
森田克行 1990 「各地域の様式編年 撰津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編II 木耳社
- や 山城考古学研究会 1983 「丹波の古墳I—由良川流域の古墳—」
吉村 健・森岡秀人 1992 「撰津」近藤義郎編『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
米田敏幸 1991 「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器
雄山閣出版
- わ 和田晴吾 1986 「金属器の生産と流通」『岩波講座 日本考古学』3 生産と流通 岩波書店

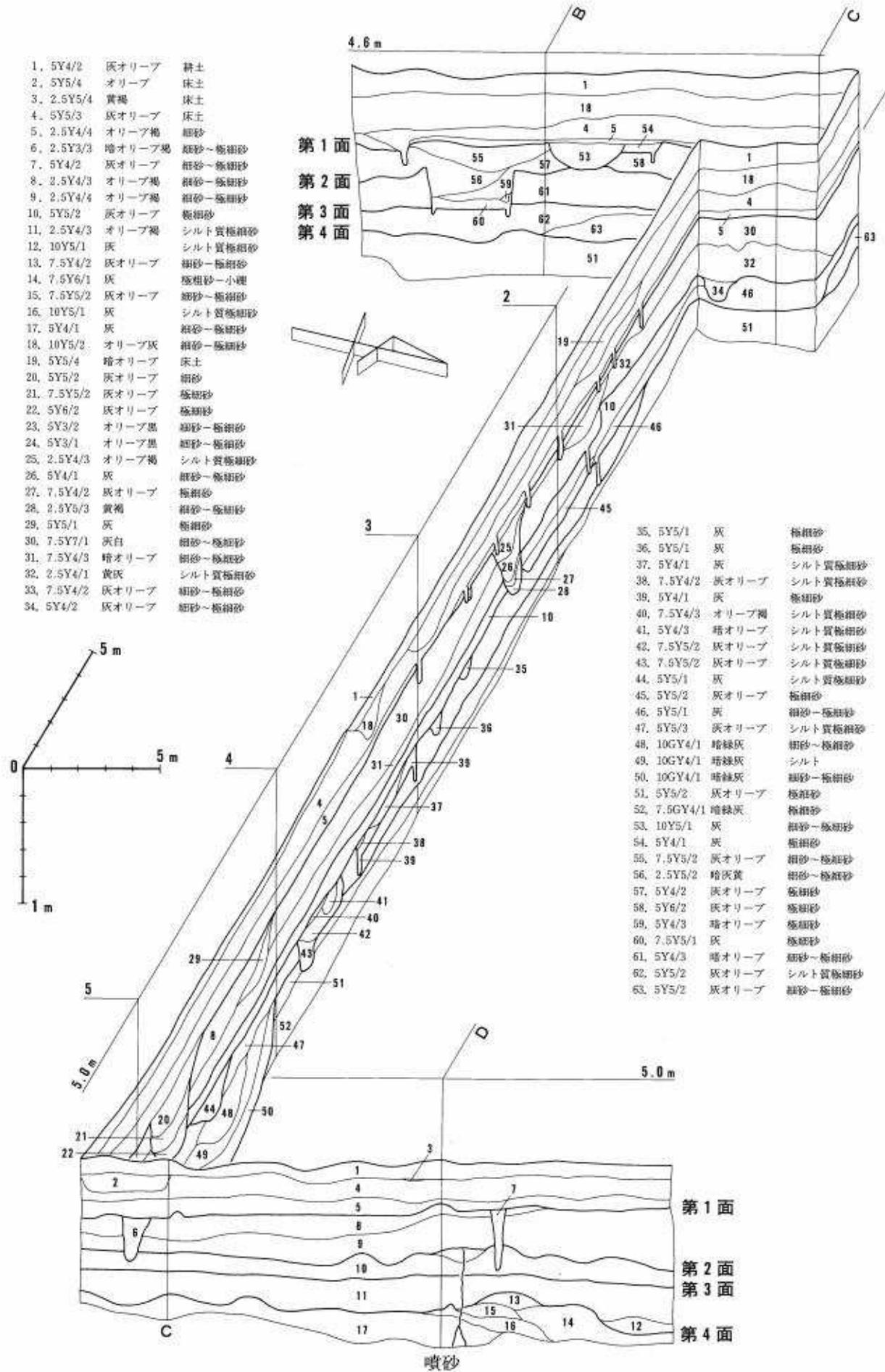
なお、第2章・第4章第4節については、その末尾に参考文献を記している。

報告書抄録

ふりがな	たのうたかだ いせき							
書名	田能高田遺跡							
副書名	園田競馬場既舎改築事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第166冊							
編著者名	甲斐昭光・織 英記・山田清朝							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 Tel. 078-531-7011							
発行年月日	西暦1997(平成9)年 3月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
たのうたかだ 田能高田	ひょうごけんあまがさきし 兵庫県尼崎市 たのう 田能2丁目 3-1~3	28202	910040	135度 26分 44秒	34度 45分 42秒	第1次確認調査 19910606	99 m ²	園田競馬場 既舎改築事 業に伴う 事前調査
			910150			19910614 19910621		
			920185			第2次確認調査 19920305 全面調査 19920928 } 19921209		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田能高田	集落跡	弥生後期 ↓ 庄内式期	竪穴住居2棟・土坑 14基・溝11条・旧河 道1条	土器・石器		顔料とへらによる 施紋土器出土 吉備等の搬入土器 平面五角形の 竪穴住居を検出		
		古墳前期	竪穴住居4棟・掘立 柱建物1棟・柵1列 土坑22基・溝2条・ 噴砂1	土師器・石器 石製品		石銅片の出土 古墳前期・近世の 噴砂を検出		
		古墳中期	竪穴住居2棟・土坑 7基・井戸1基・溝 8条・土器群7箇所	土師器・須恵器 石器・石製品・ 金属器・土錘		古墳時代仿製鏡 (破鏡)の出土 有孔円板の出土		

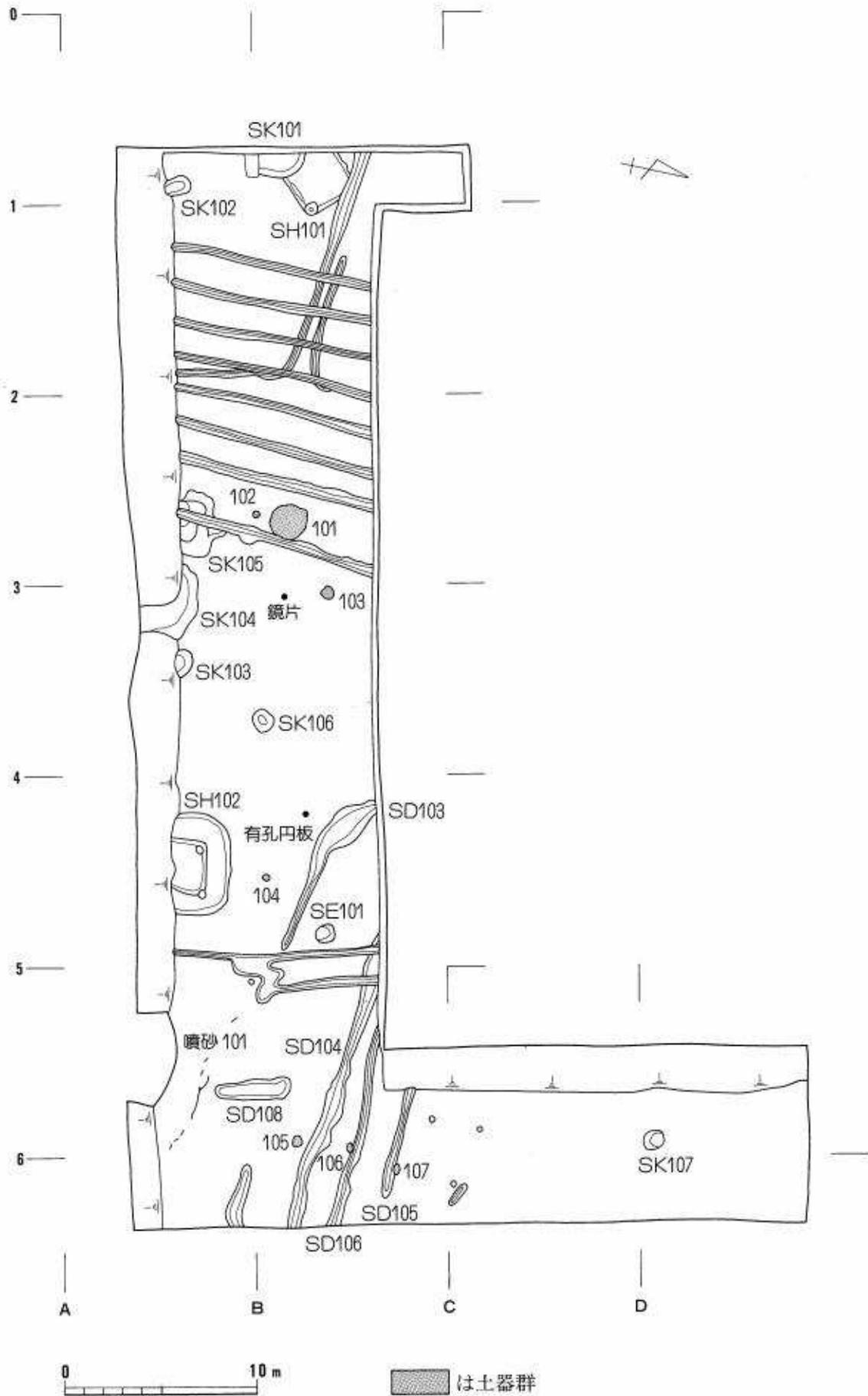
圖 版

図版1 土層堆積状況図



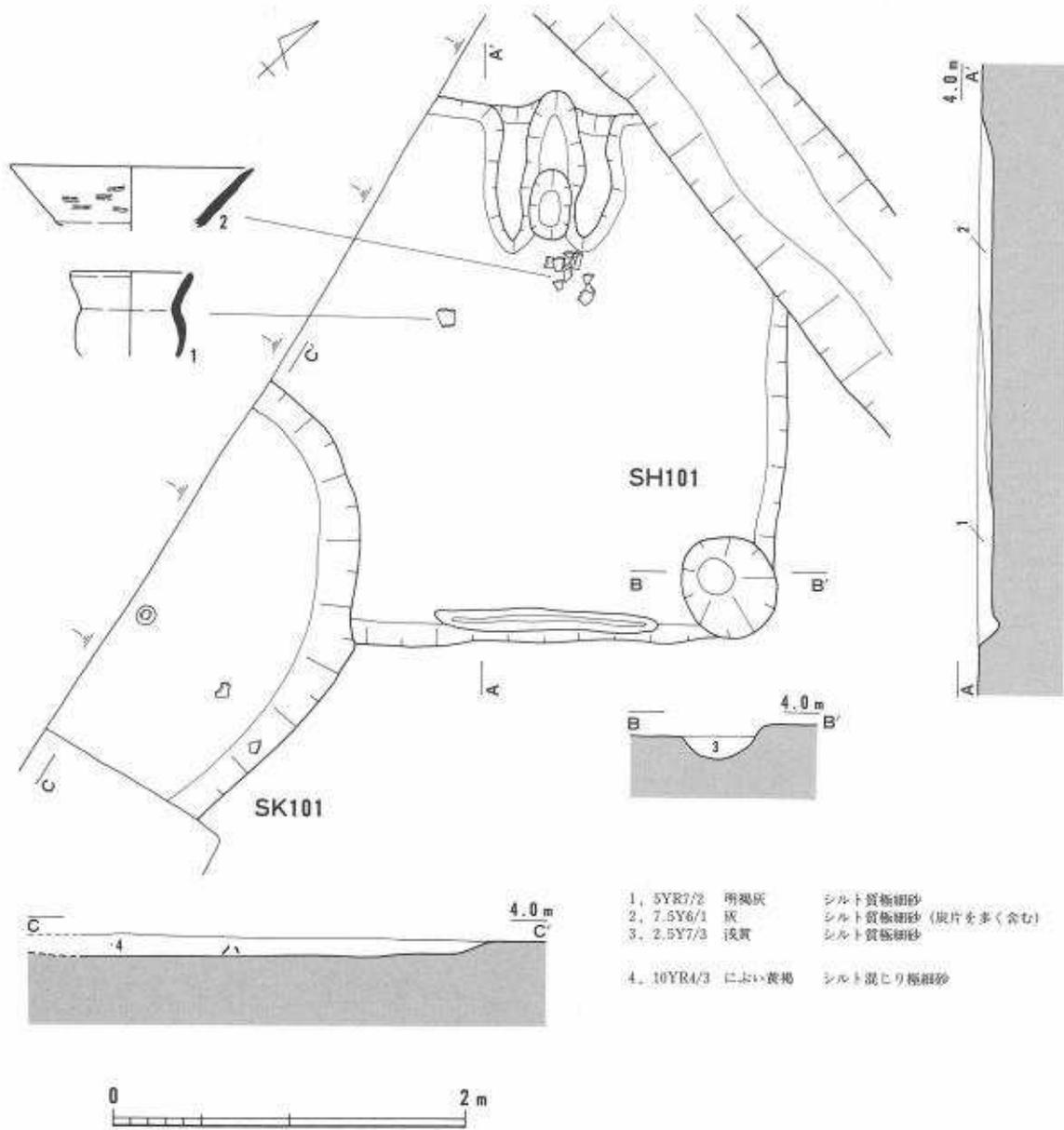
図版 2 第1面の遺構(1)

全体図



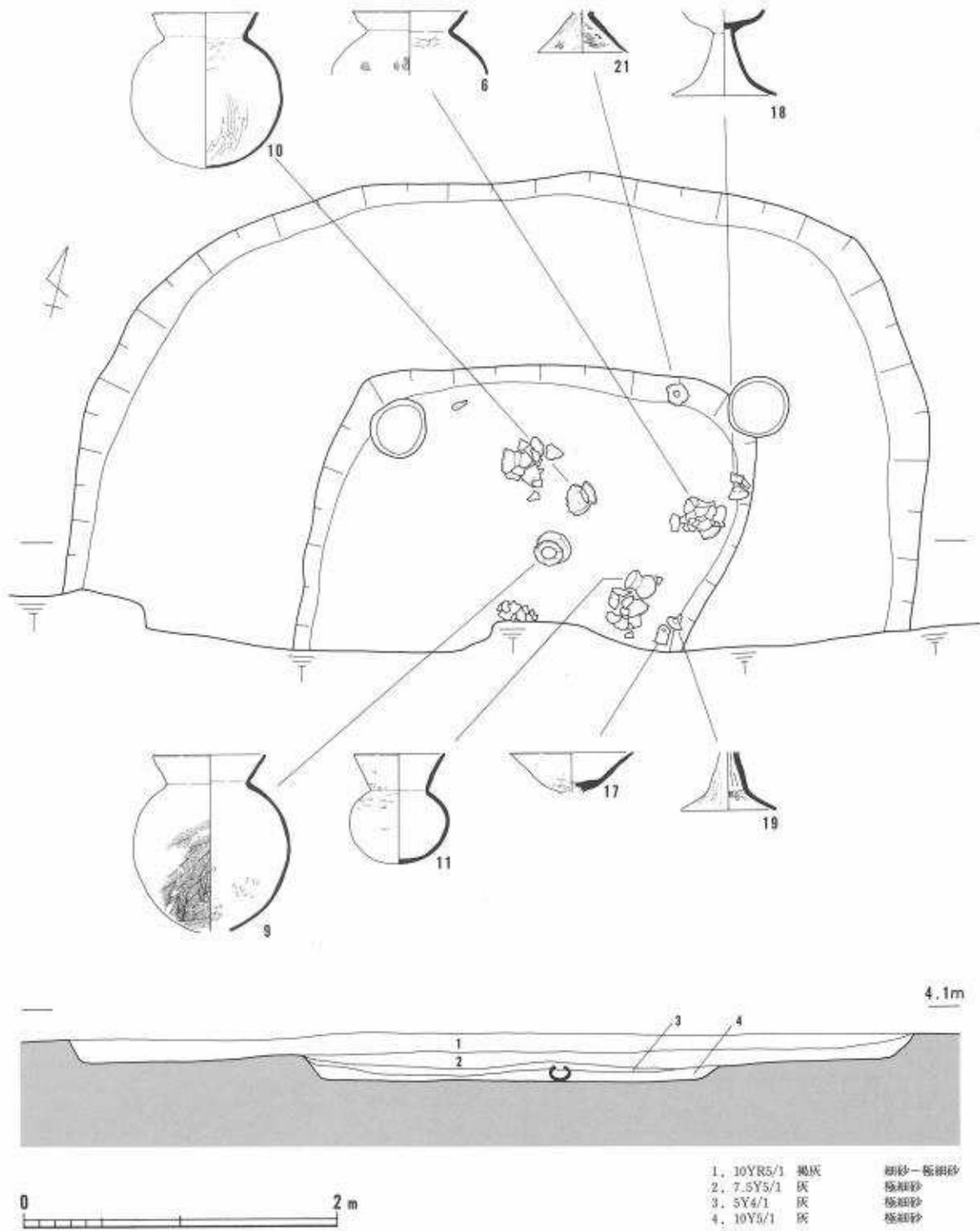
図版3 第1面の遺構(2)

SH101・SK101

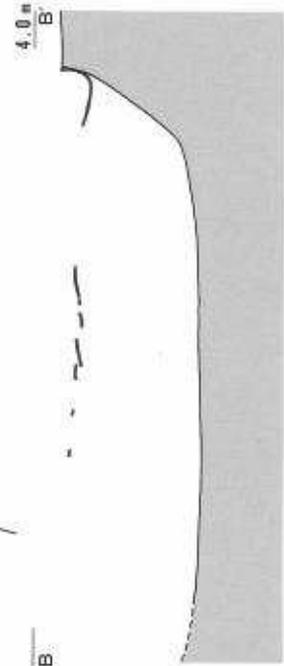
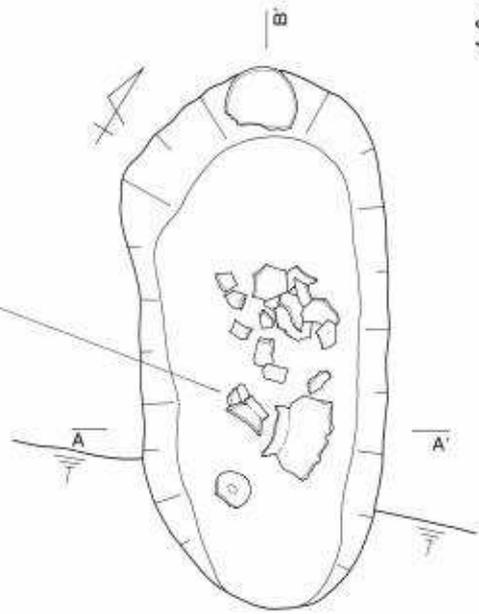
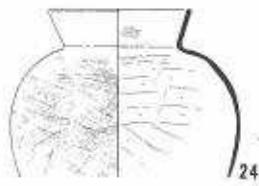


図版4 第1面の遺構(3)

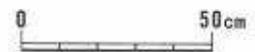
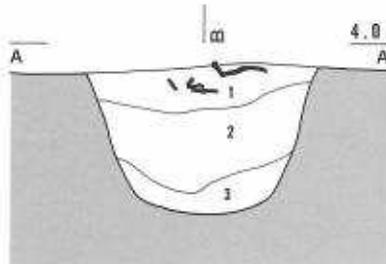
SH102



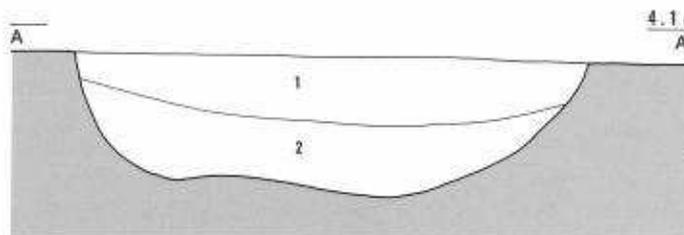
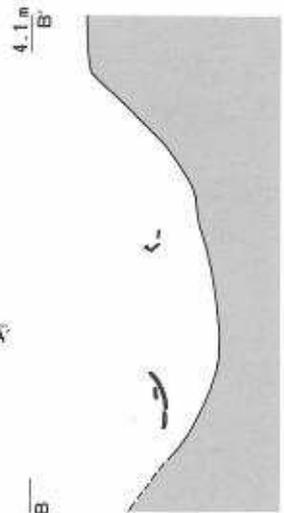
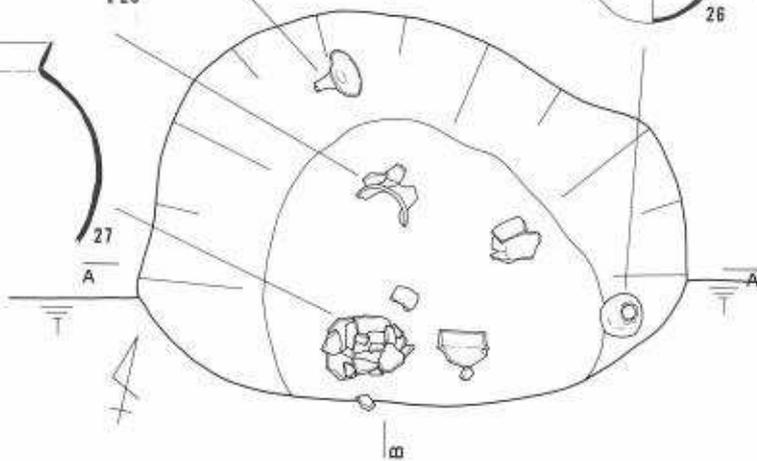
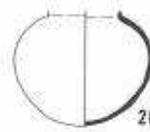
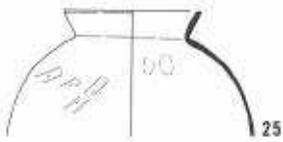
SK102



- 1. 7.5Y5/1 灰 粗砂～極細砂
- 2. 5Y4/2 灰オリーブ 細砂
- 3. 5Y5/1 灰オリーブ 粗砂～極細砂



SK103

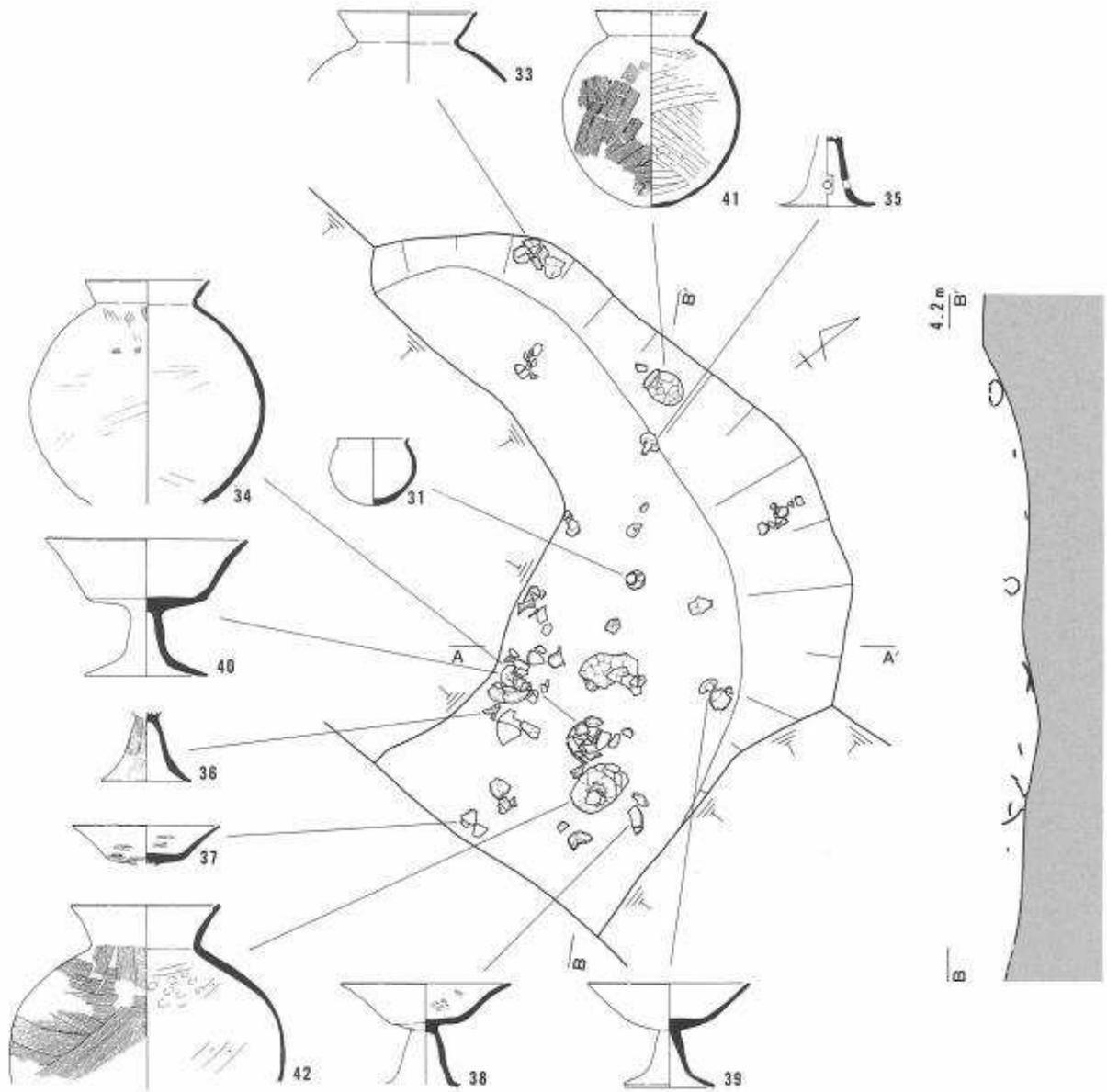


- 1. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～極細砂
- 2. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～極細砂

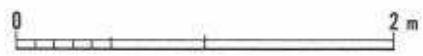
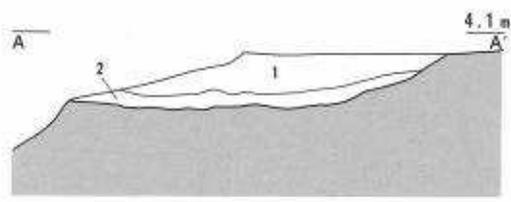


図版 6 第1面の遺構 (5)

SK104

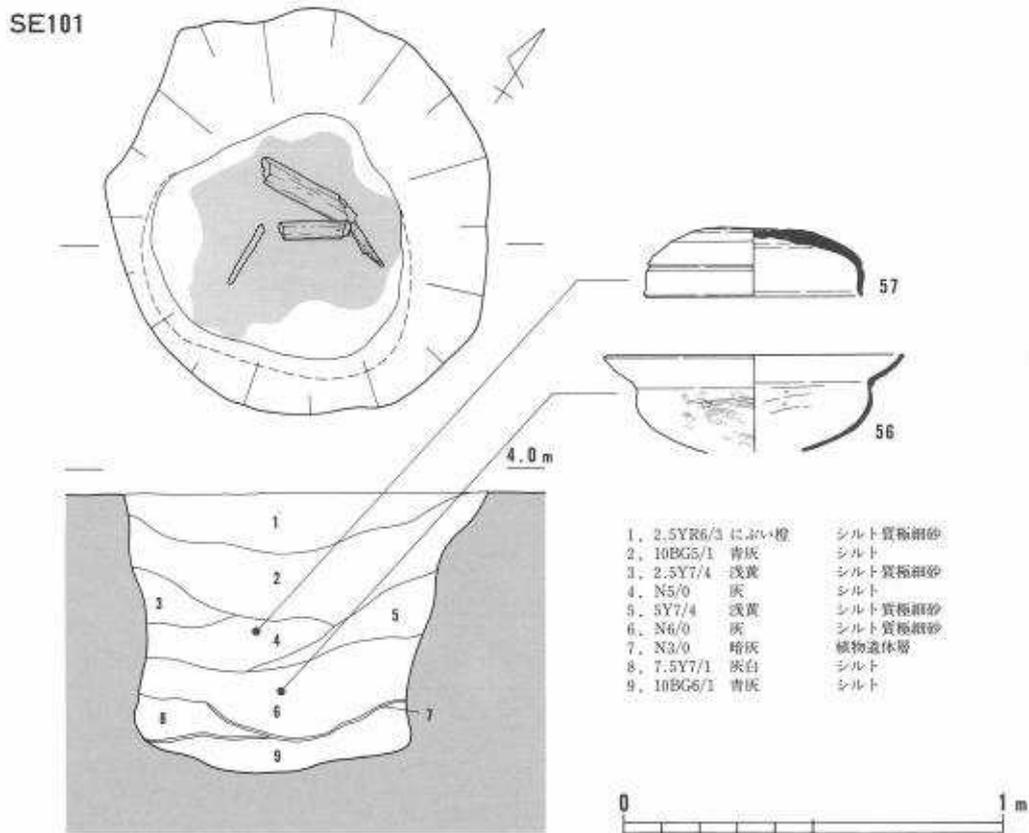
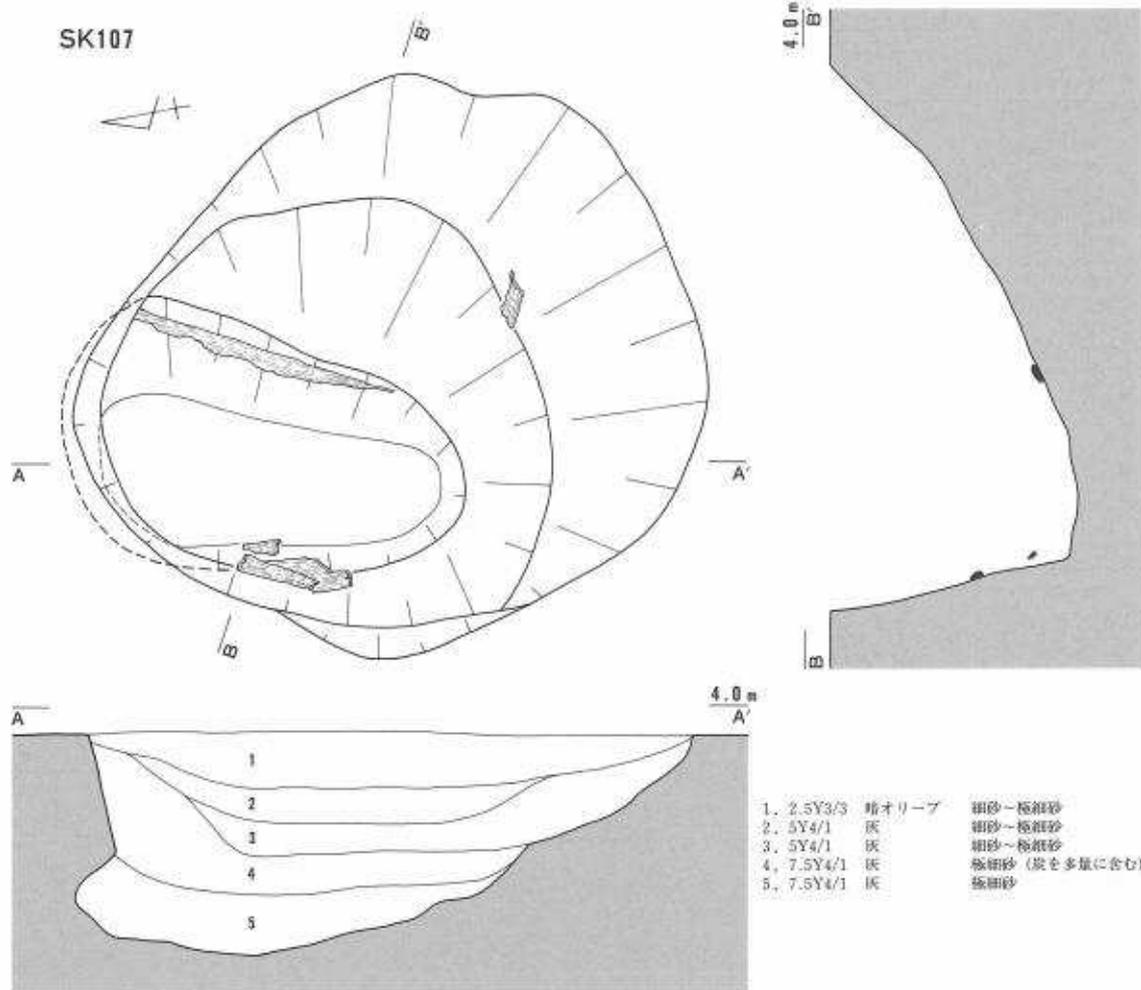


- 1. 10YR4/3 に近い黄褐色 細砂-極細砂
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂-極細砂



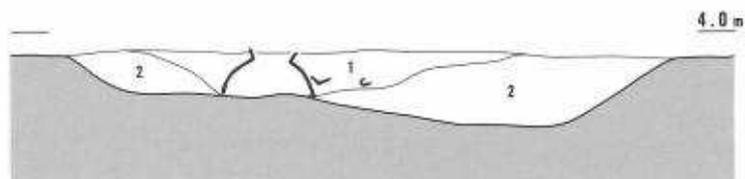
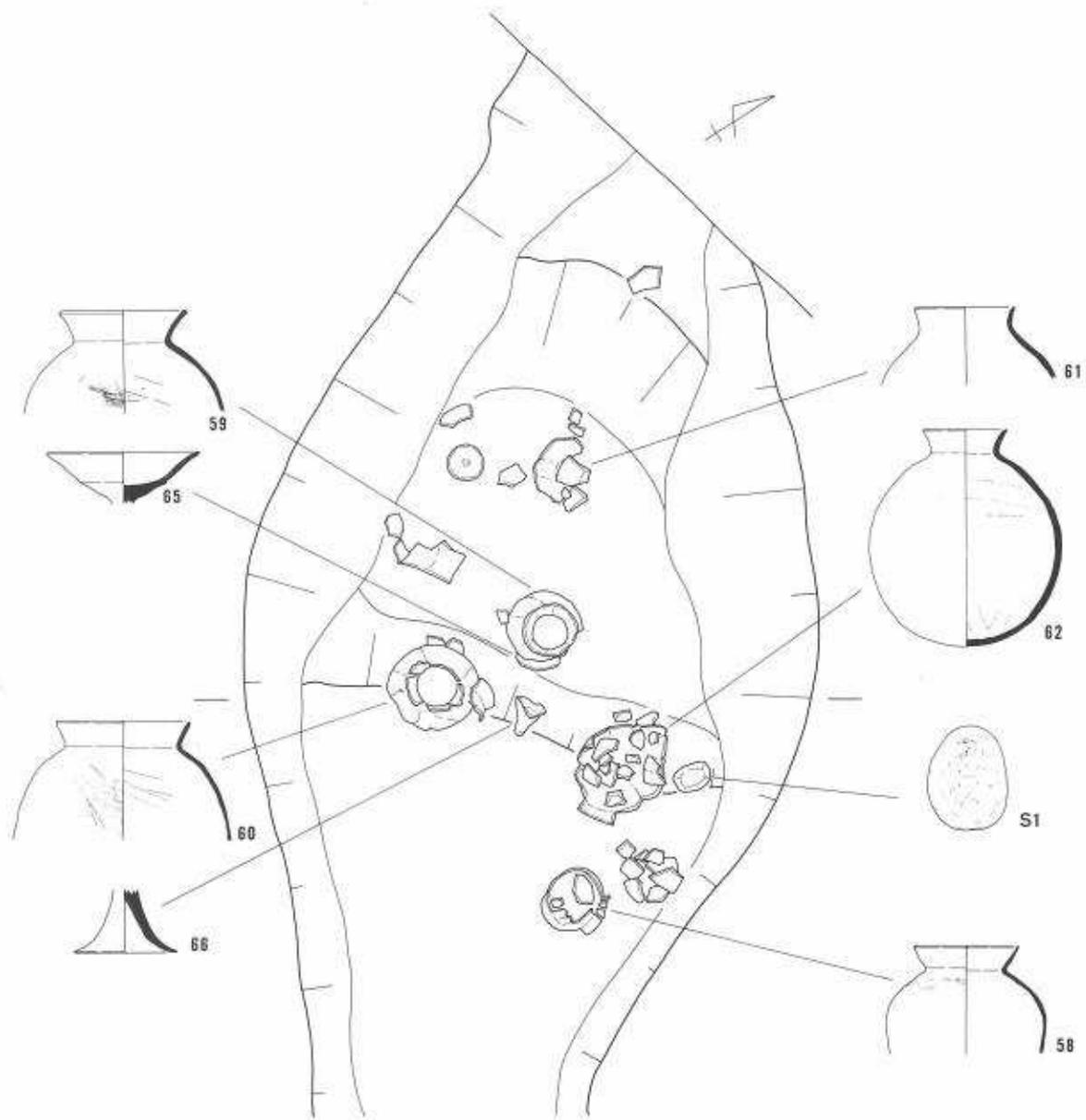
図版7 第1面の遺構(6)

SK107・SE101



図版 8 第 1 面の遺構 (7)

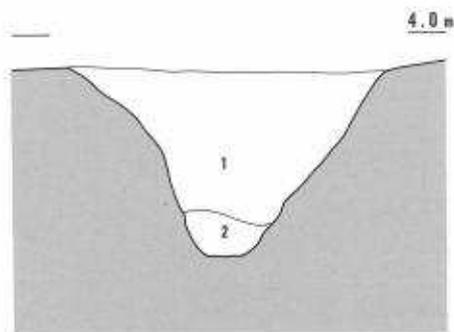
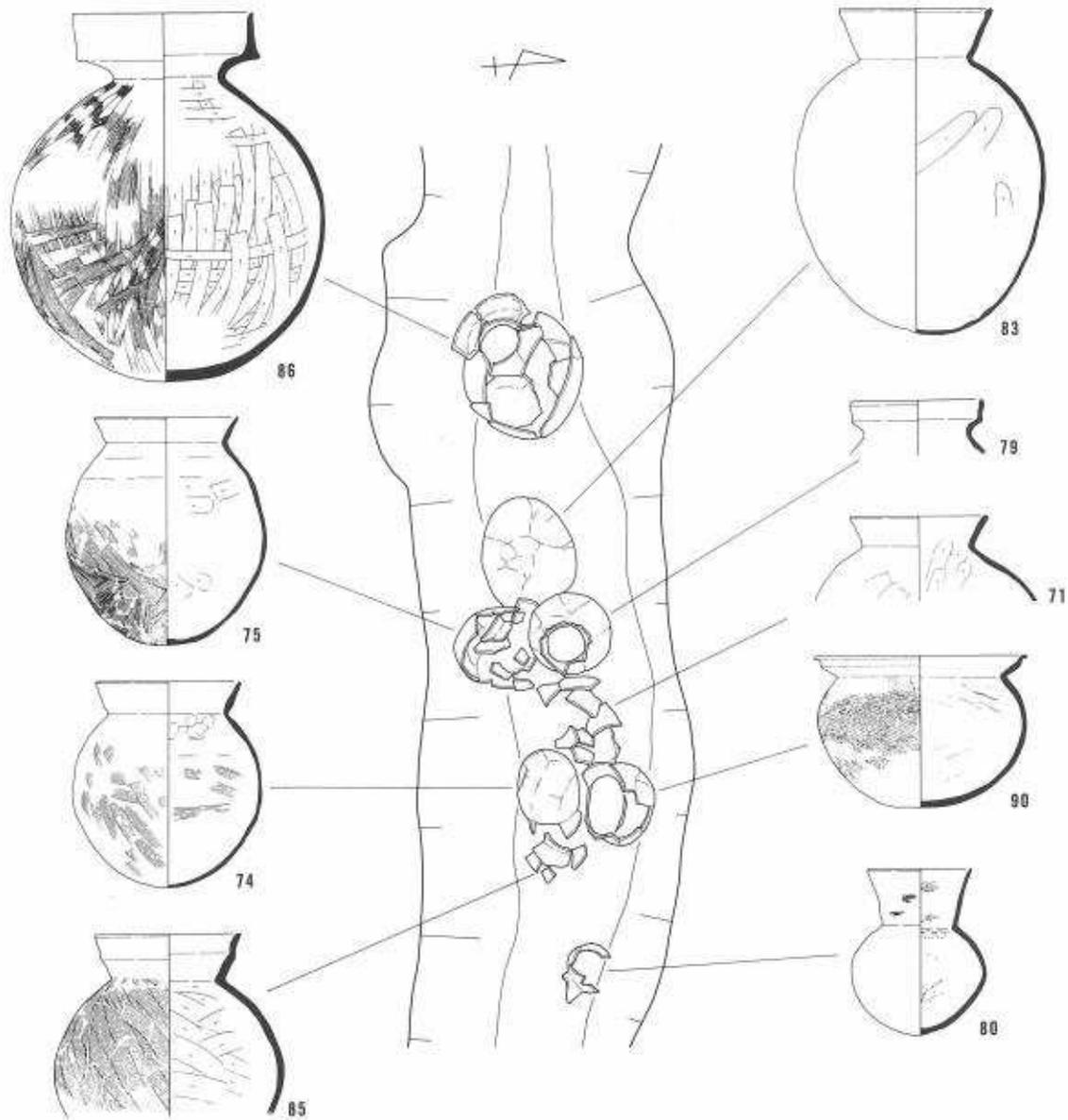
SD103



1. 5Y4/1 灰 細砂-粘細砂
 2. 7.5Y4/1 灰 細砂-粘細砂



SD104

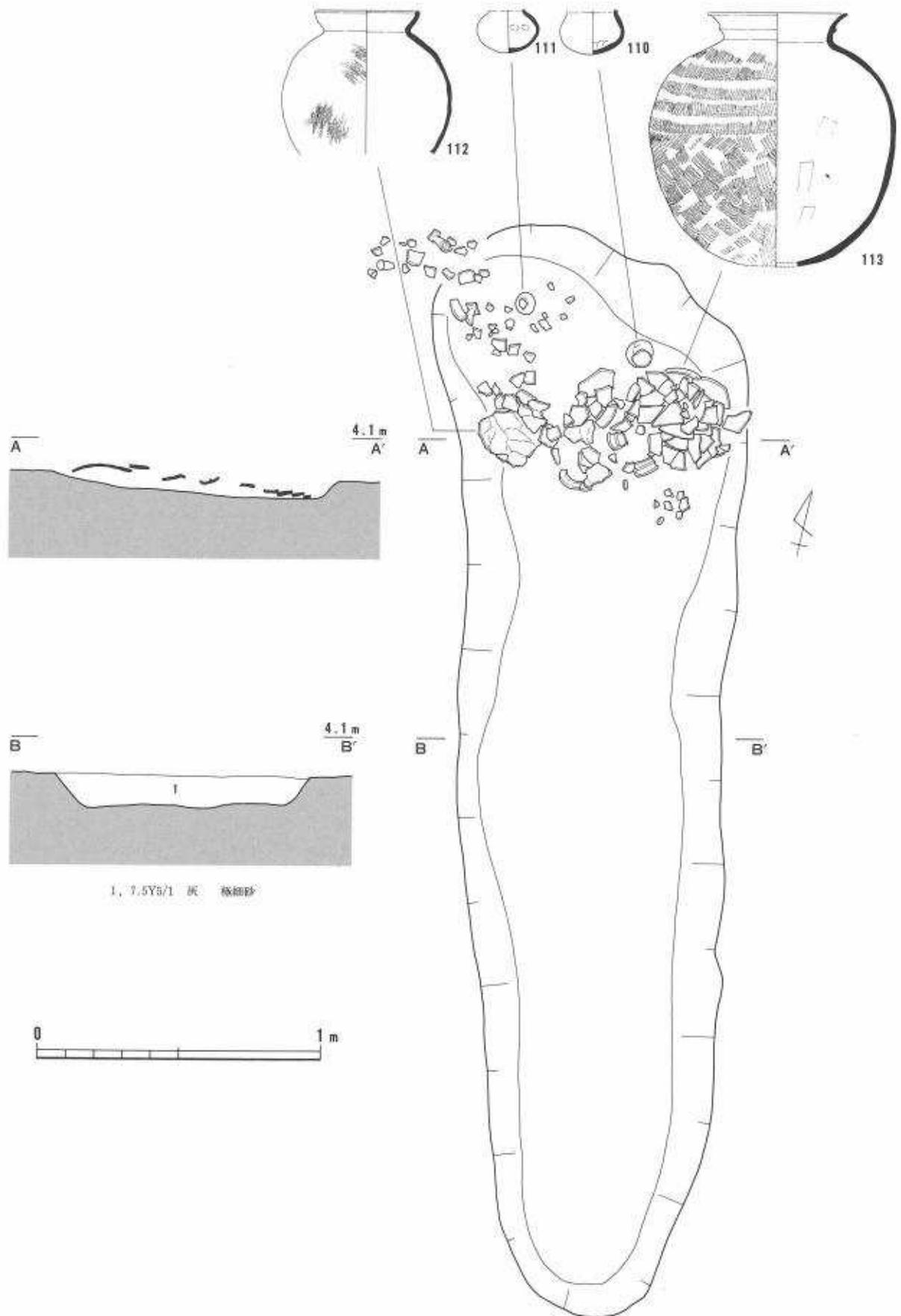


- 1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極細砂
- 2. 5Y5/1 灰 細砂-極細砂



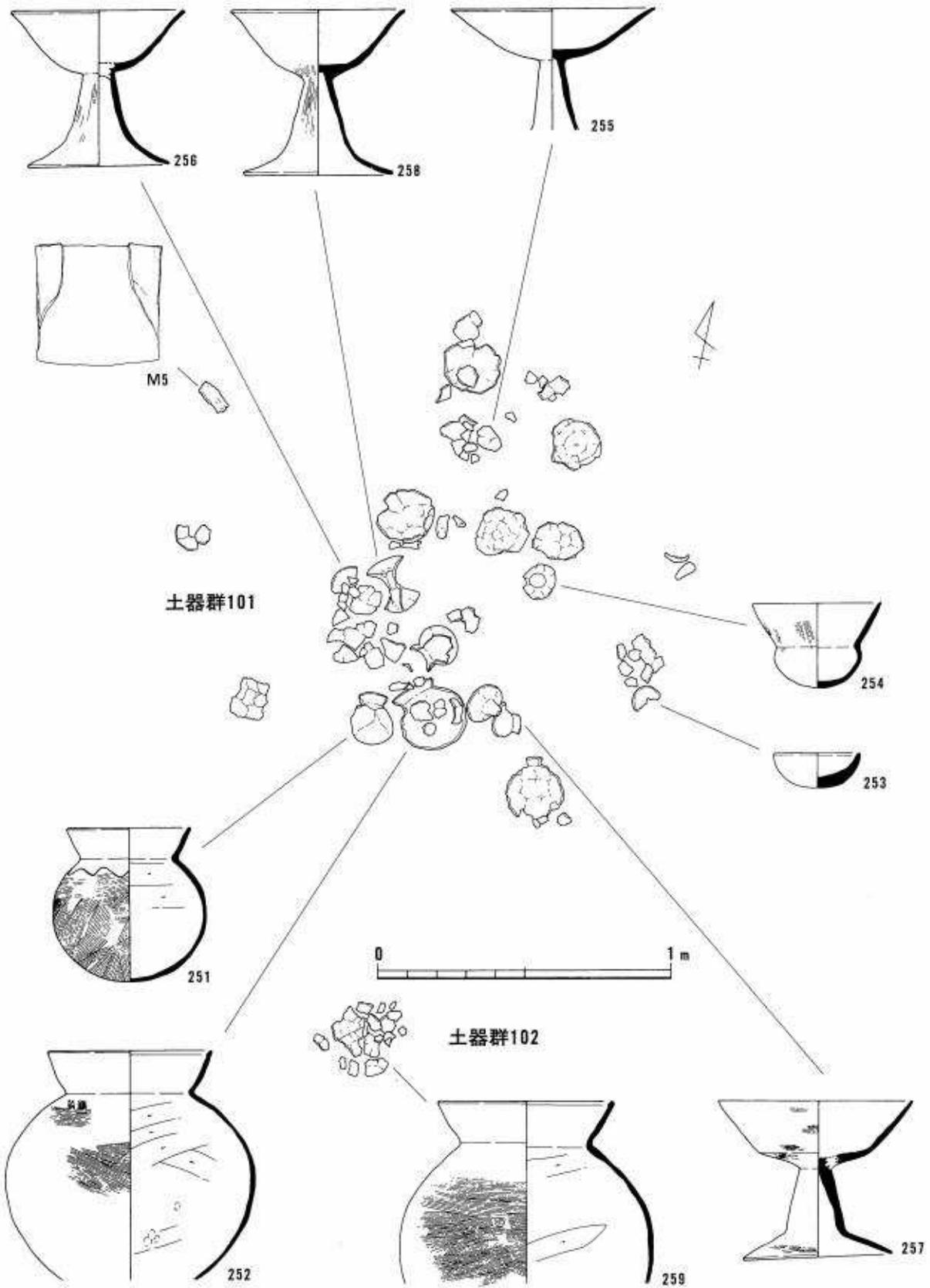
図版10 第1面の遺構(9)

SD108



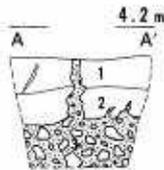
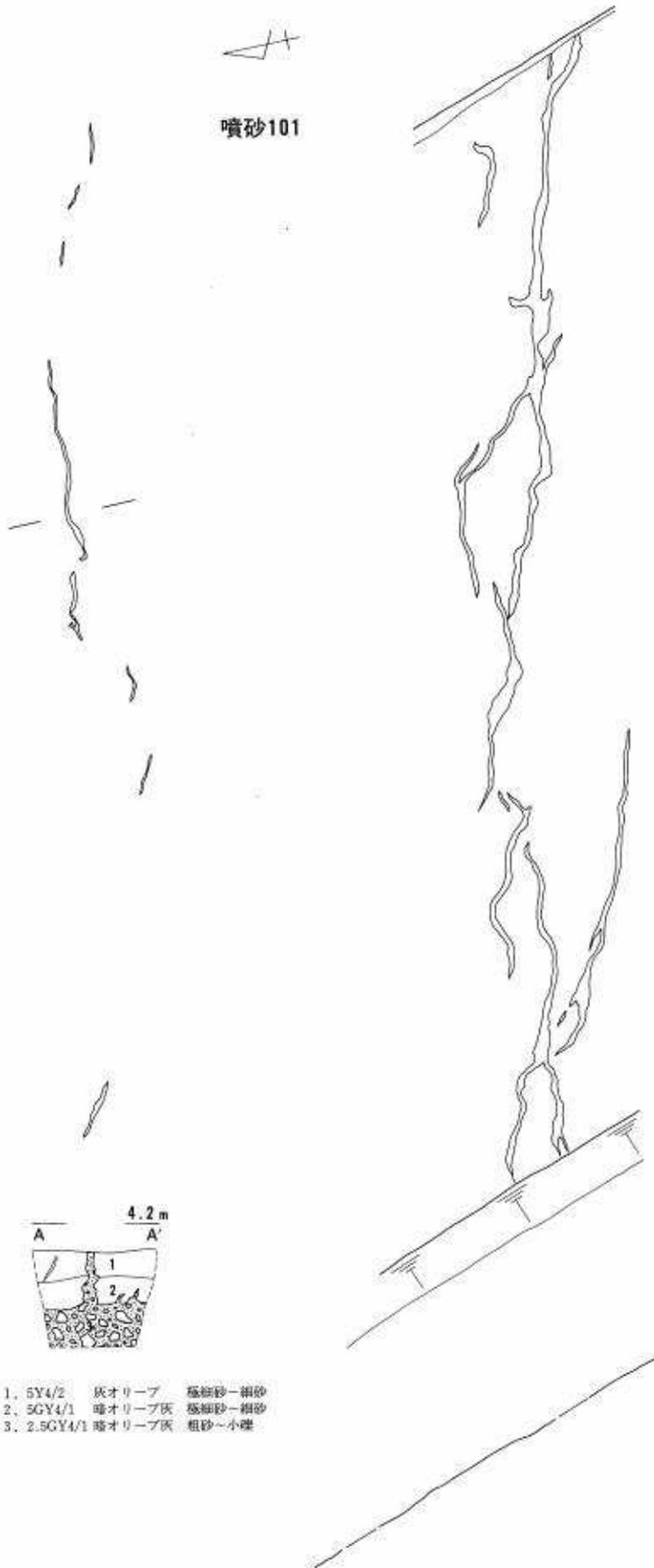
図版11 第1面の遺構(10)

土器群101・土器群102

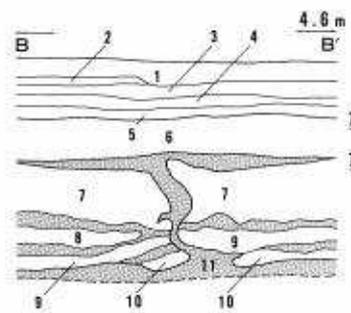


図版12 第1面の遺構(11)

噴砂101・噴砂201

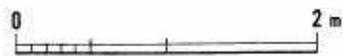


- 1. 5Y4/2 灰オリーブ 極細砂-細砂
- 2. 5GY4/1 暗オリーブ灰 極細砂-細砂
- 3. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 粗砂-小礫



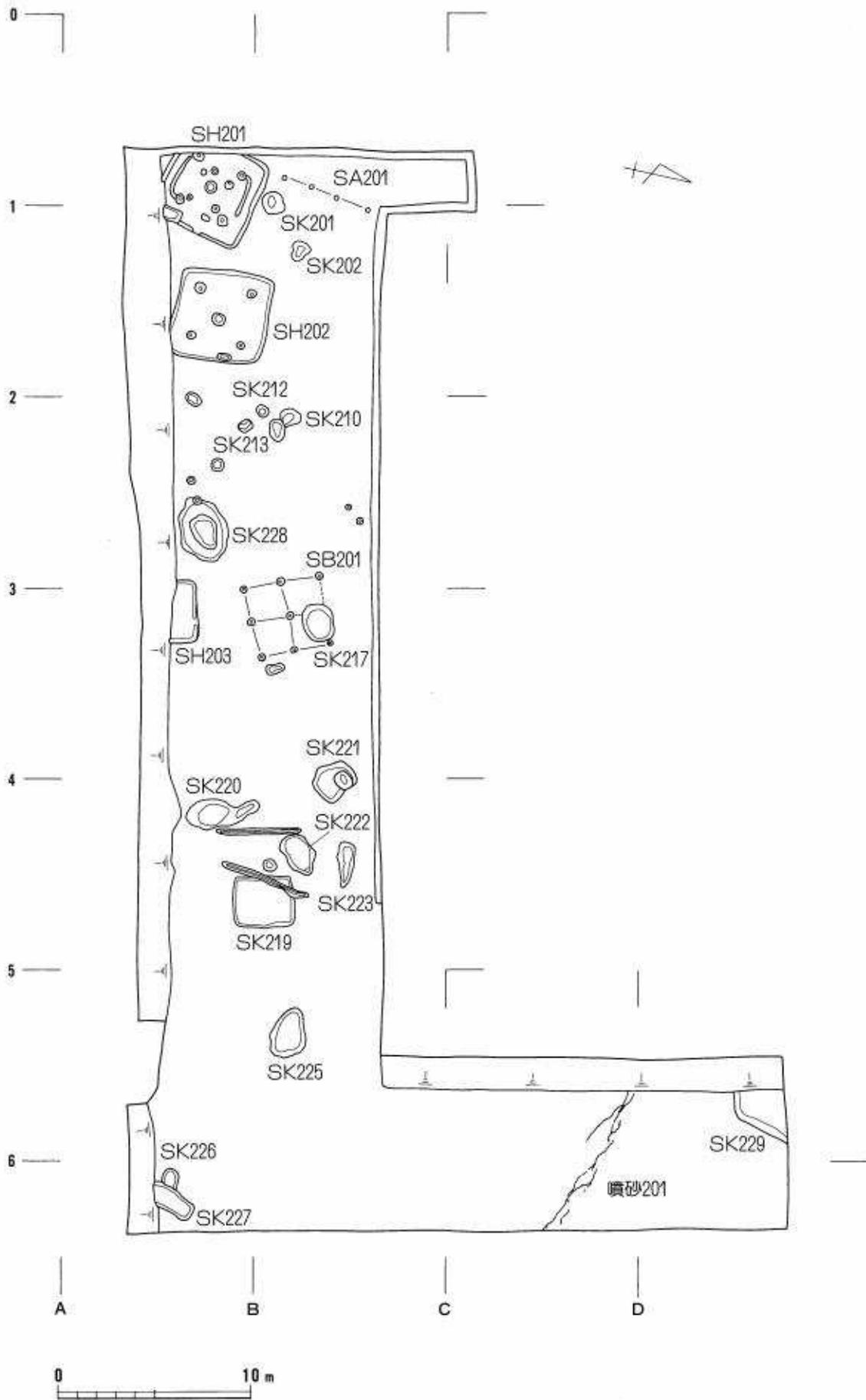
第1面
第2面

- 1. 黄土
- 2. 7.5Y5/3 灰オリーブ 極細砂-細砂
- 3. 7.5Y4/3 暗オリーブ 極細砂-細砂
- 4. 5Y4/3 暗オリーブ 極細砂-細砂
- 5. 5Y4/2 灰オリーブ 極細砂-細砂
- 6. 5Y5/3 灰オリーブ 極細砂-細砂
- 7. 5Y4/3 灰オリーブ シルト質細砂
- 8. 5Y4/1 灰 シルト質細砂
- 9. 7.5Y4/1 灰 シルト質細砂-極細砂
- 10. 5GY4/1 暗オリーブ灰 細砂
- 11. 粗砂-中砂 (シルト、細礫-小礫混じり)



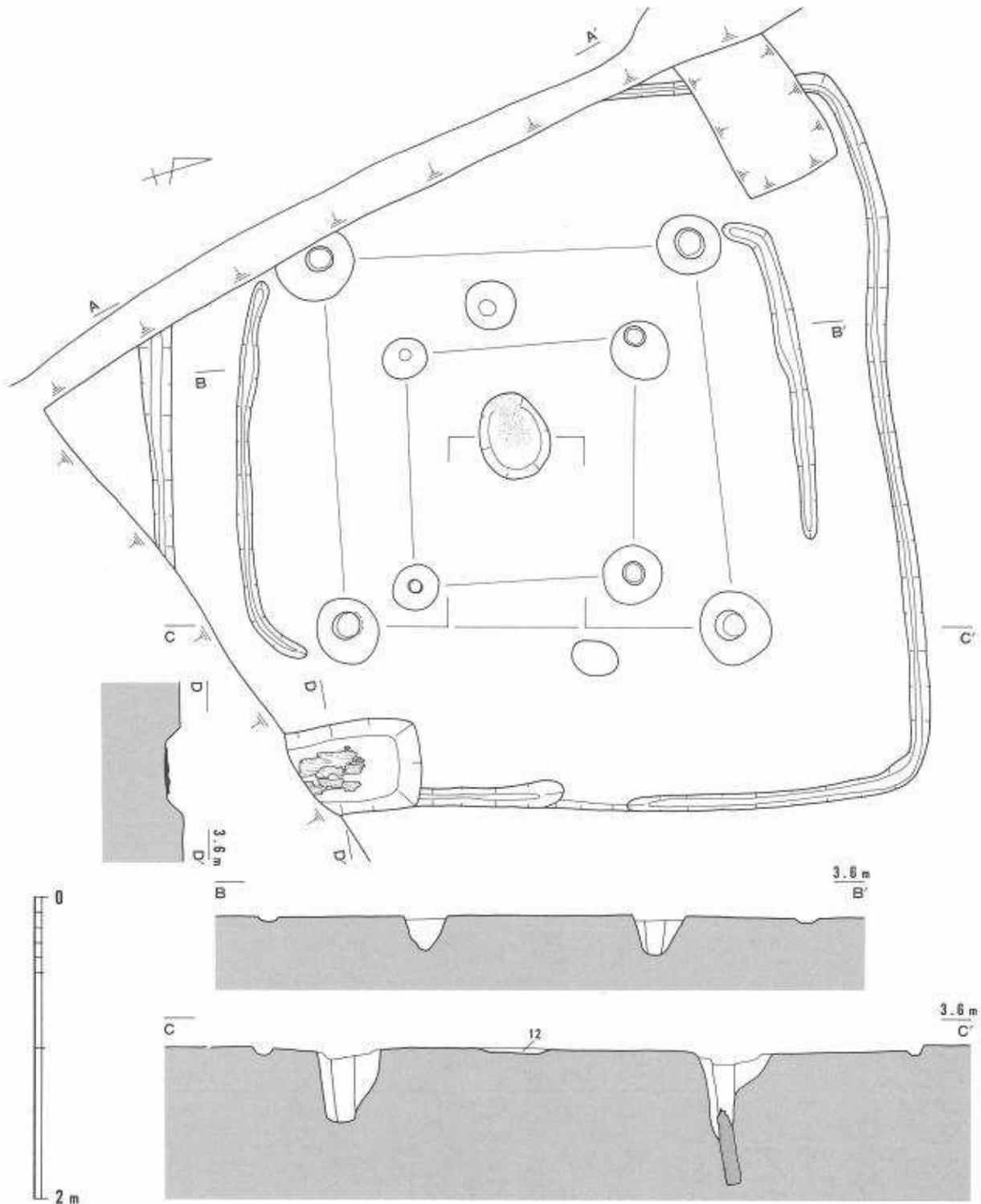
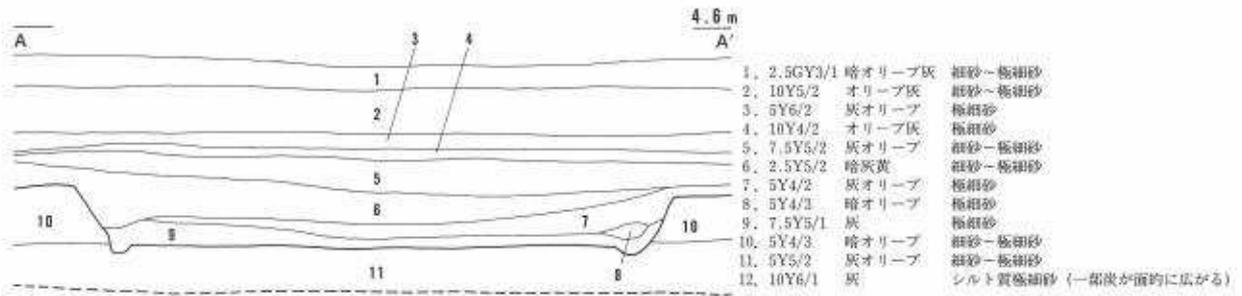
図版13 第2面の遺構(1)

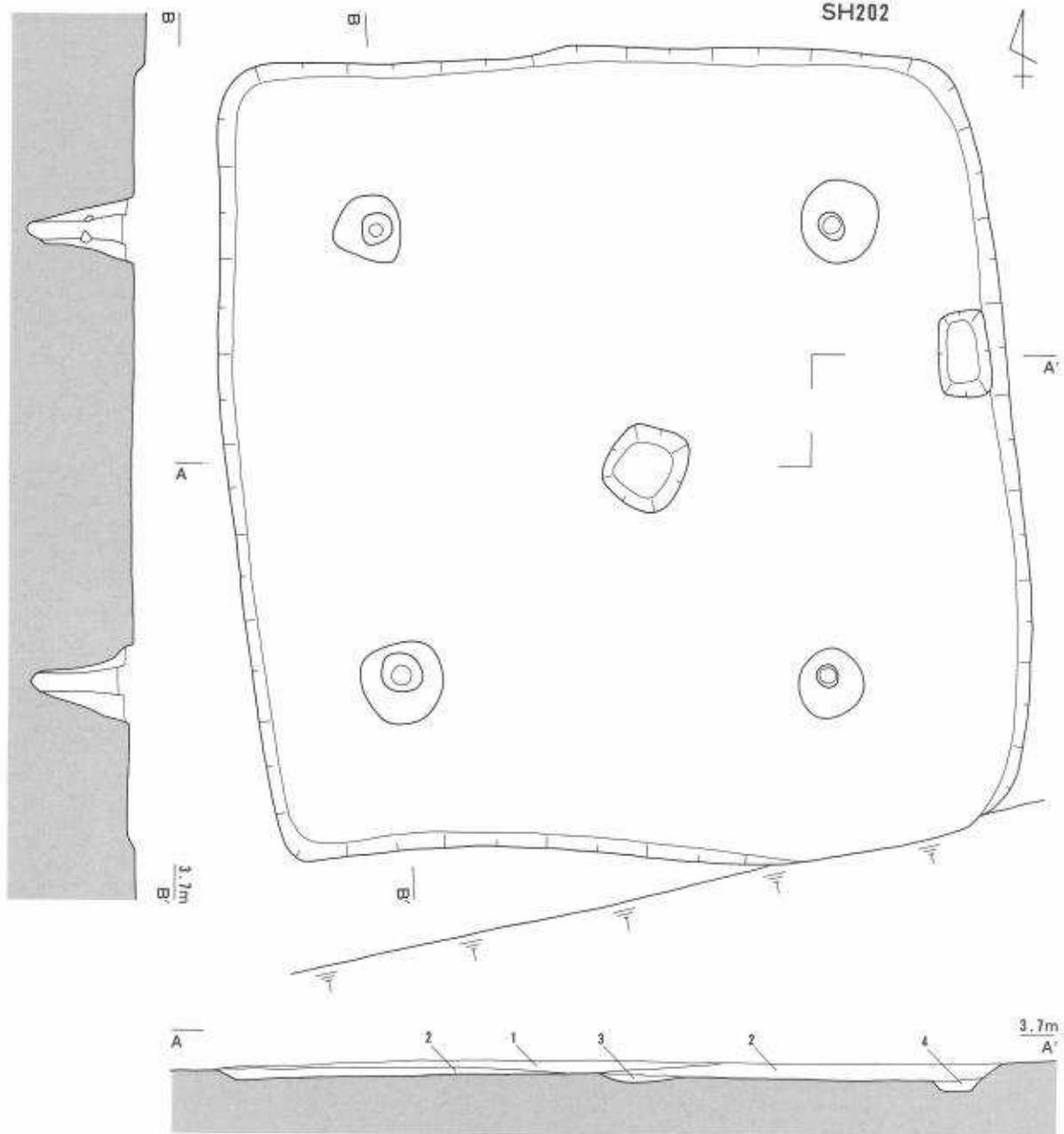
全体図



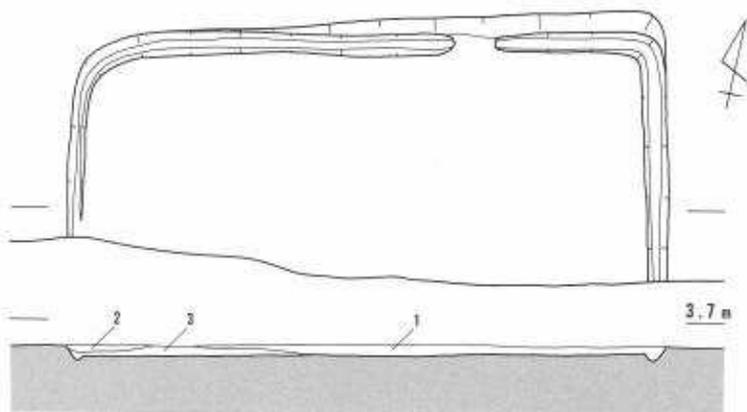
図版14 第2面の遺構(2)

SH201





SH203



- | | |
|----------------|------------------------------|
| 1. 2.5YR5/1 赤灰 | 細砂～極細砂 |
| 2. 5YR7/1 明褐色 | シルト質極細砂 |
| 3. 2.5Y4/1 黄灰 | シルト質極細砂 |
| 4. 2.5YR6/1 赤灰 | シルト混じり細砂～極細砂
(上面に破片を多く含む) |

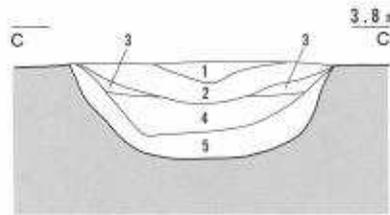
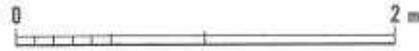
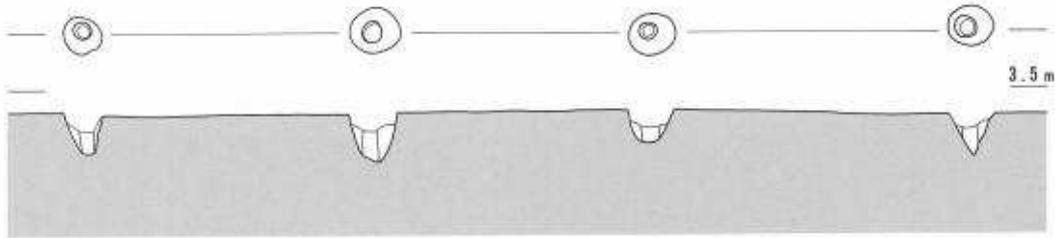
- | | |
|-------------------|---------------------------|
| 1. 5YR6/1 褐色 | シルト混じり細砂～極細砂 |
| 2. 10YR7/4 にぶい黄褐色 | シルト質極細砂 |
| 3. 2.5Y6/1 黄灰 | シルト混じり細砂
(下面に厚さ1cmの炭層) |



図版16 第2面の遺構(4)

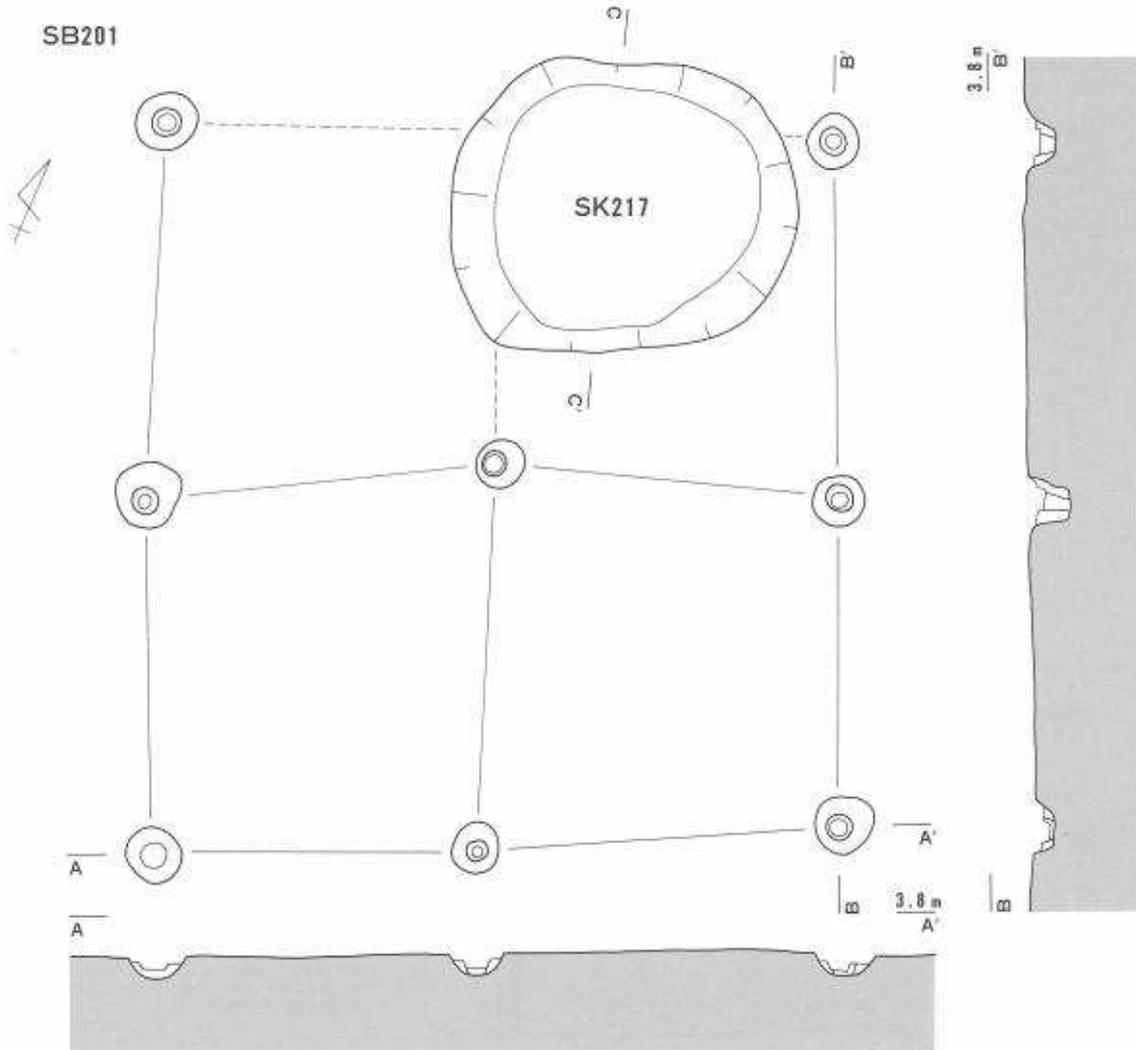
SA201・SB201・SK217

SA201



- | | | |
|------------|-------|---------|
| 1. 2.5Y3/1 | 黒褐色 | 粗砂～粘細砂 |
| 2. 2.5Y4/3 | オリーブ地 | 粗砂～粘細砂 |
| 3. 2.5Y4/4 | オリーブ地 | 粗砂～粘細砂 |
| 4. 7.5Y5/2 | 灰オリーブ | シルト質粘細砂 |
| 5. N3/0 | 暗灰 | 炭層 |

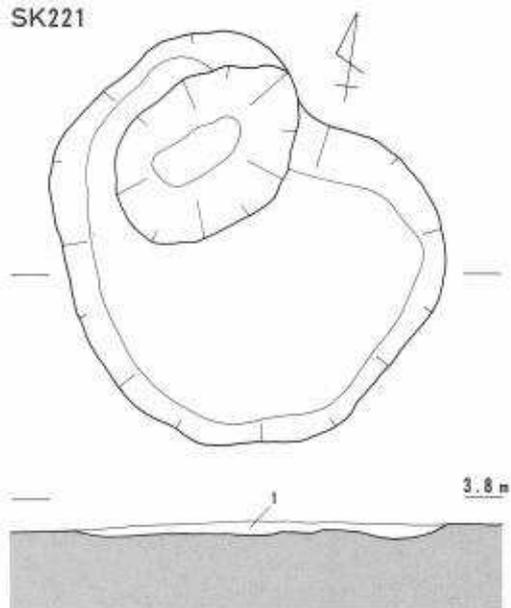
SB201



図版18 第2面の遺構(6)

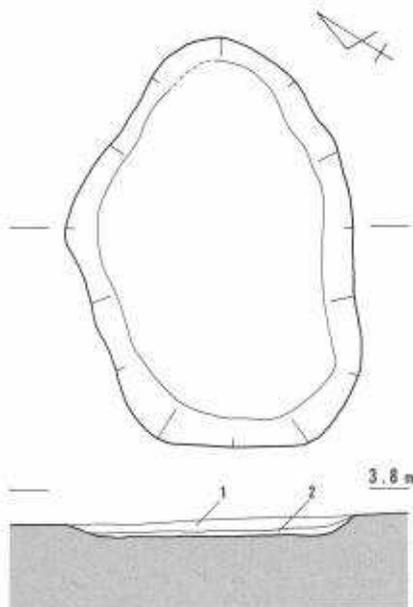
SK221・SK222・SK225・SK228

SK221



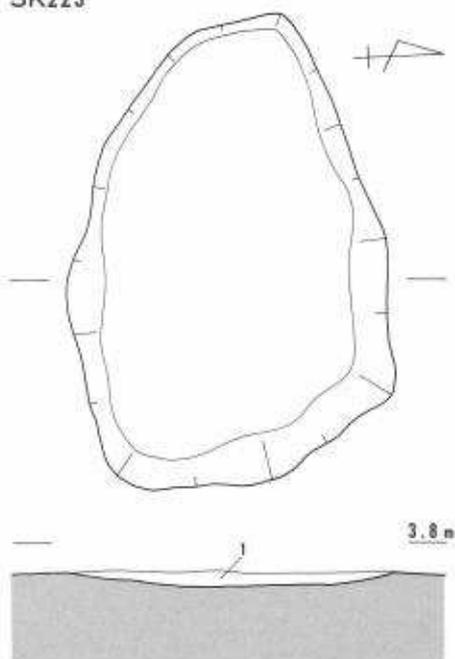
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂(炭片・視玉を含む)

SK222



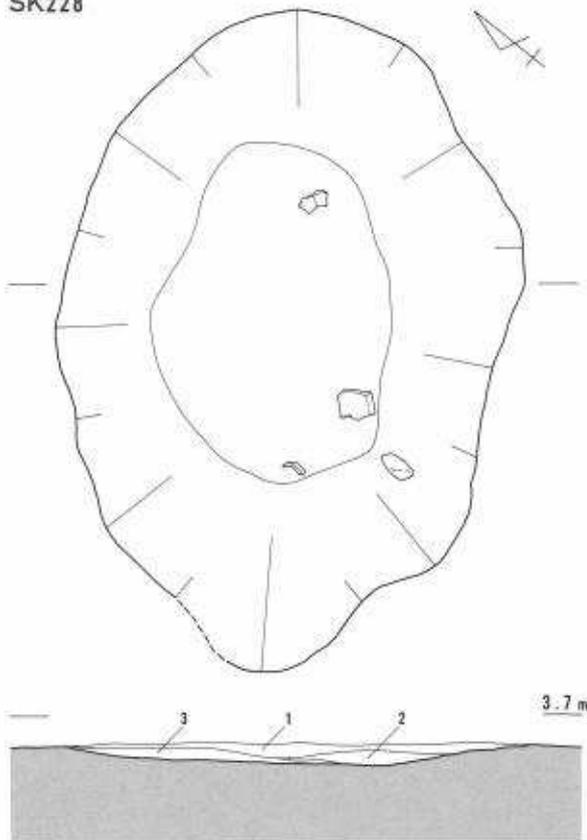
1. 5Y5/2 灰オリーブ 細砂~極細砂
2. 5Y5/3 灰オリーブ 細砂~極細砂

SK225



1. 5YR6/1 褐色 シルト混じり細砂~極細砂

SK228

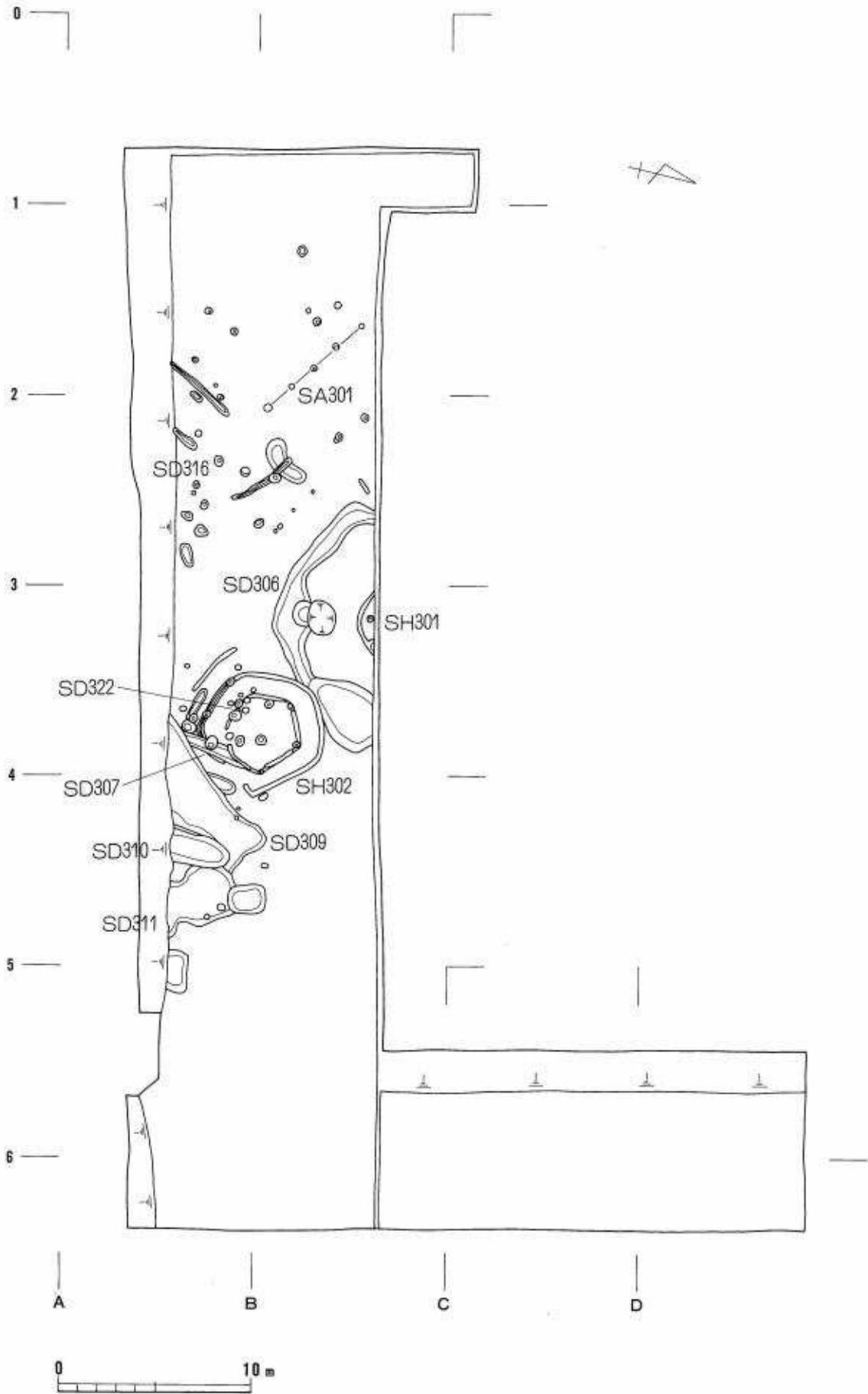


1. 7.5Y5/1 灰 シルト混じり中砂~細砂
2. N5/0 灰 粗砂
3. N6/0 灰 シルト混じり細砂~極細砂



図版19 第3面の遺構(1)

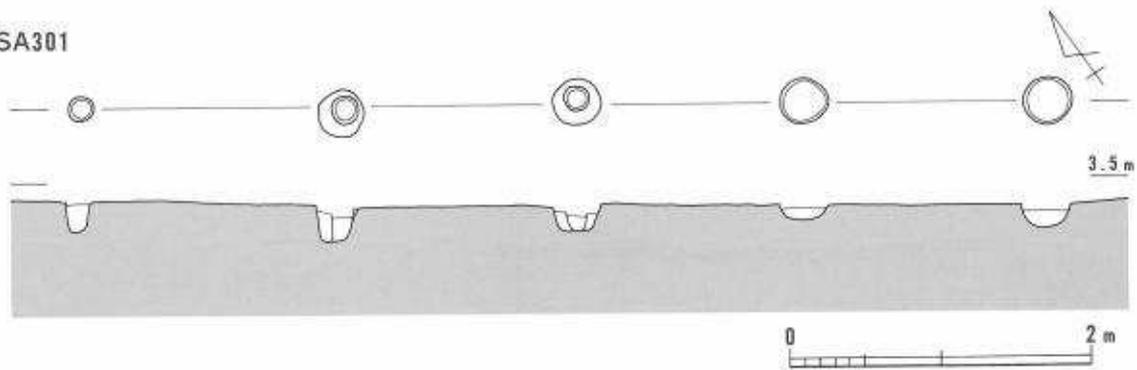
全体図



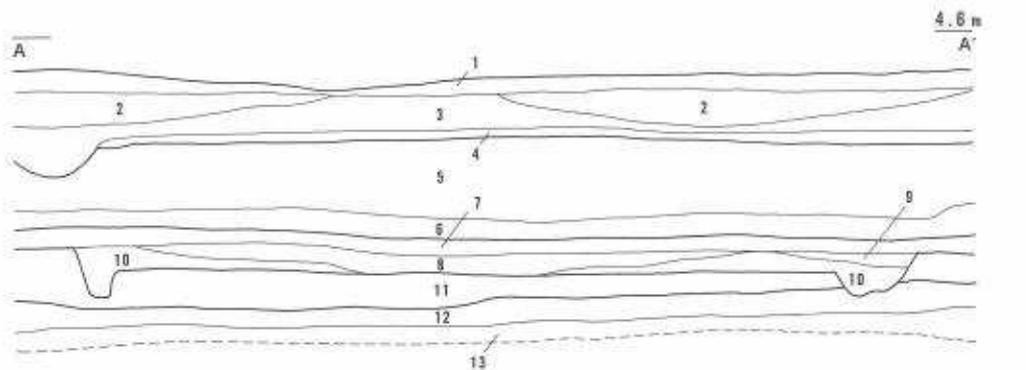
図版20 第3面の遺構(2)

SA301・SH301

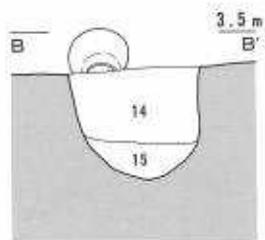
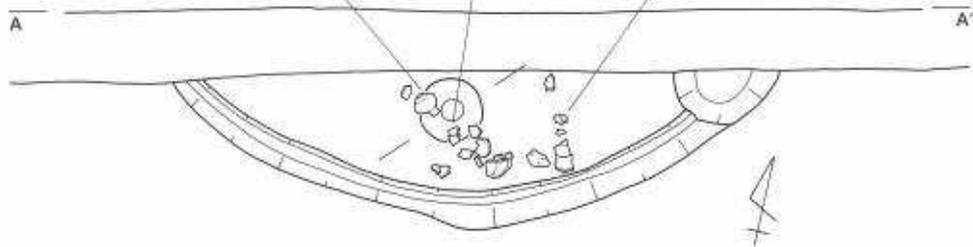
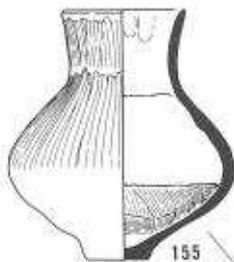
SA301

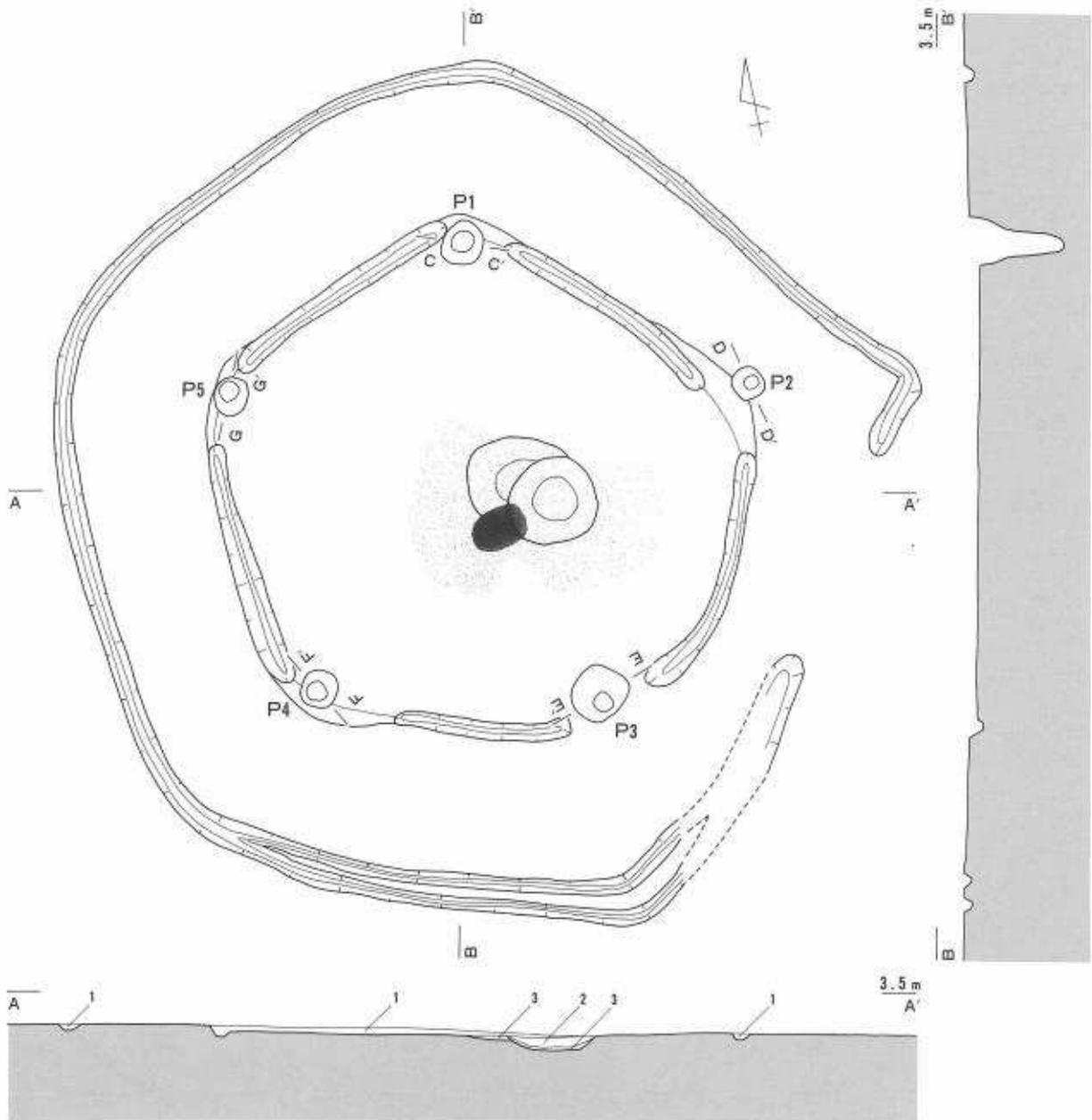


SH301



- | | | | |
|--------------------|-------------|------------------|---------|
| 1. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰 | 細砂～極細砂 (粘土) | 8. 5Y4/1 灰 | シルト質極細砂 |
| 2. 10Y5/2 オリーブ灰 | 細砂～極細砂 (粘土) | 9. 7.5Y4/2 灰オリーブ | シルト質極細砂 |
| 3. 5Y6/2 灰オリーブ | 極細砂 | 10. 5Y4/1 灰 | 極細砂 |
| 4. 10Y4/2 オリーブ灰 | 極細砂 | 11. 5Y5/1 灰 | 極細砂 |
| 5. 7.5Y7/3 灰白 | 細砂～極細砂 | 12. 5Y5/2 灰オリーブ | 極細砂 |
| 6. 7.5Y4/3 暗オリーブ | 細砂～極細砂 | 13. 7.5GY4/1 暗緑灰 | 極細砂 |
| 7. 5Y5/2 灰オリーブ | 極細砂 | | |

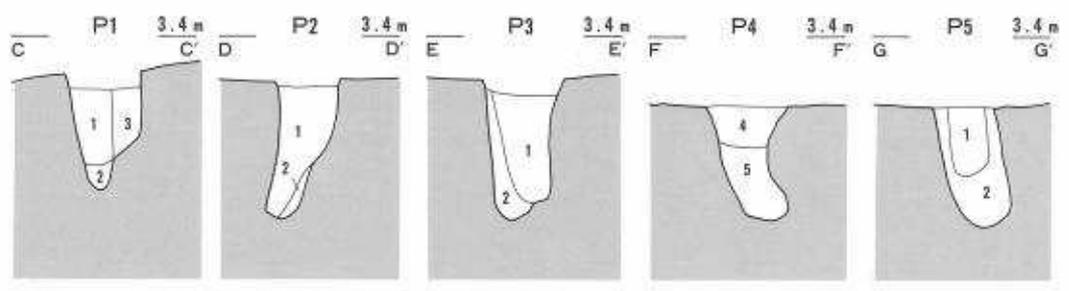




- 1. SY4/1 灰 細砂～極細砂
- 2. SY2/2 オリーブ黒 細砂
- 3. 炭層



- 炭・灰の集中
- 焼土粒の集中

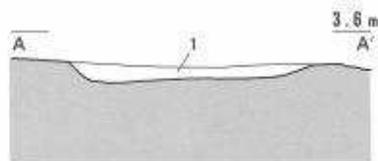
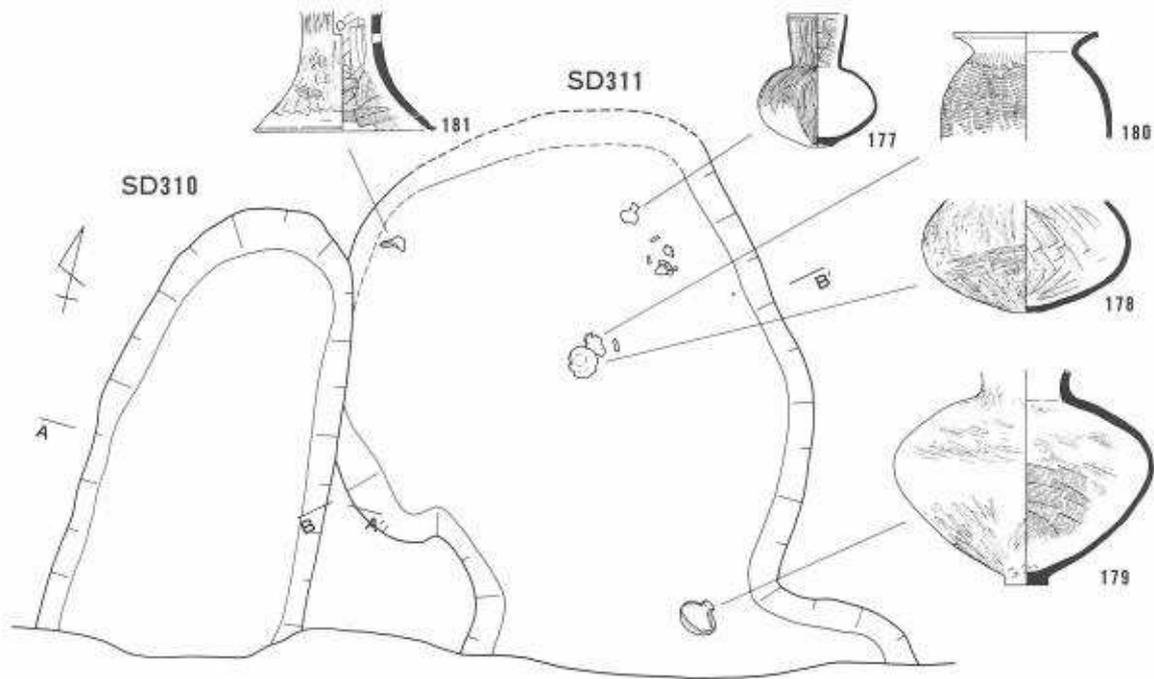
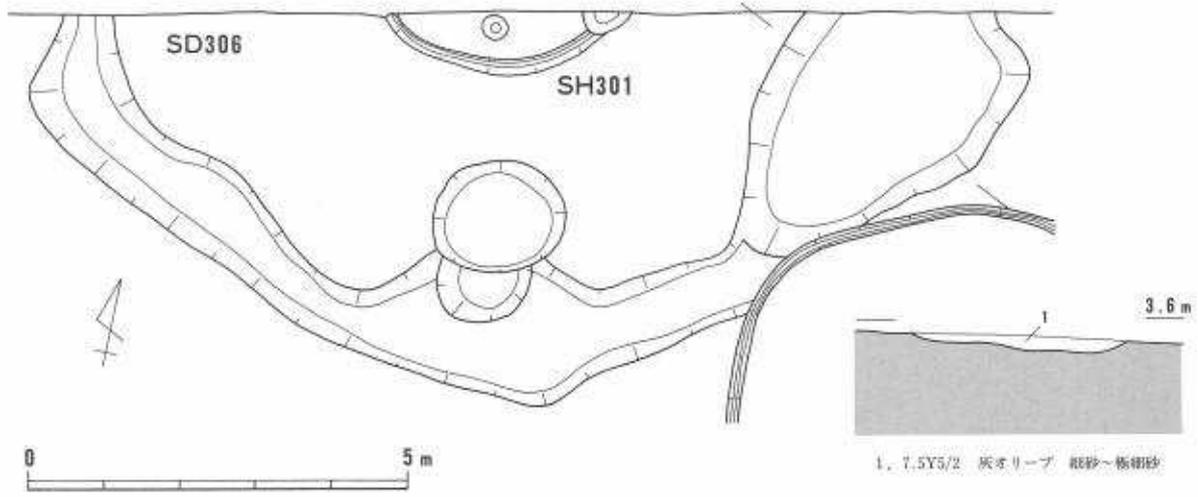


- 1. N5/1 灰 シルト混じり極細砂(炭を多く含む・柱脚)
- 2. 5BG5/1 青灰 シルト質極細砂
- 3. 10G4/1 暗緑灰 シルト混じり細砂～極細砂
- 4. SY4/1 灰 シルト混じり細砂～極細砂
- 5. 5BG5/1 青灰 シルト混じり細砂～極細砂(炭をわずかに含む)

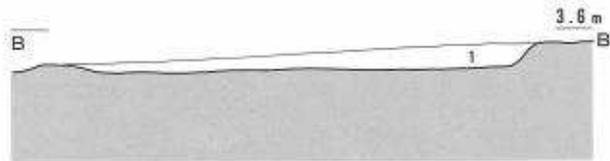


図版22 第3面の遺構(4)

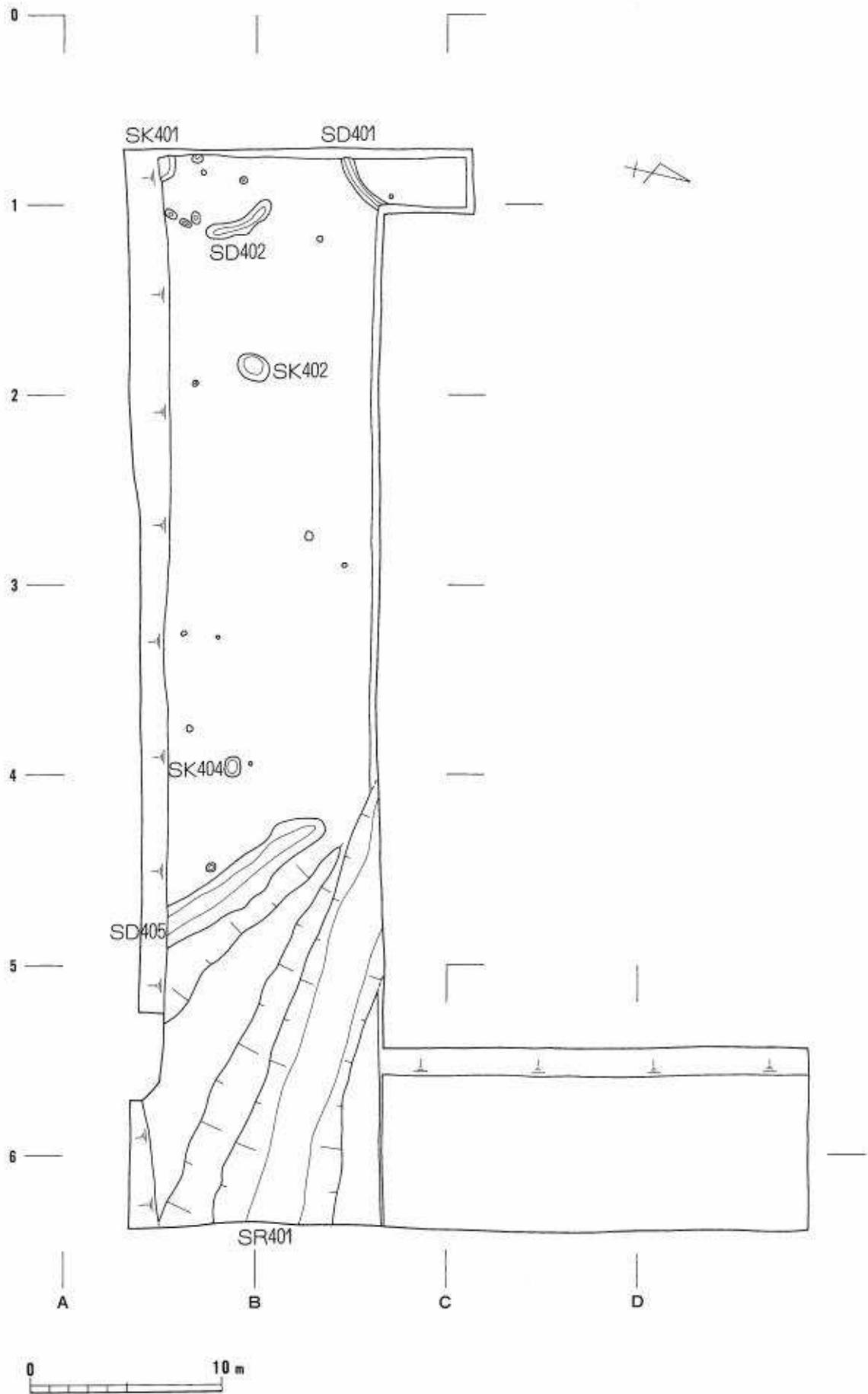
SD306・SD310・SD311



1. 5Y4/2 灰オリーブ 細砂～極細砂

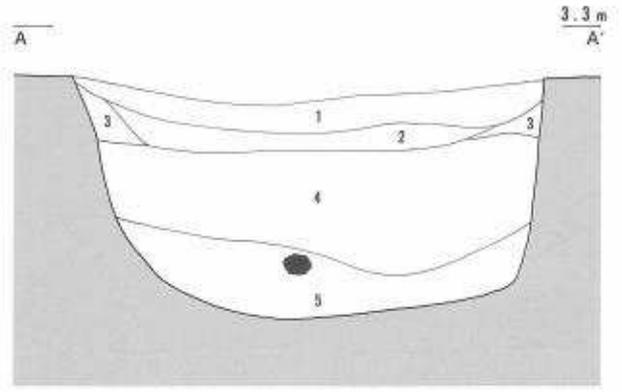
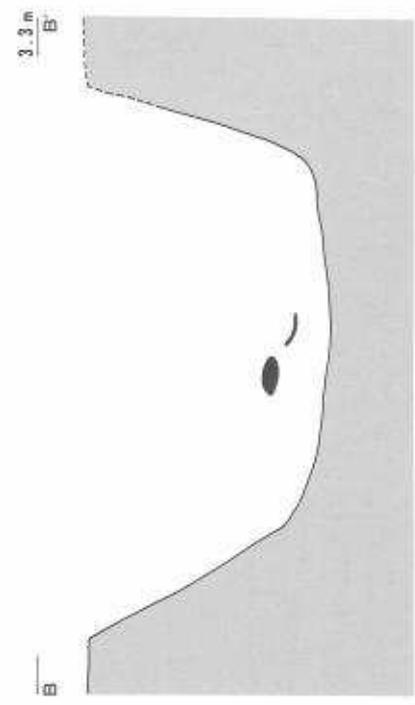
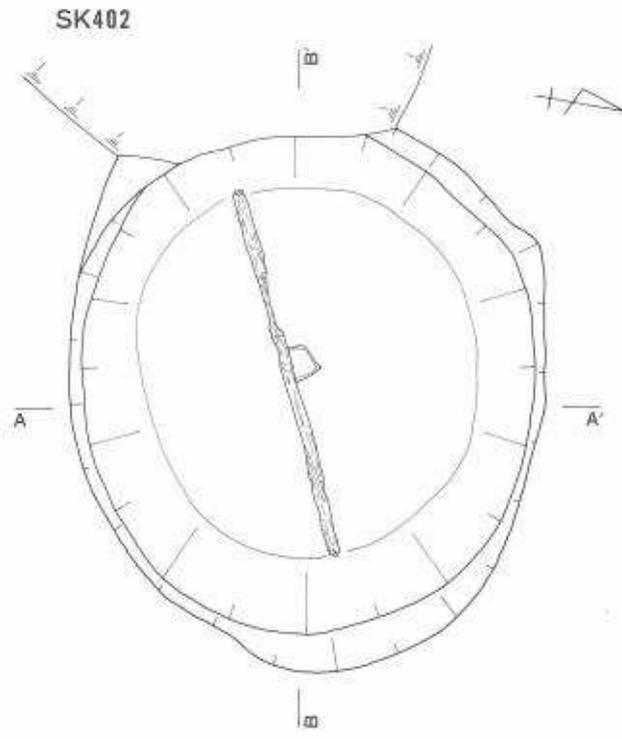


1. 5Y3/2 オリーブ黒 細砂～極細砂

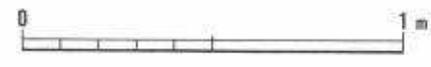


図版24 第4面の遺構(2)

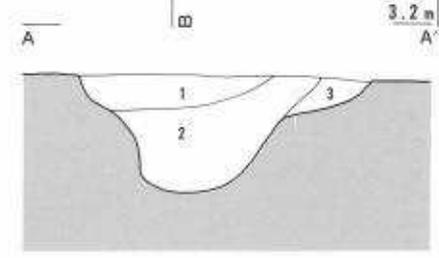
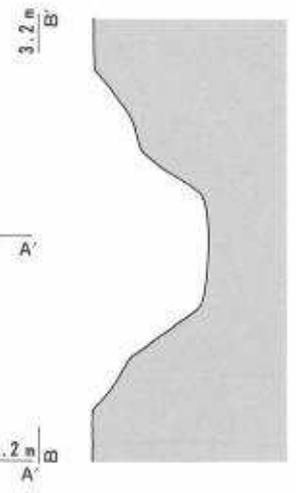
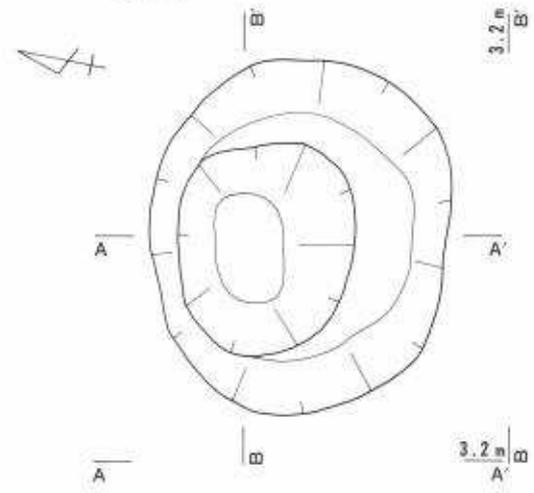
SK402・SK404



- 1. 5Y4/3 暗オリーブ 細砂
- 2. 10GY5/1 緑灰 極細砂
- 3. 5GY4/1 暗オリーブ灰極細砂
- 4. 7.5GY4/1 暗緑灰 極細砂
- 5. 10GY4/1 暗緑灰 極細砂

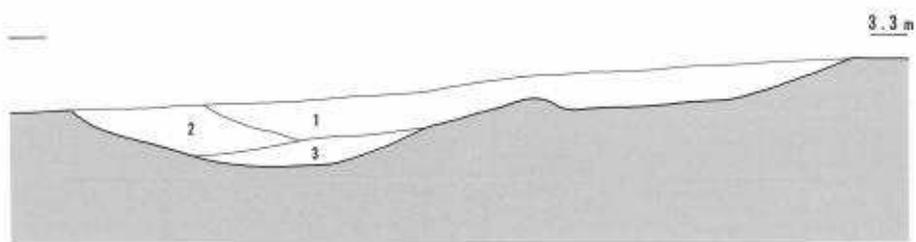
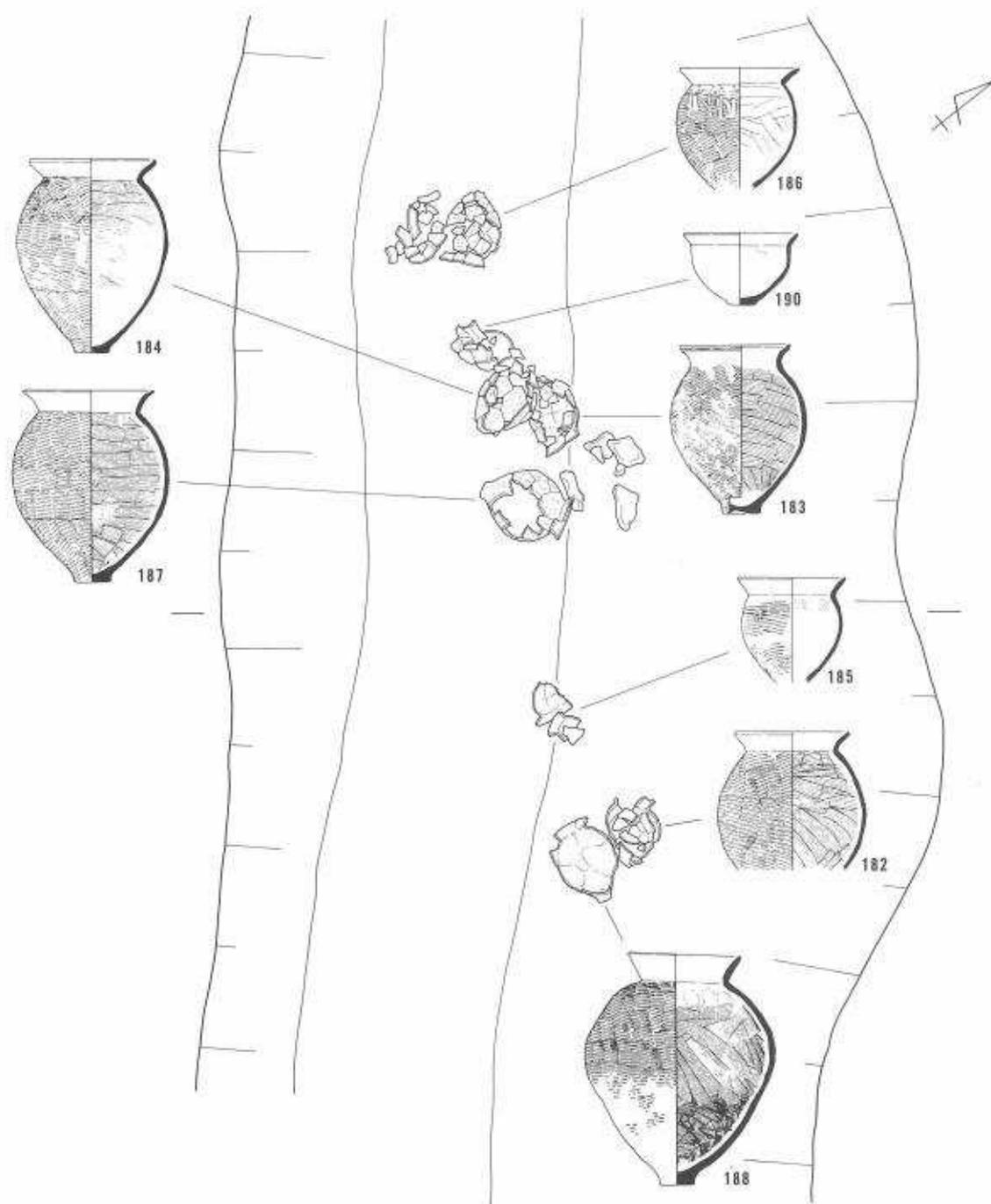


SK404



- 1. 7.5Y4/1 灰 極細砂
- 2. 10GY4/1 暗緑灰 極細砂
- 3. 10Y3/1 オリーブ黒 粗砂-極細砂



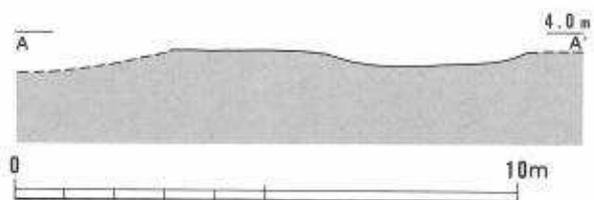


- 1. 10Y4/1 灰 細砂～極細砂
- 2. 10Y3/1 オリーブ黒 極細砂
- 3. 10Y3/1 オリーブ黒 極細砂～粗砂

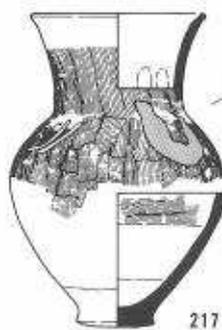
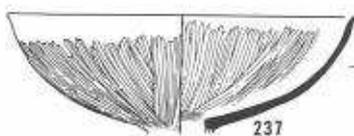
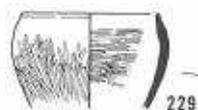
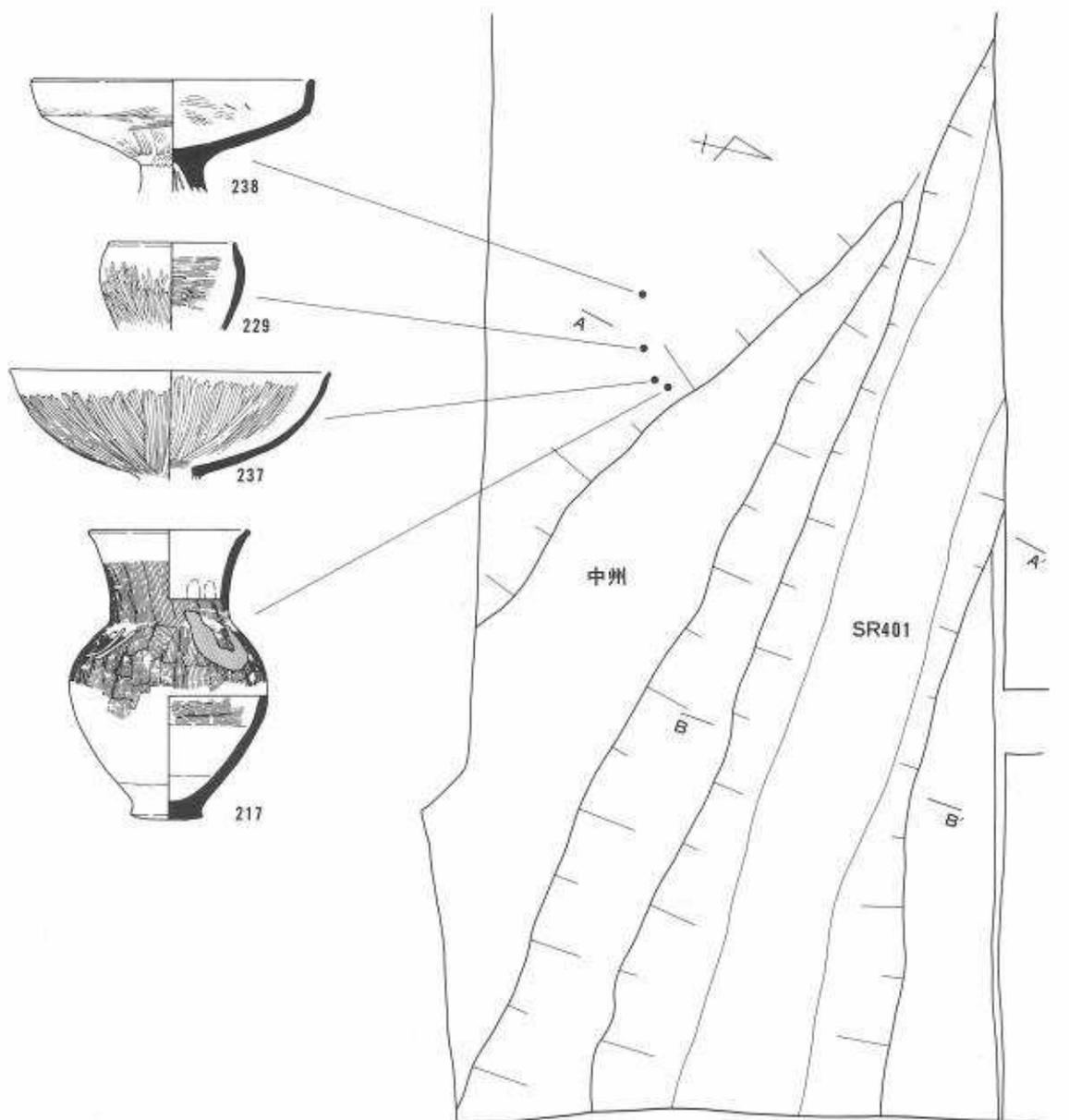
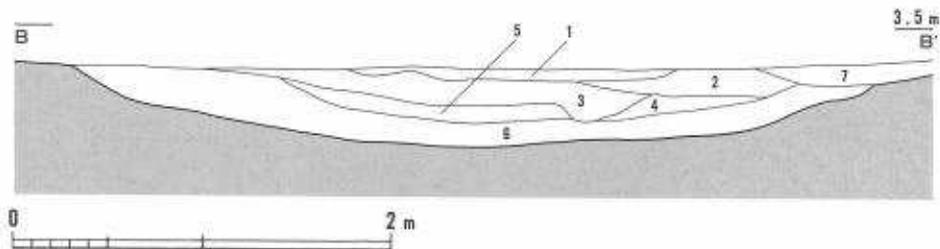


図版26 第4面の遺構(4)

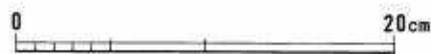
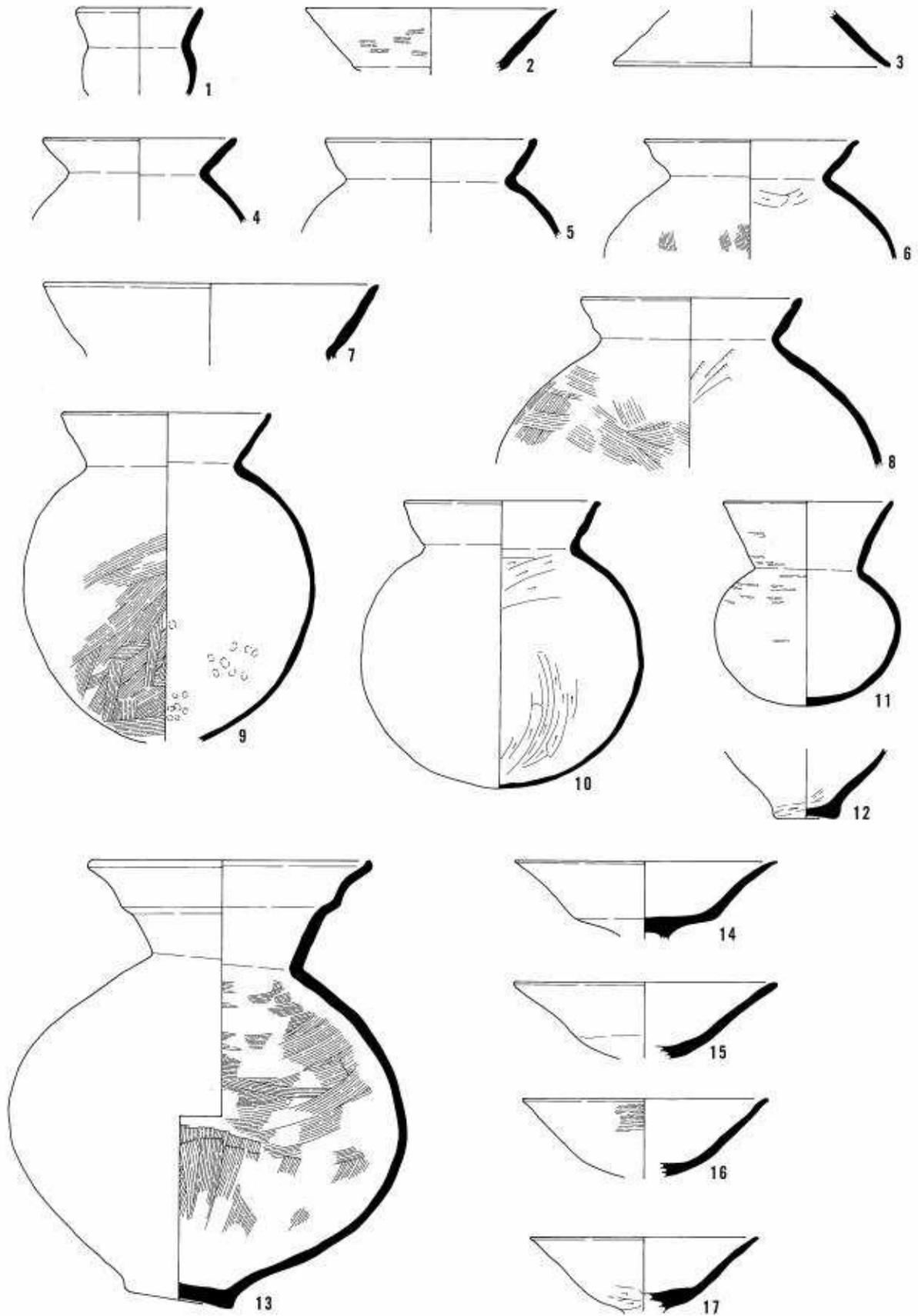
SR401



- | | |
|------------------|---------|
| 1. 10Y4/1 灰 | シルト質極細砂 |
| 2. 7.5GY4/1 暗緑灰 | シルト質極細砂 |
| 3. 5GY4/1 暗オリーブ灰 | シルト質極細砂 |
| 4. 10GY4/1 暗緑灰 | シルト質極細砂 |
| 5. 10Y4/1 灰 | 極細砂 |
| 6. 10GY4/1 暗緑灰 | 細砂-極細砂 |
| 7. 7.5Y5/2 暗オリーブ | 細砂-極細砂 |

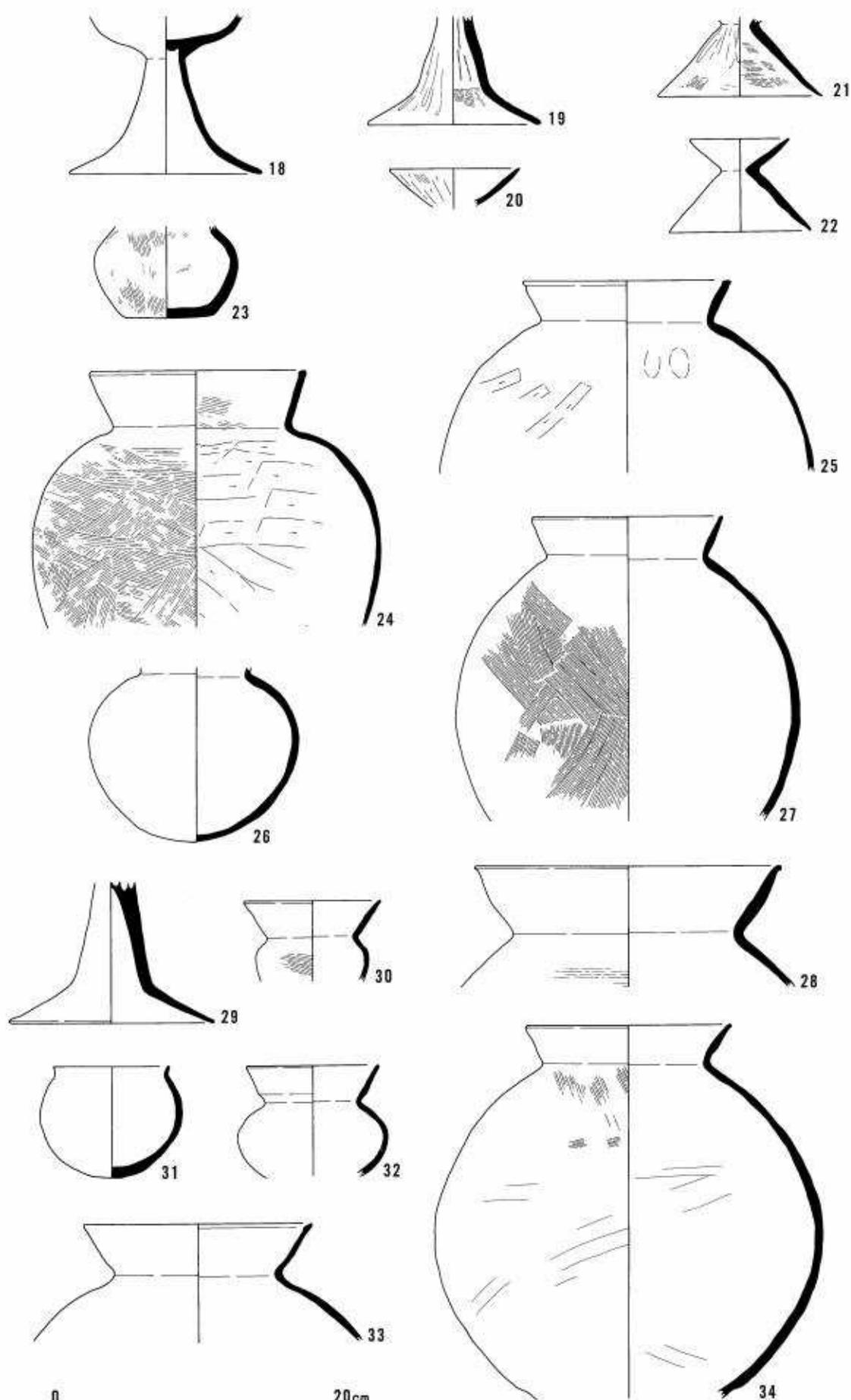


0 10m

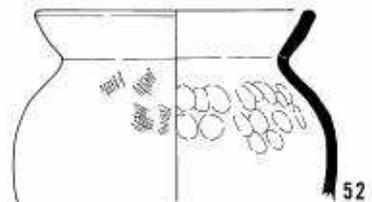
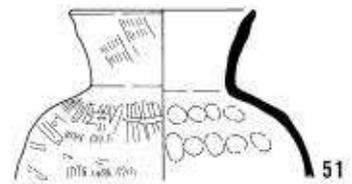
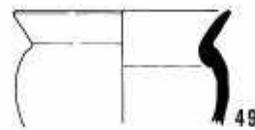
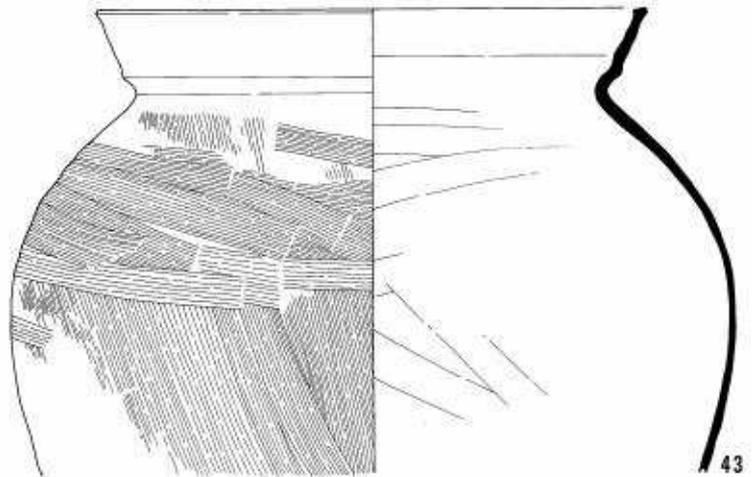
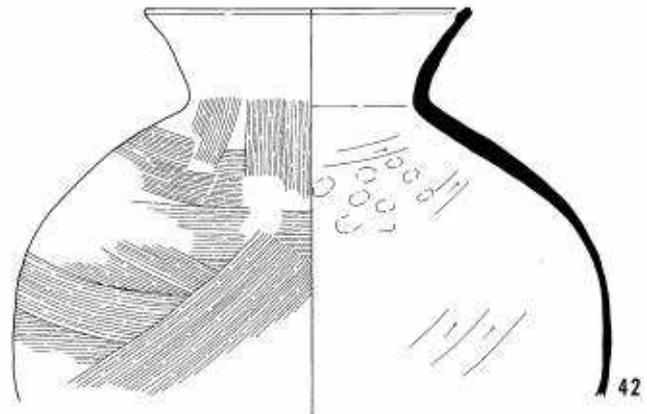
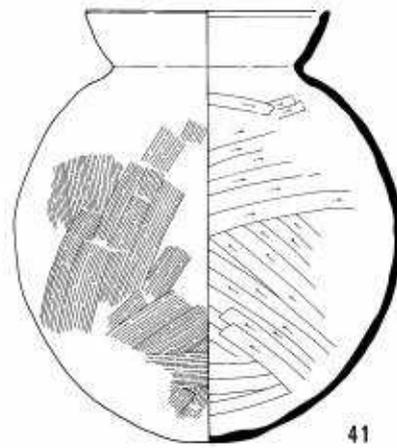
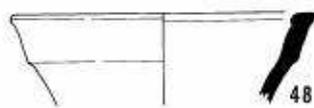
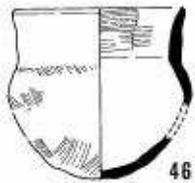
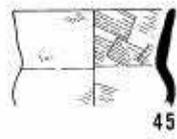
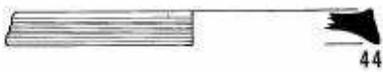
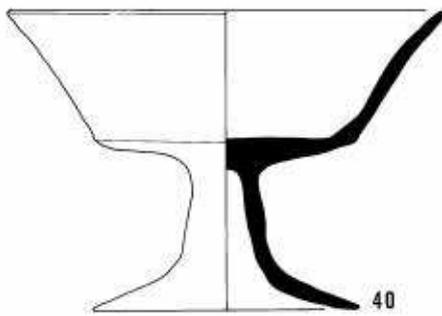
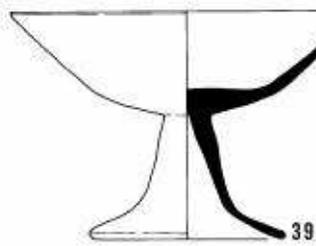
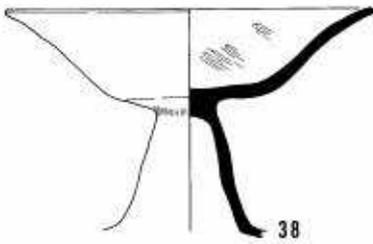
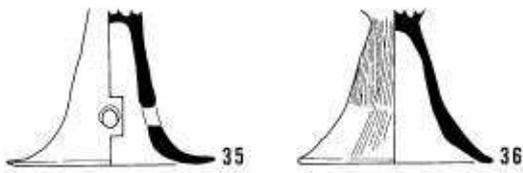


図版28 遺物(2)

18~34



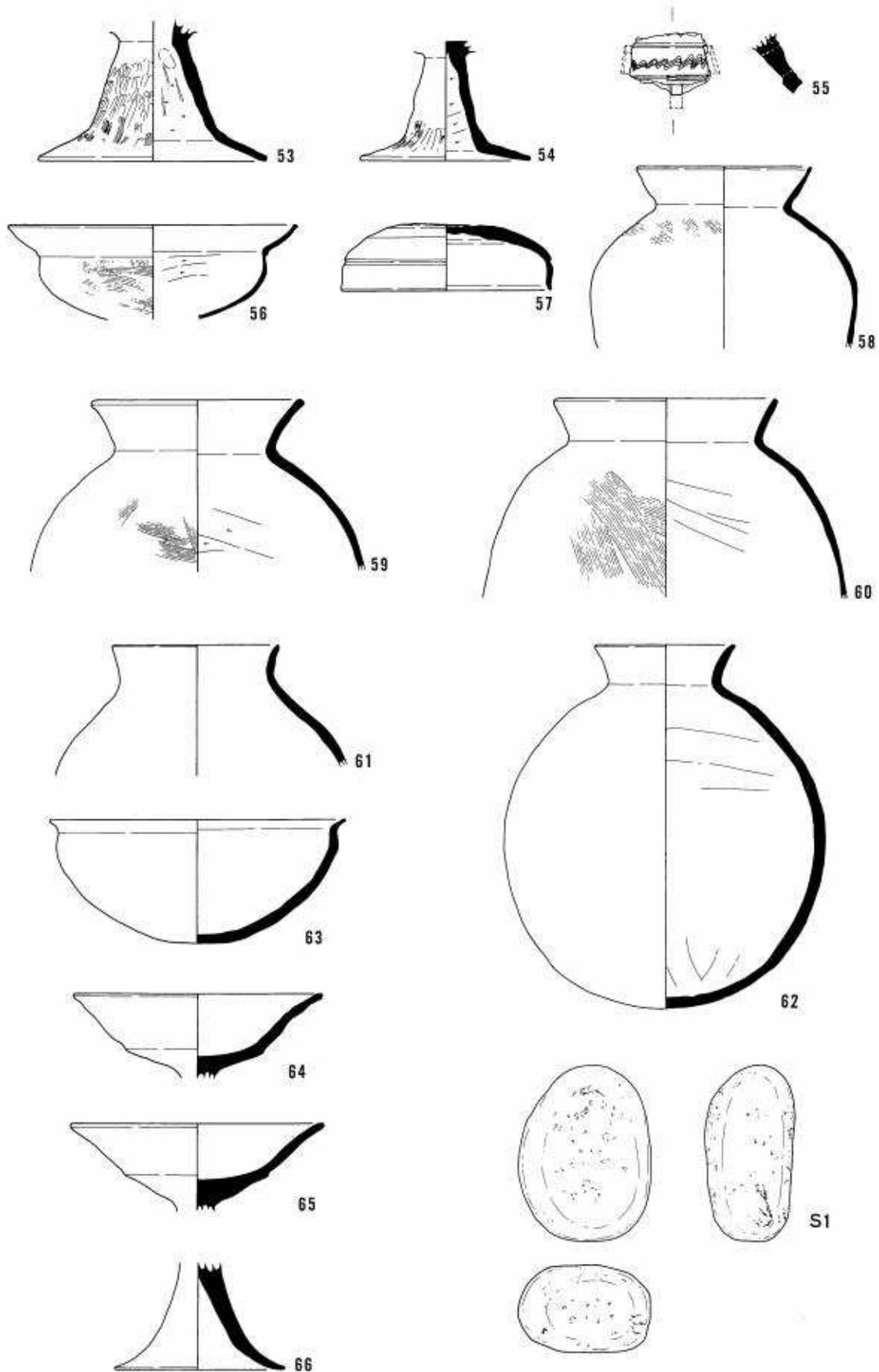
SH102 : 18~22 / SK101 : 23 / SK102 : 24 / SK103 : 25~29 / SK104 : 30~34



SK104 : 35~43 / SK105 : 44~46 / SK106 : 47 / SK107 : 48~52

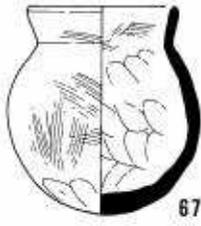
図版30 遺物(4)

53~66・S1

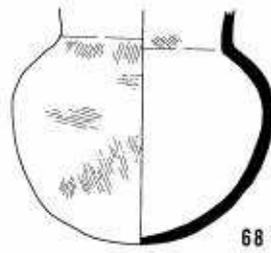


0 20cm

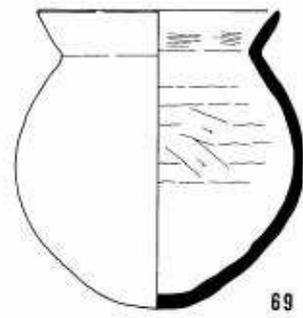
SK107 : 53~55 / SE101 : 56・57 / SD103 : 58~66・S1



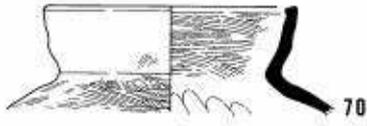
67



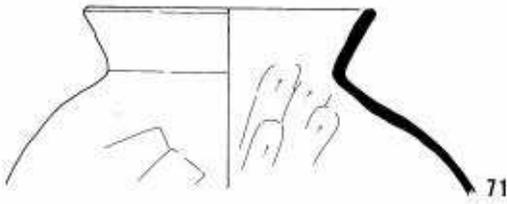
68



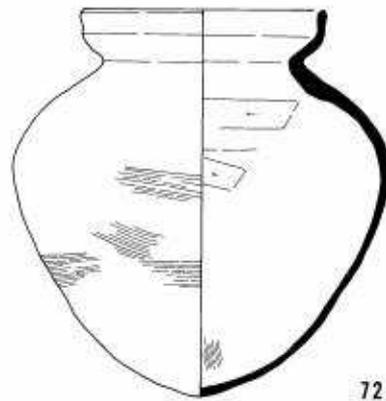
69



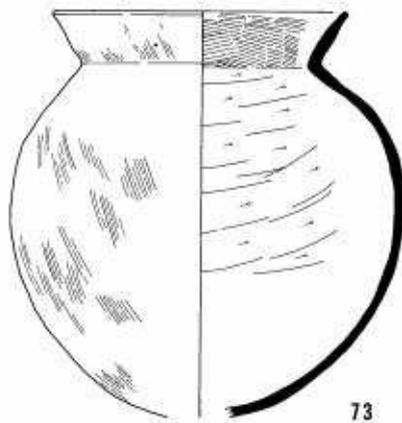
70



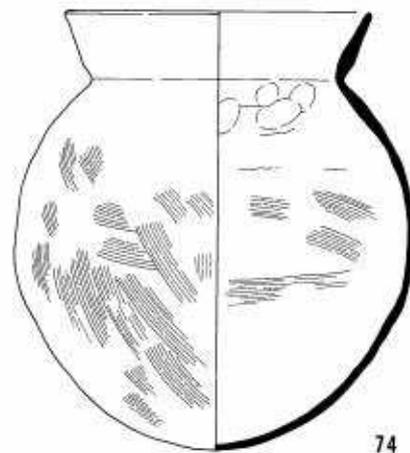
71



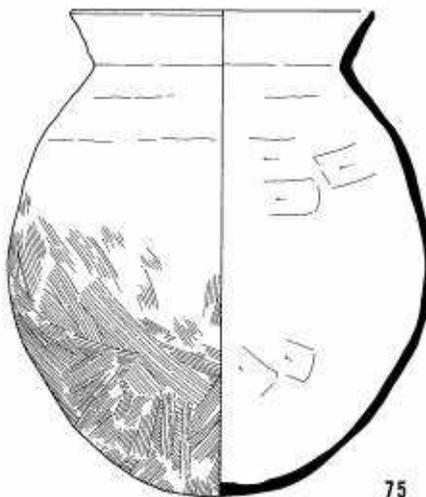
72



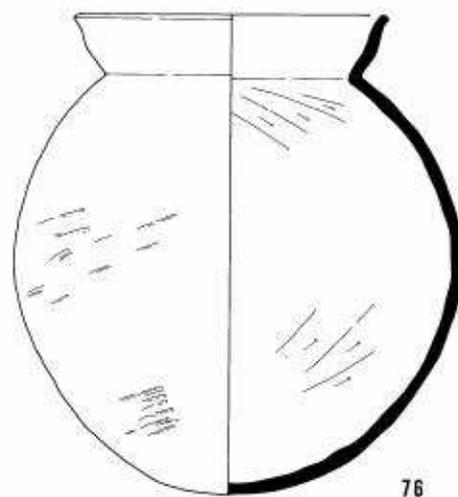
73



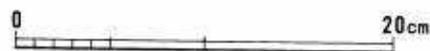
74



75

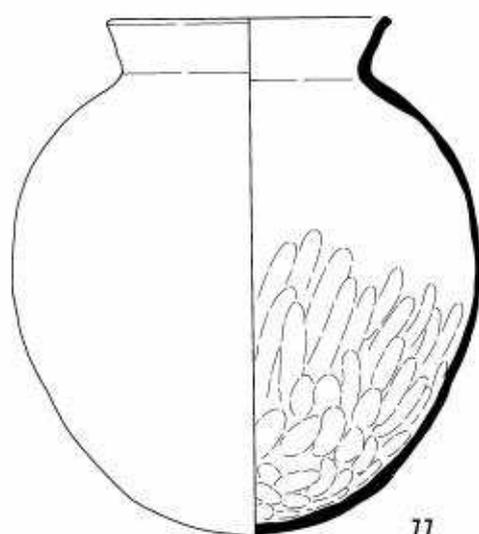


76

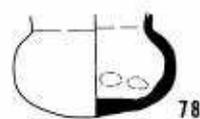


図版32 遺物(6)

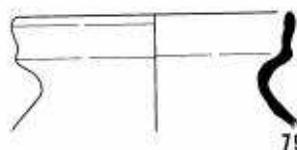
77~85



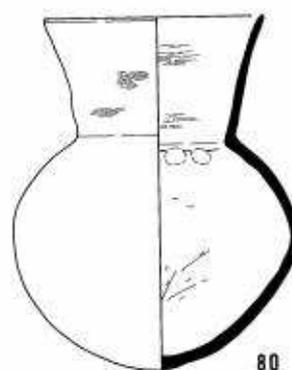
77



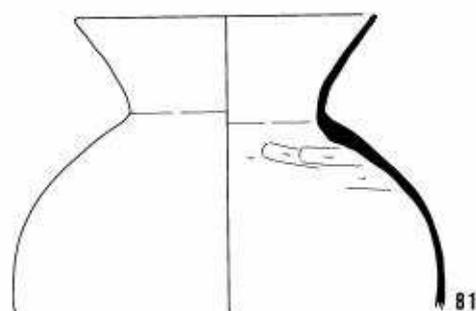
78



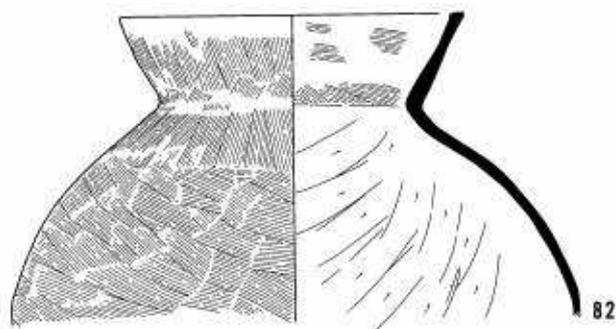
79



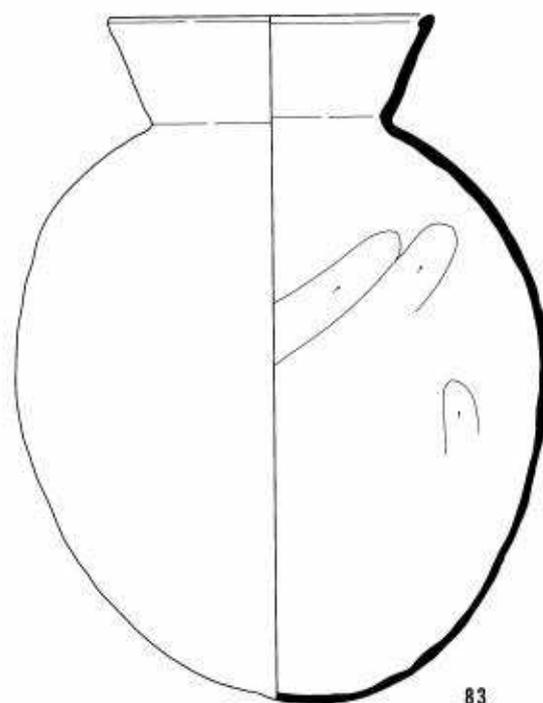
80



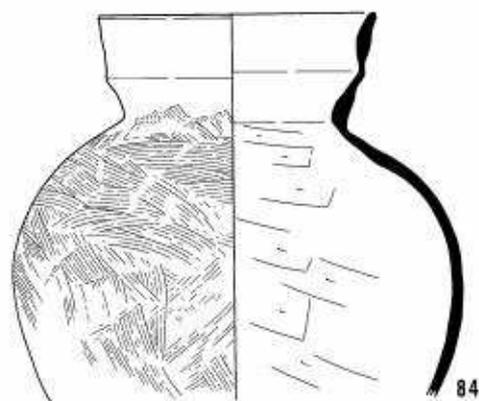
81



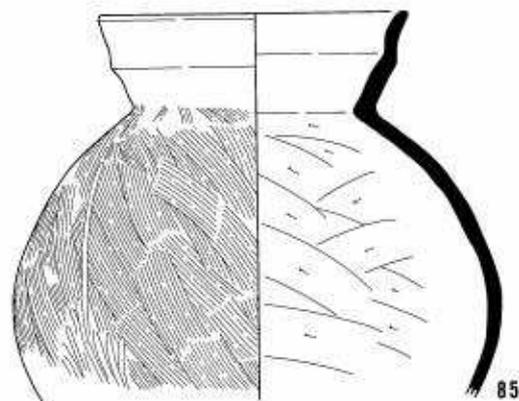
82



83

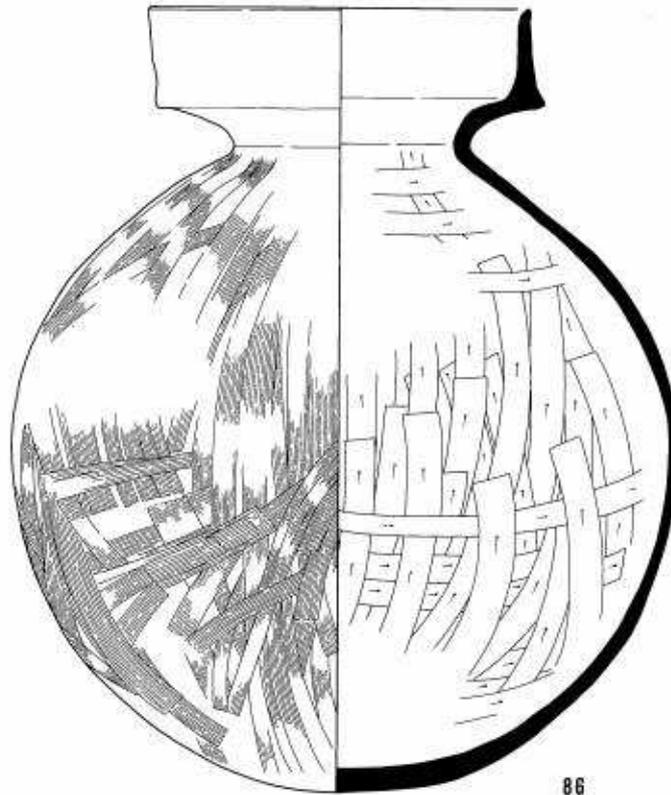


84

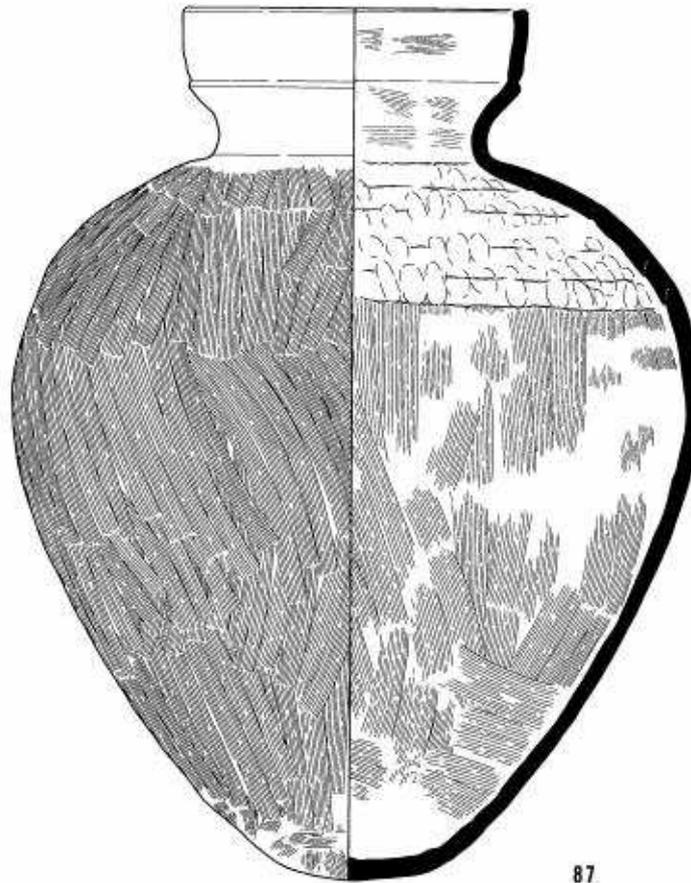


85

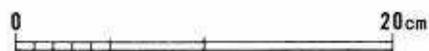


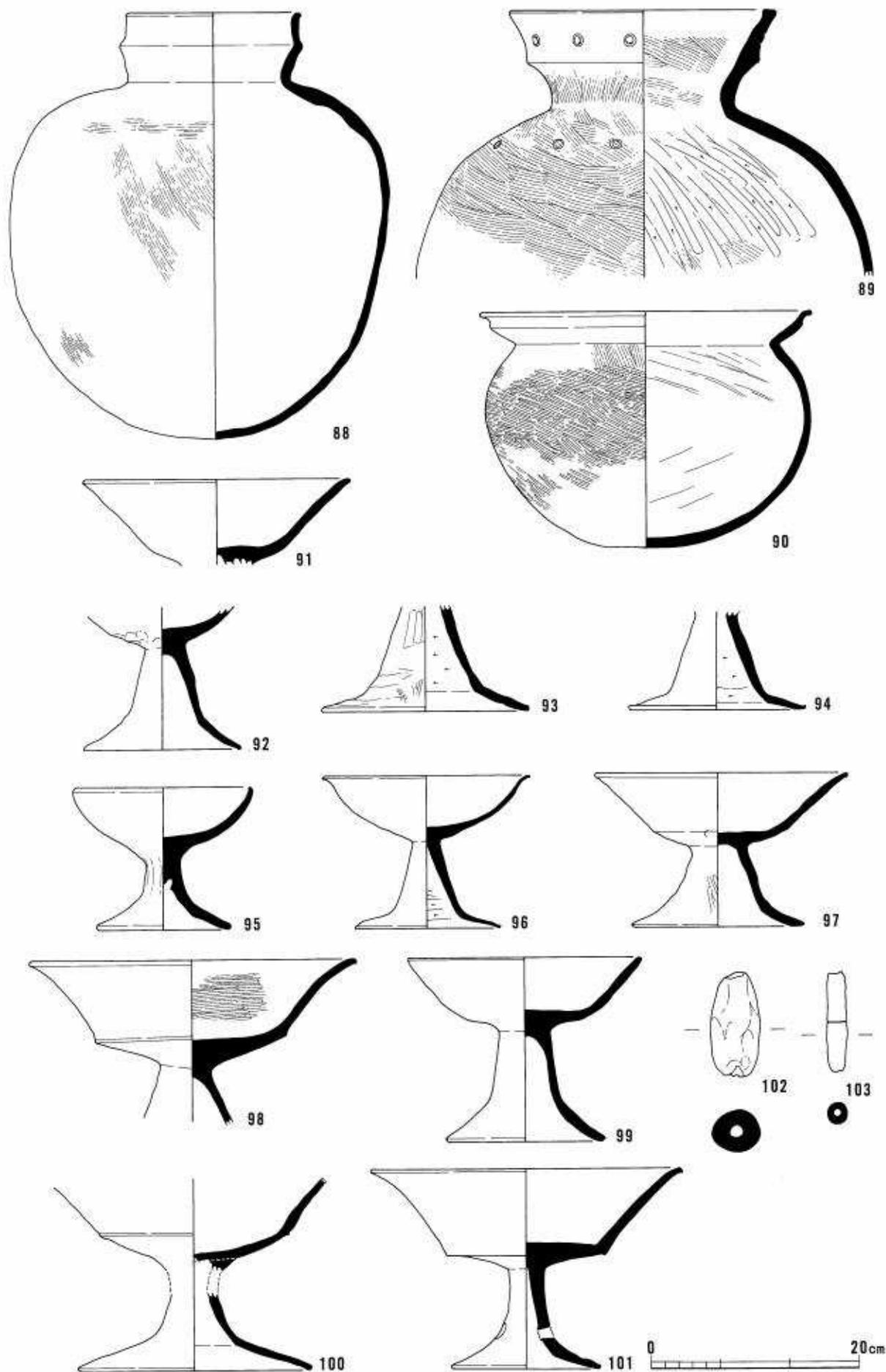


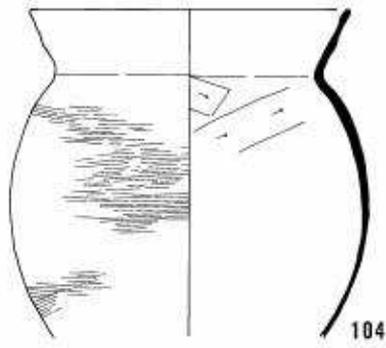
86



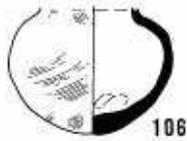
87



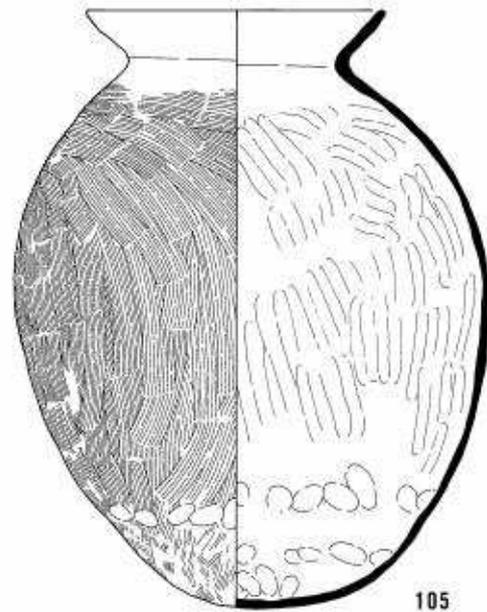




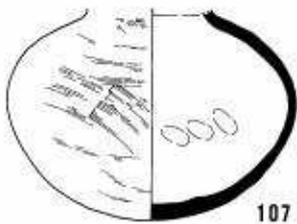
104



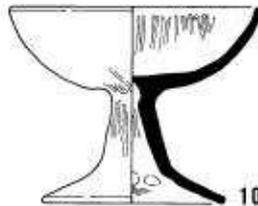
106



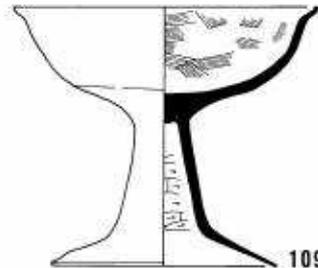
105



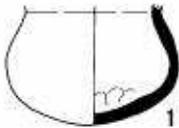
107



108



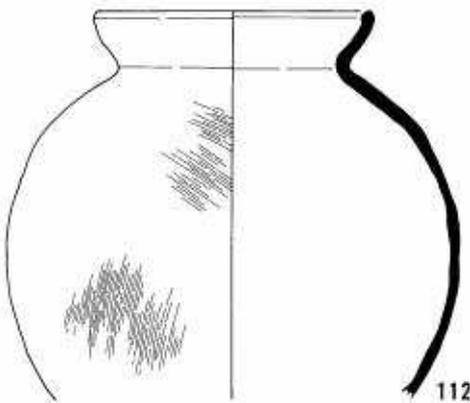
109



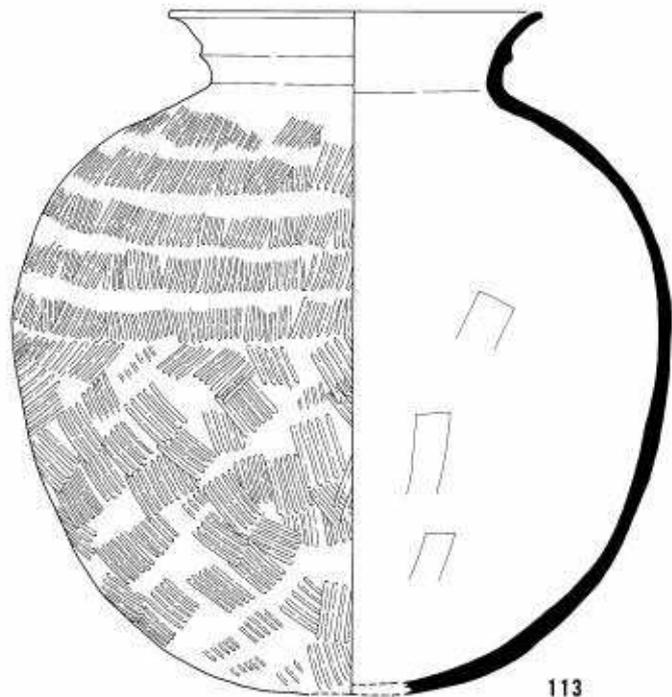
110



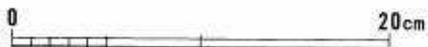
111



112

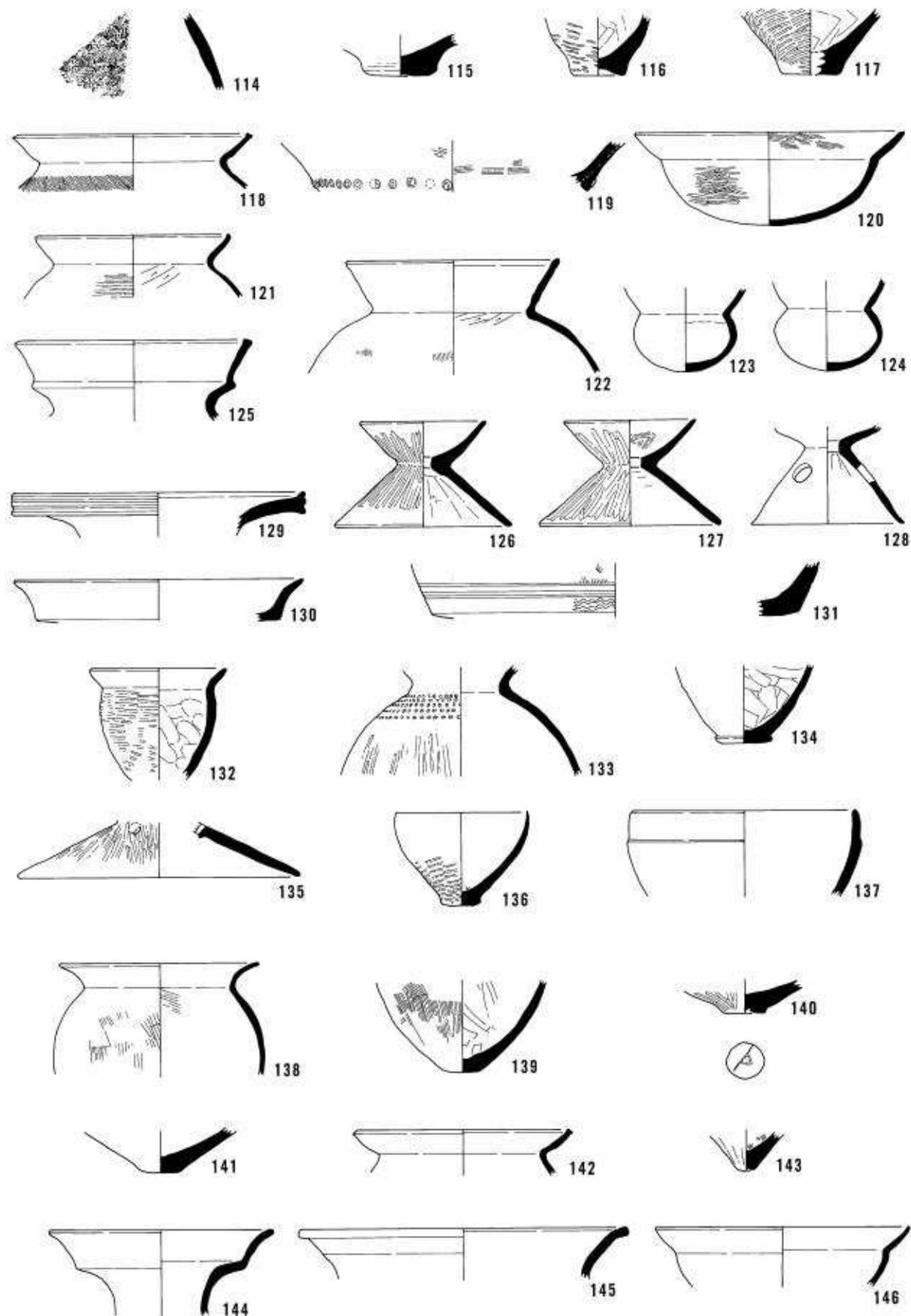


113



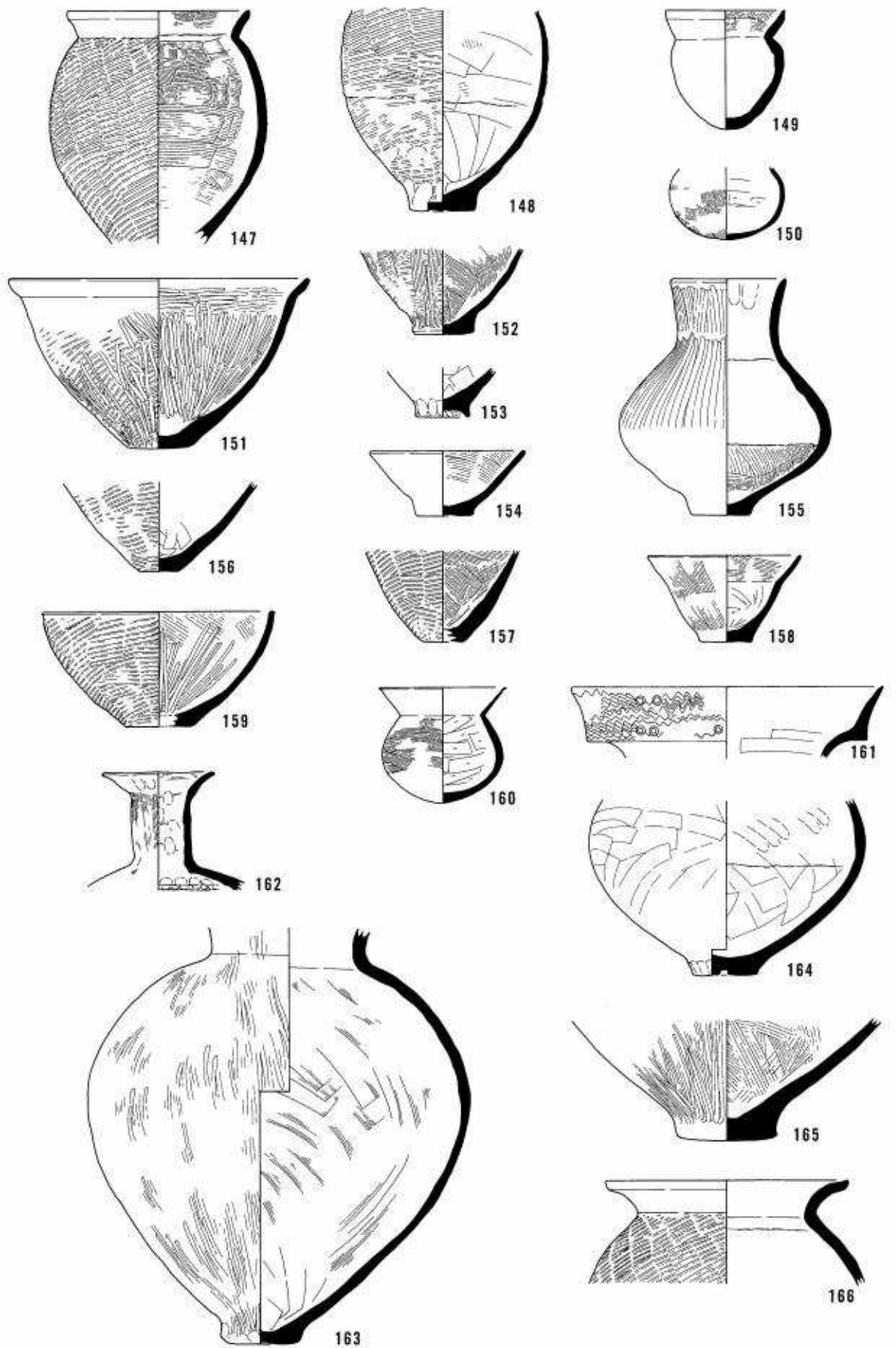
图版36 遺物(10)

114~146



0 20cm

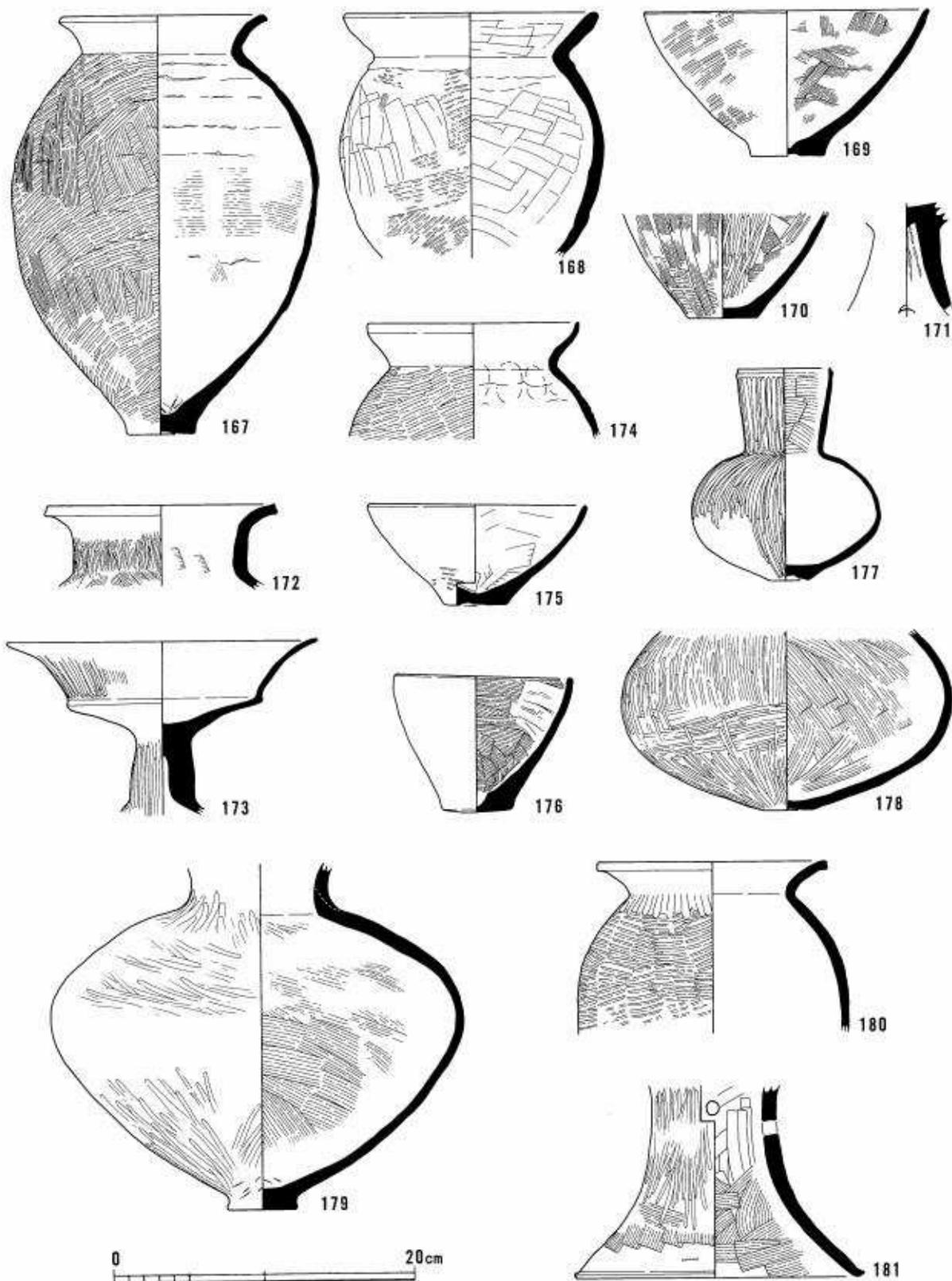
SH201 : 114~117 / SH202 : 118 / SH203 : 119 / SK210 : 120 / SK212 : 121 /
 SK217 : 122~128 / SK219 : 129 • 130 / SK220 : 131~137 / SK221 : 138 • 139 /
 SK222 : 140 / SK223 : 141 / SK225 : 142 • 143 / SK226 : 144~146

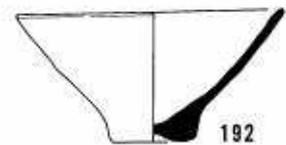
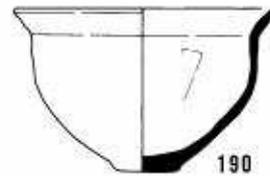
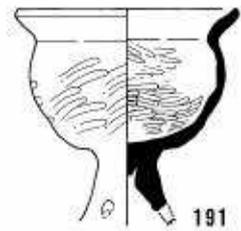
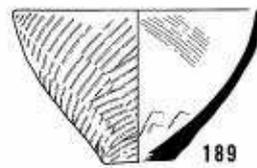
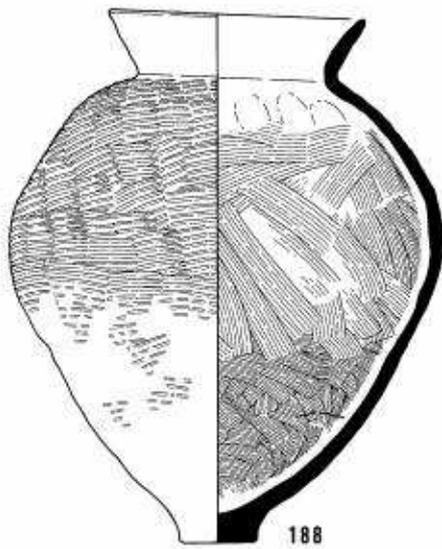
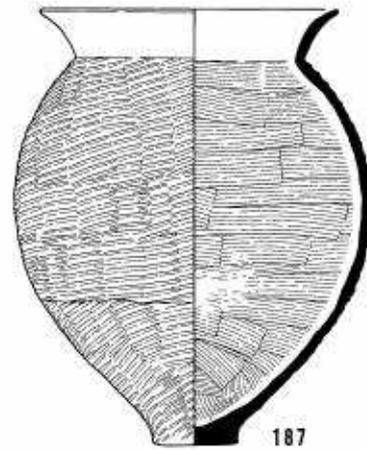
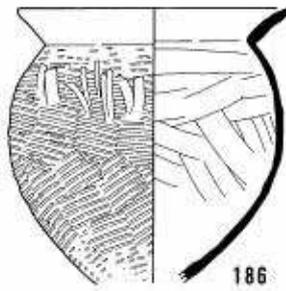
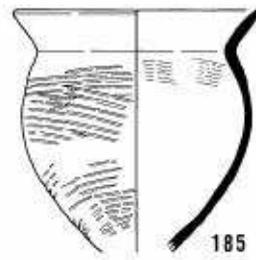
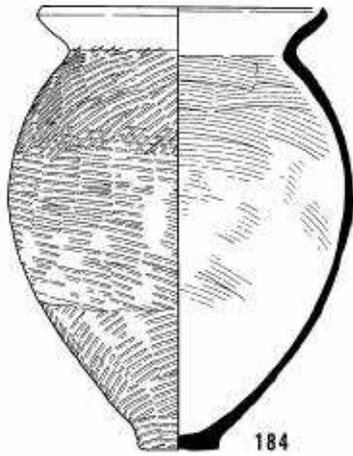
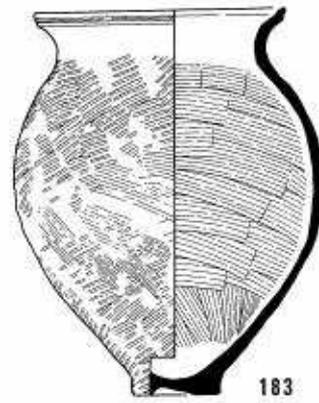
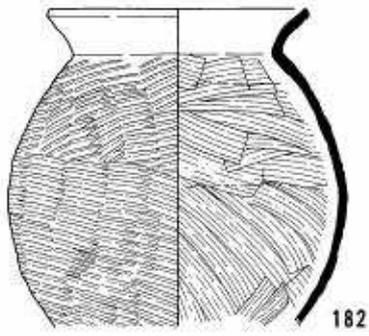


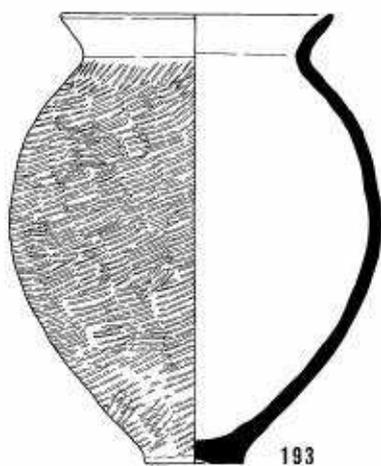
SK228 : 147~151 / SH301 : 152~155 / SH302 : 156~158 /
 SK302 : 159 / SP316 : 160 / SP332 : 161 / SD306 : 162~166

図版38 遺物(12)

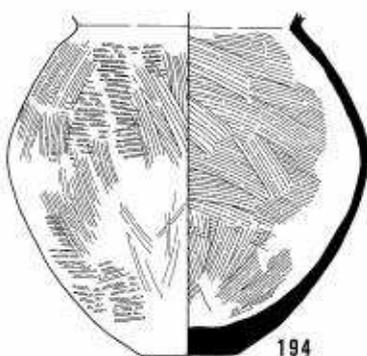
167~181



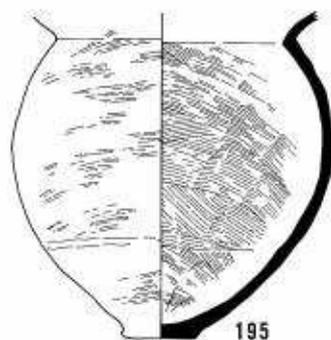




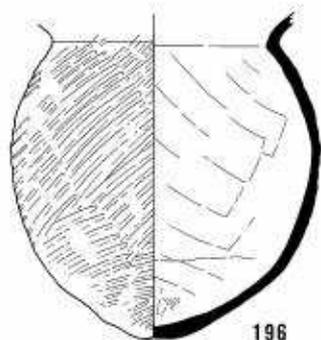
193



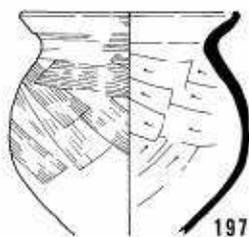
194



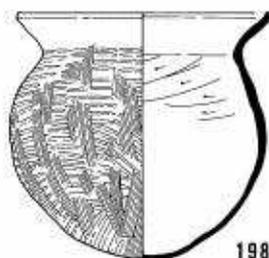
195



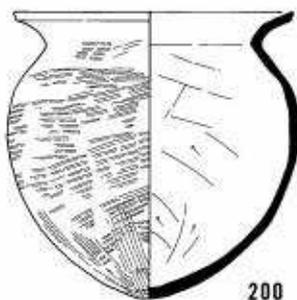
196



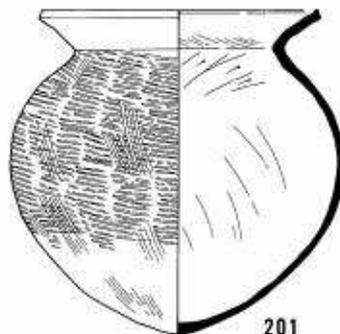
197



198



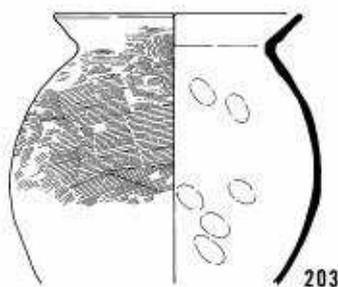
200



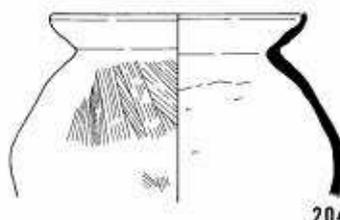
201



199



203



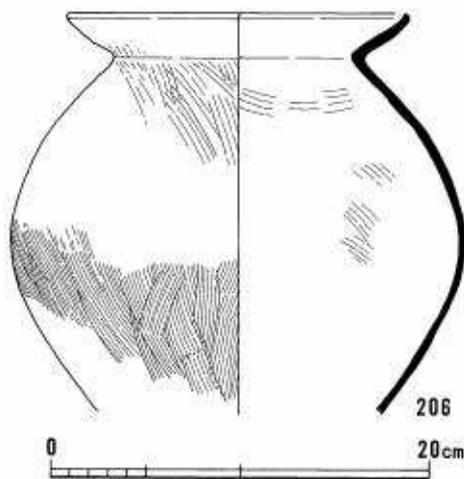
204



202

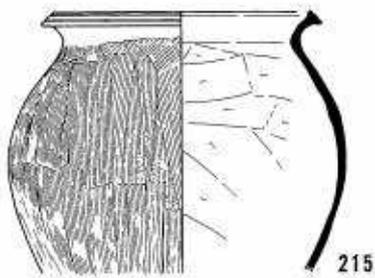
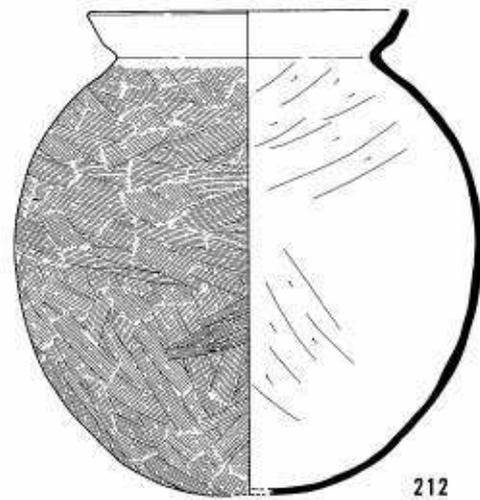
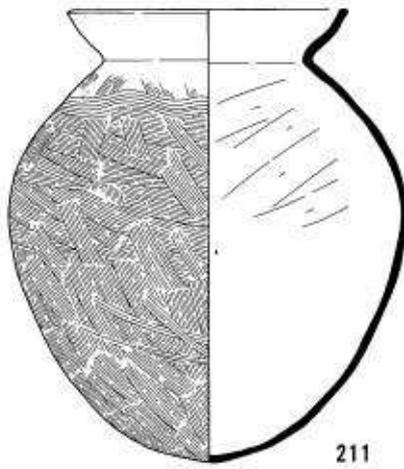
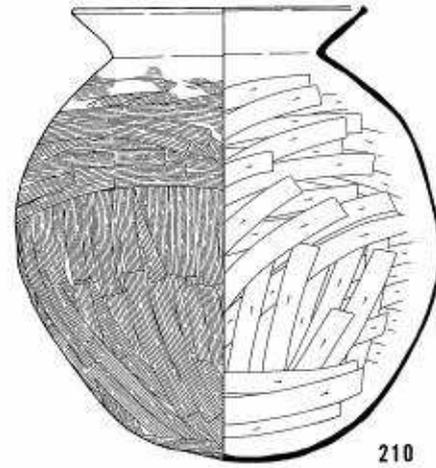
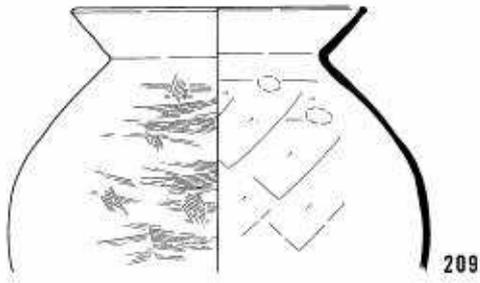
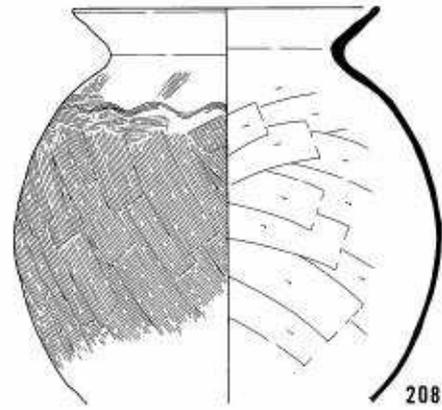
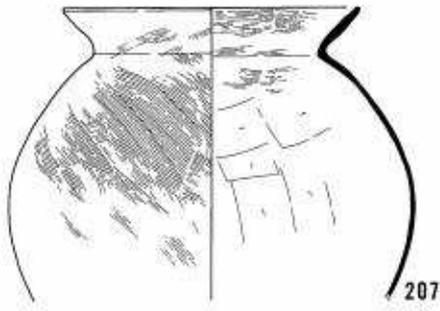


205



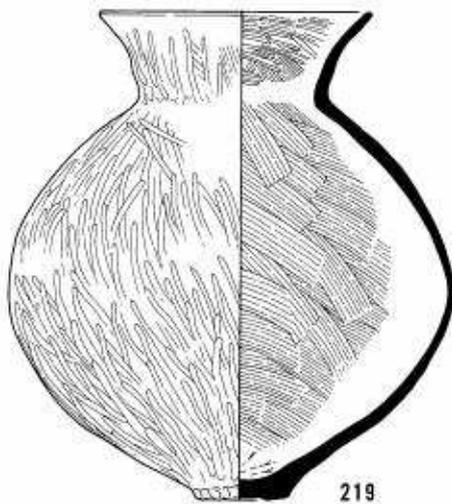
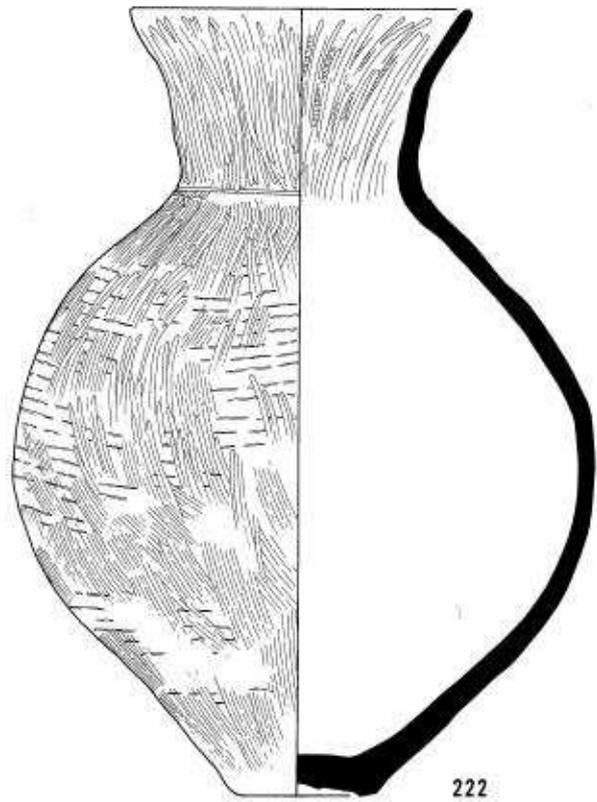
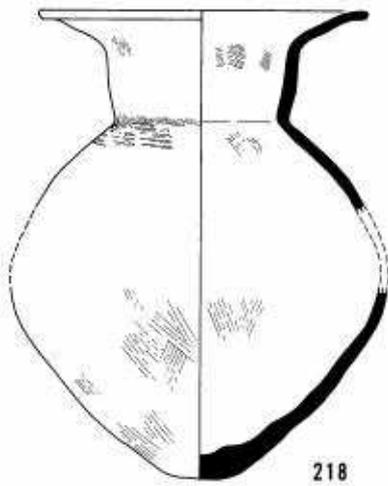
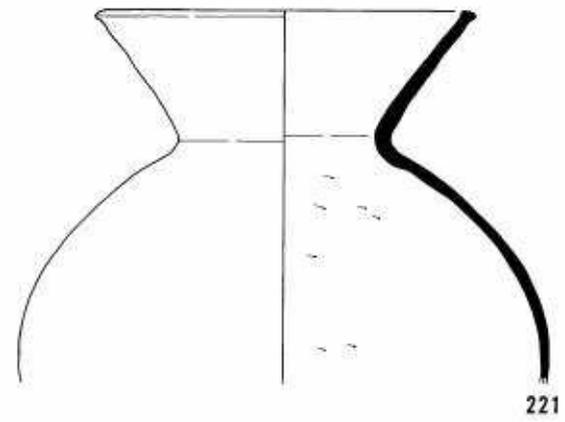
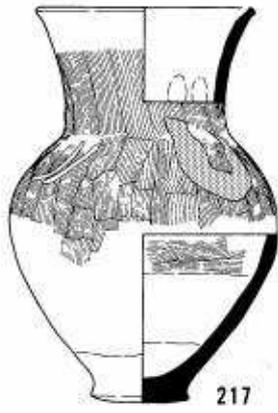
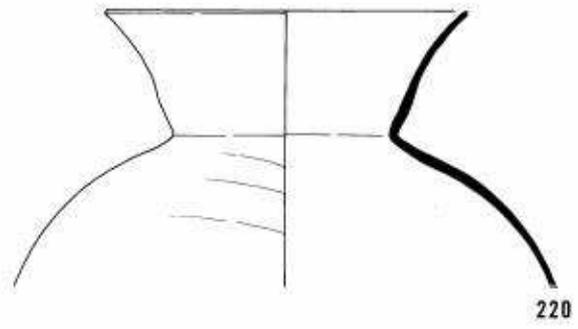
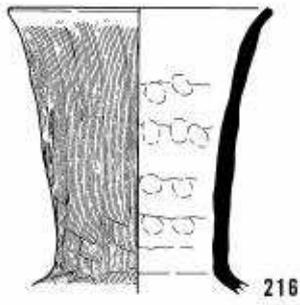
206

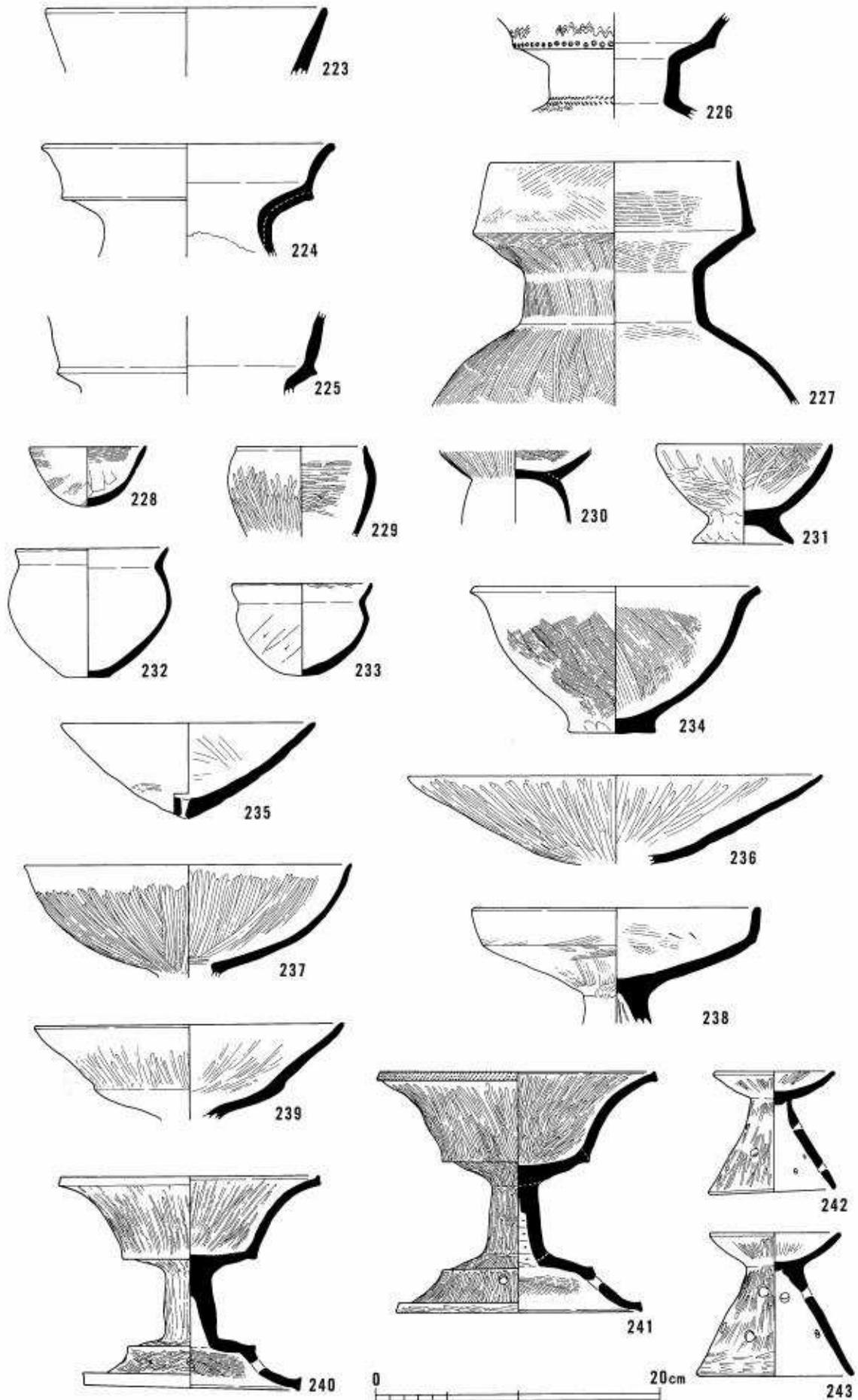




図版42 遺物(16)

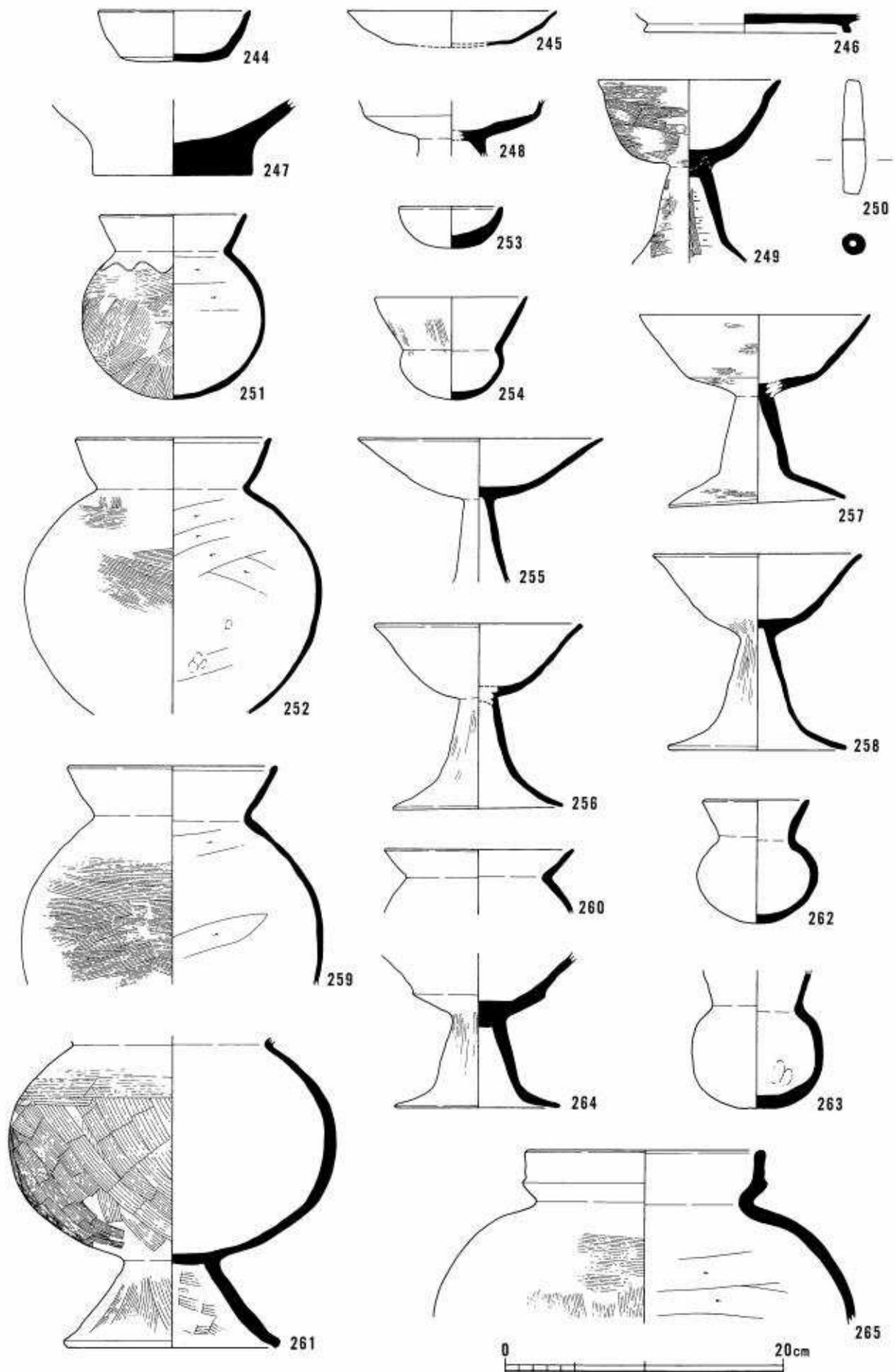
216~222



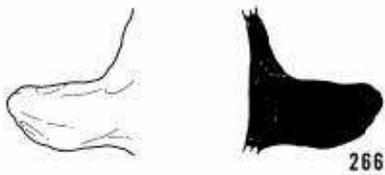


図版44 遺物(18)

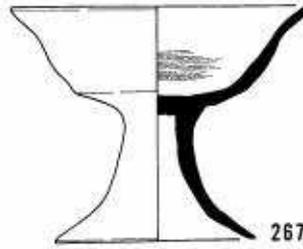
244~265



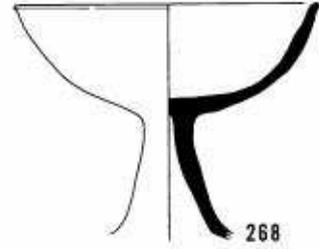
第1包含層：244~247 / 第1面直上：248~250 / 土器群101：251~258 / 土器群102：259
土器群103：260・261 / 土器群105：262~264 / 土器群106：265



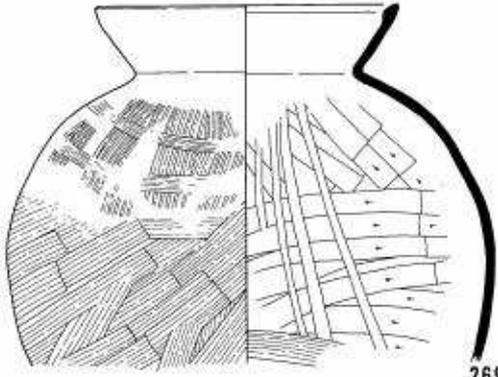
266



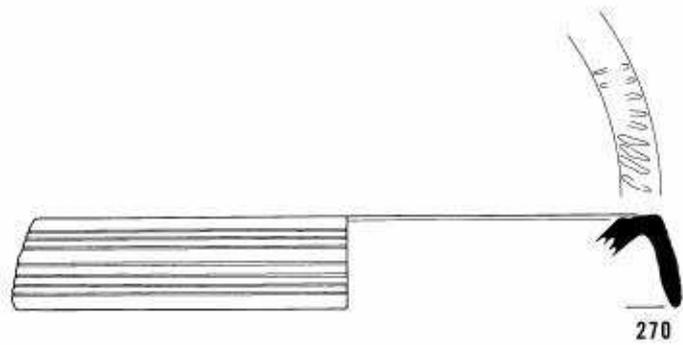
267



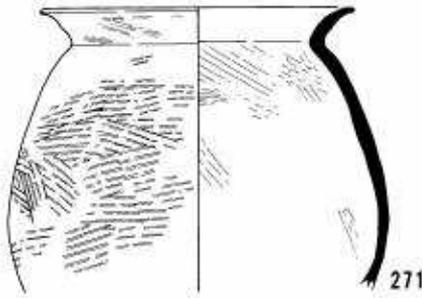
268



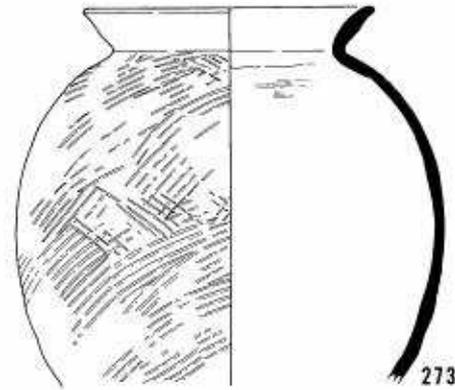
269



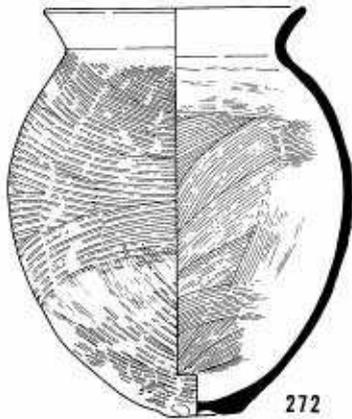
270



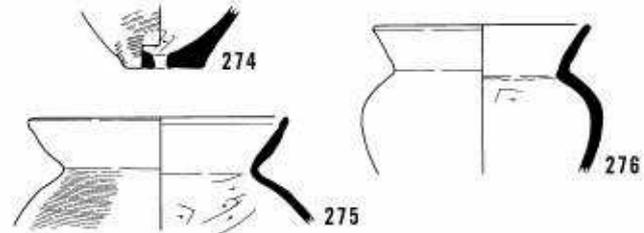
271



273



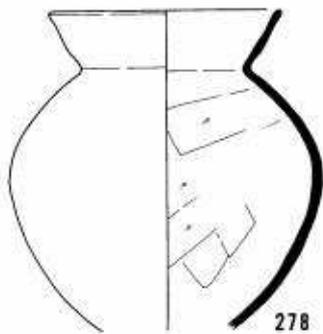
272



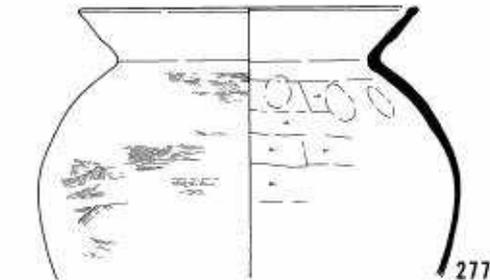
274

275

276



278

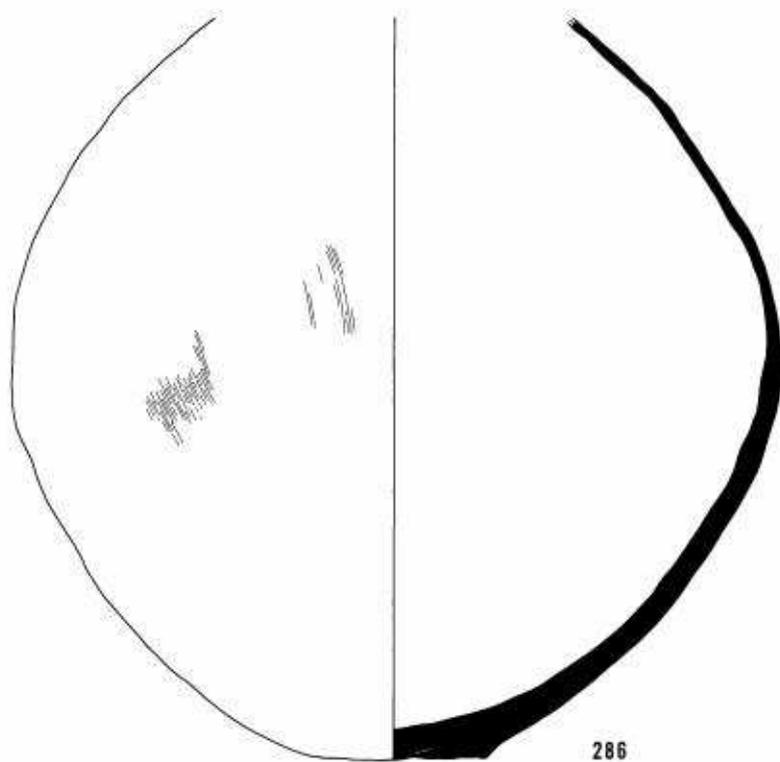
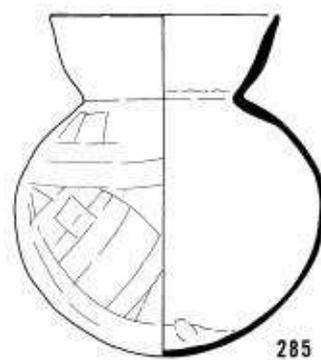
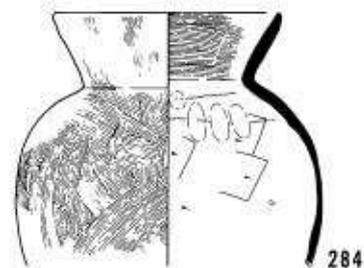
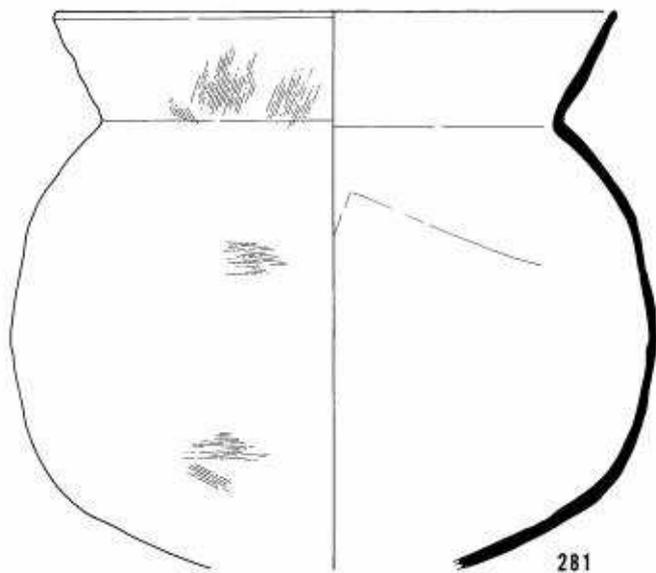
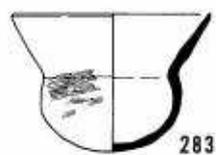
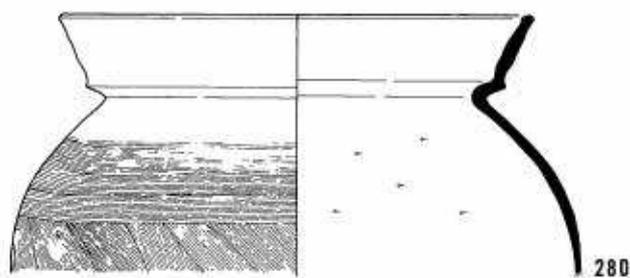


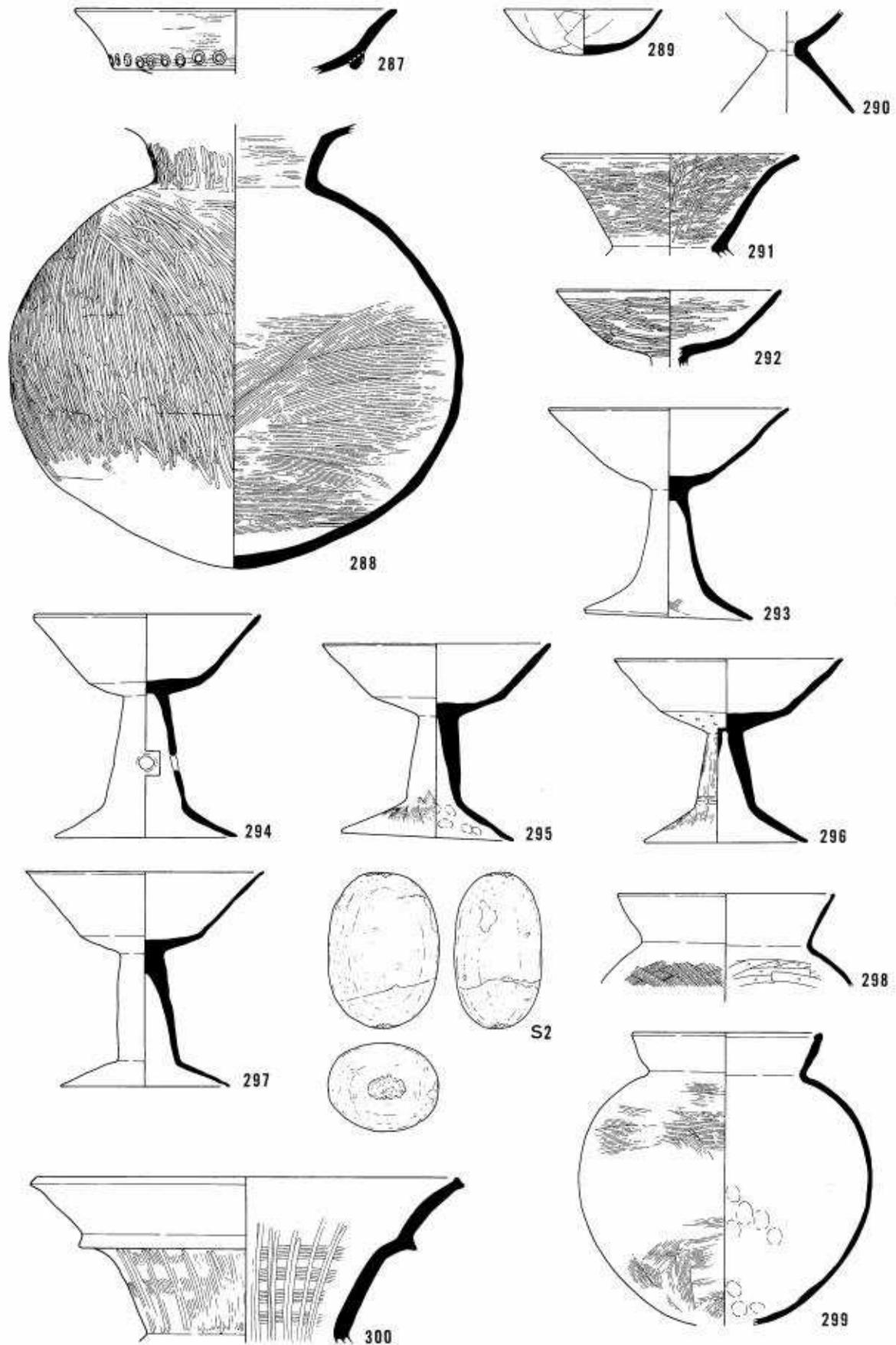
277



279





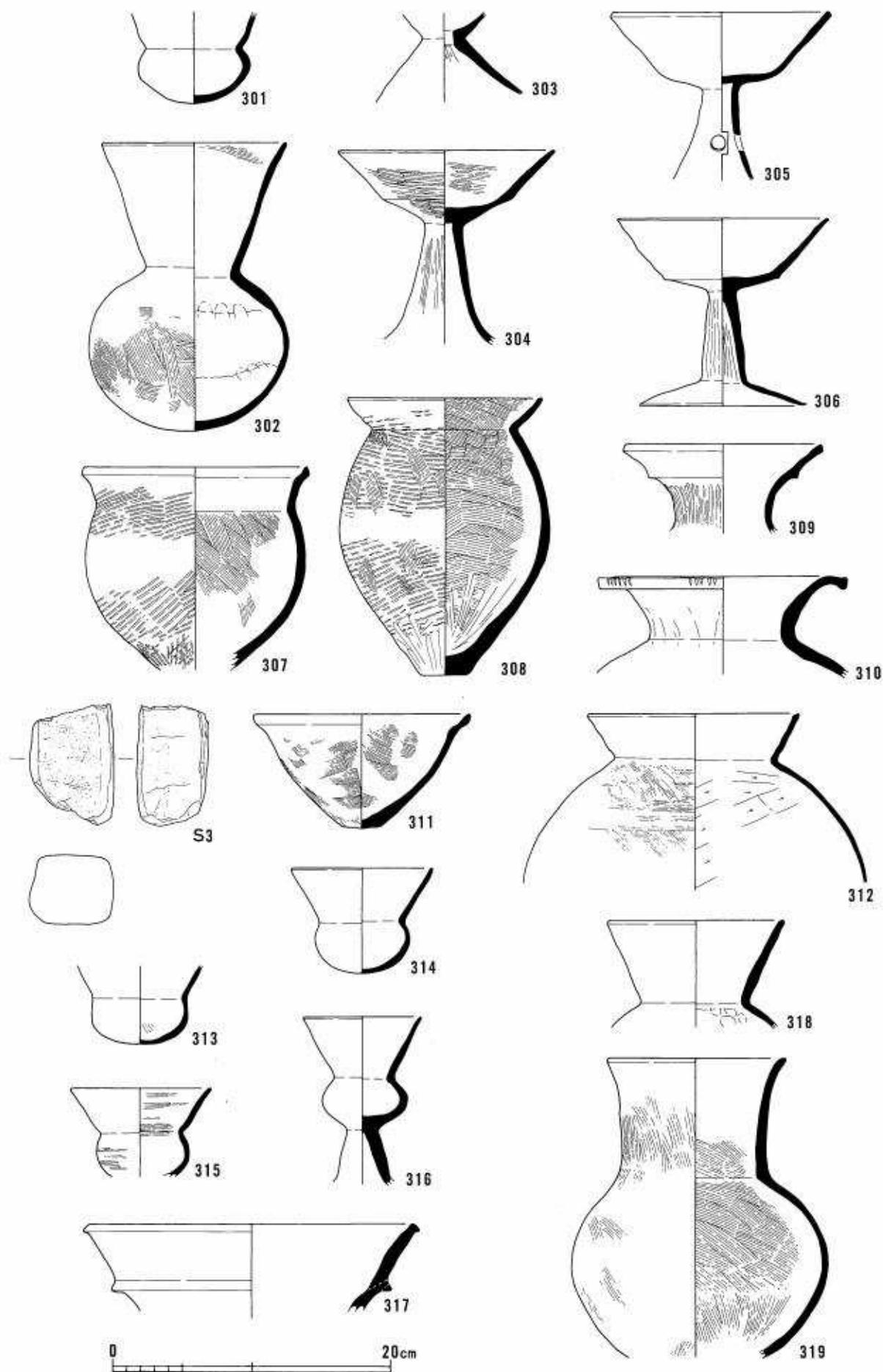


0 20cm

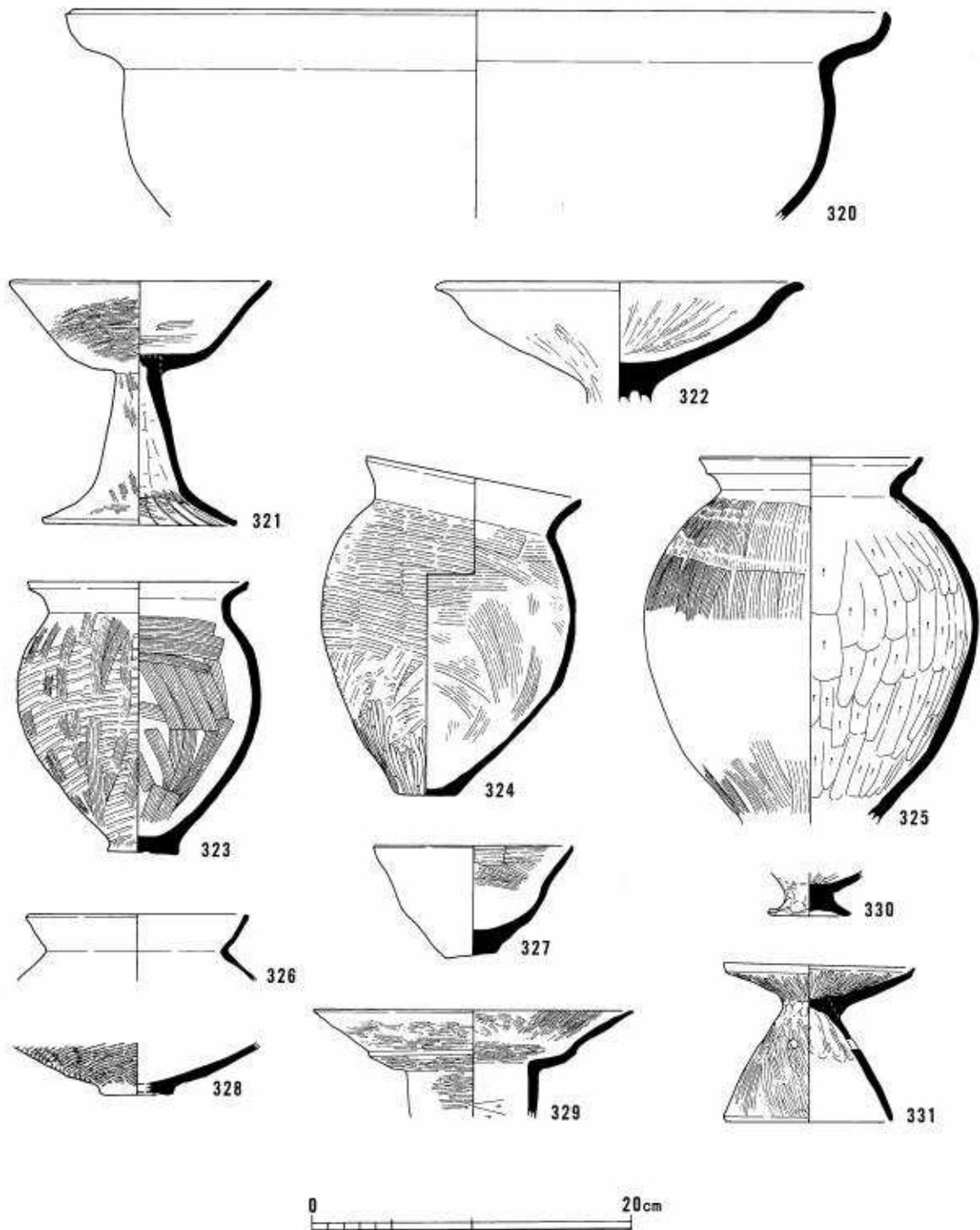
第2面直上：287~297・S2 / 第2包含層：298~300

圖版48 遺物(22)

301~319・S3



第2包含層：301~306 / 第3面直上：307~311・S3 / 第3包含層：312~319



写 真 图 版

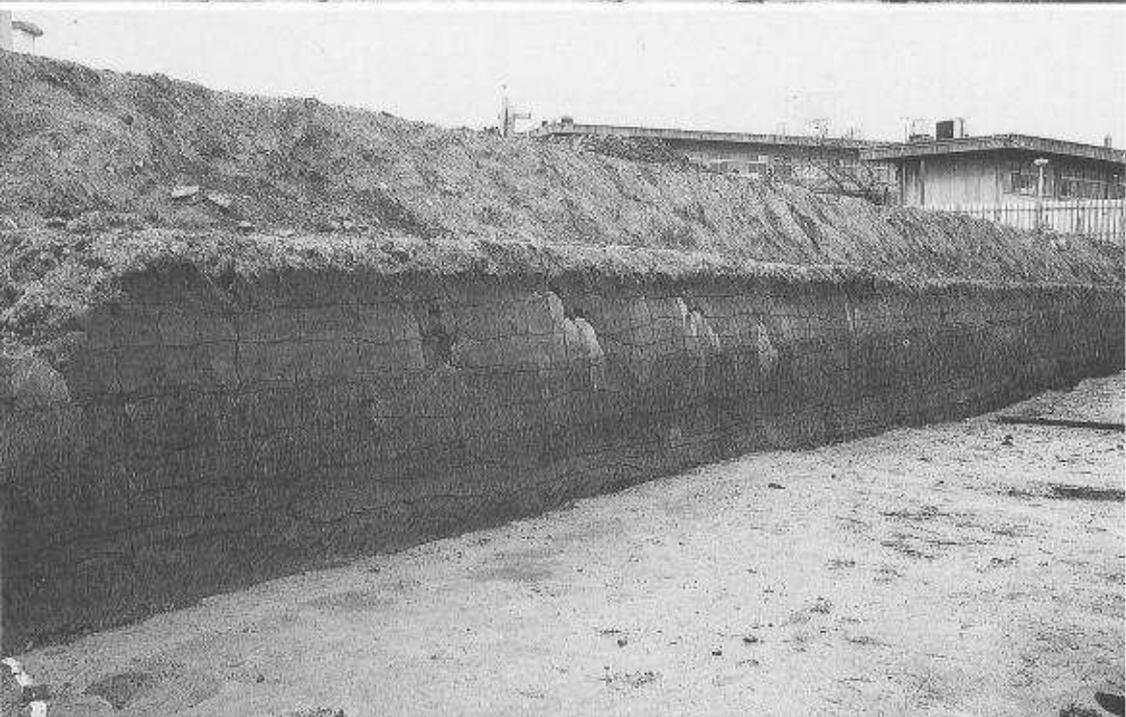




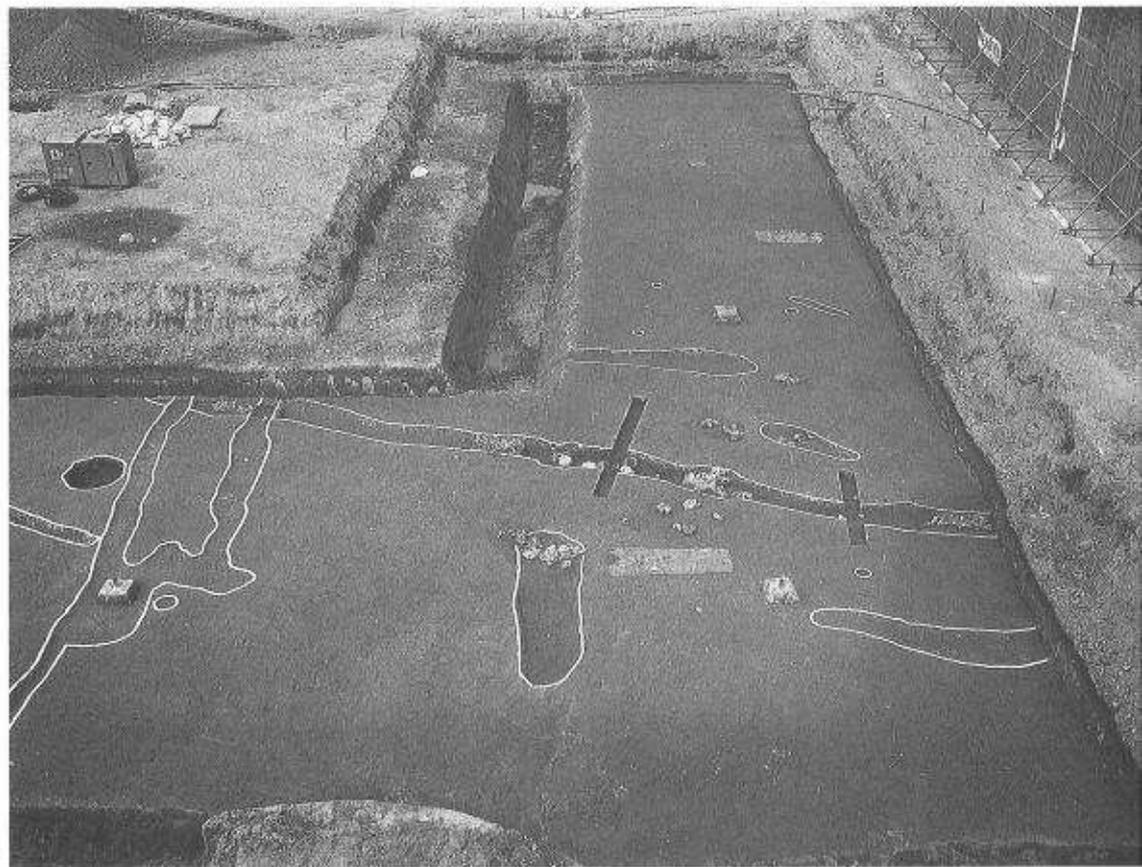
調査区の遠景



調査前の状況



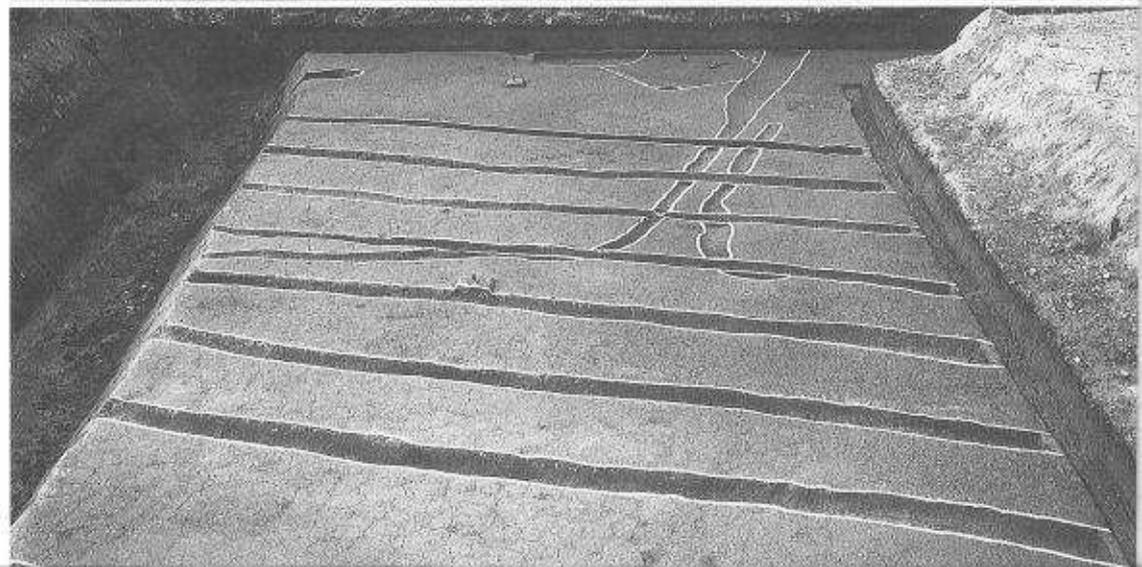
土層堆積状況



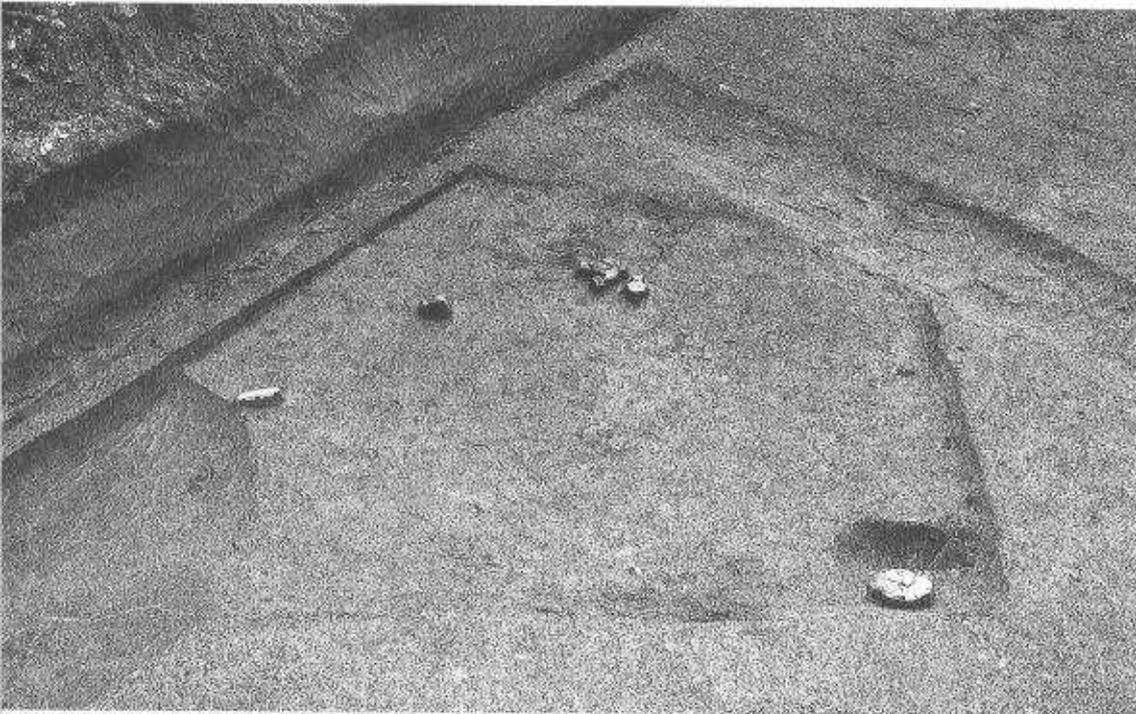
東半部の遺構(南から)



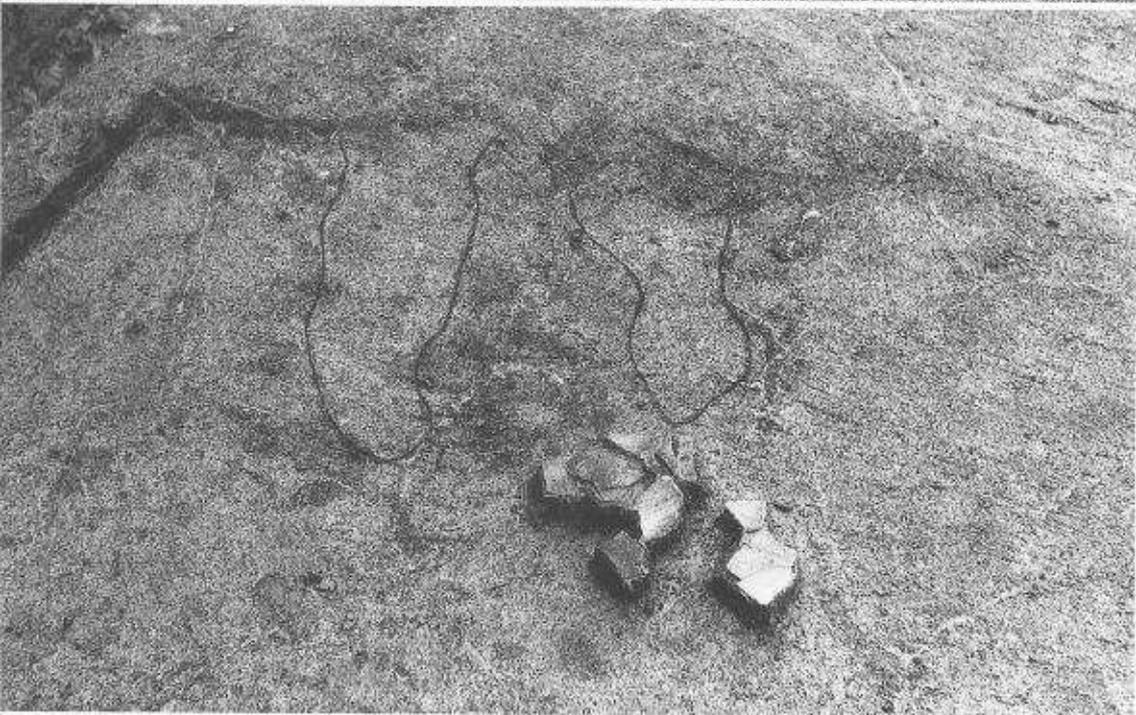
東半部の遺構(西から)



西半部の遺構(東から)



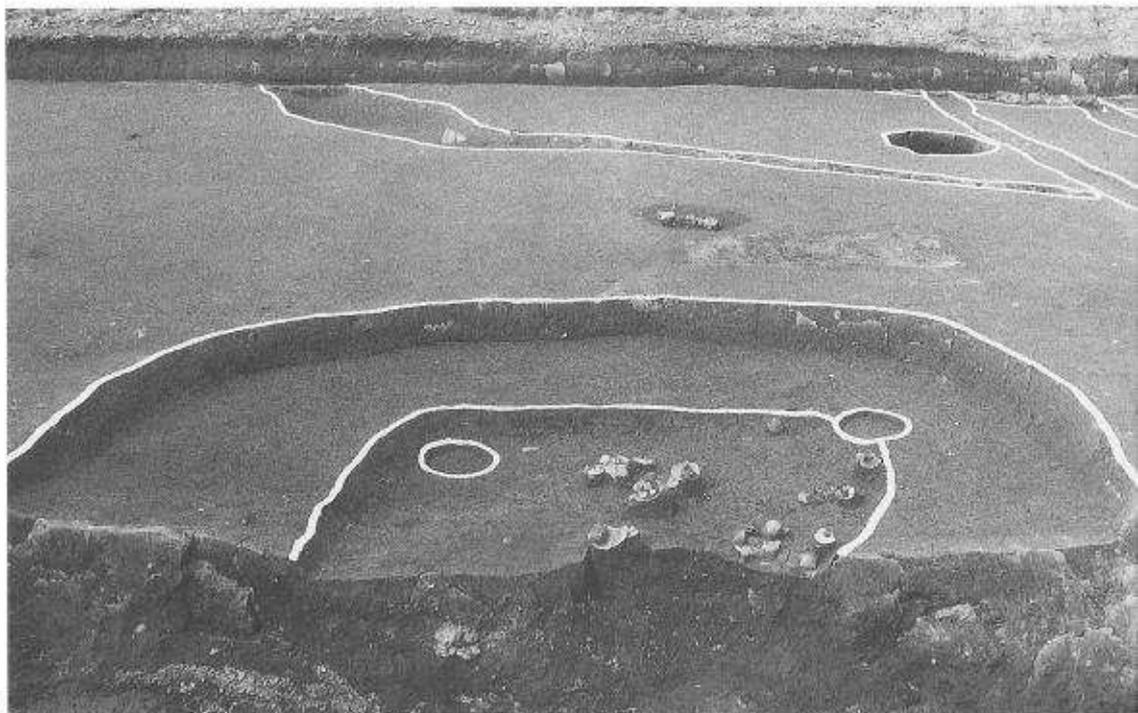
SH101 (南から)



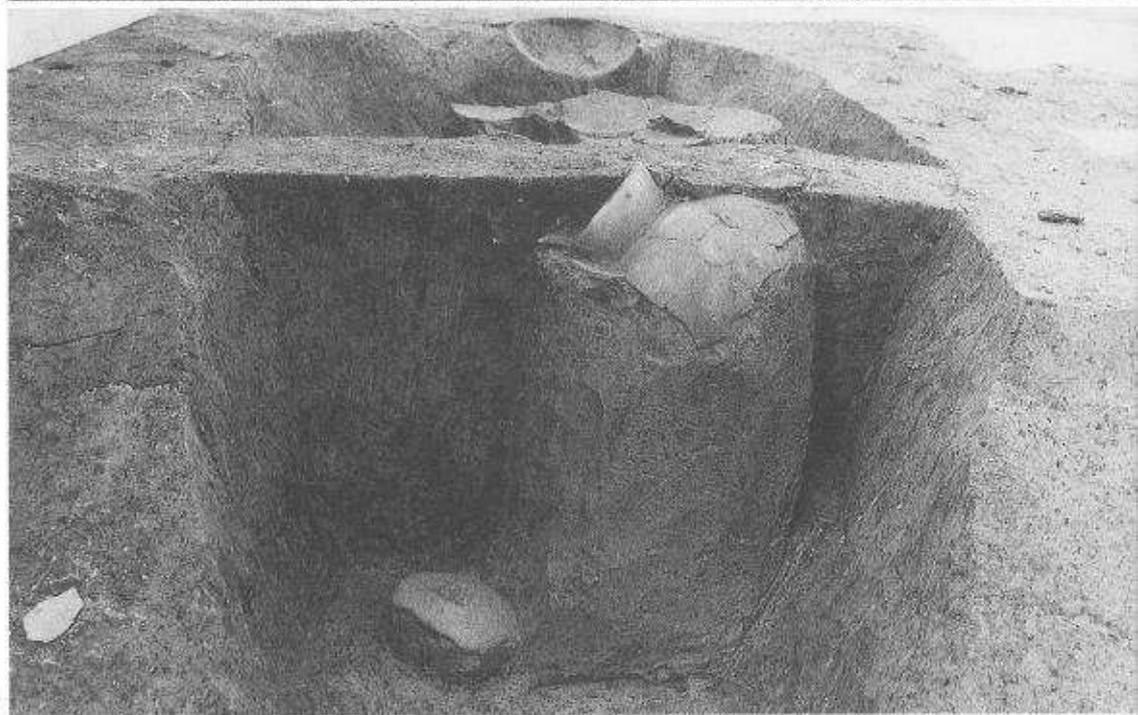
SH101 竈 (南から)



SH101 内土坑
土層断面 (北から)



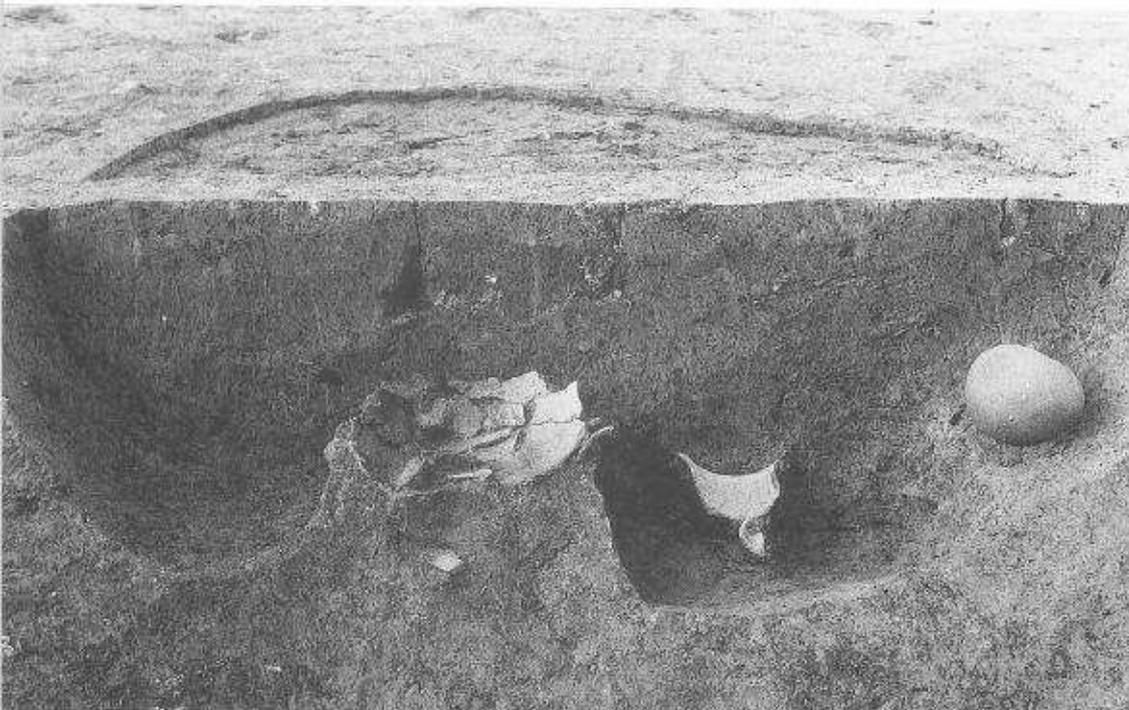
SH102 (南から)



SK102土層断面(南から)



SK102 (東から)



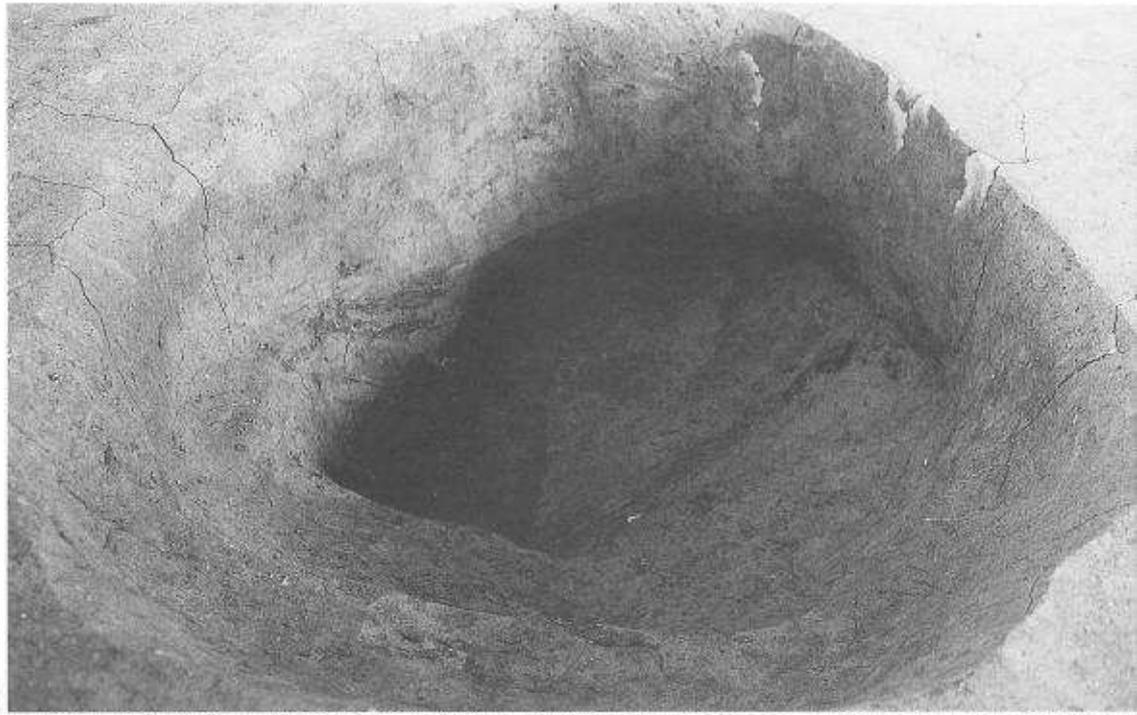
SK103 土層断面 (南から)



SK103 (南から)



SK104 (南から)



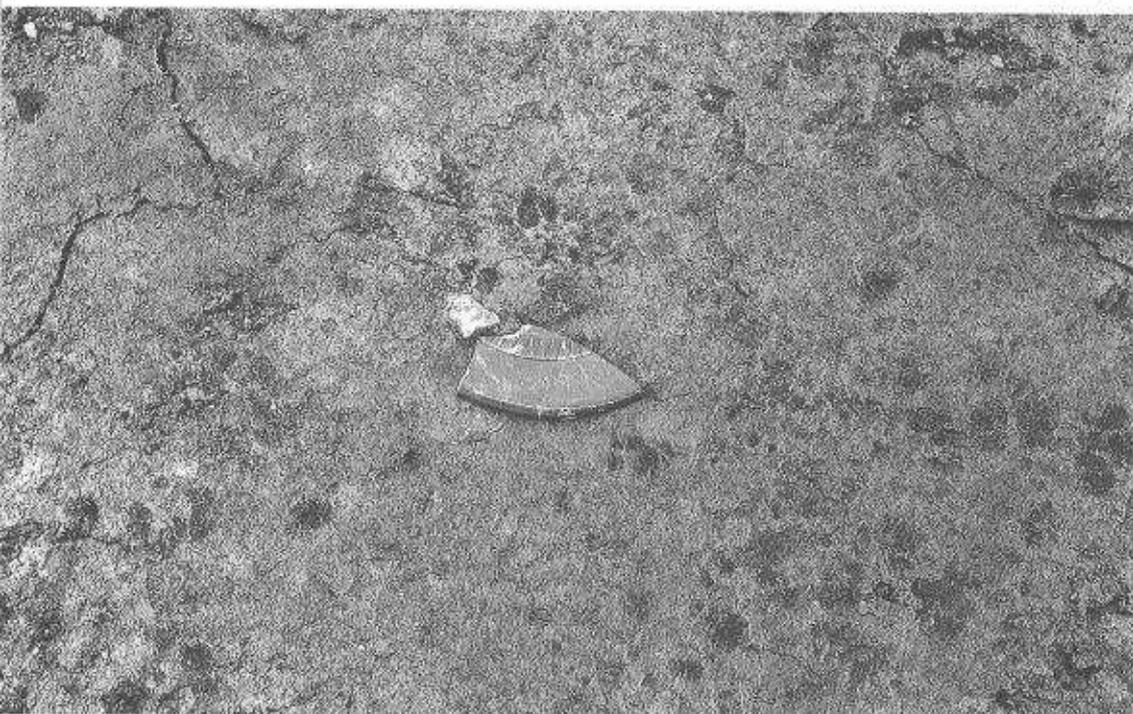
SK107 (北から)



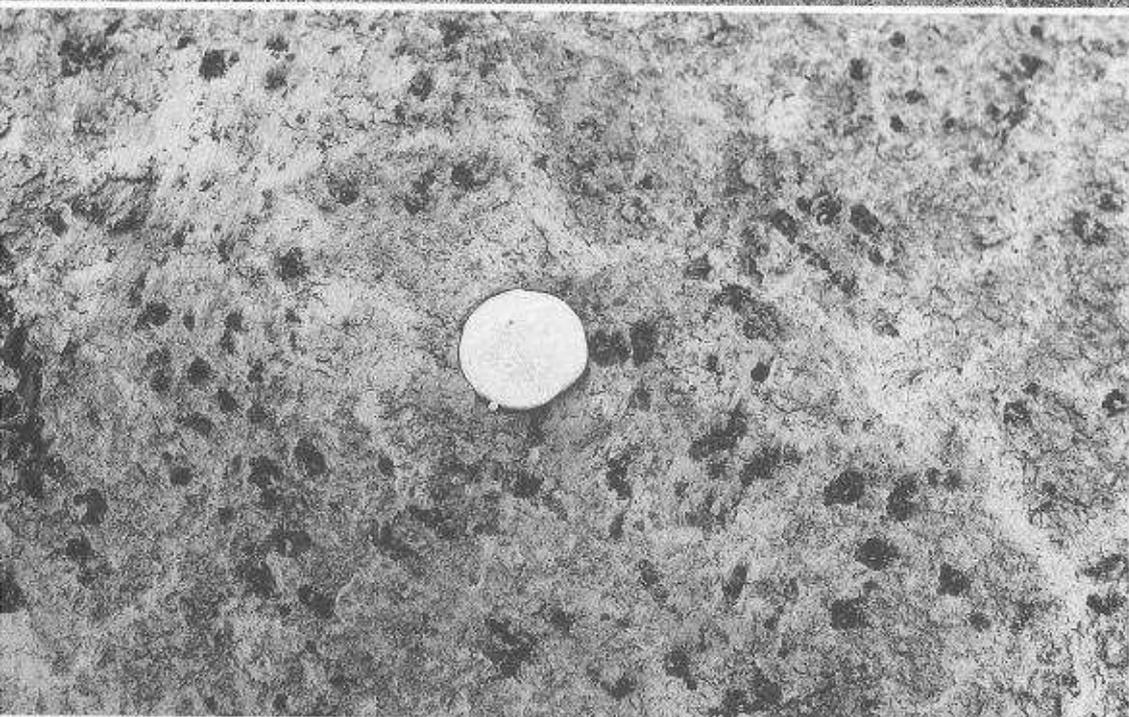
SE101 (北から)



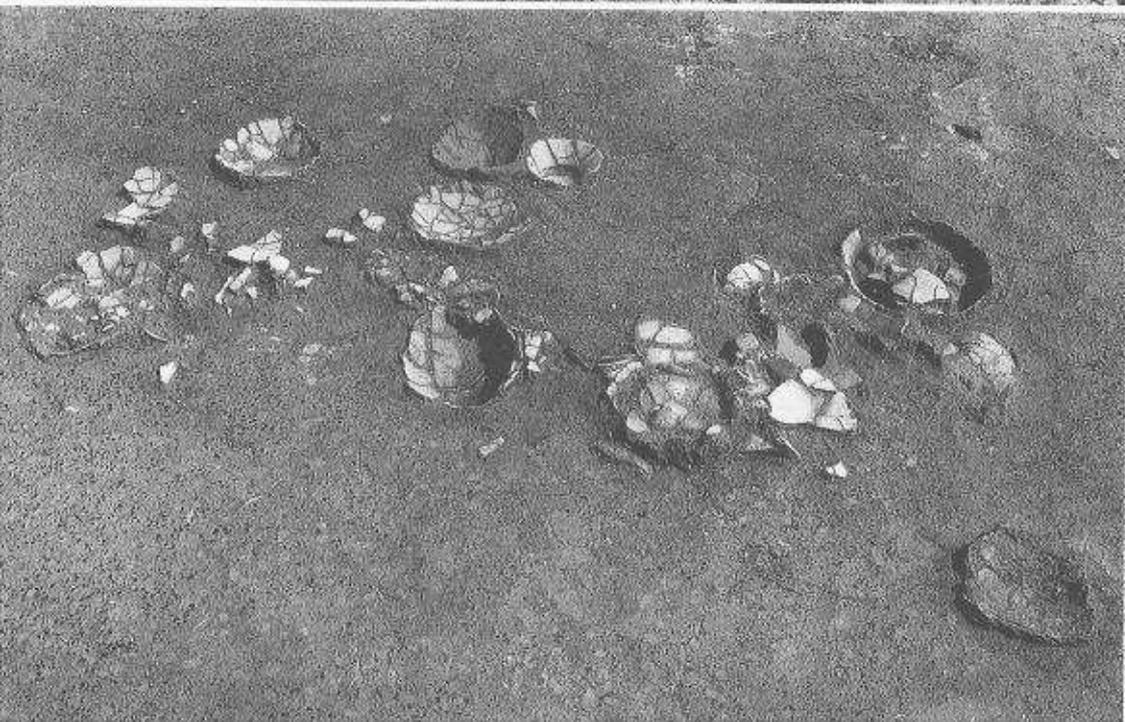
SE101炭層 (北から)



銅鏡出土状況



有孔円板出土状況



土器群101(西から)



SD103土層断面(北から)



SD103(西から)



SD104(西から)



SD104 (西から)



噴砂101 (西から)



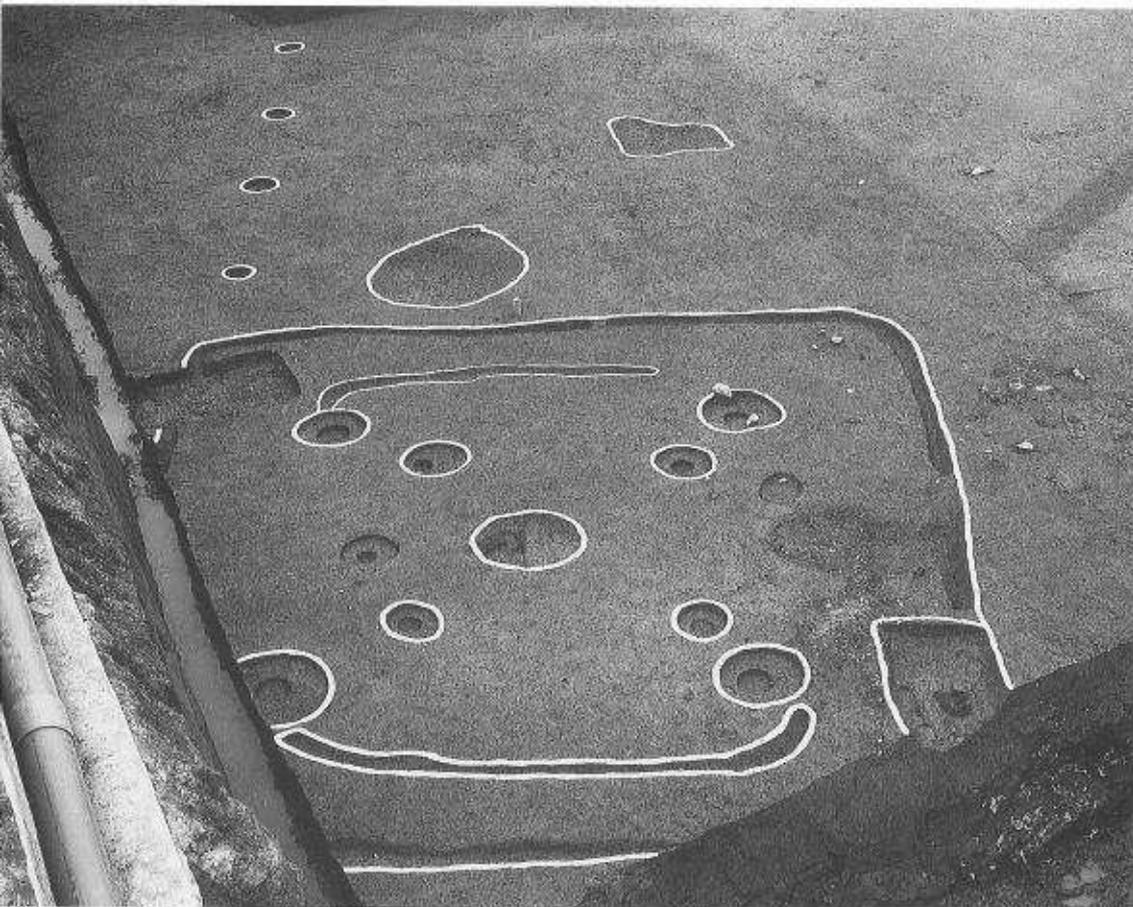
噴砂101断面 (西から)



東半部の遺構(西から)



西半部の遺構(東から)



SH201 (南から)

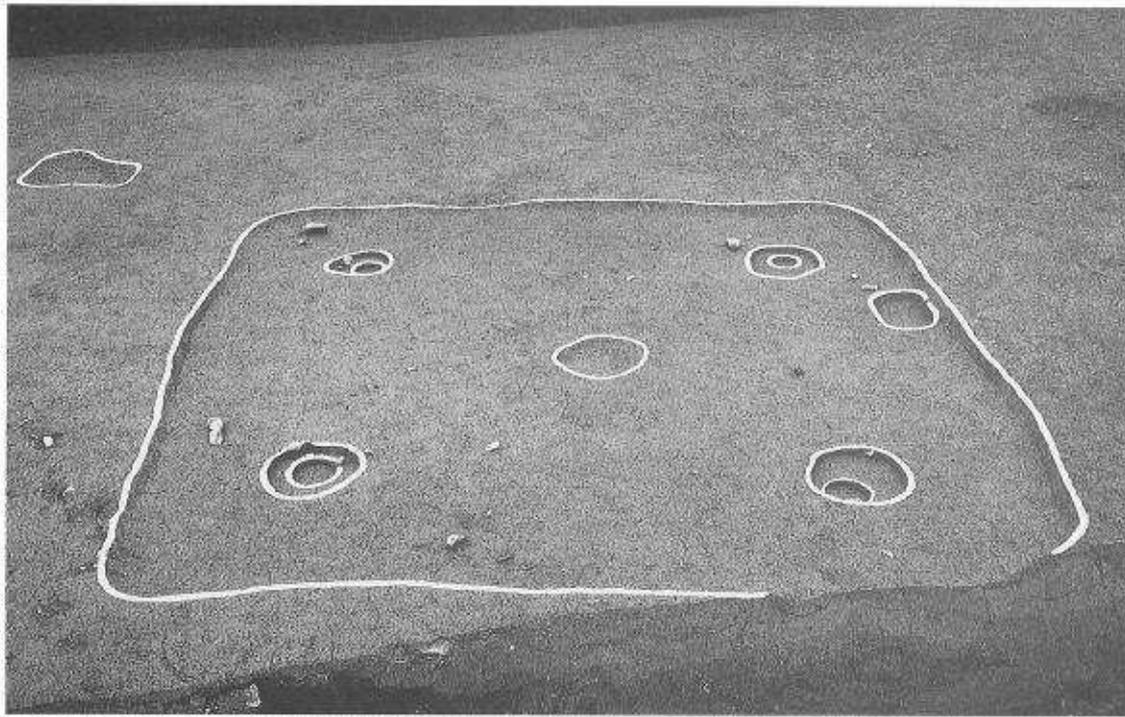


SH201土層(東から)

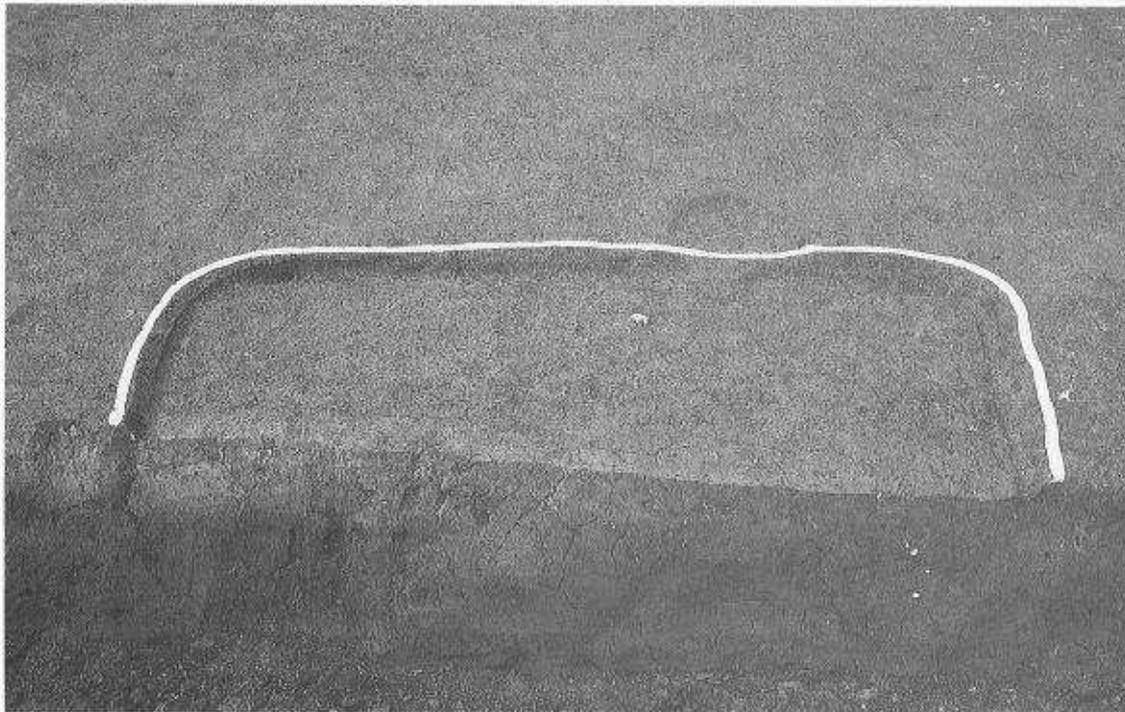


左: SH201柱根検出状況
(東から)

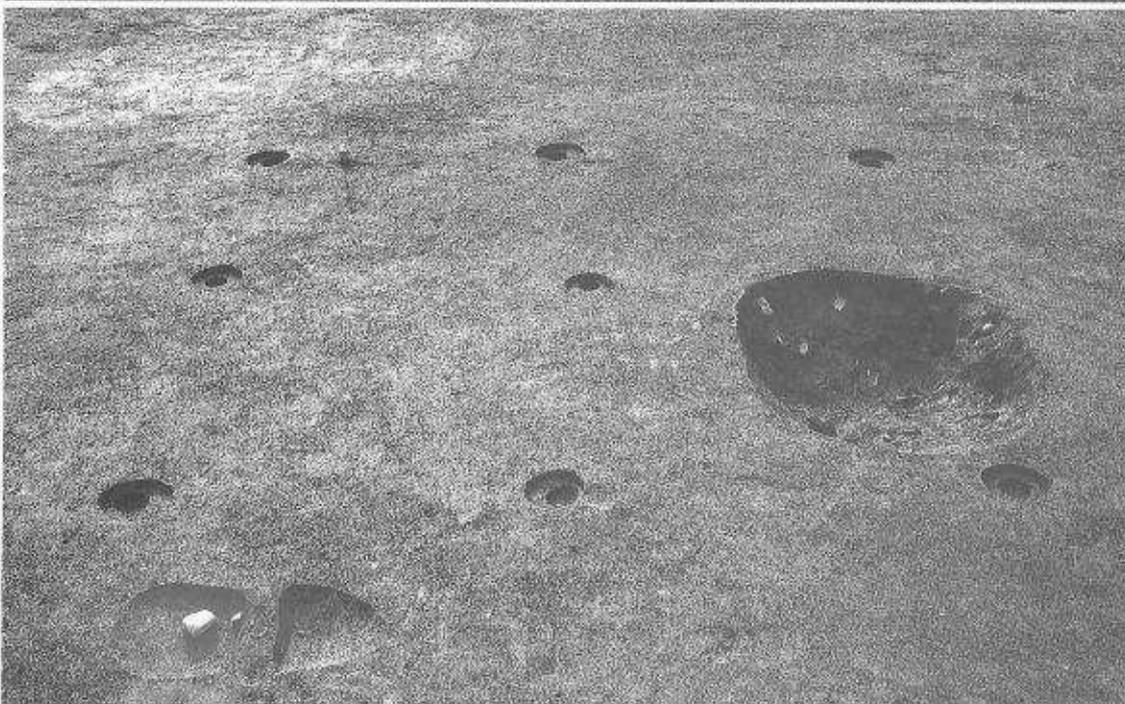
右: SH201土坑内木器
出土状況(西から)



SH202 (南から)



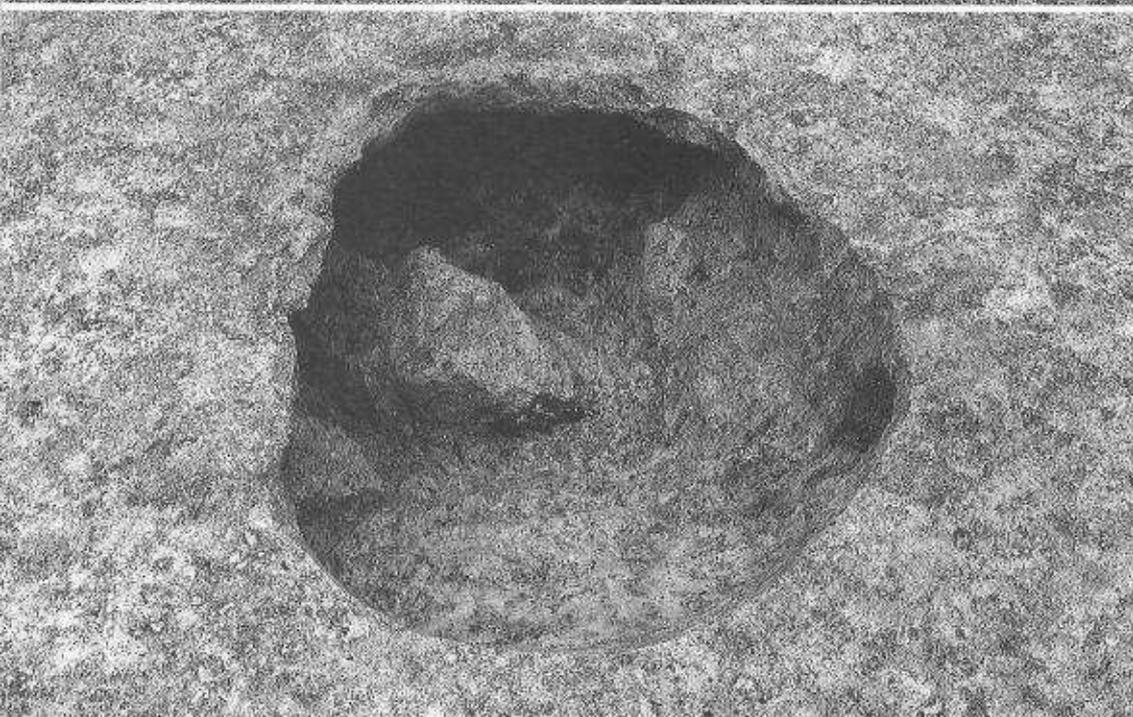
SH203 (南から)



SB201 (東から)



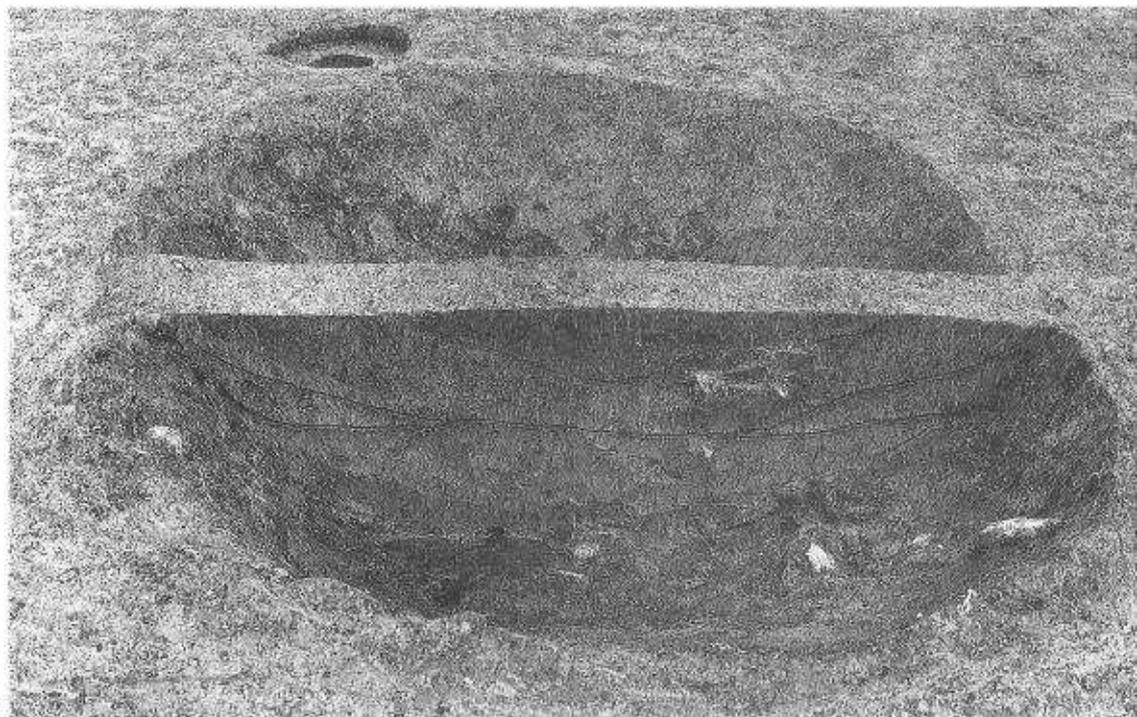
SK210 (南から)



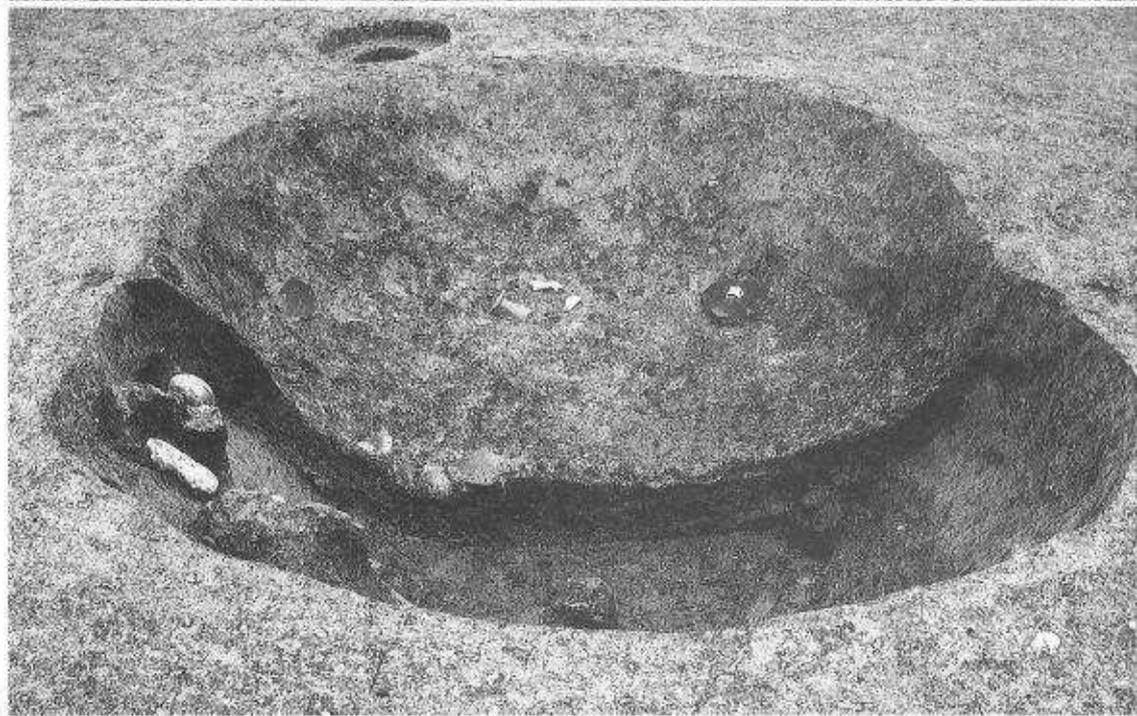
SK213 (東から)



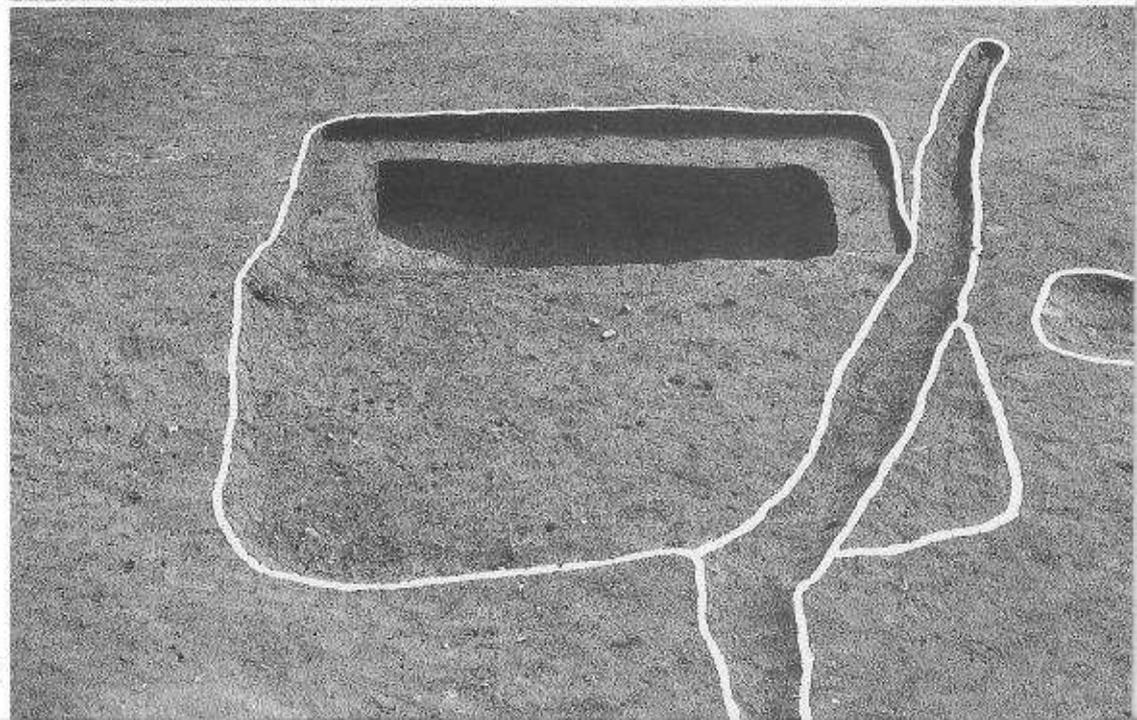
SK213断面 (北から)



SK217土層(西から)



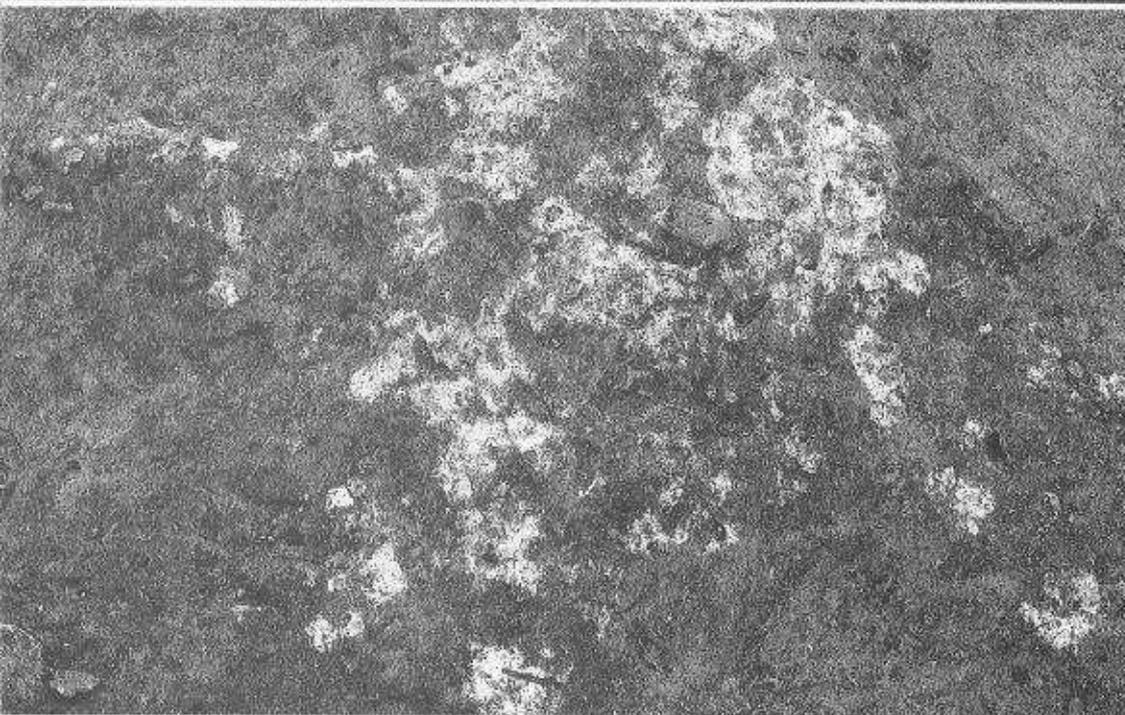
SK217炭層断面(西から)



SK219(北から)



SK 220内の白色粘土(北から)



SK 220内の白色粘土



石釧出土状況(東から)



噴砂201(南から)



噴砂201(東から)



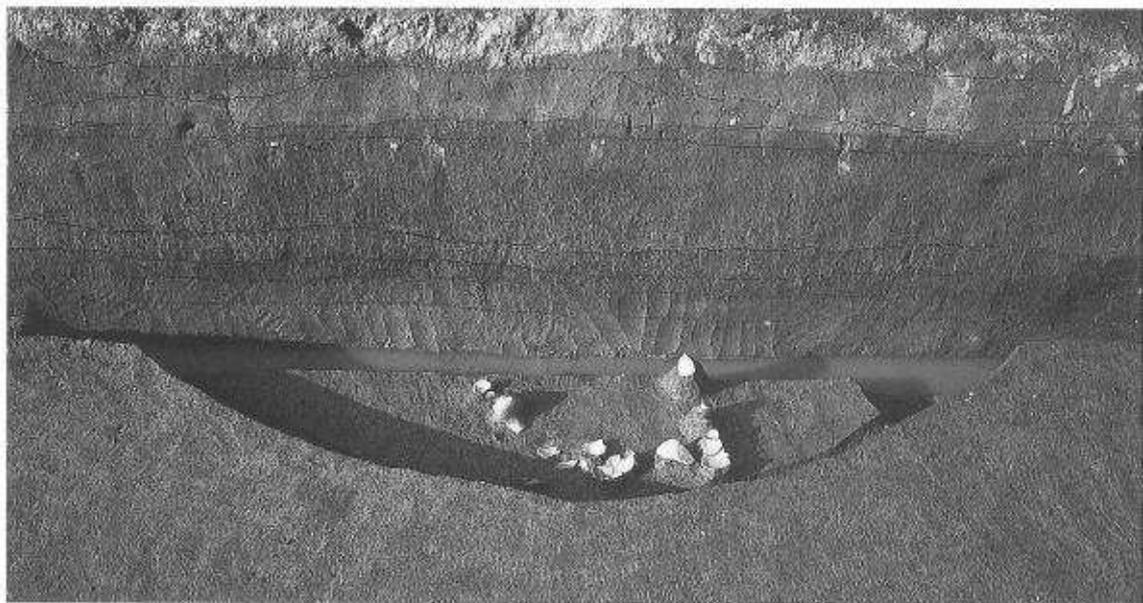
噴砂201断面(東から)



西半部の遺構(東から)



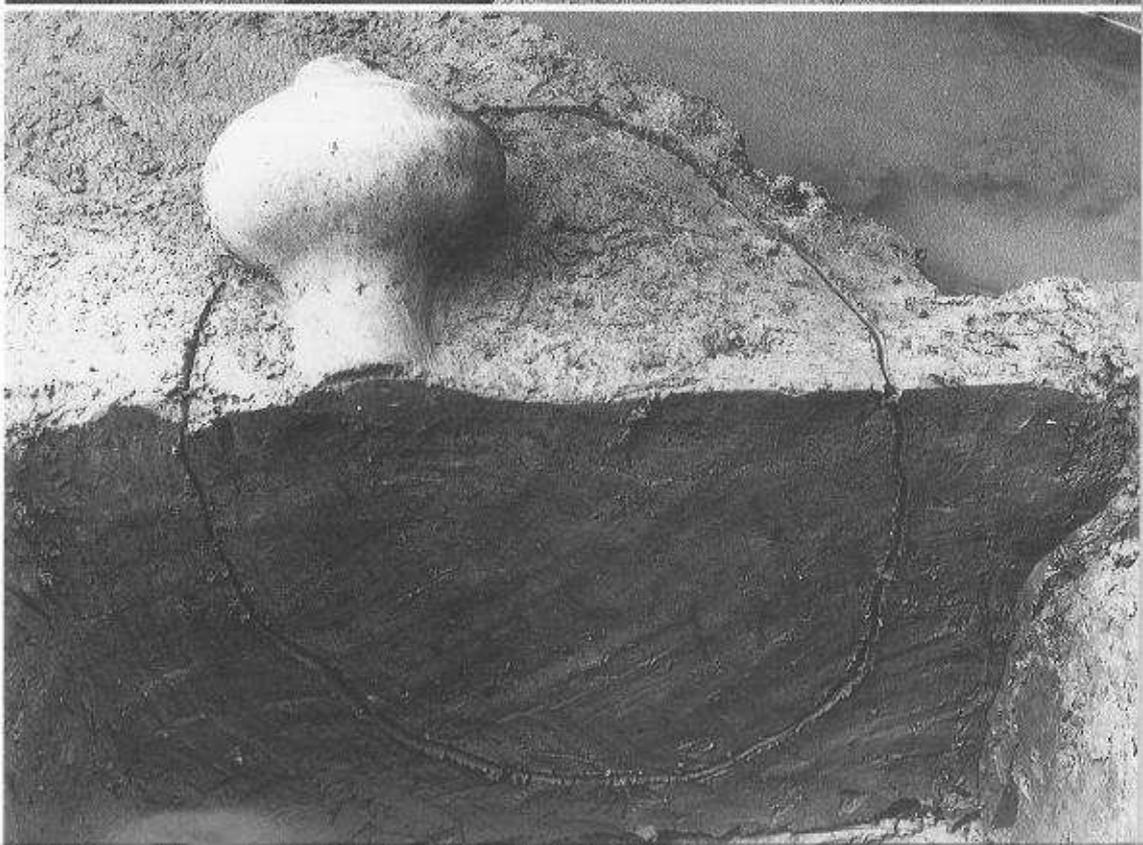
中央部の遺構(東から)



SH301 (南から)



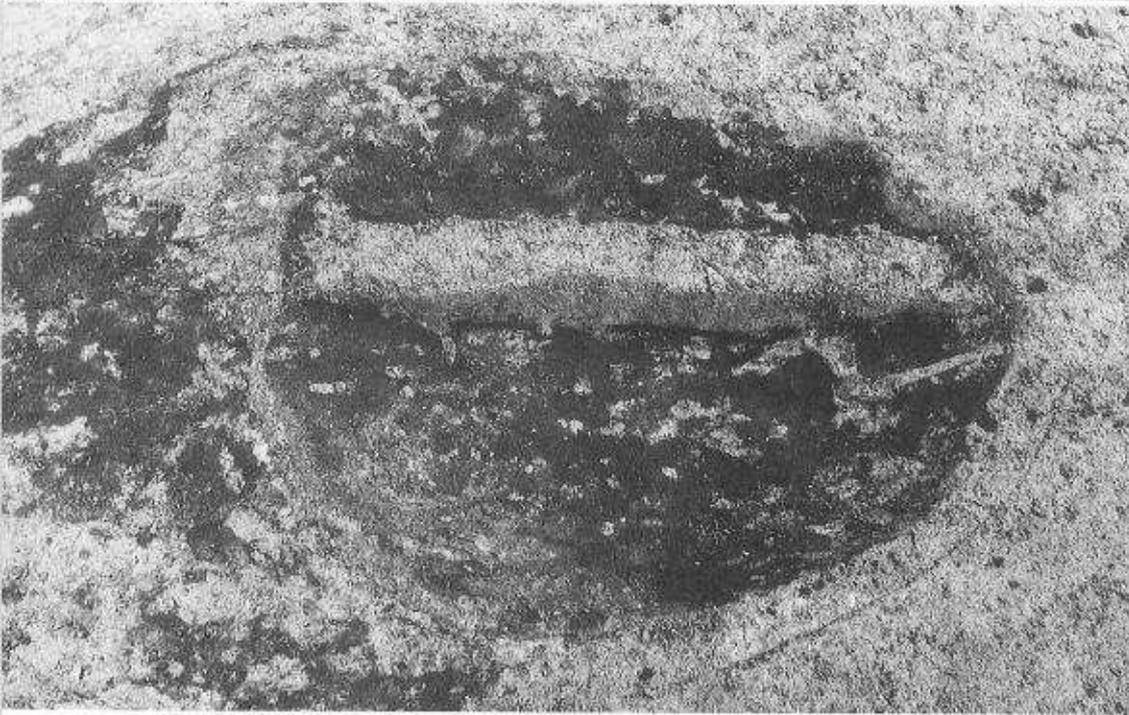
SH301 (西から)



SH301柱穴 (南から)



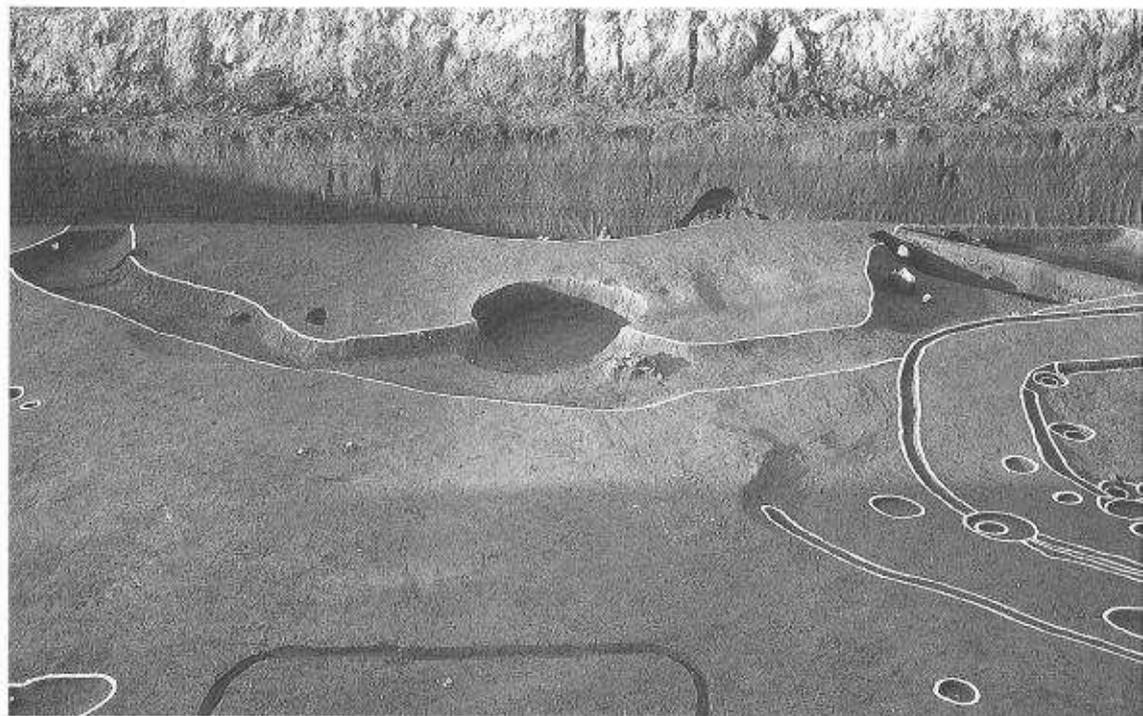
SH302 (北から)



SH302 中央土坑 (南から)



SH302-P2 (左)・P5



SD306 (南から)



SD306土層(南から)



SD306土器出土状況(南から)



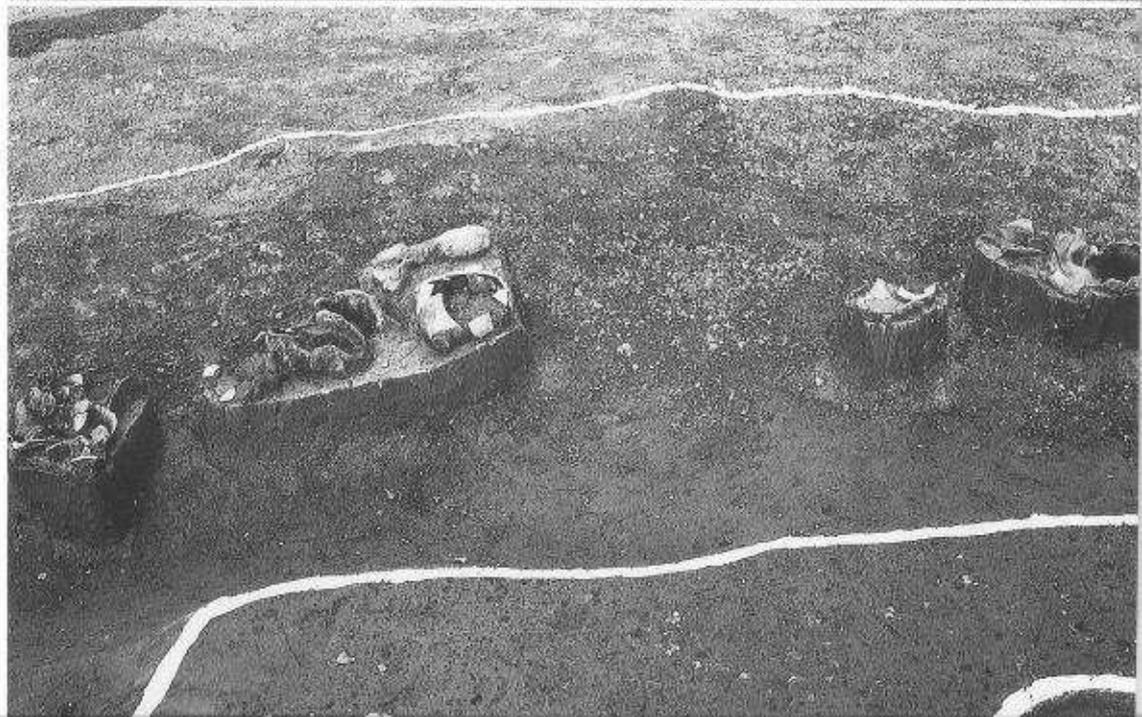
全景(西から)



SK402 (北から)



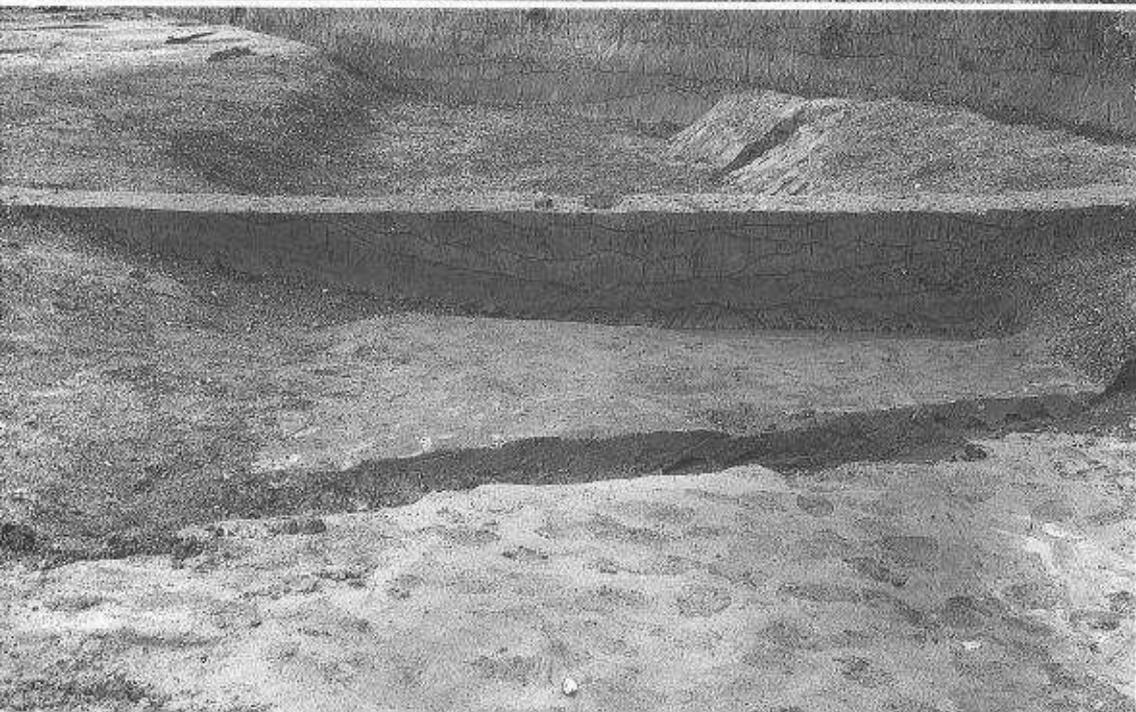
SD306最下層 (北から)



SD405 (西から)



SR401 (西から)



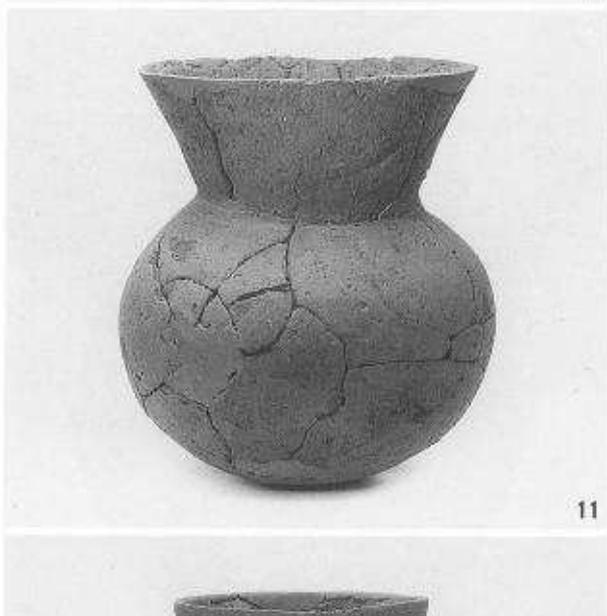
SR401土層 (東から)



9



10



11



13



31

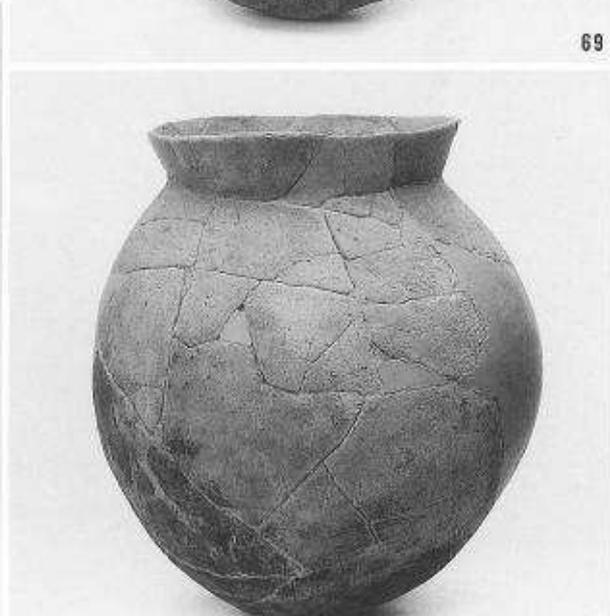


50



41

SH102 (9~13) / SK104 (31.41) / SK107 (50)



SE101 (57) / SD103 (65) / SD104 (67~80)





SD104 (95~101) / SD106 (108,109) / SD108 (113)
SK210 (120) / SK217 (123,124)



SK 2 1 7 (126, 127) / SK 2 2 0 (136) / SK 2 2 8 (147~151)
 SH 3 0 1 (155) / SK 3 0 2 (159) / SD 3 0 6 (162)



163



167



174



169



175



176



177



179

SD306 (163~169) / SD309 (174~176) / SD311 (177,179)





199



200



201



210



218



219





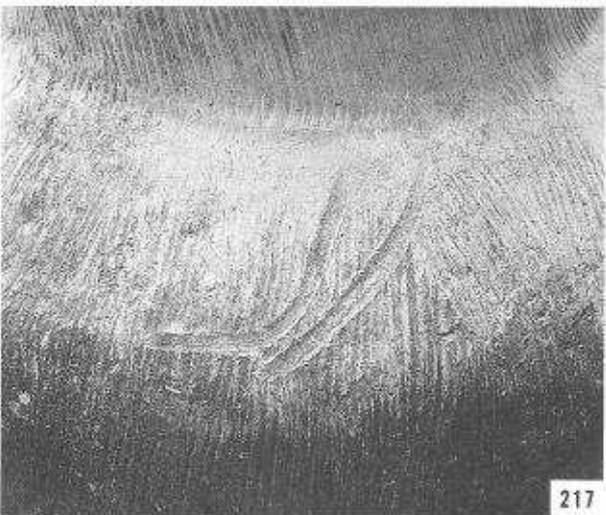
242



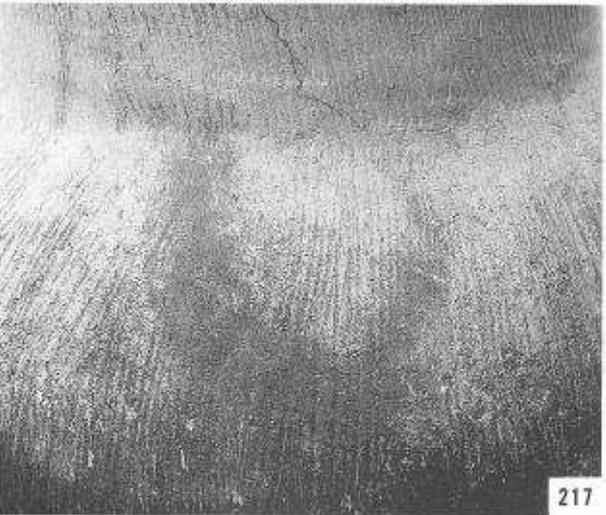
243



217



217



217



229



237



238

SR 4 0 1 (217~243)



254



256



261



262



267



272



273



280

土器群101 (254, 256) / 土器群103 (261) / 土器群105 (262)
 土器群106 (267) / 第2面直上 (272~280)



第2面直上 (278~294)



295



296



297



299



302



303



314



315

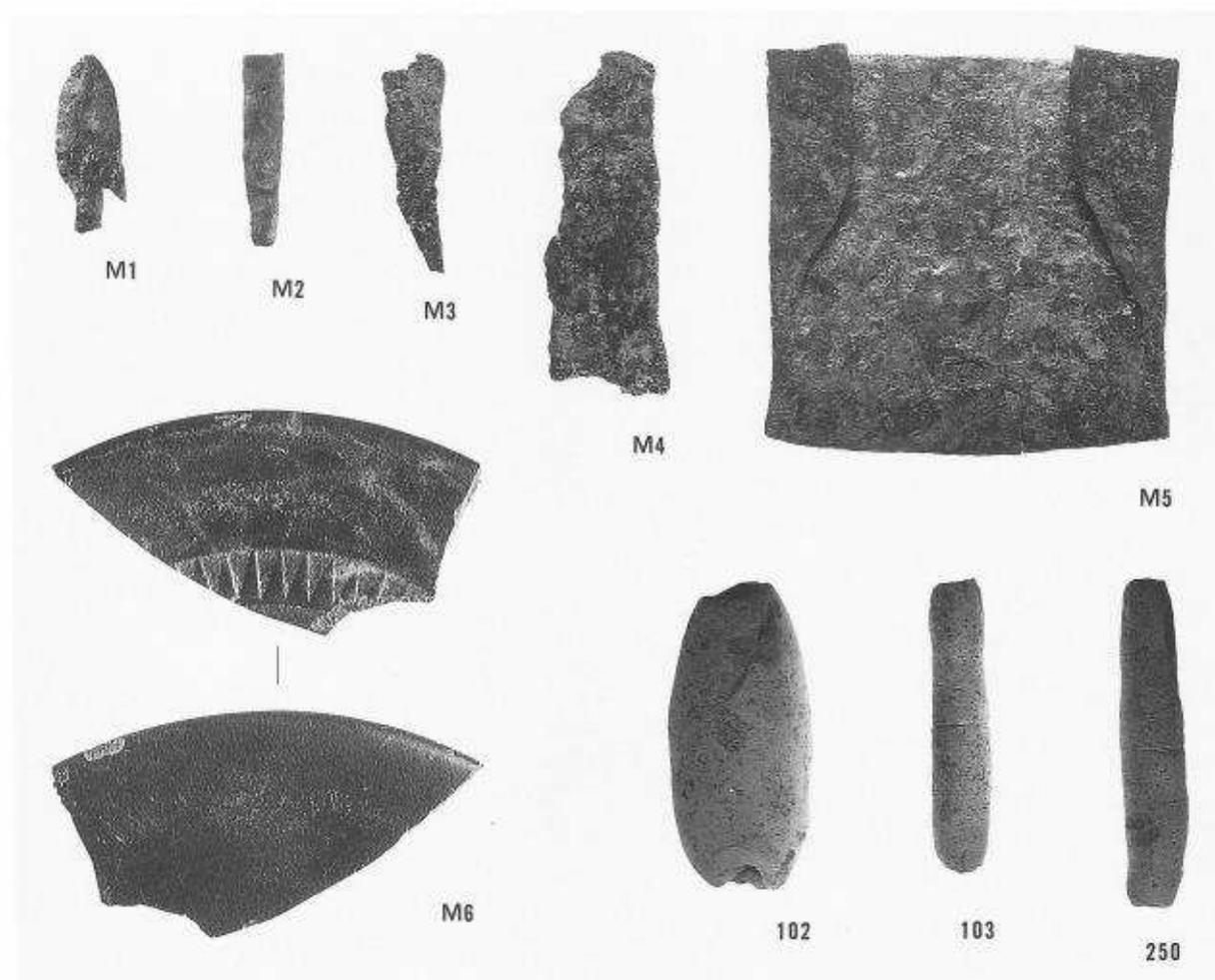
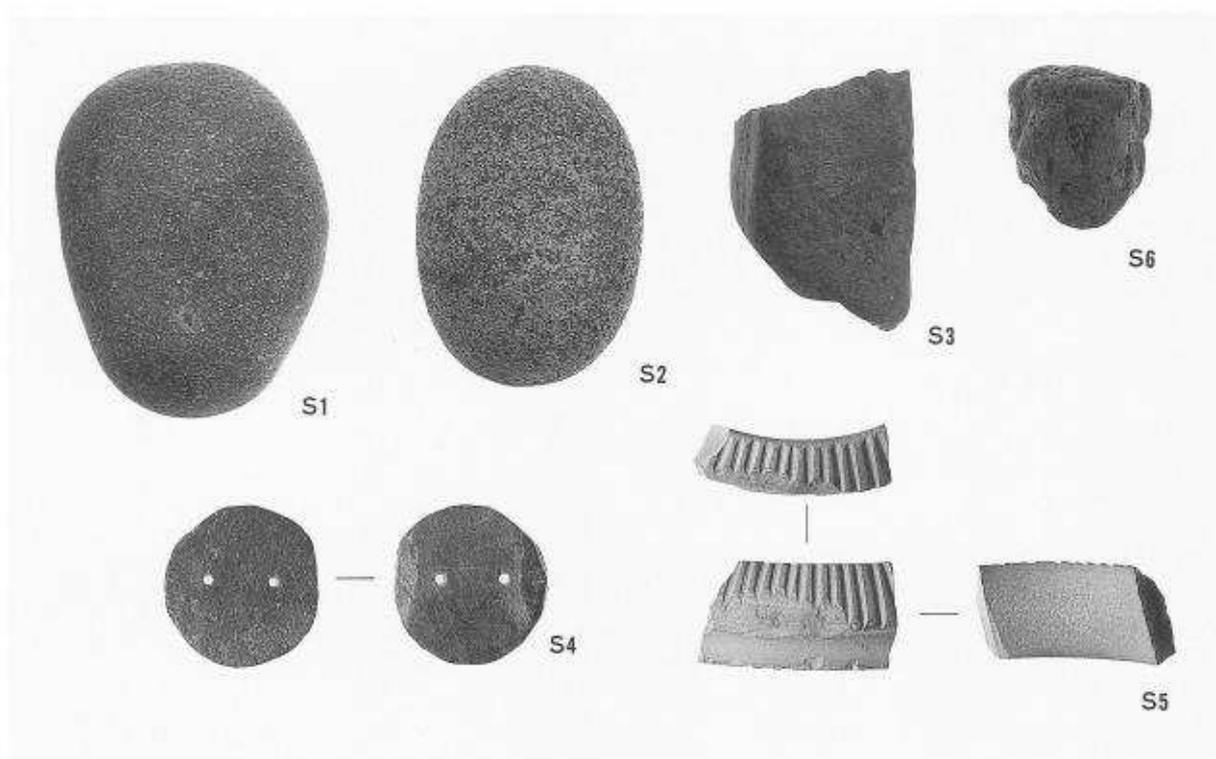


304

第2面直上 (295~297) / 第2包含層 (299~304) / 第3包含層 (314.315)



第3 包含層 (316. 321) / 第4 面直上 (323~327) / 第4 包含層 (330. 331)



兵庫県文化財調査報告 第 166 冊

田能高田遺跡

— 園田競馬場既舎改築事業に伴う発掘調査報告書 —

平成 9 年 3 月 31 日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町 2 丁目 1 番 5 号

T E L 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印 刷 菱三印刷株式会社

〒652 神戸市兵庫区大開通 2 丁目 2 - 11
